

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	茶谷 恭代
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 177 号
学位授与の日付	2014 年 1 月 22 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	現代日本語の副詞の研究 ―副詞「よほど」における程度性・評価性・ 叙法性―

Name	Chatani Yasuyo
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 177
Date	January 22, 2014
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study of Modern Japanese Adverbs —Degree, Evaluativity, Modality of "yohodo"—

現代日本語の副詞の研究

副詞「よほど」における程度性・評価性・叙法性

東京外国語大学大学院
地域文化研究科 博士後期課程

茶 谷 恭 代

目 次

第 1 章	研究の目的	1
第 2 章	副詞研究の流れと本研究の位置づけ	3
2. 1	副詞の三分類とその展開	3
2. 2	程度副詞と陳述副詞	5
2. 3	副詞における評価性	8
2. 4	本研究の位置づけ	9
2. 5	「よほど」を記述する意義	12
2. 6	「よほど」に関する辞書の記述と先行研究	15
2. 6. 1	国語辞典の記述	15
2. 6. 2	用法辞典類の記述	17
2. 6. 3	諸論考	19
2. 6. 4	先行研究のまとめ	22
第 3 章	本研究の立場と分析の対象	24
3. 1	方法論	24
3. 1. 1	実例分析	24
3. 1. 2	用法記述の方法 用いられる文の構造のとらえ方	24
3. 2	分析の対象と収集方法	26
3. 2. 1	現代語の言語資料	26
3. 2. 2	近世語（後期）の言語資料	27
3. 2. 2. 1	江戸語の成立と言語資料	28
3. 2. 2. 2	言語資料と収集方法	29
3. 2. 3	近代語の言語資料	32
3. 3	「よほど」「よっぽど」の形態の違いの扱い	33
3. 3. 1	国語辞典での扱い	33
3. 3. 2	資料による分布	33
第 4 章	「よほど」の用法記述	36
4. 1	形式的な構文特徴 一分類の一次的指標	36

4. 2	《推定判断用法》	37
4. 2. 1	用法の構造	37
4. 2. 2	構文の形式的特徴 ①「のだ」を含む形式との共起	38
4. 2. 2. 1	共起する「の（だ）」形式	38
4. 2. 2. 2	「の（だ）」形式の検討	39
4. 2. 3	構文の形式的特徴 ②推量をあらわす形式	41
4. 2. 3. 1	共起する推量形式	41
4. 2. 3. 2	推量形式の検討	42
4. 2. 3. 3	無標形式の検討	51
4. 2. 4	既実現の事態と判断との関係づけ	52
4. 2. 4. 1	「推定」と「説明」の共通性	52
4. 2. 4. 2	判断の内容	53
4. 2. 4. 3	「さぞ」との比較	56
4. 2. 4. 4	「どうやら」との比較	59
4. 2. 5	状態性をもつ語との共起	64
4. 2. 5. 1	「よほど」が結びつく語	64
4. 2. 5. 2	状態性をもつ語の特徴	65
4. 2. 5. 3	「よほど」の程度性	67
4. 2. 6	用法のまとめ	68
4. 3	《比較評価判断用法》	69
4. 3. 1	用法の構造	69
4. 3. 2	構文の形式的特徴 ③比較対象の表示	69
4. 3. 2. 1	比較対象の表示形式とそのあらわれ方	69
4. 3. 2. 2	文の叙法性	73
4. 3. 3	状態性をもつ語との共起	76
4. 3. 3. 1	「よほど」が結びつく語	76
4. 3. 3. 2	状態性をもつ語の特徴	76
4. 3. 3. 3	「よほど」の程度性	78
4. 3. 4	「よほど」による比較評価	81
4. 3. 5	用法のまとめ	83
4. 4	《必要判断用法》	84
4. 4. 1	用法の構造	84
4. 4. 2	構文の形式的特徴 ④否定条件節との共起	85
4. 4. 2. 1	共起する否定条件の形式	85

4. 4. 2. 2	否定条件形式の検討	86
4. 4. 3	必要性をあらわす構造	87
4. 4. 3. 1	従属節の内容と主節の内容の関係	87
4. 4. 3. 2	必要～当為をあらわす形式	90
4. 4. 4	状態性をもつ語との共起	92
4. 4. 4. 1	「よほど」が結びつく語	92
4. 4. 4. 2	状態性をもつ語の特徴	93
4. 4. 4. 3	「よほど」の程度性	94
4. 4. 5	用法のまとめ	95
4. 5	《例外提示用法》	96
4. 5. 1	用法の構造	96
4. 5. 2	構文の形式的特徴 ④否定条件節との共起	97
4. 5. 2. 1	共起する否定条件の形式	97
4. 5. 2. 2	否定条件形式の検討	97
4. 5. 3	除外性をあらわす構造	98
4. 5. 3. 1	従属節の内容と主節の内容の関係	98
4. 5. 3. 2	例外提示～範囲限定をあらわす形式	99
4. 5. 4	状態性をもつ語との共起	101
4. 5. 4. 1	「よほど」が結びつく語	101
4. 5. 4. 2	状態性をもつ語の特徴	101
4. 5. 3. 3	「よほど」の程度性	102
4. 5. 5	用法の広がり 例外提示～例外否定へ	102
4. 5. 5. 1	肯定条件形式と共起する場合	102
4. 5. 5. 2	肯定逆条件形式と共起する場合	103
4. 5. 6	用法のまとめ	104
4. 5. 7	《必要判断用法》と《例外提示用法》	105
4. 6	《意志不実行用法》	106
4. 6. 1	用法の構造	106
4. 6. 2	構文の形式的特徴 ⑤意志・願望形式との共起	106
4. 6. 2. 1	共起する意志・願望形式	106
4. 6. 2. 2	意志・願望形式の検討	107
4. 6. 3	状態性をもつ語との共起	110
4. 6. 3. 1	「よほど」が結びつく語	110
4. 6. 3. 2	意志・願望形式にあらわれる動詞の特徴	111

4. 6. 3. 3 「よほど」の程度性	113
4. 6. 4 用法のまとめ	113
4. 7 位置づけ未詳の例	114
4. 8 連体用法「よほどの」について	117
4. 8. 1 副詞派生の連体用法	117
4. 8. 2 「よほどの」の全体像	118
4. 8. 3 《推定判断用法》	119
4. 8. 4 《必要判断用法》《例外提示用法》	122
4. 8. 4. 1 否定条件形式の検討	122
4. 8. 4. 2 2つの用法のあらわれ方	124
4. 8. 5 《程度量用法》	127
4. 8. 6 連体用法「よほどの」のまとめ	128
第5章 「よほど」の意味と用法の通時的変化	131
5. 1 通時的な考察の目的	131
5. 2 近世後期以前の「よほど」	131
5. 2. 1 辞書における記述	131
5. 2. 2 「よほど」の形成、成立に関する記述	133
5. 3 近世後期の「よほど」	134
5. 3. 1 近世後期の使用の実態	134
5. 3. 2 形態の違い「よっぽど」と「よほど」	135
5. 3. 3 「よほど」が用いられる構文環境	135
5. 3. 3. 1 「よほど」が用いられる文	136
5. 3. 3. 2 共起する状態性をもつ語	143
5. 3. 3. 3 現代語につながる用法	146
5. 3. 4 近世後期の「よほど」の使用実態のまとめ	149
5. 4 近世後期以降～明治期・大正期～現代への変遷	150
5. 4. 1 現代語の用法への変化	150
5. 4. 2 各用法にみられる現代語との相違	154
5. 4. 2. 1 《推定判断用法》	154
5. 4. 2. 2 《比較評価判断用法》	159
5. 4. 2. 3 《必要判断用法》《例外提示用法》	165
5. 4. 2. 4 《意志不実行用法》	167
5. 5 意味と用法の変化のまとめ	168

5. 6	現代語の位置づけ未詳の例の検討	172
第6章	用法間の関連と体系	177
6. 1	現代語の用法	177
6. 2	用法のつながり	180
6. 2. 1	《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》	180
6. 2. 1. 1	《必要判断用法》と《例外提示用法》	180
6. 2. 1. 2	《推定判断用法》と《必要判断用法》《例外提示用法》	182
6. 2. 2	《比較評価判断用法》	184
6. 2. 3	《意志不実行用法》	185
6. 3	用法のつながりのまとめ	186
第7章	「よほど」における程度性・評価性・叙法性	188
7. 1	程度性	188
7. 2	評価性	189
7. 3	叙法性との関わり	192
7. 4	現代語の「よほど」	194
7. 4. 1	「よほど」はどのように変化したか	194
7. 4. 2	副詞の中での「よほど」の位置づけ	194
7. 4. 2. 1	「よほど」は比較系の程度副詞なのか	194
7. 4. 2. 2	他の副詞との関係	196
第8章	まとめと今後の課題	201
	参考文献	207
	言語資料一覧	214

第1章 研究の目的

本研究は、現代日本語の副詞研究の深化を目指し、副詞における程度性、評価性、叙法性のあり方、その関わりあい「よほど¹（よっぽど）」という副詞の具体的な記述を通して考察するものである。

副詞は文の中でのはたらきが連用修飾という1つにほぼ固定されるため語形変化をもち、形態論的なかたちづけをうけない。しかし、文の中で、共起する語や叙法形式、あらわれる位置などにおいてさまざまな性質を示すという点で構文的にかたちづけられており、副詞のもつ程度性や評価性、叙法性もそういった構文的な形式に反映されている。したがって、副詞の意味機能を明らかにするにあたっては、これら程度性、評価性、叙法性という観点は重要なものであると考える。以下、「よほど」という副詞をとおして具体的にみる。

「よほど」は、次のように状態性をもつ語としか共起し得ない点で、その語の属性的な意味に関わり程度性をあらわす副詞である。

a 彼はよほど疲れているらしい。

彼はよほどうれしかったのだろう。

b *彼はよほど犯人らしい。

このように程度性に関わることから程度副詞の1つとみなされ、cのように「～より」「～のほうが」といった比較対象を伴う比較構文で用いられることから比較に関わる程度副詞として扱われることが多い(渡辺実(1990)、佐野由紀子(1998)、川端元子(2002)など)。しかし一方で、cのような比較構文をとらない場合は、たとえばdのように特定の叙法形式を伴いやすいといった制約がある点で、文の叙法性とも関わりをもつ。同じく状態性をもつ語と共起してその程度をあらわす「とても」「非常に」「かなり」「なかなか」といった副詞とは異なり、eのような文は容認されにくいことから、単に状態性をもつ語の属性的な意味に関わるというだけでは「よほど」という副詞の多面的な性格はとらえきれないことは明らかであろう。

c あの本より この本のほうがよほどおもしろい。

d 彼が一晩で読み終わるのだから、この本はよほどおもしろいのだろう。

e *この本はよほどおもしろい。

cf.) この本は {とても／非常に／かなり／なかなか} おもしろい。

¹ 以下、本研究では「よほど」と「よっぽど」を、「よほど」で代表させて記す。「よほど」と「よっぽど」の形態的な相違については、その語源や2つの形態の成り立ちを含めて第3章、3.3で触れる。

そして、c のような比較で用いられる場合でも、「よほど」には同様に比較で用いられやすい「ずっと」「はるかに」とは異なる面がある。

f * 姉より妹の方がよほど若く見える。 ○ 妹より姉の方がよほど若く見える。

cf.) 姉より妹の方が {ずっと／はるかに} 若く見える。

「よほど」も「ずっと」や「はるかに」のように、2つの比較対象の間の程度の差が大きいことをあらわす点では共通するのだが、「よほど」は通常そうである2つの対象の関係（ここでは、「姉より妹の方が若く見える」のは普通であるということ）には用いにくいという特徴がある。これは「よほど」が程度を限定するのに伴って何らかの評価をもつ、すなわち評価性をもつことのあらわれであると考えられる。

また、「よほど」には次のような特徴もみられる。

g 雪の日は、よほど早く家をでないと間に合わない。

h * 雪の日は、よほど早く家を{でる／でることにしている／でましょう／でなさい}。

g のような文では用いられて、家をでる時間の早さの程度を限定することができるのに対して、h のような種々の述語形式をとる文では用いられない。このことから、「よほど」は「～ないと」という否定の条件節と主節にまで関わる副詞であることがうかがわれる。

このように、状態性をもつ語と結びついて程度をあらわし、何らかの評価を伴いながら、比較や文の叙法とも関わりをもつ「よほど」という副詞について、実例をもとに用法を記述し、程度性と評価性と叙法性のあり方の考察を通してその性格を明らかにすることが本研究の目的である。

第2章 副詞研究の流れと本研究の位置づけ

本章では、副詞研究の流れを概観し、本研究の位置づけと、副詞研究にとって「よほど」という副詞を記述することの意義を述べる。

2. 1 副詞の三分類とその展開

本節では、現在の副詞研究に影響をあたえ、基盤となっているともいえる副詞の枠組みとその展開について、本研究の位置づけや問題意識に関わるものを中心にとりあげて述べる。

日本語の品詞の1つである副詞は、国語学会編(1980)『国語学大辞典』によると、「語形変化をもたず、単独で用言またはそれ相当の語句を修飾（限定・強調）することを基本職能とする語」（工藤浩執筆「副詞」の項 p.744）という特徴をもち、通常次の3つに下位分類される、とある。（以下それぞれの副詞の項による。）

情態副詞：動作作用または事態のあり方を表わして、主として動詞を修飾する副詞

「ついに完成した」「おのずと分かる」「すぐ（に）行く」「ゆっくり（と）歩く」

程度副詞：状態性の意味をもつ語にかかって、その程度を限定する副詞

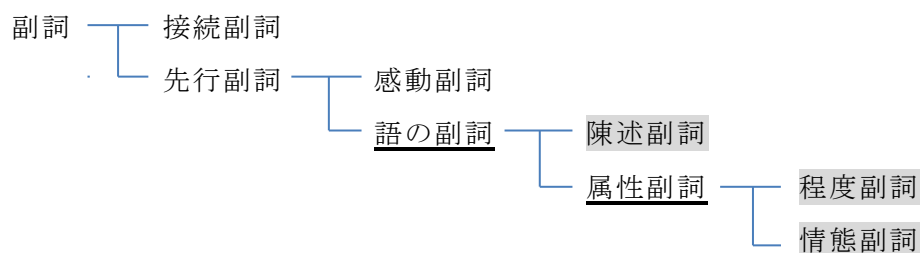
「たいへん楽しい」「もっと早く歩け」「かなりきれいな花」「至って健康だ」

陳述副詞：否定・推量・仮定など、述語の陳述的な意味を補足・強調し明確化する副詞

「けっして行かない」「たぶん行くだろう」「もし行ったら」

これらの分類と命名は、近代における副詞の体系化の出発点ともいえる山田孝雄(1908)(1936)にさかのぼる。

山田(1936)では、副詞は、直接に文の骨子となる主語や述語として用いられることなく、必ず他の自用語（体言や用言）や文に依存してはたらくものであることから「副用語」と総称され、次のように整理されている。



(p.374)

山田でいう副詞は広く「副用語」の意で使われており、いわゆる「接続詞」や「感動詞」も含む。このうち狭い意味での副詞にあたるものは「語の副詞」とされる情態副詞、程度副詞、陳述副詞の3種である。情態副詞が属性観念を、程度副詞が情態性の属性の程度をあらわし、これらはともに他の語の実質的な意義、すなわち属性観念を修飾し、陳述には関わらないものであることから「属性副詞」として一括される。一方、陳述副詞は用言のあらわす属性観念には関わらず、陳述の仕方に関わるもので、「述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方式に一定の制約のあるもの」(p.388)として、「属性副詞」とは大きく区別されている。

この山田の語の副詞における三分類のうち、情態副詞については、学校文法でいう形容動詞語幹（「静か」「なめらか」「精密」「偉大」など）をも多く含んでいたものが、のちに形容動詞として提唱されるとともに排除され²、活用の不十分な、擬声語擬態語や「はっきり（と）」「のんびり（と）」といった様態をあらわすものが中心に残される形で現在通用する三分類の枠組みに至る。情態副詞は、山田に提唱されて以降、このように修正が加えられながらも学校文法にも引き継がれ、副詞の一類に位置づけられている一群であるが、副詞研究においてはこれらを副詞に含めず、副詞から除く説もある。

たとえば、松下大三郎(1928)は副詞を「他の概念の運用に従属する属性の概念を表して他詞の運用を調節するものであつて、叙述性の無い詞である」(p.208)とし、副詞には「叙述性」(述語として何かを判定・判断する力)をみとめない。いわゆる情態副詞「唳々と鳴り響く」の「唳々と」は「聲唳々と鳴り響く」のように「聲」を主体としてその状態を叙述することができる、すなわち「叙述性」をもつことから、用言（「象形動詞³」）として扱い副詞から除く。川端善明(1983)のとらえ方は松下に似ており、「花が白く咲く」という形容詞の連用形「白く」が、「咲く」に対しては装定、「花」に対しては述定という「二重の述語性」をもつという構造がいわゆる情態副詞にも共通することから、形容詞（ただし活用はもたない点で「不完全形容詞」）として、副詞から除く立場をとる。工藤浩(2000)でも同様に、「ことがらのな〈修飾語〉として働くいわゆる「情態副詞」の大半は用言へ「(不完全)形容詞」として送り返すことになる」という、副詞から除く立場が示されている。

² 山田孝雄(1936)で情態副詞に含まれていた形容動詞語幹がのちに形容動詞として除かれたこととも関わるが、形容詞、形容動詞の連用形の扱いは立場により異なる。主に動詞を修飾してその動作の様態をあらわすという構文的な機能は、形容詞（イ形容詞）、形容動詞（ナ形容詞）にも同様に見られる（「厳しく叱る」「丁寧に書く」など）が、これらは、もとの形容詞、形容動詞と語彙的な意味に変容がみとめられなければ形容詞、形容動詞の連用形として扱われるのが通常である。しかし、一方でこれらを副詞に転成したものとみなす立場もある（鈴木重幸(1972)）。鈴木(1972)ではその理由を「問題の連用形以外の形容詞の形は、名詞のさししめすものやことがらの属性（性質や状態）をさししめし、文のなかでは規定語や述語としてはたらくが、問題の連用形は、そうではなく、動詞（形容詞）をかざり、これらのさししめす属性の属性（ようすや程度など）をさししめし、文のなかで修飾語（あるいは状況語）としてはたらくという点で、質的なちがいがあからである。そして、問題の連用形のこうした性格と同様な性格をもつ一群の単語がべつに副詞として存在するからである。」(p.463)と述べている。

³ 松下(1928)でいう「動詞」は、広く形容詞も含めた用言という広い意味で用いられている。

渡辺実(1971)はこれらに対し、いわゆる情態副詞を「情態詞」とよび、名詞、形容動詞語幹（「状名詞」）とともに「素材表示の職能のみを託される」体言類に含め、やはり副詞とは区別する。

以上のように、情態副詞としてきた大半⁴を副詞から除く説もあるなかで、情態副詞の扱いは、副詞論ひいては日本語の品詞論にとっても重要かつ大きな問題だが、情態副詞が文のことがら内の修飾語としてはたらくものであり、本稿で考えたい程度と評価と叙法という考察範囲とは直接関わるものではないため、これ以上は触れない。残る程度副詞と陳述副詞についてみていく。

2. 2 程度副詞と陳述副詞

山田孝雄(1908)(1936)で提唱された副詞の分類は、渡辺実(1971)で構文的な機能の観点からとらえなおされる。前節でも述べたとおり、情態副詞は体言類として扱われ、副詞には含まれない。また、程度副詞は「連用の職能」を担う副詞として「連用副詞」と、陳述副詞は「誘導の職能」（後続する本体を予告し誘導する）を担う副詞として「誘導副詞」とよびかえられる。渡辺の「連用成分」と「誘導成分」との違いを副詞に限ってみると、次のように区別している。まず、「非常に」という「連用副詞（程度副詞）」は、その連用対象が「美しい・静かだ」といった性質や状態を素材概念とする形容詞・形容動詞の範囲に限られることから、「被修飾語の実質上の意義すなわち素材概念の性質と関係のある装定をする」（p.306）とみとめる。それに対し、「きっと」という「誘導副詞（いわゆる陳述副詞にあたるもの）」は、その対象が「読む・美しい・静かだ・桜だ」といったあらゆる素材概念をあらわすものでありうることから、対象の実質上の意義には無関係、すなわち「叙述の知的内容量に対しては、全く増減の影響を及ぼすことがない」（p.310）うえに、「後続する本体を予告しそれを誘導する」（p.312）ことが実質的な機能である点で「連用副詞（程度副詞）」とは本質的に異なるものであると区別されている。渡辺と山田とは、情態副詞の扱いは異なるが、程度副詞と陳述副詞をこのように区別する点は共通していると思われる。ただし、陳述副詞については、渡辺実(1949)でも既に一部が示されていたが、渡辺(1971)の「誘導副詞」は「きっと」「決して」「たとえ」「もし」など、山田以降陳述副詞と扱われてきたものにとどまらない。次のように、(A) 注釈内容を表示しつつ後続する注釈対象を誘導するもの、(B) 誘導対象が素材概念であるもの⁵なども「誘導副詞」の一種として従

⁴ 情態副詞に含まれ得るものの中には、「かつて／しばらく／まだ／もう／とうとう／すぐ」など時に関わる副詞、「わざと／あえて／つい／うっかり」など意志や態度に関わる副詞などがあり、これらは副詞から除かれる情態副詞の大半とは区別してとりだされることがある（川端善明 1964、1983、工藤浩 2000 など）。

⁵ これらは渡辺実(1957)では「限定副詞」としてたてられ、「ある語の表わす素材概念を限定し、その素材に対する話し手の価値評価を表わす一群である」と規定されていたものである。

来の陳述副詞に加える考えを示した。

(A) もちろん、原書を読む。

幸京都に住むことになった。

(B) せめて半額でも融通してもらえませんか。

おまけに次男まで戦争にとられてしましまして……。

つまり、渡辺(1971)では、山田の副詞の三分類のうち、情態副詞は体言類として除かれたが、程度副詞と陳述副詞の扱いは、構文的機能の観点から「連用副詞」「誘導副詞」としてその区別は継承された。さらに陳述副詞は「後続する本体を予告しそれを誘導する」機能をもつ「誘導副詞」として、扱われる対象が広がる形でとらえなおされることとなった。

これらの研究をうけ、副詞を広範囲にわたって扱った研究として、工藤浩(1977)(1982)(1983)(1997)の一連の研究がある。ここでは、程度副詞と、陳述副詞の全体に関わる記述がある工藤(1982)(1983)を中心に、陳述副詞、程度副詞の順にとりあげる。

工藤(1982)では、「陳述(性) predicativity」という用語を「単語や単語の組み合わせを文として成り立たせる諸特徴」と仮に定め、その「陳述性」のもとに少なくとも問題になるものとして「叙法(のべかた) modality」「評価(きもち) emotionality」「係り—結びもしくは theme—rheme の関係」「とりたて focusing の関係」をあげている。そして、それに関わる副詞について次のように述べている。

こうした文の陳述性のうち、副詞あるいは副詞的成分に関係のあるものとしては、叙法ととりたてと評価の三つがあると思われる。例を挙げれば、

a) たぶん晴れるだろう。／ どうぞ来て下さい。／ はたしてあるだろうか。

など、推量、依頼、疑念といった、文ののべかた(叙法)にかかわるもの、

b) ただ君だけがたよりだ。／ すくなくとも十年はかかる。

など、限定、見積もり方といった、文の特定の部分のとりたて——つまり、表現されていない他の同類のものごととの paradigmatic な関係づけ——にかかわるもの、

c) あいにく雨が降ってきた。／ 奇しくもその日は父の命日だった。

など、文の叙述内容に対する話し手の評価・感情的な態度にかかわるもの、の三つである。こうして、筆者は現在のところ、陳述副詞について、

陳述副詞 { a) 叙法副詞
 b) とりたて副詞
 c) 評価副詞

のような見取り図をもっている。

(p.46)

このうち、「叙法副詞」については、「叙法性 (modality)」を「話し手の立場からする、文の叙述内容と、現実および聞き手との関係づけの文法的表現」(p.50)としたうえで「文の叙法性に関わりをもつ副詞」(p.52)と規定する。この規定にみられるとおり、「叙法副詞」は山田(1936)で「述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方式に一定の制約のあるもの」(p.388)と説かれ、従来様々に指摘されてきた陳述副詞にもっとも関連が深いものだと思われる。工藤(1982)ではこれら「叙法副詞」の呼応する形式の構文論的などらえ方の必要性、意味機能の記述の方法論が具体的に論じられているが、対象を広くとりやすい規定になっており、その適用範囲は広範囲にわたる。「とりたて副詞」「評価副詞」については、先の渡辺(1971)との関係でいうと、渡辺(1971)で「誘導副詞」の一種とされた「せめて・おまけに」の類(渡辺(1957)で「限定副詞」と称されたもの)が「とりたて副詞」にあたる。また、渡辺(1971)において「注釈誘導の一群」としてやはり「誘導副詞」の一種にとりこまれた「もちろん・さいわい」の類は、同じく「誘導成分」にあたる用言の誘導形とされた「確かに・珍しく」とともに、評価的・感情的な態度に関わるものは「評価副詞」に、それ以外は「叙法副詞」やその下位類にあたる「下位叙法 sub-modality」の副詞にそれぞれふりわけられ整理されている。つまり、工藤(1982)では、渡辺(1971)で「誘導副詞」としてとらえなおされた、山田以来の陳述副詞の流れにある一群の副詞をとりこみ、さらに下位類化する形で陳述副詞の全体像を提示したといえる⁶。

一方、程度副詞については、その一部について丹保健一(1981)、原田登美(1982b)などで否定を含む叙法との関わりが指摘され⁷、工藤浩(1983)で、通常、「《(相対的な) 状態性の意味をもつ語にかかって、その程度を限定する副詞》」とされる副詞群について、そのことからの性格と陳述的な性格が細部にわたって論じられている。そのなかで、陳述的な性格について指摘されるのは次の2点である。

①多くの程度副詞は純然たる否定形式とは共起しない

* きょうは相当さむくない。 * この本は大分おもしろくない。

⁶ 工藤(1982)で示された陳述副詞の下位類のうち、「叙法副詞」以外の「とりたて副詞」「評価副詞」についてはそれぞれ工藤浩(1977)(1997)で詳しく述べられている。

⁷ 丹保健一(1981)では程度副詞の中に、意志、願望、命令、勧誘、さらに否定の文末表現と共起できないものがあることが指摘され、原田登美(1982b)でも〈強程度副詞〉(程度のはなはだしいことを表す副詞)としてまとめられる副詞について①否定の対象にならない、②疑問の対象にならない、③命令の対象にならない、④係助詞「は」を下接しない、との指摘がある。さらに、原田(1982b)は、文を「素材内容」(ことからの側面)」と「ムード」(陳述的側面)とに分けた場合に「素材内容」を形成する副詞を〈素材内副詞〉、「ムード」に属する副詞を〈素材外副詞〉としたうえで、「〈強程度副詞〉は事態の程度を示す程度副詞としての役割を果す反面、事態に対する話者の批評・評価を表しているとも見られる側面があり、〈素材内副詞〉〈素材外副詞〉の中間的存在とも言えるものである」(p.60)と述べている。

* この電球はすこし明るくない。 * このひもは非常に長くない。

②多くの程度副詞は命令・依頼・勧誘・意志など、ことがらの実現を“はたらきかける”
叙法と共起しにくい

? 非常にはやく走りなさい。 * だいぶたくさん作ってください。

* とてもゆっくり歩きませんか。 * なかなかじょうずに書こう。

①は程度副詞が肯定否定の「みとめ方」に関係するためであり、②は「サマに対する程度」をあらわす程度副詞が反面（裏面）としてもつ「サマに対する評価性」のためであるとされるが、さらに、共起しにくさには語によっていくつかの段階があり、「サマに対する評価性」が濃いものほど共起しにくいことが述べられている。工藤(1983)はその理由を、評価を下すためにはその対象が実現している（さいわい晴れた／ている）か、少なくとも実現が予定されている（さいわい晴れそうだ）必要があることによる、と説明している。そして、「いわゆる情態副詞（様子や量）がことがらの側面にかたより、いわゆる陳述副詞（叙法や評価）が陳述的側面にかたよる中であって、程度副詞は、陳述的に肯定・平叙の叙法と関わって評価性を持ちつつ、ことがらの側面には形容詞と組み合わせさせて程度限定性をもつ、という二重性格のものとして位置づけられる」（p.197）と結論づけられている。山田以来、程度副詞は陳述的な面には関わらないとされ、陳述副詞とは大別して扱われることが多い存在であった。工藤(1983)では、その程度副詞を肯定・平叙の叙法性、程度性の反面にもつ評価性という観点から陳述副詞（叙法や評価）に連続してとらえる見方が提示されたといえる⁸。

2. 3 副詞における評価性

前節では、状態性概念の程度を限定する程度副詞が文の叙法性に関わることについて、そこには評価性が関与しているとの見方が提示されたことを述べた。

この評価性が程度副詞のみに関わるものではないことは、工藤(1983)でも「* さいわい君が来てくれ」「* りんごをたった二つ買いなさい。」などの例をあげて示されているが、工藤浩(1997)では、意味上、構文機能上の特性によりそれを本務とする「幸い」「あいにく」「奇しくも」といった「評価副詞」がたてられる一方で、評価は「叙法・程度・情態・とりたて・時間といった、さまざまな成分に「かぶさる」ような形で存在する」（p.71）との

⁸ このような程度副詞の叙法との関わりの面に注目したその後の研究には中山恵利子(1996b)、林奈緒子(1997)などがある。中山(1996b)では、程度副詞についていくつかの叙法形式との共起制限を調べ、共起制限の許容度によって程度副詞を①ことがら成分性②中間成分性③陳述成分性に段階的に位置づけている。林(1997)は、程度副詞が「命令のモダリティ」をもつ文に出現する条件として、「前提」「要求」「比較」の関係が成り立っている（つまり、程度副詞が比較系であることと、指示性をもつことが条件となる）こと、評価性をもたないこと、をあげている。

指摘があり、次のような相関図が示されている。

評価成分	—	叙述全体に—ことがら評価：驚いたことに～	～さいわい：評価副詞
	—	叙法部分へ—のべかた評価：さ　　す　　が　　～	～せっかく：叙法副詞
	—	時制部分へ—なりたち評価：早　　く　　も　　～	～とうとう：時間副詞
	—	相言部分へ—ありさま評価：意　　外　　に　　～	～けっこう：程度副詞
	—	用言部分へ—やりかた評価：親　　切　　に　　～	～きちんと：情態副詞
	—	体言部分へ—ものごと評価：優　　　　に　　～	～たかだが：取立副詞

(p.71)

また、副詞における評価の1つのあり方として、渡辺実(1980)では「せっかく」をめぐって考察がなされ、「見越しの評価」として提示されている。これは、「せっかく」という副詞が、たとえば

せっかく A だから B だ　　(せっかくここまで来たのだから　二三日泊ってお行き。)

せっかく A だが非 B だ　　(せっかくここまで来たのに　もう帰るのか。)

において、事態 A を直接の評価の対象とするものでありながら、「せっかくここまで来た」という事態 A のみでは用いることができず、続く事態 B (あるいは非 B) が表現されることにより落ち着きを得る、という二重性格の評価をもつものであるという指摘である。このような評価は、評価性のなかでも複文関係に関わるものとして注目される。

さまざまな成分「かぶさる」ような形で存在し、その濃さは語によって異なると提示されてきた副詞における評価性には、さらに、渡辺(1980)で指摘された「見越しの評価」のように、複文、連文関係にも及んで把握される複雑なものまであり、とらえにくく規定しにくいものである。しかし、副詞が用いられる文の叙法を制限することにもあらわれるように確かに存在し、副詞の性格やふるまいに密接に関わるものである。

2. 4 本研究の位置づけ

2. 1 から 2. 3 にわたって、副詞論全体の枠組みに関わる研究を概観し、日本語の副詞研究が山田孝雄によって提唱された情態副詞、程度副詞、陳述副詞の三分類を基礎とし、それぞれの副詞が機能による修正と精密化をうけながらとらえ直され、拡充されてきたことをみた。そして、副詞において相互に関連する、状態性をもつ語と結びついてその程度を限定する程度性、陳述的な側面の中核を担う叙法性、そこにさまざまなあり方で存在する評価性といった観点が提示されてきたことを確認した。これらの観点は今後副詞研究を深めていくために、必要かつ重要なものであると考える。

そして、これらの研究の流れをふまえてみると、副詞全体の枠組みにおいて次のような

ことが問題になってくるのではないだろうか。

1) 程度副詞と陳述副詞との関係

通常、程度副詞とされる副詞群は状態性をもつ語と結びついてその状態性概念の程度を限定する点で文のことがらの側面に関わるが、その大半は肯定・平叙という文の叙法性とも関わるものであることが工藤(1983)で指摘された。一方で、否定と呼応する「さほど」「たいして」「ちっとも」などは、やはり状態性をもつ語としか結びつかず、その程度を限定すると考えられるものだが、否定と呼応がとりあげられることも多く、たとえば、工藤(1982)では否定と呼応する「叙法副詞」としてあげられている⁹。これらをそれぞれ程度性を持ちながら肯定、否定の叙法に関わる程度をあらわす副詞として同等に考えることができるのか。そうだとすれば、いわゆる程度副詞の大半もまた、肯定・平叙とのいう叙法との関わりから「叙法副詞」の1つとして包括的に理解しうる可能性もあるのだろうか。また、「さぞ」「よほど」「あまり」などもやはり程度を限定する面をもつ一方、推量や条件など特定の叙法形式と共起しやすく叙法性との関わりをもつものである。これらの位置づけを考えるにあたっても、程度性と評価性と叙法性という観点からそれらの関係を検討するなかで、程度副詞と陳述副詞との関係を考えていくことが必要であると思われる。

2) 叙法副詞における叙法との関わり方

陳述副詞の中核をなす「叙法副詞」にどの範囲までの副詞が該当するかは理解が及ばないが、「叙法副詞」については工藤(1982)で「擬似叙法をも含めた文の叙法性に関わりをもつ副詞」(p.52)と広く規定され、その代表例が一覧として幅広く提示されている。以下、引用する。

A 願望—当為的な叙法

a) 基本叙法

1) 依頼—どうぞ どうか なにとぞ なにぶん / 頼むから etc.

2) 勧誘・申し出etc.—さあ まあ なんなら(なんでしたら)

b) 擬似叙法

3) 希望・当為etc.—ぜひ せめて いっそ できれば なんとか なるべく できるだけ
どうしても 当然

cf) 意志—あくまでも すすんで ひたすら いちずにetc.

意図—わざと わざわざ ことさら あえてetc.

B 現実認識的な叙法

a) 基本叙法

4) 感嘆・発見など—なんと なんて なんとものはや

5) 質問・疑念—はたして いったい / なぜ どうしてetc.

6) 推測—たぶん おそらく さぞ さだめし 大方 / 大抵 大概
/ まさか よもや / たしか もしや さては

⁹ 工藤(1982)では、「否定」の叙法副詞に続いて「肯定(?)」とされる中に、cf)として「一般の程度副詞」「ある種のアスペクト副詞」があげられている。

- 7) 伝聞—なんでも 聞けば cf) ～によればetc.
- b) 擬似叙法
- 8) 推定—どうも どうやら / よほど
- 9) 不確定—あるいは もしかすれば ことによると ひょっとしたら / あんがい
- 10) 習慣・確率など—きまって かならず きっと / とかく えてして ややもすれば
ともすると / いつも よく / 大抵 大概 普段
- 11) 比況—あたかも まるで ちょうど / いかにも さも
- 12) 否定
- イ) 判断性強し—けっして / まさか よもや
部分否定—必ずしも 一概に あながち まんざら
とりたて—別に 別段 格別 ことさら
- ロ) 程度性—たいして さほど さして ちっとも すこしも 一向(に) でんで
/ まるで 全然 まったく
- ハ) 動作限定—ろくに めったに さっぱり ついぞ たえて
(不可能) とても とうてい なかなか
(疑問詞) なんら なんの なにも なにひとつetc.
- ニ) 慣用句—毛頭 皆目 寸分 とんと おいそれと(は)etc.
cf) 否定的傾向—所詮 どうせ どだい なまじ へたに
(相対的テンス) まだ もう いまさら
- 13) 肯定—かならず さぞ ぜひ
cf) 一般の程度副詞 ある種のアスペクト副詞

※A 願望—当為的叙法にも、B 現実認識的叙法にも用いられるもの
きっと かならず 絶対(に) 断じて / もちろん むろん

C 条件—接続の叙法

- 14) 仮定条件—もし 万一 かりに / 一旦 / あまり よほど
- 15) 仮定逆条件—たとえ たとい
- 16) 逆条件(仮定～既定)—いくら いかにも どう どんなにetc.
- 17) 原因・理由—なにしろ なにせ なにぶん / さすがに あまり
- 18) 譲歩—もちろん たしかに なるほど いかにも
- 19) 譲歩～理由—せっかく

D 下位叙法 sub-modality

- 確認・同意—なるほど たしかに いかにも 全く / 道理で
うちあげ—実は 実の所 実を言えば 本当は 正直(言って)
思い起こし—思えば 考えてみると 思い起せば
証拠だて—現に 事実 じっさい だいいち
たとえ —いわば いうなれば いってみれば
説き起し—およそ そもそも 一体 大体 本来 元来
(概括) 一般に 概して 総じて
まとめ —結局 畢竟 要するに 要は つまり(は) 早い話(が)
(はしより) どうせ どっちみち いずれにせよ 所詮 とにかく
予想・予期—案の定 やはり はたして
めずらしく 案外(に) 意外にも / かえって
※観点～側面—正しくは 正確には 厳密には 詳しくはetc.
技術的には 時間的には 文法的にはetc.

cf)情報源—～によれば ～に従えばetc. (→ 7)伝聞 (pp.53-55)

このなかには、先にあげた「さぞ」「よほど」「あまり」など状態性をもつ語と結びついて程度限定に関わるもの、否定系の程度限定に関わるものなども積極的に位置づけられている。程度性と評価性と叙法性が相互に関与しあうものであれば、文の叙法性に関わりをもつという性格のもとに「叙法副詞」とまとめられる副詞群においても、その叙法性との関わりは、積極的に述語の叙法の文法的な意味を強調・限定するものから、評価のあり方

によって一定の叙法形式をとりやすいものまで一様でないことが予測される。これらの点も個々の副詞を検討する中で明らかにする必要があると思われる。

状態性をもつ語と結びつき程度をあらわし、何らかの評価を伴いながら、比較や文の叙法とも関わりをもつ「よほど」という副詞を中核におき、より典型的な叙法副詞、程度副詞などと対照しながらその程度性、評価性、叙法性のあり方を記述していこうとする本研究は、これまでの副詞研究の流れをうけて、このような問題意識を出発点とするものとして位置づけられる。

2. 5 「よほど」を記述する意義

ここまで、副詞研究の流れをふまえたうえで、本研究の問題意識と位置づけについて述べたが、「よほど」を記述する意義について具体的に考えてみたい。まず、「よほど」が現在の副詞に関する研究においてどのような枠組みのなかで扱われ、位置づけられているかを検討する。

該当する副詞群を総括的に扱っているものとして、工藤浩(1982)(1983)があげられる。工藤(1982)は、先にあげた「叙法副詞」と称される副詞群のなかで、「よほど」を「B 現実認識的な叙法」の中の擬似叙法である「推定」、「C 条件—接続の叙法」の中の「仮定条件」と関わりをもつ副詞として位置づけている。(全体像は2. 4の一覧を参照。「よほど」は■で示す。) また、工藤(1983)では、通説として「(相対的な)状態性をもつ語にかかって、その程度を限定する副詞」(p.177)と規定される程度副詞の代表的なものの一つとして、「よほど」があげられている。このように、「よほど」という1つの副詞が叙法副詞と程度副詞という別々の副詞群の両方で扱われているのは、叙法性に関わることと程度を限定することとが排除しあう性格のものではないからだと思われる。「よほど」は程度副詞に含めて論じられることは多いが、いわゆる陳述副詞として扱われることはほとんどない。そのような中で、「よほど」の程度性と、叙法性との関わりの両方の側面を積極的にみとめるものといえる。

また、渡辺実(1990)では、程度副詞の体系を提示し、そのなかで「よほど」を位置づける。渡辺は、程度副詞を「Xは___Aだ」という計量構文にたつか、「XはYより___Aだ」という比較構文にたつかによって大きく分け、前者を「発見系」、後者を「比較系」としたうえで、さらに、Aの位置にたつ語の意味に評価的にプラス(おもしろい／きれいだ／速い)かマイナス(つまらない／きたない／遅い)かという偏りがあるかどうかによって「評価系」「非評価系」に分け、程度副詞の体系を次のように4系列からなるものとして提示している。(渡辺(1990)では縦書きで示されているものを横書きに改めて示す。)

		比較 計量	判断構造	評価	表現性	量	
発見系	とても	× ○	発 見	±	驚 嘆	大	<div>評価系</div> <div>非評価系</div>
	結 構	× ○	望外発見	+	脱懸念	(大)	
比較系	多 少	○	潜在比較	－ ±	反期待	小	
	もっと	○ ×	比 較	±	吟 味	大	

それぞれのグループに属するとされる副詞は次のとおりである。

とても類 … はなはだ すこぶる たいへん きわめて ひじょうに ずいぶん

結構類 … なかなか わりに ばかに やけに

多少類 … すこし ちょっと やや いささか かなり

もっと類 … ずっと **よほど** いっそう はるかに いちだんと

このなかで、「よほど」は比較系の「もっと」類（比較系・非評価系）であるとされ、いわゆる程度副詞のなかで、比較構文にたって用いられるのを基本とする副詞であると位置づけられていることになる。この渡辺(1990)の提案以降も「よほど」が比較に関わる程度副詞として扱われることは多く、佐野由紀子(1998b)では渡辺の分類をさらに下位類化する試み、川端元子(2002)では双方向性か一方向性かという用いるスケールの違いで説明しようとする試みがなされている。

佐野由紀子(1998a)では共起する主体変化動詞とその際にあらわす意味によって程度副詞を3つに分類しており「よほど」は[一限界／進展的变化]の主体変化動詞と共起し「変化の度合い」をあらわす「ずっと」類（比較をあらわす副詞類）とされる。中山恵利子(1996a)では、あらわすのが量か程度か、基準はなにか（比較基準をとるか、とらない場合の基準はどのようなものか）という、量・程度・基準という観点から程度副詞の下位分類が試みられており、「よほど」は、量・程度どちらにも用いられ、比較を明示する場合もしない場合もある「量的程度副詞」に位置づけられている。

このように他の多くの程度副詞のなかで分類やグループ化を行う試みは、その範囲での体系化や一般化のために必要なことであろう。しかし一方で、「よほど」はどのような観点で分類されても、程度副詞という範囲の中で扱われ、グループ化されるだけではその性格が一面的にしかとらえられていないように思われる。それは、「よほど」が程度性と評価性と叙法性に関わるという複合的で多面的な性格をもっており、比較の程度副詞、程度副詞といった範囲におさまるものではないためであろう。「よほど」自体を記述の対象

としてその性格を明らかにすることは、次のようなことにつながる。

副詞全体をながめてみたときに、「よほど」とあらゆる面で機能を同じくする副詞が多くあるわけではない。しかし、「よほど」がもつ程度性や評価性や叙法性のあらわれにはさまざまな部分で多岐にわたる副詞との共通性、類似性がみられる。

まず、先にも述べたとおり、先行研究でも積極的に扱われているように、程度を限定し、比較構文で用いられやすいという点で程度性の面に注目すると「もっと」「ずっと」「はるかに」などと類似する面がある。しかし、それだけでなく、「よほど」にはたとえば「電話が鳴っても起きる気配がない。よほど疲れているらしい。」のように何らかの徴候を証拠とする推量（本稿では「推定」とする）をあらわす形式と共起する傾向が見られ、文の叙法性との関わりという観点からは、「どうやら（～らしい／ようだ）」「どうも（～らしい／ようだ）」といった叙法性と関わる副詞と共通性がみとめられる。そして、程度性ととともに叙法性とも関わる点では、「さぞ」「あまり」などとも共通性が見出される（「このニュースを聞いて、彼はさぞ驚いたことだろう」「あまり寒いと冷たい飲み物は売れない」）。

また、比較であっても自明の比較判断には用いにくいという「よほど」の評価性に関わる面からは、程度性をもたないものの「いっそ」「むしろ」「かえって」などの比較選択に関わる副詞との近づきがみとめられるように思われる（「ここで働き続けるくらいならいっそやめてしまった方がました」「風の強い日は船より 自転車の方が {むしろ／かえって} はよい」）。

さらに、冒頭でも触れたが、「よほど」は「雪の日は、よほど早く家をでないと間に合わない」という文では用いられて家をでる時間の早さの程度を限定することができるのに対し、「*雪の日は、よほど早く家を{でる／でることにしている／でましょう／でなさい）」のように用いられないことから、「よほど」は「～ないと」という否定の条件節と主節にまで関わる副詞であることがうかがわれる。このように2つの事態の関係に関わる面では、先にあげた渡辺実(1980)で「せっかく」をめぐって考察がなされ「見越しの評価」と称されたような、複文に関わる評価をもつ副詞の類、「せっかく」「なまじ」「さすが」「どうせ」などと共通性がみられる。

このように、「よほど」が複合的にもつ程度性、評価性、叙法性のあらわれと思われる多面的な性格は、広くさまざまな副詞と関わるものである。この多面的な性格を明らかにしつつ、程度性と評価性と叙法性の相互の関係を統合的にとらえることは、程度副詞か、陳述副詞かといった既存の枠組みをこえて、評価のあり方をはじめさまざまな観点から副詞をとらえなおす可能性を提起するのである。

2. 6 「よほど」に関する辞書の記述と先行研究

本節では、「よほど」を扱った辞書の記述と先行研究をあげて検討する。文献としては、国語辞典類、用法辞典類、その他諸論考がある。以下、順にあげる。

2. 6. 1 国語辞典の記述

国語辞典類については、中辞典、大辞典のうち、現代語の記述を優先する『大辞林』（三省堂）、歴史的記述を優先する『日本国語大辞典』（小学館）をみる。

それぞれの辞典の語釈とあがっている例を以下、引用する。

『大辞林』初版(1988)

よっぱど【余っ程】（「よきほど」の転。「余」は当て字）

（副）①程度がはなはだしいさま。普通の程度を超えているさま。たいそう。ずいぶん。

「これなら家にいた方が一ました」「一疲れていたとみえて、もう眠ってしまった」

②すんでのところでそうになってしまいそうなさま。

「一怒鳴りつけてやろうかと思ったが我慢した」

③ちょうどよい程度であるさま。

「瑟の緒のあはひ広狭もなく一に寸法の有るを云ふぞ／毛詩抄三」

④大体。おおよそ。

「者を知る器量があつたぞ、王戎と一同じやうにあつたぞ／蒙求抄一」（p.2500）

よほど【余程】（「よきほど」の転。「余」は当て字）

（副）①程度がはなはだしいさま。普通の程度を超えているさま。たいそう。ずいぶん。

「一自信があるのだろう」「自分で直接行った方が一簡単だ」「あれから一経つのに、まだ帰って来ない」

②すんでのところでそうになってしまいそうなさま。

「一捨てようかとおもったがやめた」

③ちょうどよい程度であるさま。

「是は一色付いた／狂・瓜盗人虎寛本」（p.2504）

『日本国語大辞典』第二版(2000-2002) [初版 1972-1976]

よっぱど¹⁰（「よきほど」の変化した語。「余程」は江戸時代以降のあて字）

¹⁰ 「よっぱど」の項は《形動》と《副》に分けて記述されている。《形動》には①程度や数量が適当するさま。よい程度であるさま。ほどよいさま。ちょうどよいさま。②適度を越えてかなりな程度であるさま。ずいぶん。たいそう。相当。③度を越えて十分すぎるのもうやめたい。やめてもらいたいさま。

《副》①よい程度に。ほどよく。ちょうどよく。

②ほとんどそれに近いさま。おおよそのところ。だいたい。おおかた。

「昭襄王からはよっほと百余年であらうぞ」(史記抄(1477)五・秦始皇本紀)

③かなりの程度であるさま。ずいぶん。相当に。

「この四つのあしき覚悟のなきはよっぼど仁の道なれども、まだ向上にはいたらぬぞ」(春鑑抄(1629)仁)

「其の儒者に比べては、出家の方がよっぼど広い」(古道大意(1813)上)

「手めへから了簡つけてよっぼど勘弁せねばならねへ」(滑稽本・浮世床(1813-23)初・中) (p.650)

よほど¹¹

《副》①よい程度に。ほどよく。頃合いに。

「迦楼の色の衣をかけて大路持鉢してとをらるるをせいは仏とよほど同ほどなり」(玉塵抄(1563)三二)

「当年ほど瓜の見事に出来た事は御座らぬ。是は、よほど色付た」(虎寛本狂言・瓜盗人(室町末-近世初))

②かなり。相当。ずいぶん。たいそう。非常に。

「悟のよほどいた人の衣の上に花がたまらいでちりてをちたぞ」(玉塵抄(1563)一八)

「やあ、よほど持た。さあ又汝もて」(狂言記・荷文(1700))

「日月五星の測度も、唐日本とは余ほどかわれり」(紅毛談(1765)上) (p.680)

それぞれの辞書の編集方針とあがっている例から、『大辞林』では現代語の意味として「程度がはなはだしいさま」と「すんでのところでそうになってしまいそうなさま」の2つが程度に関わるかどうかで区別してたてられており、古くは「ちょうどよい程度であるさま」という「よきほど」という語源としての意味で用いられていたことがうかがえる。また、『日本国語大辞典』ではやはり語源としての「よい程度に／ほどよく」という意味が最も古いものとしてあり、程度が比較的是なはだしいことをあらわす意味は「かなり」を代表に他の同程度の副詞を語釈にかえている。これら2つの辞書の語釈からは、「よほど」のあらわす意味に程度の大きさの面で変化があったことはわかるが、現代語において他の同程

大概。いいかげん。の3つの意味がたてられ、「よっぼどの」「よっぼどな」「よっぼどに」「よっぼどで(ある)」「～はよっぼど也」などが扱われる。

¹¹ 「よほど」の項も《形動》と《副》に分けて記述されており、《形動》には①ほどよいさま。ちょうどよいさま。②かなりな程度であるさま。相当。ずいぶん。の2つの意味がたてられている。

度をあらわす副詞との違い等についてはうかがい知ることができない。

2. 6. 2 用法辞典類の記述

「よほど」に関して記述が見られる用法辞典類には、森田良行(1977)、飛田良文・浅田秀子(1994)がある。

森田良行(1977)『基礎日本語 意味と使い方』

森田(1977)では、「よほど」の意味を「こちらの想像や世間一般の標準をはるかに越えるほどに程度がはなはだしいこと」(p.462)と記述したうえで、文型としては次の4種類になるとする。

- ① 「……なのは、よほど……らしい／ようだ／のだろう／のだ」と推量・推定もしくは、それに準じた断定となる形式。
- ② 「よほどの……」と「の」を伴って連体修飾する形式。その名詞の表す状態が並一通りでないさま。
- ③ 「BはAより、よほど……だ」の比較の形式をとって、A・Bの程度の差が大きいことを強調する。
- ④ 「よほど……しよう」と意志を表す形が以下に来て、行動に移したい気分の程度がはなはだしいさまを表す。ただし、心に強く決意するだけで、行動に移すことをためらう場合である。“思い切って”の気持ちに伴う。(pp.462-464)

これら連体修飾の場合を含む4つの文型を区別するが、このうち、①と②については推定的意識の表現に用いられ、「主観性の濃い、話し手の気持ちの強く表れた語」との記述、また、③についても「①と同様、話し手の主観でとらえた、程度のはなはだしさを表す」「話し手の主観が強く表れ、経験的、叙述的になってしまう」という記述があり（下線は執筆者）、「よほど」は程度のはなはだしさをあらわすが、そこには「話し手の主観」が強くあらわれる、としている。

飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』

飛田・浅田(1994)はまず代表的な例文をあげ、それについて解説するという形式をとっている。例文は(1)と(2)に大きく分かれており次の9例である。

- (1) ① 数学はぼくより弟のほうがよほどよくできる。
- ② あいつと仲直りするくらいなら、死んだほうがよっぽどましだ。

- ③ (工芸品展にて) **よっぽど**根気がないと、こんな細かい細工はできないね。
- ④ うちの犬はハチの須にちょっかいを出して刺されたのが**よほど**懲りたとみえて、以来絶対に近寄らない。
- ⑤ 二十億の絵をポンと買った大企業は**よほど**もうけているに違いない。
- ⑥ これだけ裏切られてもまだ吉本をあきらめきれないなんて、順子は**よっぽど**のバカだ。
- ⑦ 森君は**よほど**のことがないかぎり会社を休まない。
- (2) ①先生がガラスを割ったのは誰かと聞いたとき、**よほど**三田君がやりましたと言ってやろうかと思った。
- ②(友人のデートを目撃する) **よっぽど**声をかけようかと思ったけど、楽しそうだったからやめたわ。
- (p.585)

これら(1)(2)の例に対し、(1)は「程度がはなはだしい様子を表す」、(2)は「極端な行動をとるのを思いとどまる様子を表す」とし、程度に関わるか否かという点で区別している。(1)には連体用法(⑥⑦)を含む。また、文型の違いについては明示的ではないが、①②は比較の文脈で用いられた場合であることを示しており、それ以外も例文により文型パターンを提示しているものと思われる。さらに、「よほど」は対象の程度がはなはだしいことを話者が推量するというニュアンスで、納得(①)・感嘆(③)・慨嘆(②④)などの暗示を伴う」との記述がある。

以上の2つは、語の意味だけでなく、例文をあげてその用法(使い方)を解説し提示する用法辞典の類であり、限られた紙幅で適切な説明が求められるものである。検討事項としては次の2点があげられる。

①提示されている文型、例文が「よほど」の用法の典型を反映しているか

森田(1977)は「よほど」がとる構文の形式である文型を提示しているのに対し、飛田・浅田(1994)は構文の形式については明示的でない点是对照的だが、あげられている例を見ると飛田・浅田(1994)の((1)③と⑦を除いて)ほぼ対応している。

②森田(1977)の「話し手の主観」、飛田・浅田(1994)の「話者が推量するというニュアンス」や「納得」「感嘆」「慨嘆」などの暗示」というとらえ方が適切か。

これらはいずれも「よほど」が単に程度のはなはだしさをあらわすだけではないことの指摘であると思われる。森田のいう「話し手の主観」というのは他の程度をあらわす副詞との違いを説明するものとしては曖昧すぎる。また、飛田・浅田(1994)のあげるニュアンスや暗示は該当する例文から感じられるものか疑わしく、また、仮に感じられるとしても

それが個別の例に臨時的に読み込まれるものであれば、「よほど」によるものなのか（たとえば他の副詞「かなり」「相当」などでは感じられないものなのか）疑わしい。用法記述を行うなかで一般化できるものとしてとりだす必要がある。

2. 6. 3 諸論考

現代語の「よほど」を直接分析の対象としている論考に渡辺実(1987)、田野村忠温(2000)がある。以下、順にあげて検討する¹²。

渡辺実(1987)

渡辺(1987)では、「よほど」を程度副詞の中でも「比較副詞¹³」に属すとした上で、用法のモデル化を行っている。また、各用法を(a)語彙的条件、(b)評価的条件、(c)構文的条件、(d)表現価値の方向という4項目によって検討し、記述を試みている。それぞれの用法の記述をまとめると次のようになる。

(一) XはYよりよほどAだ。 ⇒ 基本的用法

- (a) Aに立つ語は性質・状態を表わす語である
- (b) Aに立つ語は、話手によってYに当てはまらないと評価されたものに限られる
- (c) 否定表現・疑問表現となじまない
- (d) 先行判断に対する異議申し立ての主張文を作る

(二) よほどAと見えてBだ。 (既実現) } [現実／実現の可能性]
(二)'よほどAでないとBでない。 (未実現) }
(二)"よほどAならBであり得る。 }

※「普通程度のAならばBでない」という常識の「普通程度」という部分に逆らうことから発する言い方。

- (a) Aに立つ語は性質・状態を表わす語である
- (b) Aに立つ語は、Bの原因・理由としてそれ自体では不十分、と話手に位置づけられている

¹² 副詞「よほど」を扱った論考には、他に播磨桂子(2006)、佐々木文彦(2010)がある。これらは「よほど」の意味、用法の変化に重点をおいたものであり、現代語の用法のいくつかのパターンについて触れているものの、それ自体を詳細に分析したものではなく、概ね渡辺(1987)、田野村(2000)を踏襲するものであるため、ここでは積極的にとりあげない。本稿第5章で通時的な変遷について考える際に改めて触れる。

¹³ 渡辺(1985)参照。「XはYより__Aだ」という構文（比較構文）において用いられるものを「比較」の程度副詞、「Xは__Aだ」という構文（計量構文）において用いられるものを「計量」の程度副詞として区別している。

(c) A の述語部が原因推定の言い方の型。「B だ」の部分は未来表現・不確実表現にならない

※「B だ」の部分が未実現になる場合には「A だ」の部分も言い廻しが(二)'のように変わる。

(d) 相手に向かって激励や叱咤、自分に用いて奮起や自戒、などの表現価値をもちがちである

(三) よほどA しようかとおもったが、やめた。……〔非実現〕

(a) A に立つ語は人間の意志にもとづく行為動詞

※程度副詞であるという本性は失われ、引きかえにムード性を得ている。

(b) A に立つ語は、話手にとって、その行為を実行することが意に沿った快い行為であり、ただしそれを実行することには少なからぬ抵抗感が伴う

(c) 判断動詞と逆態接続の結合の型に非実現決定の言い廻し（成語・慣用表現）

(d) 不本意思いとどまり文

渡辺の記述は(a)(b)(c)(d)の4つの観点から分析を試みたものであり、(a)の結びつく語との語彙的な共起制限ということがらの面的な面と、(b)(c)(d)の評価、構文という陳述的な面に関わる検討があわせてなされており、「よほど」の性格を両面からとらえた示唆に富む分析である。しかし、渡辺(1987)は実例を対象とした分析ではないため、たとえば次のような実例にあたるとでてくるような例の位置づけは明らかではなく、このような例をも包括的に位置づけられるような用法の記述、精密化が必要であると思われる。

・ナポリっ子と待ち合せをする時は、よほど腰をすえて、イライラしないように、はじめから心がけておくべきである。そうでもない、ヒステリーになる。

(塩野七生「イタリアからの手紙」)

・小包の場合は知事個人あてのものが多いため、よほど見た目に不審なもの以外は、直接知事室秘書課に運ばれる。(毎日新聞95.05.17)

また、それぞれの用法の分化については、(一)を構文的な制約がないモデルであるとみなし、それによって基本的用法であるとしている。(二)が実現文、(三)が非実現文に用いられるというような実現か非実現かという制約がない、ということにも読めるが、いずれにせよそれらも構文的な制約に関わるものと解釈される。)そして(二)が既実現の事実、(二)'と(二)"が未実現の事実、さらに、(二)が実現文、(三)が非実現文にと相補

う形で分化していると述べられているのは上に示したとおりである。

(一) のモデルを基本的用法とするのは、渡辺(1985)で提示された程度副詞の体系において「よほど」が「もっと」「ずっと」「いっそう」「はるかに」という副詞とともに「比較副詞」に属するという考えが根底にあることとおそらく無関係ではない。しかし、「XはYより____Aだ」という構文(比較構文)をとらない(二)の用法が現代語において周辺のものでない以上、「よほど」を比較副詞とすることには検討の余地があるだろう。そして、基本的用法のとらえ方もまた、他の用法との関係を検討したうえで再考すべき点である。構文的な制約はモダリティに関わるものに限られず、比較構文をとること自体が1つの構文的制約であるとみなしうる可能性もあるからである。

田野村忠温(2000)

田野村(2000)は、従来の内省や比較的少量の用例に依存した研究に対して、「よほど」という副詞の意味・用法の分析を通し、大規模な電子資料を利用することによって、内省では得られにくい頻度の低い用法や典型的でない用法をも含めた用法の実態を詳細に観察し、記述をより正確で精密なものにする可能性を提言するものである。「よほど」を1945例の実例にもとづいて分析した結果、「程度の強調という点では共通性を認め得るにせよ相互の関係の不明な次の3種類の用法に分類することができる」とする。

(A) あることの条件の程度のはなはだしさを言う用法

太郎は試験に合格した。よほど勉強したのだろう。

よほど勉強しなければ、試験には合格しない。

(B) 2つの事物の程度差のはなはだしさを言う用法

太郎より次郎のほうがよほど賢い。

(C) ある行為を行おうとする思いが募ったことを言う用法

よほど言おうかと思ったが、思いとどまった。(p.213)

田野村(2000)の分析は大量の実例によるため、先の先行研究で指摘される文型やモデルにそのまま沿わない例についても目配りがされている。しかし、それらの位置づけは不十分であり、分類外として保留されている例も少なくない。その原因は用法を規定する分析方法にあるように思われる。例えば、田野村(2000)では森田(1977)の「①「……なのは、よほど……らしい／ようだ／のだろう／のだ」と推量・推定もしくは、それに準じた断定となる形式」、渡辺(1987)の「(二) よほど Aと見えてBだ。というモデルに代表される用法」について、用例の頻度では「よほど」の使用は推定の表現におけるものが多いとしながらも、推定の表現かどうかを決めがたいものや、次にあげる例のように明らかに推定

をあらわしていない例が見られることから、「「よほど」は事態が既成の事実であるかどうかは問わず、その事態の成立にとって必要な条件の程度のはなはだしさを表現するものであって、“原因や理由の推定を表す”という特徴付けは「よほど」の意味・用法を過当に制限するものと思われる。」(p.215)とし、「(A)あることの条件の程度のはなはだしさを言う用法」とまとめている。(次の例はいずれも田野村(2000)より引用)

・利益を上げるには、高度に機械化するか、よほど安い労働力を使わなければならない。
(87/12/13)

・(飲み物は) 瓶からグラスへ注いで泡や色を愛でつつ味わうことが生活文化とされている。缶などに口をつけて飲むのは、よほどやむを得ない場合である。(92/10/16 夕)

田野村の指摘するように少数の用例や内省による過当な規定は問題だが、大量の実例による使用量の偏りや、構文的な特徴の違いを考慮せずに、規定からはずれる少数の用例によって規定を過当に抽象化することも問題であろう。大量の実例にもとづくものであっても、たとえば推定の表現の分析に見られたように、単に、ある表現をとるかどうかといった観点で検証的に用例をみるだけでは実証的な記述にはならない。規定からはずれると思われる用例にも位置づけがあたえられるような帰納的な用法記述を試みる必要があると思われる。

2. 6. 4 先行研究のまとめ

「よほど」に関する先行研究をあげて述べてきた問題点や検討事項をまとめる。

- 1) いくつかの先行研究で典型的な用法の概略は明らかになっているが、そのなかでは位置づけにくい実例もあり、それらを包括して位置づけられる用法記述が必要である。
- 2) 「よほど」がもつ、「程度のはなはだしさ」という程度的な意味に伴うとされる「話し手の主観(森田)」「暗示・ニュアンス(飛田・浅田)」のとらえ方は抽象的でやや恣意的な面があり、「よほど」自体の特徴が十分に一般化されているとはいえない。
- 3) 用法間の関係については先行研究では具体的には触れられていない。渡辺(1987)の基本的用法のとらえ方(渡辺の(一)の用法(比較構文にたつ用法)を「制約のない用法」して基本的用法とする)は他の用法との関係のなかで再考の余地がある。

以上の検討事項をふまえて、本研究ではできるだけ多くの実例をもとに帰納的、実証的

な立場で用法の条件を分析し、より精度の高い記述を目指す。このことは先の辞典等で提示される例文が「よほど」を代表する典型例を網羅したものであるかを検討することにもなる。方法論と分析対象については次章で述べる。

第3章 本研究の立場と分析の対象

本章では、本研究の立場として、まず方法論について述べる。実例分析を原則として記述を行うこと、また、どのような観点で分析を行うかという分析方法について具体的に述べる。分析対象となる実例を収集した言語資料の選定や収集方法についても詳述する。

3. 1 方法論

3. 1. 1 実例分析

本研究は、実例を分析の対象とし、帰納的、実証的な立場で精度の高い記述を行うことを目指すものである。そのため、実例をより広範囲の言語資料から収集して分析を行う。このような多くの実例を対象とする方法をとる理由は、まず第一に、実例には内省をはるかにこえる多様な例が見られ、それらを包括的に位置づけられるような用法記述こそが現代語の実態記述として望ましいと考えるからである。第二に、多くの実例を丁寧かつ慎重に検討することは、一部の用例によって過当に制限された規定を導き出すこと、一部の用例によって過当に規定を消極的なものにしてしまうことの両方を克服する手だてになると考えるからである。使用頻度や、用法間のつながりを示唆する例の存在などを手がかりに、「典型」と「周辺」を見極めながら意味や用法を抽出していくことは、作例や内省のみによる分析でなく、多くのかつ多様な実例を観察するなかで可能になることである。このような考えのもと、本稿では用例数（頻度）の偏りや計量的な記述をもとに考察を進めるところがある。ある語の意味機能が使用のくりかえしの中でやきつけられていくものであれば、「典型」的なものか「周辺」的なものかという違いは使用頻度として現象する面がある¹⁴。

一方で、一定の範囲の言語資料から収集可能な実例の量は研究対象によって異なり、一定の深さで分析できる量も無限ではない。また、使用可能な資料に制約がある場合もある。したがって、多くの実例を対象とするといっても、それ自体が限られた範囲からのものであることは自覚しておかなければならない。用例数（頻度）の偏りが集めたデータの偏りによって影響を受けるものかどうかの見極めが必要となる。本研究ではこのような困難と限界をみとめつつも、以上のような実例分析の意義を重視し、実例をもとに分析、考察を行い記述を進める。

3. 1. 2 用法記述の方法 用いられる文の構造のとらえ方

3. 1. 1 で述べたように本研究では実例を対象として用法記述を行うが、その具体的

¹⁴ このような、使用頻度（用例数の偏り）の見方、考え方については工藤浩(1982)に学んだ。

な分析方法について述べる。副詞は構文的な機能が連用修飾という 1 つの機能に固定されていて形態論的な語形変化はもたないが、文の中にあらわれて一定の機能を果たす以上、結びつく語やあらわれる位置など構文的な面でかたちづけられており、副詞の記述にとってもそれらの総体としての文の構造を明らかにすることが、用法、そして意味機能を明らかにしていくためには重要である。

本研究で扱う「よほど」についてもその用法を詳細に記述していくことによって意味機能を考えることをめざす。結びつく語の種類や語形をはじめ、共起する叙法形式といった狭い意味での形式を基本的な出発点とし、それらのあらかた文法的な意味の面での考察を加えながら構文的な特徴を明らかにしていくという手順で分析をすすめる。その際に、実例から一般化してとらえられる構造であれば、複文における節と節との関係、1 つの文をこえた連文の関係、さらに場合によっては「よほど」が用いられる文の先行する文脈との関係にまで分析と考察の範囲を広げ、意味機能を支える形式として扱う。

また、「よほど」が直接かかって結びつく語（実際にはどこまでかかっているかというかわかり先を単語単位で厳密に特定しにくいことも多く、それを含む述語句全体を問題にする場合もある）については全ての用法に共通して状態性という概念があげられるが、用法ごとに結びつく語の種類（品詞）とともに、その意味のタイプもそれぞれの用法を特徴づける 1 つの条件として検討の対象とする。

以上のことを次の例で具体的に示す。分析の観点は、たとえば次のような点である。

・太郎はよほど疲れているらしい。電話のベルが鳴ってもぐっすり寝入ったままだ。

・人々は、余程暑いのか、しばしば汗をぬぐっている。

〈結びつく状態性をもつ語〉（ 部分）

- ・どのような品詞があらわれるか
- ・意味的なタイプに偏りがみられるか、どのようなものか
- ・どのような語形をとるか（タ形・シテイル形など）

〈共起する叙法形式〉（ 部分）

- ・どのような形式があらわれるか（形式ごとの分布や偏り）
- ・どのように一般化されるか

〈実例に共通して見られる複文、連文関係〉（ 部分）

- ・複文や連文までを含め、それらがどのような形をとってあらわれるか
- ・「よほど」を伴う文の内容と、複文、連文の関係であらわれる内容とはどのような関係にあるか

一例としてあげたこれらの点は、相互に関連しあって「よほど」の用いられる構造をなし、特徴づけていると考えられる。このような広い意味での形式を、ある副詞の用いられる条件、その意味機能を支える条件として構文環境から見出し、総合的にとらえることが、程度性、評価性、叙法性といったいくつかの要素に関わる副詞の分析には必要だと考える。これらの考察の総体としての構造はそれぞれの用法のまとめで示す。

3. 2 分析の対象と収集方法

本研究では言語資料から収集した事例にもとづいて分析と記述を行う。以下、用例を収集した資料について述べる。3. 2. 1で、まず第4章で対象とした現代語の言語資料とその収集方法について述べる。本研究の分析対象の中心はこれら現代語における「よほど」である。また、本研究では現代語の記述を中心とするものであるが、現代語の用法の相互の関連やいずれの用法の特徴ももたない例の位置づけを考えるために、第5章で通時的な変遷についても扱うため、3. 2. 2で近世後期の言語資料と収集方法、3. 2. 3で近代語の言語資料と収集方法についても順に述べる。

3. 2. 1 現代語の言語資料

本研究の分析と考察の中心は現代語における「よほど」である。そのため、現在通用している、できるだけ多く、できるだけ広いジャンルの資料（小説、新聞、エッセイ、雑誌記事、対談集、論説）から事例を収集した。使用した具体的な資料は次のとおりである。なお、著者や作品名等の詳細については本稿末尾にリストを示し、本文中で引用する場合には著者名と作品名をあげる。

- (1) 『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』（1995）：主に小説
（翻訳作品を除く、昭和戦後に活躍した作家の1945年以降の作品（39冊55作品））
- (2) 『CD-ROM 版 新潮文庫の絶版100冊』（2000）：主に小説
（翻訳作品を除く、昭和戦後に活躍した作家の1945年以降の作品（29冊55作品））
- (3) 『CD-ROM 版 毎日新聞1995年版』
（新聞：1995年1月～12月の朝刊・夕刊を含む全紙面）
- (4) 『CASTEL/J』CD-ROM（日本語教育支援システム研究会）
（論説：1960年代～1990年代発行の「講談社新書」（37冊））
- (5) 書籍（手作業収集）計72冊
（小説28冊93作品・エッセイ33冊・対談集9冊・論説2冊：いずれも1980年代以降に発表されたものが中心である）

- (6) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』雑誌データ（国立国語研究所）
 [Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, 略称 BCCWJ]
 （雑誌記事：2001-2005 年発行 1996 件 約 440 万語 2012 年 3 月時点）

(1)～(6)の資料を対象に、電子化資料である(1)(2)(3)(4)については次の正規表現を用いて文字列検索 GREP を行い収集した。

[よヨ余餘](ほど|ぼど|ホド|ポド|程)

[よヨ余餘][つつツツ](ぼど|ポド|程)

(5)の紙媒体資料については、筆者が手作業で収集した。（その後電子化して収集の見落としについても確認を行った。）

(6)のオンラインコーパスについては、オンライン版コーパス検索アプリケーション「中納言」を利用して収集した。

以上の方法で得られた用例数は次のとおりである。収集した用例には副詞「よほど」「よっぽど」のほか、連体用法にたつ「よほどの」「よっぽどの」も含まれている。分析の対象の中心は本来の副詞用法であるため、区別して表 1 に「よほど」「よっぽど」の用例数を示す。また、現代語においては連体用法についても分析の対象とするため、表 2 に「よほどの」「よっぽどの」の用例数を示す。

表 1：現代語の形態別用例数（「よほど」「よっぽど」）

よほど	よっぽど	計
733	272	1005

表 2：現代語の形態別用例数（「よほどの」「よっぽどの」）

よほどの	よっぽどの	計
182	11	193

なお、現代語においては「よほど」以外の副詞を取りあげ、「よほど」と比較しつつ述べることもある。その際には(1)～(6)の資料が部分的に対象となるため、本文中で扱う際に適宜触れる。

3. 2. 2 近世語（後期）の言語資料

本研究では現代語の記述が中心であるが、現代語の用法の相互の関連や、いずれの用法の特徴ももたない例の位置づけを考えるために、第 5 章で通時的な変遷について扱う。対

象とする近世後期の江戸語の資料についてその選定方法と言語資料および収集方法について述べる。

3. 2. 2. 1 江戸語の成立と言語資料

江戸語の成立と言語資料については、松村明(1957 [増補版 1998])、『国語学研究辞典』(1977)、『国語学大辞典』(1980)を参考にした。

『国語学研究事典』(1977)によると、「慶長八年(1603)江戸に幕府が開かれてから慶応三年(1867)の王政復古までの、政治史でいう江戸時代を近世として扱う」とされ、さらに、国語史上、近世語は、政治、経済、文化の中心が 18 世紀半ばを境に江戸に移されたのに伴い、宝暦年間(1751～1764)を境に前期と後期に分かれるとする説が有力であるとされている。

近世語においては、前期は上方語が標準的なことばとして勢力をもち、後期は東国語を基盤とする江戸語が形成され、優位を占めてゆく時期であるにとらえられており、そのなかで、江戸の都市に発達したことばである江戸語の成立は、近世前期の早い時期の各地方言の雑居状態から、上方語、関東方言を中心とする混合の状態を経て、その完成は近世後期であるとされる。

以上のような江戸語の成立のなかで、江戸語があらわれる資料とその時期による変化については「宝暦ごろから洒落本が多く現れ、それには江戸語がかなりはっきり認められるが、まだ上方語の要素が色濃く残っている。しかし、文化(1804～1818)文政(1818～1830)期の滑稽本、天保(1830～1844)以後の人情本になると独自の体系を整えた完成された江戸語ができ上がり、後期後半の江戸語は上方語と対等の地位に立ち、いわゆる共通語的性格を有するようになる。」(p.223)という記述がある。

江戸語の資料については同様のことが松村明(1957 [増補版 1998 による])でも次のように詳しく述べられている。

江戸語を示す資料として豊富に出てくるのは、宝暦ごろから多く出版されるようになった洒落本の類である。このころにいたって、はじめて江戸語が文字の上に多く記録されるようになってくるのであるが、これは十七世紀初頭の徳川氏開幕以来、およそ一世紀半を経過していることになる。この時期になると、江戸語という独自の言語がほぼ形成されてきていたとみることができる。もっとも、洒落本の類に登場するのは特殊な社会の人々であるともみられる。また、そこに見られる江戸語も、まだかなり上方語的特徴をもった言語である。もっとひろい範囲の人々が登場し、しかも、その言語も上方語的特徴を捨てて江戸語独自の特徴をいっそうはっきり示すような資料が出てくるのは、さらに半世紀ほど経た十九世紀はじめの文化文政期を待たなければならない(1804 年—

文化元年、1818 年—文政元年)。滑稽本の類に見られる江戸語がこれで、天保期（1830 年—天保元年）以降の人情本の類に見られる江戸語とともに、これらのものにおいては、今日の東京語の母体としての江戸語のすがたが見られるに至るのである。(p.7)

また、『国語学大辞典』（1980）（「江戸語資料」の項（松村明執筆））では、近世前期つまり宝暦以前の江戸語が形成されつつあった時期については資料がきわめて乏しいのに対し、宝暦(1751～1764)以後の江戸語という独自の言語がすでにできあがってからのものは資料が豊富であるとされ、江戸語資料としてまとまった文献として咄本、重要なものとして洒落本、滑稽本、人情本、今後さらに利用されるべきものとして黄表紙・合巻等があげられている。

これらの記述を参考に、本稿の分析では、文語体でなく口語体の資料として、特に会話文体が中心である 1770 年以降の洒落本、黄表紙、滑稽本、人情本の代表的なものを対象とする。

江戸語の資料については以上の資料が利用し得る重要なものと思われるが、一方で、江戸語の様相の複雑さから、松村明(1957 [増補版 1998])には次のような指摘がある。

……一口に江戸語とか東京語とかいっても、それぞれが複雑な様相をもっている。かんたんに見ても、江戸語においては、本江戸とか旗本言葉とかいわれるものから江戸訛とか町人言葉・職人言葉とかいわれるものまであって、言語現象の上にもいろいろな様相をもっている。東京語でも山手言葉から下町言葉まで、いろいろな様相をもっている。そして、資料的に見れば、江戸語では、洒落本・滑稽本・人情本など、町人言葉・職人言葉の類を伝える文献が多い。また、今日の東京語について見れば、下町言葉は特殊位相のものとなって、いわゆる山手言葉を基盤とする共通語的なものを中心となってきている。したがって、表面にいちじるしく見えているところを中心とすると、江戸語においては町人言葉的な面での現象が多くとらえられるのに対して、東京語では共通語的な面での東京語が考えられやすい。そこで、ある言語現象について、ただ両者を結びつけただけでは、変遷の実態がほんとうにとらえられないおそれがある。(p.73)

歴史的に残された限られた資料によって言語現象の変遷をたどるということは、位相差をはじめ、地域差、文体差等の面で問題になることも多いが、そのことを認識したうえで、以上の資料を用いる。

3. 2. 2. 2 言語資料と収集方法

近世後期の資料として、洒落本、黄表紙、滑稽本、人情本などの口語体のものを中心に、

江戸語の資料と見なしうる 1770 年以降の作品を対象として用例を収集した。使用した具体的な資料について、以下ジャンル別に作品と刊行年を示す。作品名等の詳細については本稿末尾にリストを示し、本文中で引用する場合には作品名をあげる。

・洒落本 13 作品

『日本古典文学大系 59 黄表紙・洒落本集』（岩波書店）より 8 作品

「遊子方言」1770 頃／「辰巳之園」1770／「道中粹語録」1779 頃／「卯地臭意」1783
／「総籬」1787／「傾城買四十八手」1790／「錦之裏」1791／「傾城買二筋道」1798

『新日本古典文学大系 85 米饅頭始・仕懸文庫・昔話稻妻表紙』（岩波書店）より 1 作品
「仕懸文庫」1791

『日本古典文学全集 47 洒落本・滑稽本・人情本』（小学館）より 4 作品

「跣婦人伝」1753／「甲斐新話」1775／「古契三娼」1787／「繁千話」1790

・黄表紙 20 作品

『日本古典文学大系 59 黄表紙・洒落本集』（岩波書店）より 11 作品

「金々先生栄花夢」1775／「高慢斉行脚日記」1776／「見徳一炊夢」1781／「御存
商売物」1782／「大悲千禄本」1785／「江戸生艶気樺焼」1785／「莫切自根金生木」
1785／「文武二道万石通」1788／「孔子縞干時藍染」1789／「心学早染艸」1790
／「敵討義女英」1795

『新日本古典文学大系 85 米饅頭始・仕懸文庫・昔話稻妻表紙』（岩波書店）より 3 作品
「米饅頭始」1780／「三筋緯客気植田」1787／「玉磨青砥銭」1790

『新編日本古典文学全集 79 黄表紙・川柳・狂歌』（小学館）より 6 作品

「桃太郎後日噺」1777／「口空多雁取帳」1783／「従夫以来記」1784／「江戸春一
夜千両」1786／「鸚鵡返文武二道」1789／「鼻下長物語」1792

・滑稽本 6 作品

『日本古典文学大系 62 東海道中膝栗毛』（岩波書店）より 1 作品

「東海道中膝栗毛」1802-1809

『日本古典文学全集 47 洒落本・滑稽本・人情本』（小学館）より 2 作品

「酩酊気質」1806 頃／「浮世床」1813-1814

『新日本古典文学大系 86 浮世風呂・戯場粋言幕の外・大千世界楽屋探』（岩波書店）よ
り 3 作品

「戯場粋言幕の外」1806／「浮世風呂」1809-1812／「大千世界楽屋探」1817

・人情本 3 作品

『日本古典文学大系 64 春色梅児誉美』(岩波書店) より 2 作品

「春色梅児譽美」1832-1833／「春色辰巳之園」1833-1835

『日本古典文学全集 47 洒落本・滑稽本・人情本』(小学館) より 1 作品

「春告鳥」1836

以上の作品について手作業で収集を行った。なお、『日本古典文学大系』(岩波書店) に収録されている作品については、国文学研究資料館で公開されている「日本古典文学本文データベース」¹⁵も利用し、次の正規表現で文字列検索 GREP を行い、照合して収集の脱落とし等の確認を行った。

[よヨ余餘](ほど|ぼど|ぼと|ホド|ポド|ポト|程)

[よヨ余餘][つつツツ](ぼど|ぼと|ポド|ポト|程)

また、用例をあげる際には、それぞれの出典の表記にしたがうが、個々の用例の解釈にあたっては、『日本古典文学大系』(岩波書店)、『新日本古典文学大系』(岩波書店)、『日本古典文学全集』(小学館)、『新編日本古典文学全集』(小学館) に重複する作品は適宜複数の注釈を参照し、参考とした。

以上の方法で得られた用例数は次のとおりである¹⁶。

表 3：近世後期の形態別用例数（「よほど」「よっぼど」）

	よほど	よっぼど	計
用例数	34	71	105

「よっぼど」「よほど」あわせて全 105 例という用例数は分析に十分な数とはいえないが、近世の江戸語の資料の大規模なコーパスはまだ十分に構築されておらず、また、1 つの作品に多用される副詞ではないため、大量の用例を収集するのは難しい。近世後期の「よほど」の用法をこれだけの用例から一般化し体系化することはできないが、本研究におい

¹⁵ 岩波書店刊行の旧版『日本古典文学大系』の全作品の本文をデータベース化したものであり、国文学研究資料館管理のもと公開されており、ダウンロードしてテキストとして利用することが可能であった。2012 年 5 月 24 日以降、現在はその再構築版「大系本文（日本古典文学・断本）データベース」として公開され、岩波書店刊行の旧版「日本古典文学大系」と東京堂出版刊行の「断本大系」の作品について、全文検索とテキスト閲覧ができるようになっている (<http://base3.nijl.ac.jp/>)。

¹⁶ 「よっぼど」と「よほど」の区別については、出典の振り仮名にしたがっている。

また、1 例、「余程」に「やつと」と振り仮名が付されているものがあつたが、ここでは除いて扱う。

○ヨウ、トびつくりのおもひれゑらい大兵なア。彼様な兵と打合た所が、仏の御器ぢや。銅椀／＼。

○イヤ／＼、耳潰して放遣して置く法が余程増ぢやらう、ト馬のはなを海の方へ引むけ船の方へ行んとす(大千世界楽屋探)

ては現代語の意味と用法への変化を意識してたどるためにどのような使用があったかを把握することが目的であるため、用例の拡充は課題とする。

3. 2. 3 近代語の言語資料

対象とする近代語（明治・大正期）の資料について言語資料および収集方法について述べる。近世後期の資料でも口語体のものを選定して扱ったが、明治期の資料も会話文が含まれる小説を対象とし、特に言文一致がみられる口語体で書かれたものを中心に扱った。

（同一の著者による作品の中には一部文語体の作品も含まれるが、同時期の作品であるため資料からは除かなかった。「よほど」「よっぽど」の実例が得られたのは口語体のものに限られた。）大正期も同様に小説が中心である。また、明治期、大正期の資料の時代区分はやや複雑であるが、著者の生年、活躍した時期、対象となる作品の発表年を総合的に考慮し、同一著者の作品はできる限り一括して扱った。

使用した具体的な資料は次のとおりである。著者や作品名等の詳細については本稿末尾にリストを示し、本文中で引用する場合には著者名と作品名をあげる。

【明治期】

(7)『CD-ROM 版 明治の文豪』（1997）：小説

（翻訳作品を除く、主に明治期に活躍した作家の作品（35 冊 110 作品））

【大正期】

(8)『CD-ROM 版 大正の文豪』（1997）：小説

(9)『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』（1995）：小説

(10)『CD-ROM 版 新潮文庫の絶版 100 冊』（2000）：小説

((8)(9)(10)より翻訳作品を除く、主に大正期に活躍した作家の作品(46 冊 198 作品))

(7)～(10)の資料を対象に、次の正規表現で文字列検索 **GREP** を行い収集した。

[よヨ余餘](ほど|ぽど|ぽと|ホド|ポド|ポト|程)

[よヨ余餘][つつツツ](ぽど|ぽと|ポド|ポト|程)

以上の方法で得られた用例数は次のとおりである。

表 4：近代語の形態別用例数（「よほど」「よっぽど」）

	よほど	よっぽど	計
明治期	296	200	496
大正期	228	95	323

以上、本稿で分析の対象とする用例について述べた。

3. 3 「よほど」「よっぽど」の形態の違いの扱い

3. 3. 1 国語辞典での扱い

「よほど」と「よっぽど」の形態について、『日本国語大辞典』第2版(2000-2002)の「よっぽど」の項の語誌には、次のような記述がある。

中世以降の文献に現われ、意味的な関連から「良き程」の変化したものと考えられる。「日葡辞書」には「Yoppodo (ヨッポド)。または、Yoqifodo (ヨキホド)」の見出しが見られる。「土井本周易抄」「日本書紀桃源抄」などの室町時代の抄物資料では「えっぽど」の形も見られ、ヨキホド→(ヨイホド→エイホド)→(ヨッポド→エッポド)の変化をたどったものであろう。イ音便がさらに促音化したのは、「よいほど(えいほど)」の副詞としての一語化の表われと解釈できる。「よほど」の形も中世から見られるが、これは、「よっぽど」の促音が、ヤッパリ⇔ヤハリ、モッパラ⇔モハラ等の対に類推して強調の表情音ととらえられたところから、その非強調形として「よほど」の語形が生まれたものと考えられる。近世以降現代に至るまで「よっぽど」が強調的ニュアンスを伴うのに対して「よほど」は平叙的である。(p.650)

つまり、「よきほど」という語源から考えて、「よっぽど」の形がまずあり、そこから類推によって「よほど」という形が生まれて強調形と非強調形として併存しているとの解釈がなされている。

現行の国語辞典(中辞典・小辞典)でも、「よっぽど」の項には「現代語では、「よほど」をさらに強めた言い方として用いる」(『大辞林』初版)、「「よほど」を強めていう語」(『明鏡国語辞典』)、「「よほど」の強め」(『新撰国語辞典』第7版)といった記述が散見される。これらの記述は、「よほど」と「よっぽど」の形態の違いが現代語において同じ語の強調の違いとみなされていることを示している。また、実際「よほど」と「よっぽど」とで用法に違いがみられることはなく、構文論的な差異によるとは判断されないため、以下同等に扱うこととする。

3. 3. 2 資料による分布

本研究は「よほど」と「よっぽど」は同等に扱って記述を進めるが、それぞれの形態のあらわれ方が資料の性格によっても異なる傾向があるため、触れておく。本稿の現代語の資料を次のいくつかのジャンルや、会話文か地の文かによって分け、「よほど」「よっぽど」

の用例の分布（用例数と割合）を示す¹⁷。表 5 は、上から下にいくにしたがって「よほど」の割合が高くなり、「よっぽど」の割合が低くなるように並べたものである。

表 5 : 「よほど」「よっぽど」の資料別用例数と割合

形態 資料	よほど		よっぽど		計
	用例数	%	用例数	%	
小説（会話文）	105	45.3	127	54.7	232
雑誌記事（会話の引用）	6	54.5	5	45.5	11
対談	19	57.6	14	42.4	33
新聞（会話の引用）	25	61.0	16	39.0	41
エッセイ	78	62.9	46	37.1	124
雑誌記事（地の文）	23	76.7	7	23.3	30
新聞（コラム・意見）	79	84.6	14	15.4	93
小説（地の文）	346	88.9	43	11.1	389
論説	52	100	0	0	52
計	733		272		1005

それぞれの資料の種類について考えると、〈小説の会話文〉は会話を想定して書かれたものの、〈雑誌の会話の引用〉〈対談〉〈新聞の会話の引用〉は実際に話されたものを比較的忠実に再現したものであり、話される言葉に準ずる性格をもつためくだけた文体が含まれやすい。また、〈エッセイ〉〈雑誌記事〉などは会話ほどくだけないものの、日常的な文体で語られるものも多い。〈新聞のコラムや意見投書欄〉〈小説の地の文〉〈論説〉などは改まった文体が用いられやすいといえる。

もちろん、これらの資料の種類は境界が明確に定められるものではない。ここで便宜的に分けたそれぞれの種類の中にも文体の程度差はある。特に小説の地の文には、登場人物とは離れて客観的な視点から描かれるもの、登場人物の主人公が語るように描かれるものなどさまざまなものが含まれる。しかし、両極にある会話文や会話の引用と、論説との分布の差を手がかりに資料ごとに整理してみると、表 5 から「よほど」は広く用いられやすいが、「よっぽど」は会話をはじめとするよりくだけた文体で用いられやすいという傾向が指摘できる¹⁸。

¹⁷ 「余程」という漢字表記のものは、「余っ程」「余ッ程」などのように促音が表記されていない限り「よほど」として数に含める。

¹⁸ 宮島達夫(1977)では、単語の音声的なかたちと文体的特徴との間の関係が指摘されており、「つまり

資料の性格によるあらわれ方（文体的な特徴）の違いとしてとらえることと、先に述べた、強調形か非強調形かの違いとしてとらえることとは観点は異なるものであるが、「よほど」と「よっぽど」の使用にはこの両方が関わっていると考えられる。

音の入ったかたち」の例（ありたけ—ありったけ、かたはし—かたっぱし、くいはぐれ—くいっぱぐれ、まるきり—まるっきり）とともに、「よほど」と「よっぽど」の例があげられている。

また、森田良行(1977)では「よほど」の項に「口頭語としては「よっぽど」の形も用いられる」(p462)、飛田良文・浅田秀子(1994)では、「「よっぽど」は「よほど」よりくだけた表現で、日常会話中心に用いられる」(p.585)との記述があり、いずれも文体的特徴の差を指摘している。

第4章 「よほど」の用法記述

4. 1 形式的な構文特徴 ―分類の一次的指標―

本章では、実例 1005 例をもとに、現代語における「よほど」の用法の記述を行う。「よほど」の用法を記述するにあたっては、まず、形式的な構文特徴に基づいて用例を整理し、さらに意味の面からの検討を加えながら用法をまとめあげていくという方法をとる。最終的にはそれぞれの用法の典型を構造として示す。ここでいう構造とは、「よほど」がある用法で用いられることを支えている条件の総体を文（複文・連文を含む）の構造の形で示すものである。これらの作業を通じて用法の典型と周辺を明らかにしつつ、境界的な用例にも位置づけがあたえられるような、より精度の高い記述をめざす。

以下、「よほど」のもつ用法を明らかにするために記述を行うが、はじめに、分類の一次的指標としたいいくつかの形式的な構文特徴と、それぞれの特徴をもつ用例の全体に占める割合を示す。これらは用例の中で特に目立った特徴であり、用法を分けるにあたって注目すべきではないかと考えたものである。ただし、ここであげる構文特徴は、必ずしも相互に矛盾するものではなく、1つの例が複数の特徴をもつものもある。複数の構文特徴をもつものについては境界例等として改めて検討する。

① 「のだ」を含む形式との共起 26.3%

彼女は鼻歌を歌っている。よほど気分がいいのだ（ろう）。

② 推量形式との共起 25.2%

（「のだ」を含む形式（→①）は除く）

弟はよほど疲れていたらしく、ごはんを食べ終わるなり寝てしまった。

③ 比較対象の表示 26.3%

遊園地なんかより家の前の空き地の方がよっぽどおもしろい。

④ 否定条件節との共起 16.3%

雪の日はよほど早く家を出ないと間に合わない。

⑤ 意志願望形式との共起 3.6%

よっぽど文句を言ってやろうかと思ったが、ぐっと押さえて帰ってきた。

⑥ その他 9.6%

（いずれの構文特徴ももたないもの）

②については推量形式の「推量」を、非断定という広い意味で使う。（「だろう」「う／よう」に限定して使う立場（例えば三宅知宏(1995)）とは異なる。）

①～⑤の特徴は本稿の資料の「よほど」の用例に目立ったものである。渡辺実(1987)で

指摘されている構文特徴は②③④⑤の4つであるが、本稿では①の「の（だ）」¹⁹を含む形式が26.3%もあることに注目し、「の（だ）」をはじめとする「のだろう」「のか」「のではないか」などをあわせて1つの構文特徴としてとりあげて検討する。⑥その他、とした①～⑤のいずれの構文特徴ももたないものには、第4章の分析過程でいずれかの用法の周辺のものとして位置づけられるものが多いが、それでもなお残る位置づけ未詳の例については、4. 7でまとめ、第5章で検討する。

以下、用法ごとに記述を進めるが、①～⑤の特徴と各用法の主な関係について述べておくと、①②は《推定判断用法》、③は《比較評価判断用法》、④は《必要判断用法》と《例外提示用法》、⑤は《意志不実行用法》の中心となる特徴である。

4. 2 《推定判断用法》

4. 2. 1 用法の構造

4. 2では、次のようにモデル化される《推定判断用法》について述べる。

- ・ **よほど**（感情・心情をあらわす形容詞）らしく、（既実現の事態の描写）.....。
- ・（既実現の事態の描写）。 **よほど**（感情・心情をあらわす形容詞）のだ（ろう）。

例1) 焼跡の上の人々は、**余程**熱いらしくしばしば汗をぬぐっている。（永遠なる序章）

例2) 長官は一気にまくしたてる。 **よほど**ブンに対する恨みが深いのだろう。（ブンとフン）

「よほど」の用いられる構文特徴の中で、①「のだ」を含む形式、②推量をあらわす形式と共起するものについて検討する。

まず、4. 2. 2で、共起する「のだ」を含む形式について検討し、その形式にどのようなものがあらわれるか、また、それが「よほど」の用いられる文としてどのように特徴づけられるのかをみる。

次に4. 2. 3では（「のだ」を含まない）推量形式についても同様に検討する。そして、4. 2. 4でこれらの特徴が《既実現の事実とそれに関わる判断》という「よほど」が用いられる判断構造のあらわれとしてまとめられ、その判断内容は既実現事態の原因・理由にあたるものである、という一つの用法としてみとめられることを述べる。さらに、4. 2. 5では本用法において「よほど」が結びつく状態性をもつ語の傾向を整理し、「よほど」のあらわす程度と評価について考察する。

なお、先にも述べたように、推量形式と共起する例には、4. 1であげた「③比較対象

¹⁹ 「ん（だ）」という形式も含む。

の表示」という構文特徴を重複してもつものが少数だが 37 例ある。それらについては③の比較対象の表示について検討する際にとり上げることとし、以下の分析ではひとまず除く。

4. 2. 2 構文の形式的特徴 ①「のだ」を含む形式との共起

4. 2. 2. 1 共起する「の（だ）」形式

先にも述べたとおり、推量、断定、疑問といった形式を問わず、「の（だ）」を含む形式を 1 つの形式的特徴としてとりあげる。それぞれの形式の用例の分布は次の表 6 のとおりである²⁰。

表 6 : 「よほど」と共起する「の（だ）」形式と用例数

叙法形式	共起する用例数			
	名詞	形容詞	動詞	計
のだろう	10	35	47	92
のか ²¹	10	23	25	58
のだ	5	22	24	51
のだろうか	2	1	5	8
のではないか	1	1	4	6
のか（疑問）		3	2	5
のかしら	1	2	1	4
のかもしれない		1	2	3
のではないだろうか		2		2
のにちがいない		1	1	2
重複表現	2		1	3
計	31	91	112	235

ここには「のだろう」「のかもしれない」など、「の（だ）」を含む推量をあらわす形式も含まれるが、これらについて、4. 2. 3 で扱う推量をあらわす形式であることよりも「の（だ）」を含むという特徴を重視したのは、「よほど」の全用例（1005 例）のうち、「の（だ）」を含む形式と共起する例が 23.3%（235 例）もの割合でとりだせることとともに、

²⁰ 形式の欄には、それぞれ代表形をあげる。したがって、例えば「のだろう」には「んだろう」の形、さらに「のであろう」「{の／ん} でしょう」なども含まれる。

²¹ 「のか」と示した例の中には、次のように、複文の中に挿入句の形であらわれた例が多い。

例) その時、電話のベルが鳴った。音量は小さめに調節してあったというものの、母はよほど疲れ切っているのか、ぐっすりと寝入っている。(湯本香樹美「ポプラの秋」)

1) 「の（だ）」を含む形式のバリエーションが多岐にわたる

2) 特に多くを占める形式が「のだろう」「のだ」「のか」であり、推量か断定か疑問かということに大きな差がみとめられない

という2点から、「よほど」が用いられる構文的な特徴を分析するにあたっては、推量か断定か、あるいは「にちがいない」～「かもしれない」といった推量における確信度の違いよりも、「の（だ）」という形式によってあらわされる〈説明〉的であるという点が重要であると考えられるためである。この〈説明〉的であるという「の（だ）」の特徴が「よほど」が用いられる環境とどのように関わるのかを確認する。

4. 2. 2. 2 「の（だ）」形式の検討

奥田靖雄(1990)では、「のだ」を伴う文が「《説明》としてはたらく」ことをみとめたうえで、「のだ」を伴う文（《説明の文》）と、説明される出来事を提示する文（《説明される文》）とが「説明の構造」をなし、これら2つが相互に対立しながら《説明》²²を組み立てる、という指摘がある。つまり、「のだ」を伴う文に対しては、それによって説明される出来事が場面やコンテキストの中にあたえられることになる。

「よほど」が「の（だ）」を含む形式と共起する事例には、「のだ」によって説明される対象（点線部分）が、次のように前や後ろに連文や複文の形をとって文脈にあらわれるという特徴が共通してみとめられる。さらに、それらは自分で直接見聞きしたり体験したりして事実としてとらえられている既実現の事態である点で共通している。まずは用例数の多い「のだろう」「のか」「のだ」の例で示す。

(1) おたがいに子を持つ再婚者だという事実が、二人に楽な感情を抱かせた。連れ子の行助はよく出来た子だったし、澄江には女としての節度がそなわっていた。亡くなった矢部隆という男はよほど出来ていたのだろう。理一は澄江を迎えたときそんなことを思った。（立原正秋「冬の旅」）

(2) 色刷りの悪いグラビアのようなテレビスクリーンは、映し出しているものをいかにも安手の見せものに見せた。それでも人気の選手が投げ打つ度、スコアがよほど緊迫しているのか、周りの客たちはしだいにどよめき、声を挙げての声援まである。（石原慎太郎「化

²² 奥田(1990:177)では、「説明」という思考活動の本質をおさえておくための規定として「物や出来事をめぐって、これらの内部のおくふかくにかくされている、直接的な経験ではとらえることのできない、本質的な特徴をあきらかにすること」、「物のあいだの相互作用のなかから、原因・結果の関係のような、法則的なむすびつきをとりだすこと」が《説明》であるとされ、「全体としての《説明》が《説明する》と《説明される》との、ふたつの部分からなりたっている、という命題は、このような説明の本質規定から必然的にでてくるのである」と述べられている。

石の森」)

- (3) 「だるそうだな、ずいぶん」「そうなんだ。……このあいだの土曜の夜もね、ジムから帰る途中、電車で眠り込んでね。結局、乗りすごしちゃったよ。よっぽど疲れてるんだね。……」(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

以下、それ以外の「の(だ)」を含む形式と共起する例を1例ずつあげる。いずれも「の(だ)」を伴う説明(的推量)に対して、それによって説明される対象としてやはり既実現の事態が場面や文脈の中にあたえられていることが確認できる。

- (4) 天主堂を出ると、真向いの坂路を修平が一人、手に何かを持ってのぼってくるのが見えた。何となく元気がない。大人たちに叱責を受けたのが、よほどこたえたのであろうか。そのしょんぼりした一人ぼっちの姿を見ると、サチ子はたまらなく可哀想になって、「修ちゃん」と駆けよった。(遠藤周作「女の一生」)

- (5) 「何よりステキなのはね、それが誰かに見せるためのおしゃれじゃないことね。たまたま、うちの窓からはみえてしまうけど、彼女は誰の眼も意識していないの。自分だけのために、朝一番からきれいにしてるのよ」「よっぽどお金持ちで暇なんじゃないの?」と私はつい憎まれ口をきいてしまった。(森瑶子「非常識の美学」)

- (6) 「おからだがよくないとは、あなたからきいていましたが、法事にもおいでになられないようでは、よほどおわるいのかしら」(立原正秋「その年の冬」)

- (7) なんと周到な男であろう。子供がうまれるかもしれぬということを想定し、そのときは父としての責めを負うことを言明したうえで、体のつながりに入ろうというのである。思慮が周到な、というより性格がよほど律義なのかもしれない。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

- (8) 神崎：これだけ懇々と、自分の経済学者としての心情まで吐露して一学生に返事を書くのは、よほどその手紙が刺激的だったんじゃないでしょうか。(城山三郎「失われた志」)

- (9) 「わたしは顔から火が出そうだったよ」と、母は祖母の追憶が出ると、この時のことをよく言い出した。母は余程閉口したのに違いない。(尾崎一雄「踏切」)

また、「の(だ)」が断定や推量でなく、次のように会話文で疑問形式として用いられる

例が 5 例あったが、説明の対象となる既実現の事態への判断が聞き手に委ねられたものとして考えられる。

- (10)「ねえ、あなた、幾つ?」「年?」「そう」「二十歳」「それでこんなバーへ来るの。よっぽど稼いでるの?」「おじさんに金持ちがいて、使い切れないほど小遣いをくれるんだよ」
(曾野綾子「太郎物語 (大学編)」)

以上、「よほど」が「の (だ)」を含む形式と共起する例は、説明の対象として前提となる事実が示され、それに対する説明判断に用いられるものであることを確認した。

4. 2. 3 構文の形式的特徴 ②推量をあらわす形式

4. 2. 3. 1 共起する推量形式

現代日本語の推量をあらわす形式にはさまざまなものがあるが、「よほど」と共起する推量形式を調べ、共起する形式ごとに、述語の種類 (名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文) によって分けて整理すると次の表 7 のようになる²³。

なお、ここであげる推量形式には「のだろう」「のか」「のではないか」等、「の (だ)」を含むものは、4. 2. 2 で「の (だ)」を含む形式として別に検討の対象としたため、含まない。

共起する個々の推量形式に注目すると、「らしい」と共起する用例数が目立って多いことから、推量形式の中でも、特に「らしい」とそれに準ずる「推定」をあらわす形式を表の上部にとりだし、「推定」以外の形式を下部に分けて示した。これら「推定」としたものは、実際に存在している現状が徴候としてあり、それを証拠とした推量判断である点で、他の推量形式と区別される²⁴。

²³ 形式の欄には最もプリミティブな形を代表形としてあげる。したがって、「ようだ」には、「ようだった」「ようです (わ／ね)」等の他、複文の形をとった中止形「ようで」が、また「だろう」には、「であろう」「でしょう」「でござりましょう」等も含まれる。

²⁴ これらの形式について「認識的モダリティ」の一つとして一類化する考え方は先行研究にも多く見られる。工藤浩(1989)「見なし方 (推定 (らしい／と見える)・様態 (ようだ みたいだ))」、三宅知宏(1994b)「実証的判断」、仁田義雄(2000)「徴候性判断」、宮崎和人ほか(2002)「証拠性(evidentiality)」など。

表 7：「よほど」と共起する推量形式と用例数（全体）

叙法形式	共起する用例数			
	名詞	形容詞	動詞	計
らしい	13	28	44	85
と見える	5	4	13	22
ようだ	3	5	11	19
みたいだ	2	1	1	4
そうだ			1	1
複合表現 ²⁵	1		1	2
計	24	38	71	133
にちがいない	8	7	20	35
だろう	18		5	23
か、	4			4
と思われる	3		2	5
と思う	3		1	4
ではないか	3			3
だろうか	1			1
かもしれない			1	1
はずだ			1	1
複合表現	5		2	7
計	45	7	32	84

「推定」をあらわす形式として上にとりだしたものの以外の推量形式についてみると、「にちがいない」と共起する例が多く、さらに、「だろう」をはじめそれ以下の形式も名詞述語文につく場合には比較的多いという傾向が見られる。このような傾向について、「推定」をあらわす形式の特徴、「推定」以外の推量形式について考察し、確認する。

4. 2. 3. 2 推量形式の検討

〈推定〉系

「よほど」と共起する推量形式のうち、「らしい」に代表される「推定」をあらわす形式についてまず検討する。これら「推定」をあらわす形式は、実在する現状を証拠とする推

²⁵ 「複合表現」とは、「推定」、「推定」以外、の両方に見られるが、いずれも、「ように思われた」「らしくみえた」／「にちがいないと思われる」「だろうと思う」などのようにいくつかの形式が複合したものが該当する。

量判断に用いられ、次のように「推定」の根拠となる事実（用例の点線部分）が文脈にかなり忠実にあらわれる²⁶。(11)～(13)は連文の形で「よほど」の用いられる文の前や後に、(14)～(16)は複文の形で、根拠となる事実が示されている。

(11) 銀次郎は、打ちひしがれたように、だまって膝の上に眼を落しながら手を揉んでいる。
よほど手が痛かったらしい。（椎名麟三「永遠なる序章」）

(12) 利朗は想像していた以上に内藤と親しくなっていた。私がいけない間によほど頻繁にジムに通ったものとみえる。（沢木耕太郎「一瞬の夏」）

(13) 弾が、光秀の身边に集中しはじめたが、この男はよほど豪胆にできているようだった。
凝然として動かない。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

(14) 「さあ、家の中に入るんだ！」女は、よほど氣勢をそがれたらしく、行動に対してばかりでなく、言葉に対しても、ひどく従順だった。（安部公房「砂の女」）

(15) 座敷に入ると、住職は手真似で、二人の坐る場所を示した。よほど大切な檀家だとみえて、二つの大火鉢に炭火が山のように熾っており、立派な茶器や、うまそうな生菓子などが供えられてあった。（石坂洋次郎「石中先生行状記」）

(16) 米インディアンの娘、ポカホンタスと英国探検家の英雄、ジョン・スミスの恋物語。古今東西、「開拓者の男と現地の女」というのはよほど相性が良いようで、この手の史実は各地に残る。（毎日新聞 95.07.14）

「みたいだ」という形式は全て会話文の例であったが、やはり文脈でその根拠となったことを読み取ることができる。

(17) 「あなたの破壊された部屋のことだけど、あれは何かとくべつな機械を使ったの？ それとも何人ががよってたかってやったの？」「機械は使わない。一人の人間がやった」と私は言った。「よほど頑丈な人みたいね」（村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・

²⁶ 奥田靖雄(1985)では「らしい」を伴うおしはかりの文の《おしはかりの構造》は《らしさ》の存在と前提とするという指摘があり「ここでの《らしさ》とは、現象（動作あるいは状態）の部分、側面、あるいは特徴である。ある現象にかならず同伴する、もうひとつの現象である。この《らしさ》が認識する人間にとって《きざし、気配、まえぶれ、痕跡》としてあらわれてきて、それを土台に全体としての現象がおしはかられる。」(p.59)と述べられている。

ワンダーランド」)

用例の中には、次の(18)(19)のように、文法化しているとはいえないが、語彙的に「推定」に準ずると考えられるものが13例見られた。

(18)「おまえをな」と老師は言った。「卒業次第、大谷大学へやろうと思ってる。亡くなったお父さんもきっと心配しておられるから、うんと勉強をして、よい成績で大学へ入らないかん」——このニュースは、忽ち副司さんの口から寺じゅうに伝えられた。老師のほうから大学進学の話があるのは、よほど嘱望されている証拠だというのであった。(三島由紀夫「金閣寺」)

(19) 帰りの車の中では、志摩が前へ乗り、霧子と貞乃が並んで腰かけると、貞乃は、すぐにどんなに旅行が素敵だったかを、早速、霧子へ話してきかせた。そして、「あなたがたも、ぜひ機会をつくって、ひとまわりしてくるといいわね」と言ったりしたが、なんとなく迫力がなかった。間もなく車の中で、気位の高い貞乃とは思えないほど、たわいなくみずぼらしく居眠りをしはじめた。よほど疲れているようすだった。(藤原審爾「さきに愛ありて」)

このように、「よほど」が「推定」形式と共起する例は、語彙的に「推定」に準ずるものも含め、連文か複文か、あるいはさらに広い文脈かという違いはあるが、根拠となる既実現の事態が示され、それにもとづく推定判断に用いられるものであることを確認した。

〈推定〉以外の推量形式

次に、「よほど」と共起する推量形式のうち、「推定」以外の形式について検討する。先にあげた表7から、「推定」以外の形式と共起する用例数を表8として再掲する。

表 8 : 「よほど」と共起する「推定」以外の形式と用例数

叙法形式	共起する用例数			
	名詞	形容詞	動詞	計
にちがいない	8	7	20	35
だろう	18		5	23
か、	4			4
と思われる	3		2	5
と思う	3		1	4
ではないか	3			3
だろうか	1			1
かもしれない			1	1
はずだ			1	1
複合表現	5		2	7
計	45	7	32	84

〈推定〉系以外の推量形式においては「にちがいない」「だろう」に比較的用例数が多いが、それぞれの形式では「にちがいない」は動詞述語の例も多いのに対し、「だろう」以下は名詞述語の例に偏る。また、4. 2. 2で検討した「の（だ）」を含む当該形式との用例の分布にも顕著な違いがみられる²⁷（「にちがいない（35例）／のにちがいない（2例）」、「だろう（23例）／のだろう（92例）」）。そのため、まず、a. 「にちがいない」について別に検討し、次に、b. 「だろう」以下の形式についてみていく。

a. 「にちがいない」

「にちがいない」と共起する用例数は 35 例で「だろう」（23 例）より多い。本稿の分析

²⁷ 本稿の電子データ（『新潮文庫の 100 冊』『絶版の 100 冊』『毎日新聞'95』『CASTL/J（講談社新書）』）より「にちがいない／のにちがいない」「だろう／のだろう」のあらわれる用例数を「よほど」が用いられる場合と比較すると、次の通りであった。（ ）は、叙法形式全例と、「よほど」と共起する例それぞれについて、「の（だ）」を伴わない形式、伴う形式がその合計を 100 とした場合に占める割合を％で示したものである。「にちがいない／のにちがいない」の分布においては「よほど」の有無に関わらずほぼ同じ割合であられるが、「だろう／のだろう」については「よほど」の有無によって割合が大きく逆転する。これは、「だろう」と「のだろう」との違いに「よほど」の性格が関わっていることを示唆する。

	にちがいない	のにちがいない	計
全例	2630(93.7)	178(6.3)	2808(100)
「よほど」と共起する例	35(94.6)	2(5.4)	37(100)

だろう	のだろう	計
7816(77.0)	2337(23.0)	10153(100)
23(20.0)	92(80.0)	115(100)

対象とした資料のうち電子データにおいて「にちがいない」と「だろう」それぞれの全体の用例数を比較すると「にちがいない」2630例、「だろう」7816例であった(注24参照)。つまり、「にちがいない」の使用頻度は「だろう」の約1/3だが、「よほど」と共起する場合に限ってみると「にちがいない」の方が用例数が多く、「だろう」と比較すると共起しやすい形式であることがわかる。

この「にちがいない」の多さについて考えるにあたっては、大鹿薫久(1993)、三宅知宏(1994b)の指摘が参考になった。大鹿(1993)では、「だろう」が不自然になる文の1つのタイプとして「ある事態が知られていて、その事態の起こった理由なり原因なりを推量する場合の文」があげられている。その例として(車を運転していて、急に渋滞に巻き込まれたというような場合)に「この先で工事をしているだろう」と「だろう」を用いることはできないことをあげ、このような場合には「のだろう」とともに「かもしれない」²⁸「にちがいない」も用いることが可能であることを指摘している²⁹。三宅知宏(1994b)でも「にちがいない」について同様の現象の指摘があり、「らしい」等(三宅(1994b)で「実証的判断」とされる)が自然に生起可能である、前文が後文の命題を真とみなすための証拠となるような文脈で、「にちがいない」「はずだ」「確信的判断」が生起可能である点に言及している³⁰。

事実、「よほど」が「にちがいない」と共起する例は、ほとんどが次のように判断の根拠となる既実現の事態が示され、それに基づいた原因・理由の推量に用いられるものであり、それは先に見た〈推定〉系「らしい」「ようだ」「と見える」等の形式が用いられる判断構造と共通する。

(20) この石窟の天井の壁面は、ほとんど豪華といってもよいほどの見事な天井画だ。大小さまざまな骨を、これほど巧妙に使いこなすとは、よほどすばらしい下絵が、前もって作

²⁸ 大鹿(1993)で示されているこの判定について、「かもしれない」については筆者の感覚ではやや不自然に感じられる。(「のかもしれない」であれば可)。先の注24であげた「の(だ)」を伴わない形式、伴う形式に関して言えば、同様のデータにおいて、「かもしれない/のかもしれない」の割合は「5406例(75.6)/1843例(25.4)」であった。これは「にちがいない(2630例(93.7))/のにちがいない(178例(6.3))」と比較すると「の(だ)」を伴わない形式と伴う形式との対立の差として解釈できるのではないかと思われる。

²⁹ 大鹿(1993)は、このような現象について、推量の前提となるような直接あたえられた事実を帰結・結果として、そこから想定されるその理由や原因を述べる場合に、「推量の結果を事実として述べる」ものである「だろう」は用いられないが、「可能性認識や確実性の認識の述べ方」である「かもしれない」「にちがいない」は事実言明にならないため用いることが可能である、と説明している。

³⁰ 三宅(1994b)では、前文が後文の命題を真とみなすための証拠となるような文脈で、どのような認識的モダリティが用いられるか、ということを次のような例で検討している。

彼女、うれしそうな顔をしている。合格した[]。

部屋の明かりがついている。彼はまだ勉強している[]。

「にちがいない」「はずだ」「確信的判断」が生起可能なことについては「前文は命題が真であるための証拠というよりも、むしろ確信という認識のための根拠というようなものと考えられる」(p.26)と述べている。

られていたにちがいない。(塩野七生「イタリアからの手紙」)

- (21)「誠太郎！」見かねて、雪夫人が呼びおこした。「……へい」誠太郎は、ちょっと、うろたえて、目をしばたたくが、すぐまたコックリがはじまる。よっぽど眠いにちがいない。あっと思う間に、また尼僧のほうへかしがる。(舟橋聖一「雪夫人絵図」)

つまり、推量をあらわす形式の中でも、「にちがいない」は確信の度合いをあらわす形式であり、それ自体は事実としての証拠が必ず必要とされる判断ではないのだが、その確信度の高さゆえに、既実現事態である根拠が示され、それにもとづく判断に用いることも可能である。そして、それが名詞・形容詞述語、動詞述語という述語の品詞に偏りなく「よほど」と共起する用例数の多さにあらわれているのだと考えられる。

b. 「だろう」その他

「だろう」以下の形式について述べる。

「だろう」は推量をあらわす代表的な形式とされるが、「の(だ)」を伴わない「だろう」については、「よほど」との共起において多くを占める「らしい」との違いが先行研究でも指摘されている。

奥田靖雄(1985)では、「らしい」と「だろう」はともに「はなし手の想像なり判断を表現する」おしはかりの文であり、そのおしはかりの根拠や前提をつとめる具体的な事実、あるいは一般的な命題はいいきりの文で表現される、とする。そして、このいいきりの文とおしはかりの文とのsyntagmaticな関係を《おしはかりの構造》とよび、「らしい」と「だろう」とはそれぞれがつくりだす《おしはかりの構造》において関係のし方が異なっているとする。つまり、「らしい」を伴う文の《おしはかりの構造》は《らしさ》の存在を前提とし、「おしはかりの文にえがきだされている出来事の《らしさ》、つまり前ぶれ、しるし、きざし、気配、痕跡などがはなし手の感性的な経験にとらえられていなければならない」(p.61)のに対し、「だろう」を伴う文の《おしはかりの構造》は、かならずしも《らしさ》の存在を必要としないことを述べている。

このことと無関係ではないが、大鹿薫久(1995)は、「らしい」「だろう」それぞれで示される推量の判断内容とその根拠との関係から、両形式の違いを説明している。「らしい」は「帰結・結果」を判断の根拠とし、その「理由・原因」を判断内容とするのに対し、「だろう」は「理由・原因」を判断の根拠とし、そこから導かれる「帰結・結果」を判断内容とする、つまり、判断の根拠と内容の関係が対称的な方向性をもつことを指摘している。

このように、形式から見ても「だろう」は「よほど」が共起する形式の大多数を占める「らしい」とは、それによって示される判断の構造も異なるものである。本稿の資料でも

「だろう」と共起する用例は23例と限られてはいるが、これらについて以下検討する。

まず、「よほど」と共起する場合の述語をみると、先にあげた表7からもわかるように、「らしい」等の〈推定〉系や、a.でみた「にちがいない」には、名詞述語文より動詞述語文の方が多いのに対し、「だろう」には名詞述語文の例が目立つという傾向がある（動詞述語5例に対し、名詞述語18例）。

名詞述語の場合は、形式的にも「判断文」（三尾砂(1942)）をなす性格をもつ。個々の例をみても次のように根拠となる既実現の事態が文脈にあらわれており、それに対する判断、つまり「推定」形式に準ずるものと解釈される³¹。

(22)「どなたでござる」門前の番所で、織田家の家来が鄭重にきいた。供に連れてくる侍女ふたりの衣装があまりに豪華なのと、男衆にかつがせている吊り台の上の献上品が立派なのとで、よほど門地の高い尼門跡かなにかであろうとおもったのである。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

(23)（副將軍なら、躍りあがってよろこぶと思うたのに）と、義昭は、信長の辞退の本意がわからなかった。よほど謙譲な男だろうとおもった。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

以上のように、形式的には共起しにくい「だろう」についても23例中18例は、名詞述語をとるという特徴から、「らしい」典型とする〈推定〉系の推量形式によって主にあらわされる、既実現事態とそれに関わる判断とであることの1つのあらわれ方として位置づけられることを述べた。「だろう」以下の形式についてはそれぞれ用例数が少ないが、同様に考えられるものと思われるため、数例をあげるにとどめる。

(24) 黒装束は、這った。よほど器用な男か、みしり、とも音がしない。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

³¹ 「だろう」が名詞述語文に用いられる場合のふるまいについては、大鹿薫久(1995)でも触れられている。「らしい」と「だろう」が、理由・原因を推量するか、帰結・結果を推量するか、という判断の方向性が反対であるとしたうえで、「らしい」と「のだろう」は多くの場合それほどの意味の違いを感じさせない言い換えが可能だが、名詞述語文の場合には「のだろう」ならぬ「だろう」が取り替え可能な場合があることを指摘している。その理由について、名詞述語文の特殊性（名詞述語文があらわす事態が、その判断が成立することによって知識として成立するという性質のものであること）をふまえて次のように説明する。「判断するということを離れて事態系列における理由・原因—帰結・結果関係というものが考えられないという特殊性（即ち判断の成立と事態の成立が相即的であること）から、ここでの理由・原因は判断の根拠に等しく、判断の内容として成立する事態の、事態成立の理由であった。それは事態系列に引きなおしてみれば、帰結・結果に相当する事態であり、ここに判断の方向性と呼んだものが反対であるにもかかわらず、判断の根拠となる同じ事態から「……らしい」と「……だろう」の文がほぼ同じような意味で使われることになるのだと考えられる。」(p.540)

- (25) 私はそれとなく彼の動きを目で追っていたが、彼はそのまま通路をはさんだ横にずれ、「15のD」に腰を下ろした。あんなことがあるとふつうは、バツが悪いから離れた席に座るものだが、そうはしなかったのは、よほど眠たかったためと思われる。（岸本葉子「幸せな朝寝坊」）

「だろう」を伴う動詞述語の例が5例ある。これらは、大多数の用例に共通する、既実現事態を根拠とする判断という判断構造とは異なる。先の奥田(1985)でいう「《らしさ》の存在」を必要としない点で「らしい」とは異なり、また、大鹿(1995)においては帰結・結果を推量する点で、所与の状況から理由・原因を推量する「らしい」が用いられる文とは対称的な方向性をもつ、とされるものである。

「よほど」が「だろう」と共起しそれが動詞述語である例は、まずそれ自体が全体からみると少数で限られたものなのだが、特に次のように、ある条件が示され、それにもとづいてその帰結・結果を推量するものが多い。

- (26) “飛び道具”といえは弓ぐらいしかなかった時代の戦争は、この風向きというものが、戦闘の死命を制する重大なカギであつたろうことは想像に難くない。当時の軍師は、今日以上に真剣に天気の詳細をみたにちがいないのだ。おそらく、風向きを占うことの出来る人がいたら、よほど大事にされていただろう。（本田宗一郎「私の手が語る」）

- (27) かれらは、「南無、妙、法蓮華、経」と連呼する。大声でとなえる、自然、心が歩武堂々、前へ前へと前進するようリズムになる。しかも宗旨に現世利益の色が濃く、これを念持すれば、仏天は浮世の諸慾を満たせてくれるという攻撃的な教えである。庄九郎がもし、少年のころを浄土教（浄土宗、一遍宗、浄土真宗）の本山で送ったとすれば、よほどちがった人間になっていたであろう。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

- (28) 家康の兵法ずきが諸侯に伝染して徳川初期の剣術黄金時代ができあがったもので、豊臣家の天下がつづいていれば、剣術史というものはよほどちがったものになったろう。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

あわせて、「だろう」以外の形式が動詞述語をとる例（7例）をみても、ある条件が示され、それにもとづいてその帰結・結果を推量するものが多いという点は同様である。

- (29) 黒人であろうが身体障害者であろうが後進諸国であろうが、（ああ私は、なんと緊張しながらこれらの言葉を書いているのか）また、男に対してソンな立場にいるということ

になっているわれわれ女もだが、もうそろそろ、差別用語に神経を尖がらせるような不毛なエネルギーの消費はやめにしてはどうか。Mrs でなく Ms とつけられた手紙など来るとぞっとする。「おれはクロンボ、あんたはキイロ」式で国際関係も動きはじめたら、成果はよほど確かなものになると思うのです。（塩野七生「人びとのかたち」）

(30) またしてもここに、継母の問題が出てきた。継母子という不自然な関係は、どうしても解決の道がないものであろうか。彼女自身にしても、もしも沢田安次郎先生に子供がなかったとすれば、今とはよほど考えが変っているはずであった。（石川達三「人間の壁」）

(31) それに、もう一つ、幸いなのは、お手伝がいてくれることだろう。亡くなった妻の遠縁にあたっていて、妻が生きていたころからいてくれる。一度結婚をしているのだが、もう結婚はこりごりだといっていて、年も三十五、六歳のはずだった。もし、この民子がいてくれなかったら、のぼるを勤めに出すことは出来なかったろうし、章太郎の家庭の事情は、今とはよほど変っていたかもわからない。（源氏鶏太「停年退職」）

これら、「だろう」が動詞述語文である例（5例）と「だろう」以外が動詞述語文をとる例のうち7例³²のあわせて12例は、「よほど」が推量形式と共起する中でも多くを占める、既実現事態を根拠とする判断（「らしい」を代表とする「推定」判断）とは判断構造が異質なものであった。ただし、これらには、条件といっても反事実のことを述べる例が目立ち、(30)(31)に見られる「今とは」のように、現状が比較対象として想定しやすいこと、また、共起する状態性をもつ語にも「違う」「変わる」「～になる」など異同や変化をあらわすものが多いという偏りがある。この12例については、歴史的な用法の変化もふまえて、第5章で改めて位置づけを検討することとする。

以上、「よほど」が共起する推量形式について検討し、それらは推量形式の中でも、実在する現状が徴候としてあり、それを証拠とする推量をあらわす「推定」形式（「らしい」「と見える」「ようだ」など）に偏ること、また、「推定」以外の形式についても個々の用例を検討すると、文脈の中に既実現事態があたえられ、それを根拠とする判断であるという特徴は共通しており、それが「にちがいない」との共起の多さ、「だろう」と共起する場合に名詞述語文に偏ることにもあらわれていることを述べた。

³² 表8の「だろう」以下の形式のうち、「と思われる」の2例は、次のように既実現事態を根拠とする判断を示すものであったため除き、7例となる。

それにしても、三木謙一は立派な人物だった。その人がなぜ顔まで潰されるような悲惨な殺され方をされなければならないのか。犯人はよほど三木謙一を恨んでいたと思われる。（松本清張「砂の器」）

4. 2. 3. 3 無標形式の検討

ここまでみてきたように、「よほど」が共起する推量形式とその検討から、「よほど」があらわれるのは文脈にあたえられる既実現事態を根拠とする判断である点で共通することが確認された。特定の叙法形式をもたない次のような無標形式の例も同様に考えられるだろう。以下、述語の種類別に用例数と例を示す。

【だ／するφ】28例（名詞述語18例 形容詞述語1例 動詞述語9例）

(32)「……なあ、新さん、いくら相手が頭巾をかぶって目だけ出してたって、何十年も連れ添うた自分の女房に気がつかないなんて、お前よっぽど親不孝者だな。匂いとか素ぶりでもわかりそうなもんじゃないか！」（石坂洋次郎「石中先生行状記」）

(33)「誠にちゃんに、見られちゃったわ。あの子、この頃ませてるの。好奇心が強くて困るの。新婚さんの部屋をのぞいたり、つまらないことにばかり、興味をもつ。あの子に見られるなんて、今日は、よっぽど、間がわるいわ。……」（舟橋聖一「雪夫人絵図」）

(34) 八六年から二年連続で夏の大会に出場した東亜学園（東京）の川島堅投手は、ベスト4まで勝ち進んだ八七年夏に宿泊した。ドラフト一位でカープに入団。二軍で再び夕立荘を訪れた川島投手は「おばちゃん、僕はよほど夕立荘に縁があるね」と笑った。（毎日新聞 95.03.31）

(35)「ご病気をなされたか」光秀が思わず口走ったほど、この対面の座に出てきた荒木村重はやつれきっていた。村重は元来戦さ上手な男だが、かといって粗豪な人物ではなく、茶道では利休七高足の一人に数えられるほどに堪能な男である。「いや、病気はせぬ」強いて笑顔を作ろうとするのだが、それが微笑になりきらない。（よほど、懊悩している）とすれば、やはり謀反の風説はうそではなかったかもしれない。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

(32)～(35)の例は、いずれも複文、連文の形で既実現の事態が示され、「よほど」を伴う文は、特定の叙法形式を伴わない無標の形で示されるものである。これらは述語の種類の間でも、まず、(32)(33)のように名詞述語と形容詞述語の場合は「判断文」（三尾砂(1942)）としての性格をもつ。また、動詞述語の場合も「縁がある／激しいところがある／重大な問題があった」などの状態動詞や「懊悩している／たくさん払っている／惚れ込んでいた／気が転倒していた／興奮して（すべきことを忘れていた）」などシテイル形で状態をあら

わすような判断性の強い述語であり、「判断文」相当であると考えられるものである。

つまり、これらは4. 2. 3. 2でみたような推量形式を伴わず、何らかの根拠に基づいた推量判断であることが積極的にマークされない無標形式であるものの、既実現の事態が示されるという構文環境において用いられ、やはりそれを根拠とする判断を述べるものと解釈される。より確信的な述べ方になる無標形式であられる例は、実例においては会話や独話で相手や自分に対する評価（既実現の事態に対して原因としての解釈も可能）を確信的な意見として述べるような場合に「わ」「ね」「な」などの終助詞を伴って用いられることが多いようである。

4. 2. 4 既実現の事態と判断との関係づけ

4. 2. 4. 1 「推定」と「説明」の共通性

4. 2. 2で、共起する「の（だ）」を含む形式を検討し、それらが断定であるか推量であるか、確信度がどうか、ということに関わらず、説明の対象として前提となる事態が示され、「よほど」がそれに対する説明判断に用いられていることを述べた。

4. 2. 3では、共起する推量形式を検討し、多岐にわたる形式の中で「推定」（実在する現状を証拠とする推量判断）をあらわす「らしい」の割合が高いことにも反映されるが、さらにそれ以外の推量形式との共起においても、根拠となる既実現の事態が文脈の中にかなり忠実に示され、「よほど」はそれにもとづく推定判断に用いられていることを述べた。これらは、「根拠からの推定」と「対象への説明」というように、その方向性は逆だが、次のように、「推定」に対しては「（推定）根拠」として、「説明」に対しては「（説明される）対象」として文脈にあたえられる既実現の事態を前提とする判断である点で共通するものである。

《既実現の事態》

《判断》

戦後の寄付がよほど喜ばれたらしい。

〔推定の根拠〕

→ 〔推定〕

ベルリン大学では名誉学位を贈られた。

〔説明される対象〕

← 〔説明（的推量）〕

戦後の寄付がよほど喜ばれたのだ（ろう）。

本稿の対象とした「よほど」の用例において、多数を占めるのは「らしい」と「のだろう」と共起するものであった。「らしい」と「のだろう」の近づきについては先行研究でも指摘が見られる（奥田靖雄(1985)、田野村忠温(1991)、大鹿薫久(1995)など）が、この2つの形式に代表される「推定」と「説明（的推量）」との根底にあるのは既実現の事態に関

わる判断であり、それが二次的に形式面で「推定」系を中心とする推量形式、「の（だ）」を含む諸形式と共起する傾向としてあらわれているのだと考えられる。このような、既実現の事態に関わる判断に用いられる用法を《推定判断用法》とし、1つの用法とみとめる。

以上、4. 2. 2、4. 2. 3の検討をふまえ、「よほど」の1つの用法が共起する叙法形式の面から特徴づけられることを述べた。

4. 2. 4. 2 判断の内容

「よほど」が用いられる判断には、既実現の事態がその判断の根拠、あるいは説明対象として存在し、文脈上明示されるが、さらに、その判断内容は既実現の事態に至った原因や何らかの事情であると解釈される過去～現在のことがらであるという特徴がある。既実現の事態と「よほど」が用いられる判断との関係は、判断内容の、名詞文、形容詞文、動詞文、という述語の種類と、それらがとる形式（スル形かシタ形か）の面からも確認できる。

名詞文、形容詞文においては、いずれも根拠となる事態が認識される時点にすでにある、あるいはそれ以前にあった性質や状態であり、非過去形や過去形であられる。いずれも点線で示した既実現事態に至る原因や何らかの事情と考えられることがらが述べられる。

(36) できることなら隣に坐っている人と、「ねえ、モリヨーコさんの今夜の帽子、ダイアナ妃も真青ってとこね」とか、「ちょっとバランス悪いんじゃない？」とか、「あんなの被ってよく人前に出られるわね。よっぽど目立ちたがりやなのね」とか悪口を口に出して言ったら、もっといい気分だろうと思う。（森瑶子「非常識の美学」）

(37) 父親の次郎は、予備役の海軍少将で、山本とあまり肌の合わない艦隊派の一人であったが、息子の茂章は山本がよほど可愛がった部下であったらしく、山本は、「感状授与の南郷君を詠める」と題して、「さき匂ふ花の中にも一きはに馨ぞたかき華の益良男」という歌を作ったりもしている。（阿川弘之「山本五十六」）

(38) 慌て者の彼が、のそりとも動かぬ恰好を見ると、よっぽど眠いんだな、と可笑しくさえる。（尾崎一雄「冬眠居閑談」）

(39) 銀次郎は、打ちひしがれたように、だまって膝の上に眼を落しながら手を揉んでいる。よほど手が痛かったらしい。（椎名麟三「永遠なる序章」）（例(11)再掲）

動詞文は全体の約半数を占めるが、シタ形、あるいはシテイル（シテイタ）形であらわ

れる例が多く、点線で示した既実現の事態をもとに、より以前のできごと、あるいは同時に存在する状態が、やはりその既実現事態に至る原因や事情として述べられている。

(40) 葉の効き始めによほどひどく暴れたのだろう、膝の下と足首の、例の縛り方をした箇所には青痣が残っていた。(有吉佐和子「華岡青洲の妻」)

(41) やがて前座の十回戦が終り、セミファイナルの日本タイトルマッチが開始された。挑戦者のネッシー堀口は内藤と同じ控室にいたが、よほど減量に苦しんだらしく痩せ細っていた。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

(42) 色刷りの悪いグラビアのようなテレビスクリーンは、映し出しているものをいかにも安手の見せものに見せた。それでも人気の選手が投げ打つ度、スコアがよほど緊迫しているのか、周りの客たちはしだいにどよめき、声を挙げての声援までである。(石原慎太郎「化石の森」)(例(2)再掲)

(43) 「さ、帰りましょう。元気を出して……」先生は立ちあがった。金山明夫はよほど疲れていると見えて、地べたに手をつき、膝をついてから、ようやく身を起した。(石川達三「人間の壁」)

このような例が典型であるため、「よほど」が用いられる判断内容が動詞文でスル形をとる例は、スル形で現在の状態をあらわす状態動詞やそれに準ずるもの（見える／気が合う／要る…）にほぼ限られる。

(44) 相手はよほど臂力に自信があるのか、そのまま退きもせず、刀をもって光秀の刀を押し、そのまま押し斬ろうという勢いをみせた。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

(45) 「どうしてこんなところで会うなんてお考えになったんです？」高男が訊くと、多津子ははきはきした口調で、「理由はございませんわ。ただこんなところでお会いしそうな気がしていましたの」と言った。「僕はよほど盛り場でもぶらぶらしていそうに見えるんですね」(井上靖「射程」)

広く、既実現事態を根拠とする判断自体には、次のように未来のことがらを推量するものもあるが、「よほど」の実例にはこのように未来を推量する例は見られず、入りにくいよ

うである³³。

(46) 奥さんは、診察室へ入り、自分で鞆を支度し、いそいで表へ出ていった。表では、オートバイのエンジンをかける音が、すぐ聞えた。どうやら奥さんは、オートバイのうしろに乗って行くらしい。(藤原審爾「さきに愛ありて」)

(47) 空を覆っていた雲はところどころで切れて、そのあいだから満月に近い月が見えた。明日はどうやら良い天気になりそうだった。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

つまり、「よほど」が用いられる判断というのは、既実現の事態を前提とするものであるが、さらに、その既実現の事態が生じる原因や何らかの事情として解釈される過去～現在のことがらを判断内容として述べるものが典型であるといえる。

また、原因や事情を推量するものであることは、「よほど」の実例に次のような例があることから指摘できる。名詞述語相当と解釈される例には、次のように名詞が形式的になったものが少なくないが、それらは「せい」「ため」「から」など、「よほど」が用いられる判断が既実現事態の原因・事情、理由であることを積極的にマークするものが多い。

(48) 道中、まき子は、市之丞の容態について、いろいろに問いただしたが、そのつど、黒助の返事はハッキリせず、そればかりか、まき子と目を見合わせるのを避けようとする気配が窺われた。まき子は、それを、市之丞がよっぽど重態なせいであろうと推察して、女の足の歩みをひとしおもどかしく感じたりした。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)

(49) あんなことがあるとふつうは、バツが悪いから離れた席に座るものだが、そうはしなかったのは、よほど眠たかったためと思われる。(岸本葉子「幸せな朝寝坊」)(例(25)再掲)

(50) 十二日までの相撲から見て、精神力(心)、相撲の取り口(技)で貴乃花の断然有利は動かせまい。相手の攻めに応じた自在の相撲を取れるうえに、相撲が速い。相手は速さに負けてスキを見いだせないうちに土俵外に運ばれるか、土俵にはっている。「星勘定

³³ 工藤真由美(2006)では、文の対象的な内容、モダリティー、テンポラリティーの相関について述べられており、「「ダロウ」の場合は、「するダロウ」のように〈未来〉が多いのに対して、「ラシイ」では、「したラシイ」のように〈過去〉あるいは〈現在パーフェクト〉のほうが多いのである。この事実は〈現実世界の事象=証拠〉に基づくか否かという〈推定〉と〈推量〉の違いが、テンポラリティーと相関することを示しているように思われる。」(p.154)という指摘がある。「〈現実世界の事象=証拠〉」(=既実現事態)にもとづいて〈推定〉される内容は過去～現在が多いという大まかな傾向がみとめられることは興味深いが、(46)(47)のように未来のこともある。そのなかで「よほど」が用いられる推定判断は過去～現在に偏るようである。

は考えない。一番々々楽しむつもりで取る」と言い切れるのは、よほど自信があるから
だろう。(毎日新聞95.05.19)

また、次のように、点線部分の既実現事態をとりこむ形で、全体が判断内容として述べられるような場合があり、原因や事情、理由の推量であることが明確である。

(51) 春の、あれ、が新しい芝居のことだとはすぐ分ったが、それがこう突然のように目の前に現れるとは思いがけなかった。が、とにかく筆十郎が出演者の中に加わっていることは確実なのだ。何しろ他でもない旦那の口から出たのだから。旦那もよほど機嫌がよくて、だから自分のような者にまで、自分の口から云いたかったのだろう。(有吉佐和子「黒衣」)

(52) 道三にとって信ずべからざる大異変であった。子が殺されたことではない。偽子義竜はふたりの弟を殺した以上、稲葉山城に拠って国中の武士に檄をとばし、味方をつのり、道三の政権をたおして自立する覚悟であろう。いや覚悟の段階どころか、計画がよほど進んでいたればこそ、孫四郎・喜平次を殺したにちがいない。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

以上、本用法における「よほど」は、既実現の事態から、過去～現在の事態や状態をその原因・理由として推定するのに用いられることを述べた。

4. 2. 4. 3 「さぞ」との比較

4. 2. 4. 1、4. 2. 4. 2では、「よほど」が用いられる構文環境について述べてきた。このような「よほど」の特徴は、状態性概念をもつ語の程度を限定し、かつ推量の叙法形式とも関わりをもつ点で「よほど」と共通する「さぞ」³⁴という副詞と比較すると対照的である。「さぞ」も「よほど」と同様、次のように状態性をもつ語と結びついてその程度をあらわしながら、推量形式と共起して用いられることの多い副詞である。

(53) 日本人は勤勉である。毎朝、満員電車で通勤しているのに文句一つ言わない。満員電車はさぞ苦痛だろうと思うが、何を考えているのか、男の中には楽しみだという者もいる。(土屋賢二「われ笑う、ゆえにわれあり」)

³⁴ 対象とした「さぞ」の例にはいくつかの形態が含まれる。(「さぞ」131例、「さぞかし」50例、「さぞや」16例、「さぞな」2例) これらは対象とした用例においては特定の形式において特別なふるまいがみられるということがなかったため、本稿の分析では「さぞ」のバリエーションとみなして扱った。

「さぞ」199例を対象に、「よほど」と同様、共起する推量形式を調べると、次の表9のような分布を示す。（実例の対象とした資料は3．2．1であげた(1)(2)(4)(5)である。）

表9：「さぞ」と共起する推量形式と用例数

叙法形式	共起する用例数			
	名詞	形容詞	動詞	計
だろう	15	33	46	94
(ことだろう)	1	12	22	35
う・よう		25	11	36
にちがいない	2	6	5	13
のだろう	2	2	5	9
かもしれない			1	1
のではないか			1	1
(こと)と思う		1	1	2
(こと)と思われる		1	1	2
そうだ			1	1
φ／するφ	1		1	2
省略・その他				3
計				199

「よほど」と共起する推量形式が、「だろう」よりも「のだろう」に代表される「のだ」を含む形式、「だろう」よりも「らしい」に代表される「推定」をあらわす形式に偏っていたのに対し、「さぞ」と共起する推量形式は「だろう」「ことだろう」「う・よう」といった「のだ」を含まない形式が80%以上を占めている。つまり、「のだ」という形式を含む説明的であるという点には関与していない点、また、推量形式のなかでも特に「推定」をあらわす「らしい」「ようだ」「と見える」などと共起する例が1例も見られない点が、まず共起する形式の面で対照的である。

そして、共起する推量形式の特徴は、「さぞ」が用いられる推量の文における判断内容にも関わる。「さぞ」も推量形式を伴う文に用いられる以上、その推量判断も何らかの状況や知識を情報とし、それにもとづいたものであることは十分に考えられる。しかし、共起する推量形式が「推定」形式あるいは「のだ」を含む形式であるという偏りから、「よほど」は、その情報が既実現事態という〈結果〉としてあり、その事態が生じた〈原因〉を判断する文に用いられるのに対し、「さぞ」は、その情報（特に明示されない場合もあるがある場合には）から〈結果〉として生じる状態や事態を判断する文に用いられるのが

基本であるという質的な違いがある。このことは次のように判断のよりどころとなる情報が複文で示される例を比較するとより明確である。

(54) はっきりしていたのはとにかく、（ここで大声を出さなければ）と思ったこと。

のちに警察の人が帰ってからも、喉がびんびんと痛かったくらいだから、よほど大きな声だったのだろう。（岸本葉子「幸せな朝寝坊」）

(55) こうした一連の演出をした黒幕が、新官僚として頭角を現した藤原不比等。草壁皇太子から死の直前、護り刀「黒作り懸佩の刀」を譲られるほどだから、よほど信頼が厚かったのだろう。（毎日新聞'95.04.14）

(56) 「先生、ワタシニモ何カサセテ下サイ。」院長ハ驚イタヨウニ彼女ヲ見タ。「アア君カ。モットユックリ寝テイレバヨカッタノニ。君ハ昨日ハ随分働イタカラサゾ疲レタダロウ。……」（福永武彦「死の鳥」）

(57) 結婚式は生家ですることになっていた。田舎の結婚式だからさぞかし賑やかなことであらう。（新田次郎「孤高の人」）

(54)～(57)は同じ「から」という接続助詞で結びつけられているが、(54)(55)のように「よほど」を伴う場合は、4. 2. 4. 2で述べたとおり、(54)の、出したのが「大きな声だった」という判断内容はカラ節で示される「警察の人が帰ってから、喉がびんびんと痛かった」という事態が生じた〈原因〉として、(55)の「信頼が厚かった」という判断内容もカラ節で示される「草壁皇太子から死の直前、護り刀「黒作り懸佩の刀」を譲られた」という事態が生じた〈原因〉として解釈されるものである。一方、「さぞ」を伴う場合は、カラ節に示される事実が判断のための情報となっていると思われるが、(56)の「疲レタ」という判断内容はカラ節で示される「昨日ハ随分働イタ」という事態の〈結果〉を、(57)の「賑やかだ」という判断内容も同様に、カラ節で示される「田舎の結婚式だ」という事実の〈結果〉を推量的に判断していると解釈される。そのため、「さぞ」が用いられる推量判断の判断内容は、次のように、過去(58)、現在（発話時）(59)のほか、未来(60)のことも少なくない。（内容の意味的な面では、内面の感情や心情を推量するものが目立つ³⁵。）

³⁵ 「さぞ」については杉村泰(2003)でも、事態の人称は二人称、三人称が多く、共起する語には感情や感覚をあらわすものが多いとの指摘があり、「当該事態の経験者に感情移入して、その感情、感覚、境遇を共感的に推量する」場合に用いられるとされる。

(58) そして、星光の邸宅は石の門のついた立派な建物、これに反して星の家は破れかかった木造のくぐり戸で、平家の古い小さな家だ。……検事たちが錯覚し、勢いこんでとなりに乗り込んだというのも、むりもない。星光の家では突然の来訪者に、さぞ驚いたことだろう。（星新一「人民は弱し官吏は強し」）

(59) 郵便局で別れたときの彼女の顔が白い帆に重なった。逃亡兵から懲役囚へと転落したおれをさぞや彼女はさげすんでいることだろう。（加賀乙彦「湿原」）

(60) 信夫は逃れるようにして自分の机に戻った。早く美沙のことを断らなければならない。しかし和倉礼之助がさぞガッカリするだろうと思うと、何とも断りづらい。（三浦綾子「塩狩峠」）

この点でも、「よほど」が用いられる判断内容が既実現の事態に至った原因や何らかの事情であると解釈される過去～現在のことからであり、動詞文の場合はシタ形、シテイル形がほとんどでスル形は現在の状態をあらわす状態動詞やそれに準ずるものに限られるのとは対照的である。

つまり、「よほど」と「さぞ」が用いられる推量は、その方向性が逆であり、「さぞ」が推量という文の叙法性に関わるものであるのに対し、「よほど」は、根拠となる事態（あるいは説明対象となる事態）から〈原因〉を推定（あるいは説明）する判断に重点がある点がやはり特徴的であるといえる。

実在する現状が徴候としてあり、それを証拠とした推量判断である点で他の推量形式と区別される「推定」をあらわす代表的な形式である「らしい」が、「さぞ」と共起する例には1例もないのに対し「よほど」とは多く共起する形式であったこと、「のだ」あるいはそれを含む推量形式が、「さぞ」にはそれほど多くないのに対し「よほど」には目立って多いことは、このような判断構造の違いの形式面でのあらわれである。

以上、「さぞ」との比較を通して、共起する推量形式のタイプが対照的であることから、同様に推量形式と共起する特徴をもちながらもその判断構造は異なるものであることを指摘し、4. 2. 4. 1、4. 2. 4. 2で考察した構文環境が「よほど」に特徴的なものであることを確認した。

4. 2. 4. 4 「どうやら」との比較

「よほど」と類似した構文環境で用いられる副詞に「どうやら」がある。「どうやら」は「よほど」や「さぞ」のように状態性をもつ語と結びついてその程度を限定する、という程度性はもたないが、やはり推量形式と共起して用いられるという特徴があり、特に「推

定」をあらわす「らしい」「ようだ」という形式をとる点で「よほど」と類似する面がある。

「どうやら」472例³⁶を対象に、「よほど」と同様、共起する推量形式を調べると、次の表10のような分布を示す。（対象とした資料は3．2．1であげた(1)(2)(4)(5)である。）

表10：「どうやら」と共起する推量形式と用例数

〈推定〉系

叙法形式	共起する用例数			
	名詞	形容詞	動詞	計
らしい	87	13	134	234
ようだ	42	12	34	121
(し) そうだ		7	23	30
みたいだ			1	1
Vてみえる			1	1
語彙的推定表現				17
計				404

〈推定〉系以外

叙法形式	共起する用例数			
	名詞	形容詞	動詞	計
と思われる	6		1	7
にちがいない	3		2	5
のではないか			5	5
だろう/こと—			2	2
ではないか	2			2
かもしれない			2	2
のかもしれない	1		1	2
と思う			2	2
よう（推量）		1		1
のにちがいない	1			1
のだろう			1	1
だϕ/するϕ	11	3	12	26
のだ	1		10	11
のか			1	1
計	25	4	39	68

³⁶「どうやら」の例には、次のような「どうやらこうやら」に準じて「どうにかして」という意味で用いられるものがある。

・ふり返ってみると、間違いだらけの人生である。どうやらこうやら世の中を渡ってこれたのが不思議な位だ。（五木寛之「風に吹かれて」）

「どうやらこうやら」に準じて「どうやら」が「どうにかして」という意味で、ある事態が実現したことを確定したものとして述べる文に用いられることが明確な次のような例については除いて扱った。

・鷲羽岳の登りも、雪がかたく、スキーを脱いで、アイゼンに履きかえねばならなかった。鷲羽岳のいただきまではどうやら視界が効いたが、そこからはいよいよ濃い霧になった。（新田次郎「孤高の人」）

・吟子は石黒の私邸を尋ねることにした。一度むだ足を踏んで、二度目に牛込揚場町の石黒邸でどうやら会える機会を得た。（渡辺淳一「花埋み」）

表 10 では左に〈推定〉系として、実在する現状が徴候としてあり、それを証拠とした「推定」をあらわす形式を、右に〈推定〉系以外の形式を示した。共起する形式は「らしい」「ようだ」が圧倒的多数を占め、「らしい」「ようだ」を代表とする〈推定〉系の形式と共起する割合が全体の 85%以上を占める。このような共起する形式が「推定」形式に偏る傾向は「よほど」と同様であり、次のように徴候としての既実現の事態（点線部分）があり、それを根拠とした推定に用いられる点も共通している。

(61) その朝、月子から元気のよい声で、「午前中に登記をすませて帰るわ」という電話があった。どうやらなにかもうまくいったらしい。(藤原審爾「さきに愛ありて」)

(62) すでに、ビールびんがからになっていたので、広太は、追加を注文した。秀子は、黙って、それを見ているだけであった。新しいビールびんが来ても、お酌をしてやろうともいわなかった。どうやらさっきからの広太の言葉に、すこし腹を立てているようだ。(源氏鶏太「停年退職」)

一方で、「よほど」において「らしい」を代表とする「推定」形式以上に用例が見られた、「のだろう」を代表とする「のだ」を含む形式はほとんどなく、「のにちがいない」「のだろう」「のではないか」等いずれも数例ずつに限られている。つまり、「よほど」は既実現の事態と判断という 2 つのことがらの関係に重点があり、それは「(推定) 根拠」と「推定」、あるいは「(説明される) 対象」と「説明」という関係であらわれうるため、共起する形式は「推定」をあらわす形式と「説明」をあらわす「のだ」を含む形式に偏りがみられた。それに対し、「どうやら」は「のだ」であらわされる「説明」的であることには関与せず、もっぱら「推定」という文法的意味に関わるのだと考えられる。

このような違いは、判断の内容の違いにもあらわれる。「よほど」が用いられる判断には、既実現の事態がその判断の根拠あるいは説明対象として存在し、文脈上明示されるが、さらに、次の(63)のようにその判断内容は既実現の事態に至った原因や何らかの事情として解釈される過去～現在のことがらであるという特徴があった。

(63) 銀次郎は、打ちひしがれたように、だまって膝の上に眼を落しながら手を揉んでいる。よほど手が痛かったらしい。(椎名麟三「永遠なる序章」)(例(11)(39)再掲)

「よほど」も「どうやら」も根拠にもとづく判断である「推定」をあらわす形式と共起しやすい副詞であるが、その「推定」をあらわす形式のなかで「(し) そうだ」については、

「よほど」は共起しにくい³⁷が「どうやら」は次のような例が比較的まとまった数見られるという違いがある。

(64) 十月のはじめのおだやかで気持の良い夜だった。空を覆っていた雲はところどころで切れて、そのあいだから満月に近い月が見えた。明日はどうやら良い天気になりそうだった。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

(65) 次の目的地は瀨川山だったが、一時はれた霧がまた張り出して視界を閉ざして動かないところを見ると、どうやら雨になりそうだった。(新田次郎「孤高の人」)

(66) やがてそれらが帰ってきて、敵の軍容、人数、部署などを報告した。それらを総合すると、予想される合戦の形態は、どうやら長良川をはさんでの決戦、ということになりそうであった。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

(67) 残りの水で、顔を洗い、首すじを拭くと、かなり気分もよくなった。土間の下を、冷たい風が流れていた。どうやら表のほうのぎやうすそうだ。(安部公房「砂の女」)

「(し) そうだ」は、何らかの兆候を判断するのに用いられる形式であり、そこにはやはり観察され、認識された既実現の事態(例文の点線部分)が存在する。したがって、既実現事態にもとづく判断という点では「よほど」の場合と変わりはないのだが、「どうやら」の場合、その判断の内容は(64)(65)(66)のような動詞文では未来のことがらを、(67)のような形容詞文では認識される事態から結果として判断される状態を述べるものであり、既実現事態の生じる原因や事情と解釈されるものに限られない。

また、「どうやら」の例の多くは「らしい」「ようだ」と共起して、先の(61)(62)のように判断内容が既実現事態の生じる原因や事情と解釈されるものであるが、「らしい」「ようだ」と共起する用例の中にも既実現事態の描写が明示されるものの、それを根拠とする判断の内容は原因や事情とはいえない例がある。

(68) 長距離バスで行くより仕方がなかった。ところが、バスターミナルに着くと、最終バス

³⁷ 表7に見られるとおり、「よほど」には1例のみ。

・早瀬は窓の外へ空唾を吐いた。「あの女交換手、あの調子じゃよほど頑張りそうだが、脱出の指揮は俺がとるからな。俺の命令にしたがって行動しろ。あいつがぐずぐずいたら、貴様、かつぎ出せ。……」(三浦哲郎「驢馬」)

他の多くの例が、観察された既実現の事態からその事態に至る原因や何らかの事情と解釈される過去～現在のことがらを推定するものであるなかで、未来のことを推定する例であるが、わずか1例という点からみても「よほど」が通常は用いられにくい例であると判断される。

が出たあとだった。どうやら、ラスベガスで一泊しなくてはならないらしい。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

- (69) そのとき、ブラームスのクワルテットのあいだから、ごく小さい苦痛の聲がきこえました。あたしの左は通路で、右隣には髪の高い少女が坐っていて、どうやらそれはその少女ののどからもれてきたようでした。(倉橋由美子「聖少女」)

次の(70)(71)のように、観察が行われたことの描写はあるが具体的な根拠は明示されない場合、さらに(72)(73)のように「らしい」「ようだ」によって何らかの根拠にもとづく推定判断であることは示されるが、その根拠となる事態が文脈にあらわれない例も少なくない。

- (70) イランの子供たちがこれほど熱中する番組とはどのようなものなのだろう。ふと興味を覚え、彼らの頭の上から覗き込むと、どうやらそれはボクシングの試合らしかった。らしいとしかわからなかったのは、不鮮明で、上下二段に分裂し、しかもそれが逆転しているという、凄まじい画像だったからだ。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

- (71) 文字盤の少し下あたりに見える小窓から推測すると、塔の内部はどうやら空洞になっており、梯子か何かで上にのぼることができるようだったが、そこに入る入口らしきものはどこにも見あたらなかった。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

- (72) それから、とつぜん視界がひらけて、小さな部落があらわれた。……むろん、その中の何軒かは、黒い瓦ぶきだったり、べにがら色のトタンぶきだったりした。トタンぶきの建物は、部落の中の唯一の四つ辻の角にあって、どうやら漁業組合の集合所らしかった。(安部公房「砂の女」)

- (73) ところが、さて峻一が自分の膳を眺めると、そこにはなんの菜も茶碗もお椀もない。ただ丸い金属製の罐が幾つも積みあげてある。それはどうやら歐洲叔父の妻の実家で造っている旭飴の罐のようであつた。(北杜夫「楡家の人びと」)

「どうやら」は、その判断内容は根拠である既実現事態の原因や事情であることが多いものの、それに限られるわけではなく、また、根拠にもとづく推定判断であることが「らしい」や「ようだ」などの形式によって示されればその根拠自体は具体的に示されないこ

ともある。つまり、用いられる判断が根拠にもとづいた推定判断であることに重点があると考えられる。このことは、「推定」をあらわす形式の中でも「よほど」とは共起しにくい「(し) そうだ」とも共起して用いられる例がある点、また、「よほど」が共起しやすい「のだろう」を代表とする「説明」をあらわす「のだ」を含む形式には偏りが見られない点にもあらわれている。

一方、「よほど」があらわれる構文環境には、既実現の事態がかなり義務的に文脈にあらわれ、その事態が生じるに至った原因や事情が「よほど」が用いられる判断の内容として述べられる。既実現事態と判断の間には〈結果〉と〈原因〉という因果関係があり、「よほど」はこの2つの事態の関係において用いられることに重点があると考えられる。このことは、この2つの事態の関係を反映しうるものであれば、共起する形式は「推定」をあらわすものに限らず、「どうやら」とは共起しにくい「説明」をあらわす「のだ」を含む形式にも偏りをみせることにあらわれていると考えられるだろう。

以上、「よほど」と同様に「推定」をあらわす形式と共起しやすい「どうやら」との比較を通して、4. 2. 4. 1、4. 2. 4. 2で考察した構文環境が「よほど」に特徴的なものであることを確認した。

4. 2. 5 状態性をもつ語との共起

4. 2. 5. 1 「よほど」が結びつく語

4. 2. 4では、「よほど」が用いられる構文的な特徴を、文の叙法形式にもとづいて、既実現事態を前提とした（推定的／説明的）判断という判断構造へと一般化できることを述べた。それに加えて、「よほど」には状態性をもつ語と結びついてその程度を限定するという面がある。

「よほど」が共起して用いられやすい「らしい」を代表とする「推定」をあらわす形式、「のだ（ろう）」を代表とする「説明（推量）」をあらわす形式は、広く既実現事態を前提とする判断に用いられる。しかし、同様の判断構造であっても、次のように状態性をもつ語を伴わない文には「よほど」を用いることができない。

(74) 私は、食べのこした飯を食おうと思ったが、箸がなかった。土手をのぼるとき、落し

たらしい。（三浦哲郎「驢馬」）

→箸がなかった。土手をのぼるとき、*よほど 落したらしい。

(75) 純子は、二階へ上がると、じっと耳を澄ました。今どきの若者の部屋なら、たいてい何か音楽でも聞こえているものだが、今は物音一つしない。たぶん、どの部屋も留守なのだろう。（赤川次郎「女社長に乾杯！」）

→今は物音一つしない。たぶん、どの部屋も *よほど 留守なのだろう。

「よほど」が用いられる文は、形容詞文であれ、動詞文であれ、名詞文であれ、いずれもそれ自体が状態性をもつ語であるか、あるいはそのような語を修飾語として伴うものであり、「よほど」はその状態性概念の程度を限定している。

(76) 二人は恋仲ではないらしいけれど、たいそう親しげに話しあって品よく笑っている。よほど仲がいいらしい。(開高健「新しい天体」)

(77) その時、電話のベルが鳴った。音量は小さめに調節してあったというものの、母はよほど疲れ切っているのか、ぐっすりと寝入っている。(湯本香樹美「ポプラの秋」)

(78) 例の少年はよっぽどいいものをたべつけていると見え、競歩選手そのこのけの速さで歩く。(井上ひさし「下駄の上の卵」)

(79) へつらうような笑いを口角にうかべて、忠平は、うしろから茶をもってきた女中に、語氣をかえて、「はよ、晩飯もってこんかいな」叱りつけるようにいうのだった。この宿とはよほど馴染みらしい。(水上勉「越前竹人形」)

(80) 導師は、まだ若い。その若さで、おおぜいの僧を従えて読経をつづけているのはよほど身分のよい出なのであろう。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

4. 2. 5. 2 状態性をもつ語の特徴

既実現の事態をもとにその原因・理由の(推定的／説明的)判断に用いられる本用法において、「よほど」は状態性をもつ語と共起してその程度を限定することを述べたが、共起する状態性をもつ語には形容詞をはじめ、状態動詞、動詞(句)、名詞などがあり、さらに、意味の面でもやや偏りがある。以下、意味的なタイプごとに代表的な語例をあげる。特に目立ったものには()で数を示す。

【人の内面～内情(感情・心情・精神的肉体的状態・感覚・性格・資質・出自など)】

{うれしい(15) かなしい さびしい くやしい こわい おそろしい 照れくさい

／すきだ(12) きらいだ ショックだ 心配だ 堪えがたい 惜しい 機嫌がいい ムシの居所がわるい 恨みが深い 思い入れが強い 気に入っている(11) 惚れこんでいる 好意を持っている 深く愛している 困っている 動揺している 恨んでいる 自信がある(9) 愛

着がある（心魂に／肝に）こたえる(7) 気になる 痛癢にさわる ほっとする
／つらい(6)（具合が）悪い(4) 眠い(3) 苦しい調子がいい 空腹だ 疲れている(11) 退屈している 熟睡している 喉が渴いている ストレスが溜まっている（体が）凝っている 氣勢をそがれる／あつい 寒い 痛い／ウブだ 律儀だ 欲張りだ 偏屈だ 鈍感だ 凡庸だ 能天気だ 無神経だ 無能だ 口不精だ 目立ちたがりやだ 物好きだ 度胸がない 人柄がいい 神経が太い 気位が高い 脳味噌が足りない 度胸が据わっている 無愛想にうまれついている／腕がいい 思慮深い 器用だ 習熟している 人間離れしている 力量がある／躰の厳しい家に育つ 身分のいい出だ 金持ちだ 経済的に余裕がある／暇だ・暇がある(6) 事情がある(3) 苦勞する つらい目にあう 家庭がうまくいっていない 揉める}

【定めや社会的な傾向（コントロールできないもの）】

{運がいい(2)・わるい(5) 相性がいい(3)・わるい(2) 条件がいい ついてない なじみだ 縁がある(2) 気が合う 深い宿縁でつながっている /マイナーだ 普及度が低い 信頼が厚い おそれられている 愛されている 囑望されている 人気がある}

【成果に関わる意志的行為】

{慎重にやる うまく調整する うまく会う うまくだましあう 一生懸命に修行する まめに手入れする 巧妙に外にもらさないでいる 頻繁にジムに通う 深いところにもぐる 稽古する 練習する 頑張る 奮戦する}

最後にあげた、【成果に関わる意志的行為】というのは意志動詞であるが、状態性と無関係なものではなく、多くは「慎重にやる」「うまく調整する」「一生懸命に修行する」など何らかの状態的な修飾をうけるものである。動詞が単独であられる場合でも「稽古する」「練習する」「頑張る」など個々の具体的な行為を総合的にあらわし、時間や頻度、熱心さなどの量や程度の幅を読み込みやすい要素をもつものに限られ、やはり状態性にかかるものと解釈される。したがって、意志的行為であっても動作が具体的な「座る」「起きあがる」のように状態性を想定しにくい動詞はあらわれにくい。

上にあげたいくつかのタイプはこの用法においてまとまった傾向を示したものだが、これらに尽きるわけではない。しかしながら、ある程度意味的な偏りがみられるのは、直接認識される既実現事態からその原因やなんらかの事情が、【人の内面や内情】【定めや社会的な傾向】に求められやすく、また、既実現事態としてあらわれた成果ともいふべき事態の原因が、そこに至る努力である【意志的行為】に求められやすいということのあらわれであると思われる。

4. 2. 5. 3 「よほど」の程度性

本用法における「よほど」は、このように既実現事態を前提とした（推定的／説明的）判断という判断構造の中で、状態性をもつ語と結びついてその程度をあらわすのだが、同様に既実現の事態を認識してそれをもとに判断を行う場合には、他にもさまざまな程度をあらわす副詞が用いられることがある。

(81) 風がいくらか出てきたらしく、軒端の風鈴が涼しい音をたてる。(渡辺淳一「花埋み」)

(82) 「そんなのあるかい。そんなにやたらと大砲がついててたまるか」と、中学生の米国は、こんな遊びにやや飽々しているらしく、批評がましい声を出した。(北杜夫「楡家の人びと」)

(83) 少し遅れて着いてみると、彼らはフィールドを一周してゴールポストの下に集まっていた。かなり激しく走ったのだろう、白い息が、短い周期で強く吐き出される。(藤原正彦「若き数学者のアメリカ」)

(84) 山本は、新しい航空本部長のポストを非常に喜んだらしく、何年でもやりたいと言っていた。(阿川弘之「山本五十六」)

これらの副詞のあらわす「小」～「大」さまざまな程度の中で、「よほど」はある状態の程度が〈過度に「大」〉であることをあらわしている。

(85) 「あ、これはひどい熱です。風邪ですね。すぐ横になって下さい」……そう言われてもすぐ素直に横になるような忠敬では、普段はないのだが、その日は余程つらかったのか、イネが促すままに、床に入った。(佐藤嘉尚「伊能忠敬を歩いた」)

(86) お土産は何がいいだろうということになって、日本の筆と墨、硯にきめ、それを取り寄せてからシャガール邸を訪問することになった。マルク・シャガールは、めったに人に会わないことで有名な人らしい。私の紹介者がよほどシャガールと親しかったのだろう、ご夫妻ともども上機嫌でわれわれを迎えてくれた。(本田宗一郎「私の手が語る」)

(85)(86)の例でみると、通常であること（波線部分）を前提とした場合に、通常ではない異常な、意外性のある既実現の事態（点線部分）を認識して、そのような事態

4. 2. 6 用法のまとめ

次の構造で示される《推定判断用法》には以下のような特徴がある。

- ### ◆構文の形式的特徴

- ⇒判断の内容は、既実現事態に対して原因・理由にあたる。

【成果に関わる意志的行為】

「よほど」は、ある既実現の事態が通常でなく異常であるという認識のもとに、そのような事態に至る原因・事情の{推定／説明}判断に用いられる。つまり、既実現事態と判断という2つの事態の関係のなかにあらわれるという特徴がある。既実現事態に通常でない様子を見とめ、その原因、事情である事態にもそれ相応の程度のことを見とめられるであろうという判断から、「よほど」は程度の意味としては普通に想定される程度を超えて〈過度に「大」〉であることをあらわし、そこには〈異常性〉〈意外性〉といった評価を伴う。

4. 3 《比較評価判断用法》

4. 3. 1 用法の構造

4. 3 では、次のようにモデル化される《比較評価判断用法》について述べる。

A (なんか／など) より B (の) ほうが よほど (主観的・評価的形容詞)。
--

例1) 「…臆病者として生きるよりも、馬鹿者として死んだ方がよほどでした。」(死の鳥)

例2) 地元紙の夕刊の記事よりも、運転手仲間の噂話のほうがよほど速やかに具体的な情報を伝えてくれる。(バニシングポイント)

「よほど」の用いられる構文特徴の中で、③比較対象の表示があるもの、すなわち「～より」「～の方が」などの形式で比較する対象が示される比較構文をとる例が 264 例と多く見られたことから、2つ以上のことがらの比較を前提とするものを1つの用法と見とめ、検討する。

4. 3. 2 では、「ずっと」「はるかに」という比較に関わる他の副詞との比較を通して、比較対象を表示する形式について検討し、そのあらわれ方や、文の叙法性の面から「よほど」が用いられる比較構文の特徴について述べる。4. 3. 3 では、本用法の「よほど」が共起する状態性をもつ語にどのような傾向があるかを示す。4. 3. 4 では、4. 3. 2 と4. 3. 3 で指摘した点を総合し、さらに「よほど」が用いられる比較と先行文脈との関係から、「よほど」が独自の比較評価判断を主張する場合に用いられることを述べる。

4. 3. 2 構文の形式的特徴 ③比較対象の表示

4. 3. 2. 1 比較対象の表示形式とそのあらわれ方

比較とは2つ以上の事柄を比べることであるが、その比較される対象は次のように、「～より」「～(ぐらい)なら」「～に比べると」、「～方が」「～は」などの形式で示される。

(87) 加藤は横須賀の出張が嫌ではなかった。園子と六甲山へ登るより、横須賀へ行く方がよほど意義のあることだった。(新田次郎「孤高の人」)

(88) 「こんな世の中、いったい誰が信用できるね。俺の知り合いに金や物を預けるぐらいなら、見ず知らずのあんたに賭けた方がよっぽどマシさ。腹のへってるやつはダメだ。俺はあんたの、そのなりを信じる」(浅田次郎「地下鉄に乗って」)

(89) 鬼にもいろいろあって、中国でいう死者の幽鬼や、人間とみればいきなり取って食うようなひたすら恐ろしい鬼、また地獄のほうで閻魔大王のもとに仕える赤鬼、青鬼とさまざまだが、わが酒吞童子はそれらにくらべるとよほど人間くさい存在である。(本田宗一郎「私の手が語る」)

「XはYよりよほどAだ」「YよりXの方がよほどAだ」という関係にある「X」と「Y」のあらわれ方をその表示形式ごとに整理すると、次の表 11 のようになる。「X」と「Y」それぞれについて、明示される場合の形式ごとの用例数をあげる。表には、「X」と「Y」の一方しかあらわれない場合に、一方は非明示であるため、その用例数も示した。()内は、いずれか一方でも比較対象が表示される全用例 264 例に対する、用例数の割合である。

表 11 : 「よほど」と共起する比較対象の表示形式と用例数

X		Y	
形 式	用例数	形 式	用例数
方が	184 (69.7)	より	129 (48.9)
は	25 (9.5)	なら	10 (3.8)
が	4 (1.5)	に比べて	6 (2.3)
こそ	2 (0.8)	も・ないが	1 (0.4)
て	1 (0.4)	どころか	1 (0.4)
となると	1 (0.4)	たって	1 (0.4)
		は・だが	1 (0.4)
明示 小計	217 (82.2)	明示 小計	149 (56.4)
非明示	47 (17.8)	非明示	115 (43.6)
計	264 (100)	計	264 (100)

「X」と「Y」が文中に明示される割合をみると、「よほど」が用いられる比較構文では「Y」よりも「X」が文中に明示される割合が高い。このことは、同様に比較構文で用いら

れやすい「ずっと」（208 例）「はるかに」（149 例）という副詞³⁸と比較すると、「よほど」が用いられる比較の傾向であることがわかる。表 12 に「ずっと」、表 13 に「はるかに」と共起する比較対象の表示形式とそれぞれの用例数を示す。

表 12 : 「ずっと」と共起する比較対象の表示形式と用例数

X		Y	
形 式	用例数	形 式	用例数
方が	65(31.3)	より	139(66.8)
は	32(15.4)	に比べて	17 (8.2)
被連体語	10 (5.0)		
が	6 (2.9)	は	3 (1.4)
も	2 (1.0)	なら	2 (1.0)
こそ	2 (1.0)		
て	1 (0.5)		
明示 小計	118(56.7)	明示 小計	161(77.4)
非明示	90(43.3)	非明示	47(22.6)
計	208(100)	計	208(100)

表 13 : 「はるかに」と共起する比較対象の表示形式と用例数

X		Y	
形 式	用例数	形 式	用例数
方が	52 (34.8)	より	106 (71.1)
は	20 (13.4)	に比べて	13 (8.7)
が	10 (6.7)		
被連体語	5 (3.4)		
も	1 (0.7)		
明示 小計	88 (59.1)	明示 小計	119 (79.9)
非明示	61 (40.9)	非明示	30 (20.1)
計	149 (100)	計	149 (100)

「よほど」が用いられる比較構文では「Y」よりも「X」が文中に明示される割合が高い

³⁸ 「ずっと」「はるかに」はいずれもそれぞれいくつかの用法をもつが、そのうち比較対象が何らかの形で明示されている例のみを対象とした。「ずっと」全 790 例中 208 例、「はるかに」全 222 例中 149 例を対象とした。

のに対し、「ずっと」「はるかに」は逆で、「Y」が明示される割合が高く「X」は「よほど」と比べるとかなり低いという傾向にある。

これは、次のように文脈から明らかであるために文中に明示されないということもあるだろうが、それだけではないように思われる。

(90) 星はからだの調子が変わだなと思うと、すぐに売薬を買って早目に悪化を食いとめる習慣が身についてしまった。ひどくしてから医者にかかるより、はるかに安くてすむ。(星新一「人民は弱し官吏は強し」)

(91) 漫画は太郎は大ていのものを読んでいる。下手な小説より、ずっとまじめに、甘くなく、この世の悲しさをとらえているものが多いのに、どうして、世間の大人たちは、寄ってたかって目の敵にするのかなあ、と思う。(曾野綾子「太郎物語」)

「はるかに」も同様だが、特に「ずっと」が用いられる比較構文には、「～より」で示される比較対象「Y」の内容が「以前の状態」「予想／予定」「普段の状態」「目の前の状態」等である次のような例が 208 例中 54 例 (26.0%) と多く見られる。

(92) 「気をつけてな」と博士は言った。暗い光の中で見ると、博士は最初に見かけたときよりずっと老けてみえた。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

(93) しかし一般に、女子学生というものは、世間が考えるのより、ずっと荒っぽい。或いははるかに幼稚である。(曾野綾子「太郎物語 (大学編)」)

(94) 士官室の飛行機屋がしきりと残念がるのは、瑞鶴らの艦隊が珊瑚海に到着するのが二日遅れたことが原因であった。ラバウルに零戦を空輸するのが予定よりずっと手間どったためである。(北杜夫「楡家の人びと」)

(95) クリスマスだからなのか、新宿のあたりはいつもよりずっとネオンが明るいような気がした。(椎名誠「新橋烏森口青春篇」)

(96) 案の定それは長い仕事になった。数値の配列自体は比較的単純なものだったが、ケース設定の段階数が多かったのも、計算は見かけよりずっと手間どった。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

このような例は、2つの異なるものごとの比較というより、ある主題 Z（囲み部分）について、ある状況を基準としてどうなのかを「(Z は) Y (以前の状態／予想・予定／普段の状態／目の前の状態) よりずっと A だ」という比較構文で述べるものである。一方の比較対象である「X」は「現状・実際」にあたり、通常明示されにくいのだと思われる。現代語の典型としては、「よほど」はある基準「Y」からの差が単純に大きいということを述べるこのようなタイプの比較にはなじみにくい。

?? 新宿のあたりはいつもよりよほどネオンが明るい。

?? 計算は見かけよりよほど手間どった。

「よほど」は「ずっと」や「はるかに」と比べて、「X」の方が表示されやすく、また、「Y」も 264 例中 115 例(43.6%)が非明示であるが文脈から特定することが可能な具体的な対象であった。さらに、「X」が表示される形式についてみると、特に「～の方が」という形式であられる割合が目立って多い。この傾向は、「よほど」が「X は Y より A だ」という 2つの事態の単なる比較でなく、「X」を積極的に選びとるような比較に用いられやすいことのあらわれではないかと思われる。

4. 3. 2. 2 文の叙法性

「よほど」が比較対象が表示される構文環境で用いられる場合、その文は平叙文に限られ、命令文、意志文、疑問文などに用いられる例はない。比較の表現自体は平叙文に限られるわけではなく、次の作例のように命令文や意志文、疑問文などにも用いられる。

兄より {たくさん食べろ／たくさん食べよう／たくさん食べますか}。

このカメラより安いカメラを {買え／買おう／買いますか}。

これらの文に「よほど」を入れると不自然であり、やはり平叙文に限られるという制約があるようである。（「ずっと」の場合は可能か。）

兄より *よほど {たくさん食べろ／たくさん食べよう／たくさん食べますか}。

○?ずっと

このカメラより *よほど 安いカメラを {買え／買おう／買いますか}。

○?ずっと

さらに、平叙文においても、(97)のように連体節において用いられる例、(98)のように従属節で用いられる例も数例見られるが、本用法として扱った 264 例のうち大多数を占めるのは、(99)(100)のように終止述語の部分に用いられるものであった。

(97) 結局のところ日本人は、「だめ派」がいうとおり、どうしようもない劣等人種なのかもしれない。いまはただ、私自身を含む学者・評論家・ジャーナリストなど“言挙げ人”の知的レベルが、国民の平均的なそれとくらべて、よほど低いことを切に祈るのみである。(飯田経夫「「ゆとり」とは何か」)

(98) 茄子の葉裏にべったりとたかった斫虫は、私が指でつぶした方が余程手っ取り早いからいつもそうするが、七ツ星テントウの居る葉だけは、特別に彼のため残してやる。(尾崎一雄「冬眠居閑談」)

(99) こんな研究室で演奏をやっていいかと尋ねられた切替教授は答えた。「構いませんよ。今大学は復活祭の休み中、ここは地下、それに近くの学生会館のほうがよっぽどうるさい」(加賀乙彦「湿原」)

(100) 可愛い制服が着たい。くだらないと言えはそれまでのことだが、モチベーションがあれば子どもだって頑張れる。私より娘の方が余程立派だ。(森浩美「こちらの事情」)

また、終止述語で用いられる場合、述語の形式は無標の言い切りの形である場合が多く(264 例中 189 例 (70.0%))、断定的な述べ方が典型であるといえる。比較対象の表示を伴い、文の叙法性においてこのような特徴をもつ用法を《比較評価判断用法》として1つの用法とみとめる。

ここで、4. 2. 1でも触れた、比較対象の表示と推量形式との共起という構文特徴を重複してもつものについて触れておく。比較対象が表示されて用いられる例には、4. 2. 1でとりあげた推量形式との共起という構文特徴を重複してもつものが 37 例、4. 2. 2でとりあげた「のだ」を含む形式との共起という構文特徴を重複してもつものが 22 例見られた。

(101) 「……わたしだって、そりゃね、会ったこともない男と結婚しろと言われたとき、いやで、死んだほうがましだと思ったよ。だけど、親がすすめるんだし、親はわたしより世間をしっているしね、利口なんだから、わたしが会って決めるより、よっぽどたしかだろうと思い直したよ。……」(藤原審爾「さきに愛ありて」)

(102) せっかく油が乗っているのに時間を無駄にするのは惜しかった。無駄？しかし他人から見たら、こんな小説を書いている方がよほど無駄かもしれない。(福永武彦「死の鳥」)

(103) 時代は変わっていく。当然である。ロー・リエ・ホワン・インと歌い踊る時の少女たちは、精一杯の笑顔をつくってくれた。あの笑顔が見られなくなったのは少し淋(さび)しいのだが、そのかわりに普段の顔が見られる。笑顔にしる、つくられたものより、普段のもののほうがよほどいいのだ。(毎日新聞 95.04.09)

これらは、形式的には、4. 2の《推定判断用法》とも共通する、推量形式、あるいは「のだ」を含む形式と共起するという特徴をもつが、《推定判断用法》の本質的な特徴である、既実現の事態を前提とする判断という判断構造をもつものではないため、4. 2では扱わなかった。比較対象が表示される2つの事柄の比較判断において「よほど」が用いられる場合には、比較という評価判断に重点があるために、平叙文である限りは認識的叙法には直接関与せず、さまざまな認識的叙法形式と共起しうるのでと考えられる。したがって本稿では(101)(102)(103)のような例は《比較評価判断用法》と位置づける。

ただし、比較対象が表示され、推量形式の中でも「推定」をあらわす形式、あるいは「のだ」を含む形式と共起し、かつ、文脈には既実現の事態（点線部分）が示される次のような例は、まさに“比較評価判断”と“推定判断”という両方の性格をあわせもつ中間的な例とみるべきであろう。本稿では両用法で対象として扱った。

(104) しかし、コンスタンティノーブル攻防戦についての最も正確で最も冷静なこの記録は、ローマ法王庁を震駭させたイシドロスの手紙よりも、ローマの知識階級の間で評判になったウベルティーノの長編詩よりも、また、フランスの地で十字軍精神鼓舞のための宣伝に活用されたテダルディの物語よりも、当時では、普及度はよほど低かったようである。一八三七年に重要史料としてヴェネツィアのマルチャーナ図書館入りするまで、バルバロ家の史料室に眠ったままであったからだ。(塩野七生「コンスタンティノーブルの陥落」)

(105) 活字離れが著しいといわれる今日の中・高校生たちですが、コミックやゲーム、TVドラマなどと関連した活字メディアには殺到します。たとえば、難事件に挑む金田一少年が「金田一耕助の孫」とあれば、その「じっちゃん」がどんな名探偵かを知りたくなって元祖・金田一耕助シリーズを読み始めた中・高校生も少なくないようです。……金田一少年をはじめマンガの人気キャラクターたちは、今や少年・少女らにとって、親や

先生よりもよほど頼りになる活字世界への案内人なのでしょう。(毎日新聞 95.08.21)

以上、「よほど」が用いられる文の叙法性について、平叙文に限られ、さらに平叙文の中でも無標の言い切りの形で述べられる終止述語に用いられる場合が多いことを確認した。また、比較で用いられる「よほど」はその比較判断自体に重点があることから特定の叙法形式に関与するものではなく、平叙文においてさまざまな認識的叙法形式とも共起しうる点についても触れた。

4. 3. 3 状態性をもつ語との共起

4. 3. 3. 1 「よほど」が結びつく語

「よほど」が比較対象の表示とともに用いられる場合も、「YよりXの方がよほどAだ」「XはYよりよほどAだ」といった比較構文をとる平叙文の中で、終止述語にたつ状態性をもつ語と共起して用いられる。

「よほど」が用いられる文が形容詞文、動詞文、名詞文いずれの場合も、形容詞を中心に状態をあらわす動詞や名詞などそれ自体が状態性をもつ語であるか、あるいはそのような語を修飾語として伴うものであり、「よほど」はその状態性概念の程度を限定している。

4. 3. 3. 2 状態性をもつ語の特徴

比較構文をとる評価判断に用いられる本用法において、「よほど」は状態性をもつ語と共起してその程度を限定することを述べたが、共起する状態性をもつ語は、形容詞を中心に、状態動詞（含蓄がある／見ごたえがある）、状態をあらわす動詞（句）（役に立つ／興味をそそる）、名詞（常識人だ／弱虫だ）の場合がある。これらは、意味の面では「いい」「ました」などに代表される主観的な判断によって定められる評価的なもの³⁹に大きく偏る。客観的にも明らかな見たままの状態ではなく、何らか主観的な価値基準や感じ方のようなものにしがたってくださる評価であることが特徴である。評価としてはプラスのものマイナスのもの両方みられる。以下、代表的な語例をあげる。特に量的に目立ったものには（ ）で数を示す。

³⁹ 樋口文彦(2001a)では、形容詞のあらわす評価について、ある物が同種の他の物との関係のなかでもつ意味あいをあきらかにする評価を「《資格づけ的な評価》」（まるい、あかい、たいらな、とうめいな）、人間の側からの意味づけ（《いい／わるい》）を「《価値づけ的な評価》」（まじめな、りこうな、じみな、げんきな、げひんな、べんりな）として区別している。本稿での状態性をもつ語は形容詞に限るものではないが、人間の主観的な判断による「いい」「ました」を代表とする価値判断であり、この「価値づけ的な評価」を含むものであると考えられる。

{いい(28) おもしろい(6) 楽しい(3) うまい えらい すごい おいしい 詳しい わかりやすい てっとり早い (文化度が) 高い (レベルが) 低い (スケールが) 大きい // 悪い(3) むずかしい(3) ひどい うるさい きたならしい 危なっかしい 疑わしい

ましだ(15) 簡単だ(7) 楽だ(5) 自然だ(4) 大事だ(3) 粹だ きれいだ 素敵だ 上等だ 立派だ 幸福だ 正常だ 確実だ 有意義だ 健全だ 無難だ 現代的だ 生産的だ 効率的だ スマートだ// 苦痛だ 面倒だ 退屈だ 無駄だ ぜいたくだ 苛酷だ 危険だ アンフェアだ 意義がある(3) 含蓄がある 夢がある 可能性がある 見ごたえがある スリルがある すっきりしている 気が利いている 理にかなっている 見事に説明している 若々しい精神構造を保っている 役にたつ 頼りになる 時間短縮になる 刺激になる 興味をそそる 生きがいを感じる おどろきに値する リラックスできる 話として納得できる 充実感を味わうことができる // 劣っている (常識から) ずれている 世話が焼ける 常識人だ 弱虫だ 変人だ 狂人だ 君子だ ブルジョア趣味だ プロレタリアだ}

このような偏りは、やはり同様に比較において用いられる「ずっと」や「はるかに」と比較すると「よほど」に特徴的なものであることがわかる。「ずっと」や「はるかに」と共起する状態性をもつ語には、「よほど」と同様に主観的な判断による評価的なものももちろん見られるが、それだけでなく、次のように、直接知覚されたり事実であったりする客観的に明確な状態をあらわすものも多く、制限がない⁴⁰。

{多い 少ない 細い 大きい 小さい 高い 明るい 暗い 広い 狭い 甲高い (上背が) ある (容積が) ある やせこけている ふけている 年をとっている よく似ている 年上だ 先輩だ ……}

(106) しかしそれは決して楽な探索ではなかった。途中にはまるでごっそりと地面が陥没したあのような深く切れこんだ溝があり、僕の背たけよりもずっと高く繁茂した巨大な野いちごの茂みがあった。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

⁴⁰ 「ずっと」と「はるかに」は幅広くさまざまな状態性をもつ語と共起する点で共通しているが、それぞれに多少傾向の差はみられる。「はるかに」には特に「多い」「少ない」など数量に関わるものが目立ち、「ずっと」にはそのほかにも、「～{に/<}なる」の形で変化をあらわすものも多い。

・(夏ごろあつたときにくらべて、宮村健はずっと明るくなったように感じた。(新田次郎「孤高の人」)
・枯れた草の上を獣たちが食べ物を求めてさまよっている姿にも出会った。彼らは白みを帯びた淡い金色の毛皮に包まれていた。その毛は秋よりはずっと長く、そして厚くなっていたが、それでも彼らの体が前に比べて遥かにやせこけていることははっきりと見てとれた。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」))

(107) マクドナルドは、山本よりずっと年上であったが、態度や話しぶりはまことに懇切で、山本とは意気投合するところさえあるように見えた、榎本重治は語っている。(阿川弘之「山本五十六」)

(108) 当時は、土手などはない。河幅は現今の京都の加茂川よりもはるかに広く、洪水のたびごとに湖のような観を呈するが、平素はほとんどが草茫々の洲である。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

(109) 彼が立ちあがったとき、はじめて彼を知る者はあらためて目を見張った。坐っているとき予想していたより、怪童ははるかに上背があったからである。(北杜夫「楡家の人びと」)

以上のような「よほど」が共起する状態性をもつ語の傾向は、4. 3. 2. 2で述べた、「よほど」が平叙文の中でも無標の言い切りの形で述べられる終止述語に用いられる場合が多いこととも関わっていると思われる。「ずっと」「はるかに」は、多様な状態性をもつ語と共起し、文の中でも終止述語をはじめ、たとえば先の(106)(108)のように連体修飾節述語や従属節述語にかかる位置に幅広くあらわれることにより、比較に基づいた評価判断だけでなく、ある状態を比較表現を通して描写するような記述にも自由に用いられる。それに対し、「よほど」は、共起する状態性をもつ語が主観的に定められるような評価的な語に偏り、それらは終止述語において無標の言い切りの形で用いられるのが主である。このことから、「よほど」は、2つのことがらを比較したうえで一方を積極的に評価し、その判断を述べるような比較の文に用いられやすいといえる。

4. 3. 3. 3 「よほど」の程度性

本用法における「よほど」は、「X」と「Y」という2つの事柄を比較対象とする「YよりXのほうがよほどAだ」という比較構文において主観的評価的な状態性をもつ語と結びつき、「X」と「Y」の程度差が「大」であることをあらわす。この程度差が「大」であることをあらわす点は4. 3でも比較検討してきた「ずっと」「はるかに」と共通している。

渡辺実(1990)では程度副詞を「XはAだ」という計量構文と「XはYよりAだ」という比較構文のどちらにたつかによって検討し、その体系を、発見系と比較系とで対立し、それぞれが非評価系と評価系とに二分されるかたちでとらえることを提示した。「よほど」は、比較構文にたつ副詞である「比較系」であり、程度の量としては「大」であるとされる「もっと類」(ずっと、いっそう、はるかに、いちだんと)の1つとして位置づけられている。さらに、佐野由紀子(1998)は、渡辺実(1990)の「もっと類」を次のような基準で区別して

《もっと類》と《ずっと類》に分け、「よほど」を《ずっと類》に位置づけている。

「XはYより〈程度副詞〉A」というとき、

- ・もっと類：「YもAである」という前提を必要とする …さらに いっそう
- ・ずっと類：「YもAである」という前提を必要としない …はるかに 断然 **よほど**
- ・多少類：「YもYも〜Aである」ことを発話の結果として含意する
…多少 少し やや ちょっと いささか (かなり だいぶ)

渡辺実(1990)でも、佐野由紀子(1998)でも「よほど」は「ずっと」「はるかに」と同類に位置づけられており、共通する面があることから、本研究でも対照する副詞として「ずっと」と「はるかに」を扱った。そして、4. 3. 2で述べたように、「よほど」の用いられる比較は、「ずっと」や「はるかに」と比べると、比較対象のあらわれ方、文の叙法性、文中でどのような位置にある述語にかかるか、などに特徴があること、さらに、4. 3. 3でみた状態性をもつ語の意味的なタイプも限られていることを示した。

これらのことをふまえて、「よほど」の程度性について考えてみたい。先にあげた佐野由紀子(1998)では、《もっと類》と《ずっと類》との違いを「XはYより〈程度副詞〉A」とした場合に「YもAである」という前提を必要としないかという点で区別していた。この点、「よほど」も「ずっと」「はるかに」も「YもAである」という前提を必要としない、すなわち、「Y」は「A」に該当する場合もしない場合もある、ということで共通するものとされている。実際、実例の中には、「YもAである」という前提を必要とせず、「X」と「Y」の差が「大」である場合に、「よほど」と「ずっと」が併用されるものがある。

(110) 貨物帆船ピルグリム号の船長が胴慾な悪玉で航海の費用をすこしでも安くあげようと、乗組員の食事の質と量をぐんとさげる、そこで船内に次々と壊血病患者や餓死者が出るというのが設定だが、餓死者も結構みんな肥っているのでどうもなじめない。餓死者を観ているお客のほうがよっぽど痩せていて、ずっと可哀想だった。(井上ひさし「下駄の上の卵」)

しかし、「ずっと」はまた、「Y」が「A」であるか否かにはあまり関わらず、直接知覚されたり事実であったりする客観的に明確な状態をあらわす場合にも広く用いられ、単に「X」とある基準「Y」との程度の差が「大」であることをあらわすが、「よほど」をこのような比較に入れるとやや大げさな感じがしてしまう。

(111) 僕の背たけよりもずっと高く繁茂した巨大な野いちごの茂みがあった。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)(例(106)再掲)

? 僕の背たけよりも{よほど／よっぽど}高く繁茂した巨大な野いちごの茂みがあった。

(112) マクドナルドは、山本よりずっと年上であったが、態度や話しぶりはまことに懇切で、山本とは意気投合するところさえあるように見えたと、榎本重治は語っている。(阿川弘之「山本五十六」)(例(107)再掲)

? マクドナルドは、山本より{よほど／よっぽど}年上であったが、……

一方、「よほど」には、「YはAではない」、という前提のもとで「Xの方が」と一方が選択的に「A」だと評価される例が目立ち、現代では「よほど」の強調形とされることが多い「よっぽど」の形⁴¹であられる場合にその傾向が強い。次の例では、点線部分から「YはAではない」ということがわかる。

(113) もっとも太郎自身は、太りすぎの女みたいに身のしまらないアーモンドが嫌いで、それくらいならむしろ小粒のピーナッツの方を、よほどおいしいと思う。(曾野綾子「太郎物語」)

(114) 「お母さん、こんなところ退屈だよ。どこにもぼくが暴れられるところがないんだもの。家の前の空き地の方が、よっぽど面白いや」これは、高校時代からの友人が子どもたちを有名な遊園地に連れて行った時、彼女の長男・光太郎君が言ったせりふです。(毎日新聞 95.07.20)

(115) 「鎧を脱がしてしまえば女は怖くない」「ばかね、鎧を脱いだ女ほど、質の悪いものはないのよ。もう戦う気がないんだから、一生、男にのしかかって生きようとする。……それがどれだけ男の負担になるのか。怖いわよ、だから意地を張って鎧を着たままの女の方が、本当はよっぽどやさしいし、飽きがこないし、面倒じゃないし」(森浩美「家族の言い訳」)

(116) 手水鉢のあるくぐりの外へ出て、「ダメよ。バカねえ」「だって、お姐さん。いつまでも、話しているおくさんたちの方が悪いぜ。よもやにひかれて、眠れやしねえ」「そりゃア、話したい人が、話をするんなら差支えないでしょう。聞き耳立てる人の方がよっ

⁴¹ 「よほど」と「よっぽど」の形態の違いについては、第3章、3. 3で触れた。

これらの例では、2つの比較対象「X」と「Y」は、「YがAでない」のに対して「X(の方)がAである」ことが対照的に述べられており、発話者にとってはその差は〈過度に「大」〉であると意識されている。このような対照的な比較に「よほど」はなじみやすく、「Y」が非「A」である場合はもちろん、たとえば次の(117)のように、「Y(孝三郎の威圧的な言い方)」も「X(孝三郎に母屋のものがいそいで密告したこと)」も「A(気に入らない)」である場合でも、やはり意識としてその「気に入らない」程度は圧倒的に「X」の方が大きく、「X」と「Y」との差は「大」であるととらえられているといえるだろう。

- (117) 貞乃は、格別気にもとめずに電話に出た。いきなり孝三郎の声が流れてきた。「おいおい、まさかおれの丹精した花を切ろうというつもりじゃないだろうな。一本も截ることはならんぞ」「はいはい」貞乃は電話をきくと、たちまち冷い不機嫌な顔になった。孝三郎の威圧的な言い方も気に入らないが、孝三郎に母屋の者がいそいで密告したことのほうが、よほど気に入らない。(藤原審爾「さきに愛ありて」)

4. 3. 4 「よほど」による比較評価

4. 3. 2で、「よほど」が用いられる比較における、比較対象のあらわれ方と文の叙法性について、4. 3. 3では共起する状態性をもつ語の特徴についてとりあげ、それぞれの観点から「よほど」の用いられる比較について述べてきた。これらいくつかの観点から指摘してきたことは相互に関わりあいながら「よほど」の本用法を特徴づけている。

まず、先行研究の渡辺実(1987)で、「XはYよりよほどAだ」とモデル化されている本用法であるが、比較対象のあらわれ方をみると、「X」が文の中に明示される割合は高いものの、「Xは」の形であらわれる例は264例中わずか25例(9.5%)にすぎず、「X」が文脈から明らかであるなどなんらかの理由で明示されない場合(47例)をのぞくと、「Xの方が」の形(184例)がそのほとんどを占める。これは、「ずっと」や「はるかに」と比較しても「よほど」に顕著な傾向であり、形式に忠実にモデル化するとすれば「YよりXの方がよほどAだ」の方がより実態を反映していると思われる。そして、このことは、「よほど」の用いられる比較が、「X」を主題としてその状態が「Y」と比べてどうであることを述べるというよりは、2つの事柄「X」と「Y」を比較したうえで、「X」をより積極的に「Aだ」とみとめるものであることを示唆する。「A」にたつ語が、より主観的な基準によって定められる「いい」「ましだ」等を代表とする評価的な語に偏り、それが文レベルでみると平叙文の終止述語の位置で、かつ、断定的に述べる言い切りの形であるのが圧倒的多数を占めることから、「よほど」は比較を通して一方を積極的に選択・評価する判断に用いられや

すいといえる。

さらに、「よほど」には、「Y より X の方がよほど A だ」という関係において、「Y は A ではない」という前提のもとで「X」を選択して「A だ」と評価する例が目立ち、特に「よっぽど」の形であらわれる場合にその傾向が強いことは先にも述べた。したがって、発話者の意識の面では2つのことから「X」と「Y」の程度差は〈過度に「大」〉であり、その評価判断自体が「Y でなく Xこそが A である」「Y は A ではない。X の方がまだ A だ」というような積極的な主張として述べられるものであるといえるのではないだろうか。

このことは、「よほど」が用いられる比較を文脈の中でみるとより明確である。「よほど」が用いられる比較判断の内容自体が、先行文脈（たとえば、常識(118)(119)、相手の主張(120)(121)、現状(122)(123)など）に反するものであり、それがあえて積極的に主張されるものが多い。

(118) T V 東京の「T V チャンピオン」が面白い。毎週さまざまな人々が登場してチャンピオンを目指して大奮闘。よくぞここまで、と感心するマニア度。「インスタントラーメン通」「少女マンガ通」など、いろんなものに精通している人がある。下手なタレントよりオタクなシロウトの方が、よっぽど見ごたえがある。(毎日新聞 95.02.20)

(119)「心配しないでいいわよ。どうも厄介なことになりそうと思ったら、お医者を頼むから」「そうかい」それでもう少し様子を見ることになったのだが、看護婦の霧子より、まきの診断のほうがよほど正確だった。(藤原審爾「さきに愛ありて」)

(120)「大変なことになる前に、地頭所の役人に来てもらって取締りを強化したらどうか……役人たちの経費はわれわれが負担すればいい」という意見が多かった。それに対して忠敬は、強い口調で反論した。「冗談ではない。役人が、こんなときに何の役にも立たないのは、江戸を見たってはっきりしている。役人に金を出すぐらいなら、その分村民たちに与えたほうがよっぽどいい。……」(佐藤嘉尚「伊能忠敬を歩いた」)

(121) 白い歯でがりがりと噛みながら、「ぶじに生きて戻れば、今夜、そなたを抱いてやる」「不吉なことを」「ばかめ。人の世はもともと、不吉なことだらけだ」「変わったことをおおせられますこと」「なんの、あたりまえの事をいっている。人の世が吉であれかしと祈っている世間の者こそよっぽど変人だ」(司馬遼太郎「国盗り物語」)

(122) —夢だっていいじゃないか。僕はそういうふうにいるんだ。僕は毎日勤めに行って、俗なイタリア語の手紙かなんか書いてるけど、それよりは下宿へ帰ってペトラル

カでも読んでの方がよっぽど本当の僕だ。(福永武彦「草の花」)

- (123) 不思議なのはリポートが手書きのみということだ。私が卒業した大学では、リポートはワープロでの清書が望ましいとなっていた。学生の汚い癖字をいくつも読まされるよりは、きれいな清書を読みたいと思うのが当然だと思うのだが。リポートを書く側としても、下書きと清書の区別のいらないワープロ原稿の方がよほど時間短縮になる。(毎日新聞 95.06.01)

つまり、世間一般の常識、他の主張、今ある現状など何らかの先行文脈に対して否定的な内容である2つのことがらの比較関係を主張するのに用いられる「よほど」には、やはり〈異常性〉〈意外性〉という評価が伴っており、2つのことがらの程度差も意識の上で〈過度に「大」〉であると感じられるのだろう。ここでは〈過度に「大」〉であるという程度的な意味よりも、〈異常性〉〈意外性〉といった評価が前面に出ているというべきかもしれない。「よほど」が用いられる比較の特徴としてみてきた比較対象のあらわれ方、文の叙法性、共起する状態性をもつ語の性格も、この評価性と程度性とは反映され、制約や偏りが生じているものと思われる。

4. 3. 5 用法のまとめ

《比較評価判断用法》について、以上述べてきたことをまとめる。

次の構造で示される《比較評価判断用法》には以下のような特徴がある。

Y (なんか・など) より	X (の) ほうが	よほど	(主観的・評価的形容詞)。
[比較対象]	[比較対象]		無標形式の終止述語
			[評価判断]

◆構文の形式的特徴

- ・比較対象が表示される（「Y より X の方がよほど～だ」という関係において特に X が「～の方が」という形式で表示される割合が高い）。
- ・「よほど」を伴う文は平叙文に限られ、特に無標の言い切りの形で述べられる終止述語が典型。

⇒一方を積極的に選択して評価する比較判断に用いられる

※比較判断の内容（X と Y の関係）自体が先行文脈に反するもので、それをあえて主張する状況で用いられやすい。

◆状態性をもつ語

- ・形容詞を中心に、状態動詞、動詞のテイル形、名詞。
- ・意味の面で【主観的・評価的なもの】に偏る。

「よほど」は、一般常識や相手の主張といった先行文脈に対して、比較対象である2つの事態に対する評価がその先行文脈に反する内容である評価判断に用いられる。つまり、比較対象という2つの事態の関係において用いられるという特徴がみとめられる。このような比較評価判断の中で、比較対象であるXとYの差は発話者の意識においては大きく、「よほど」は程度的な意味としては比較対象XとYの差が〈過度に「大」〉という程度をあらわすが、2つの比較対象である事態の関係が一般常識や相手の主張に反する点で〈意外性〉という評価を伴う。

4. 4 《必要判断用法》

4. 4. 1 用法の構造

4. 4では、次のようにモデル化される《必要判断用法》について述べる。

・ よほど 意志動詞	ないと、	{ 無意志的な事態（意味的にマイナス事態）。 評価 {だめだ・困る}
	なければ、	
・	するには、 よほど 意志動詞	{ないと／なければ} いけない。 必要がある。

例1) 六甲縦走路はまだ完全ではない。 よほど調査してないと道に迷うおそれがある。

(孤高の人)

例2) 北海道も月に年に開発されつづけるので 人家の见えないところまでいくにはよほど遠走りしなければならぬが、…… (新しい天体)

「よほど」の用いられる構文特徴の中で、④否定条件節と共起するもの、について検討するが、この形式的な特徴は、否定条件の形式の中でも「ないと」「なければ」をとりやすいといった形式の偏りはあるものの、本用法と典型としては区別される4. 5の《例外提示用法》と重なりをもつ。《必要判断用法》と《例外提示用法》とは、否定条件の形式、「よほど」がかかる状態性をもつ語のタイプ、それによってあらわされる従属節の内容と主節の内容との関係を総合して、用法の構造の典型としては4. 4. 1、4. 5. 1でそれぞれ提示した次のようなモデルで区別されると本稿ではみとめ、それぞれの用法の拡張の方向も異なるものであることを示す。

《必要判断用法》

- [illegible]

《例外提示用法》

- ・ **よほど** (形容詞) + 名詞
無意志動詞
ない限り、
なければ
以外は
傾向・習慣・事実 (意味的に中立な事態)。
評価 {大丈夫だ・心配することはない}。
- ・ のは、 **よほど** (形容詞) + 名詞 に限られる。

このように、一次的な指標とした形式的な特徴が1つの用法にまとまりやすい4. 2《推定判断用法》、4. 3《比較評価判断用法》、後に述べる4. 6《意志不実行用法》とはやや事情が異なるため、4. 4《必要判断用法》については次のように記述をすすめる。

4. 4. 2で、否定条件の形式と共起する用例すべて（《例外提示用法》として扱われるものも含め）についてその形式と分布を示したうえで、《必要判断用法》においてあらわれやすい形式および文構造を確認する。4. 4. 3では、主節の内容を整理し、従属節の事態と主節の事態の関係を明らかにし、本用法とみなしうるその他の文構造にも言及する。4. 4. 4では「よほど」が結びつく状態性をもつ語を提示し、その特徴について述べる。

4. 4. 2 構文の形式的特徴 ④否定条件節との共起

4. 4. 2. 1 共起する否定条件の形式

現代日本語の条件をあらわす形式には「と」「ば」「たら」「なら」をはじめ、いくつかの形式があるが、「よほど」と共起する場合はその多くが否定の形をとるものである。それらの否定条件の形式を調べ、形式ごとの用例数を次の表 14 に示す。表中に※で（ ）に示した形式とその（ ）内の用例数は、それぞれの否定条件形式のうち、「ないといけない」「なければならない」のように、ひとまとまりとして文のモダリティをあらわすとされる分析的な形式になっているものが何例あるかを示している。（したがって、たとえば「ないといけない」の 3 例は「～ないと」62 例に含まれる。）

表 14 : 「よほど」と共起する否定条件の形式と用例数

否定条件の形式	用例数	%
～ないと	62	37.8
(※ないといけない)	(3)	
～ない限り	46	28.0
～なければ	36	22.0
(※なければならぬ)	(11)	
～なくては	13	7.9
(※なくてはいけない)	(4)	
～なかったら	2	1.2
～なきゃ	2	1.2
(※なきゃいけない)	(1)	
～(せ)にや	2	1.2
(※(せ)にやいかん)	(1)	
～ないことには	1	0.6
計	164	100
	(20)	(11.6)

ここでは、否定条件の形式をとる用例数の全体を提示するため、ひとまず《必要判断用法》と《例外提示用法》とを区別せずにあげた。「ないと」「ない限り」「なければ」に用例数が目立って多く、そのうち、「ないと」「なければ」は、条件をあらわす代表的な形式「と」「ば」「たら」「なら」の中でも、より一般的な条件をあらわすとされる形式であること、「ないといけない」「なければならぬ」など〈必要～義務〉をあらわす分析的な形式を形成するものであることが指摘される。本用法《必要判断用法》の中心となるのは、分析的な形式を含めそれらを形成する否定条件の形式「ないと」「なければ」「なくては」である。

4. 4. 2. 2 否定条件形式の検討

表 14 であげた否定条件節の形式のうち、「ないといけない」「なければならぬ」などの分析的な形式を除くと、共起する用例数は、「ないと (59 例)」「ない限り (46 例)」「なければ (25 例)」「なくては (9 例)」「なかったら (2 例)」「なきゃ (1 例)」「せにや (1 例)」「ないことには (1 例)」である。このうち、用例数の多い「ないと」「ない限り」「なければ」について、否定条件に前接する語と主節の内容を検討したところ、次のような傾向がみられた。

「ないと」と共起する用例には、否定条件に前接する語に動詞 42 例、形容詞 6 例、名詞 10 例と圧倒的に動詞が多く、中でも意志動詞が多くを占める。主節は意味的にマイナスの事態に偏り、評価をあらわす語の場合も同様、「だめだ」「困る」などの意味的にマイ

ナス評価をもつものである。

一方、「ない限り」と共起する用例には、前接する語に名詞 16 例、意志動詞 11 例、無意志動詞 9 例、形容詞 8 例、副詞 2 例と、それほど偏りなく意志動詞以外もあらわれる。主節も意味的に中立的なものが多く、評価をあらわす語の場合も「大丈夫だ」「心配することはない」など意味的にマイナスの評価ではなくむしろプラスの評価をもつものである。（「なければ」と共起する例はどちらにもまたがる。）

このことから、「ないと」「ない限り」という個別の形式がそれぞれにとりやすい傾向にもとづいて、次の 2 つのタイプを対極にある典型としてとりだすことができる。

A: よほど 意志動詞 + ないと、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{意味的にマイナスの事態} \\ \text{評価（だめだ／困る）} \end{array} \right\}$

B: よほど (形容詞)+名詞 + ない限り、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{意味的に中立的な事態} \\ \text{評価(大丈夫だ／心配することはない)} \end{array} \right\}$
無意志動詞

A のタイプが 4. 4 で述べる《必要判断用法》の典型パターンである。(B のタイプについては 4. 5 《例外提示用法》で詳しく触れる。)

以上は否定条件の形式を手掛かりに、見出される傾向を示したものであるが、この 2 つのタイプは否定条件の形式のみによって区別できるものではない。《必要判断用法》のパターンである A について、4. 4. 3 で従属節の内容と主節の内容との関係、4. 4. 4 では従属節の否定条件形式に前接する語についてさらに詳しく述べる。

4. 4. 3 必要性をあらわす構造

4. 4. 3. 1 従属節の内容と主節の内容の関係

《必要判断用法》の「よほど」が否定条件節と共起する場合、その複文の主節の内容は望ましくないマイナス評価の事態であるという特徴がある。形式にもとづいて次のように整理される。それぞれ該当例をあげる。

a) 望ましい事態の非実現：無意志動詞の否定形

「～づらい」「～にくい」「～がたい」

(124) 小野寺さんは「暦だけでなく、農民の暮らし自体も変わった。みそやしょうゆの自給も減り、自然から離れて季節感がなくなっている。世界中のおいしいものもどんどん入るし、よほど努力しないともち文化は残らないだろう」と話す。(毎日新聞 95.12.25)

(125) この工場では、天井を動くクレーンの音と回転する機械の響きで、余程、大きな声を
ださないと話がきこえない。(遠藤周作「女の一生」)

(126) もともと企業人は、現在の境遇に自分をなじませ、その境遇を利用して成長するという
生き方をしなければ生きていけない。しかし、現在のように企業の環境が主客におい
て変化はなはだしい時期には、よほど個人の側で意識的に生き方を選択しないと生きづ
らいのである。(森清「選び取る「停年」」)

b) 望ましい事態の不可能：可能動詞の否定形

「～することができない」

(127) 当時、家に風呂のある所は少なく、風呂があっても薪が貴重品なので、ほとんどの人
が銭湯へ行った。だから、銭湯はいつでも大混雑なのである。お湯だって、よほど早く
に行かなければきれいなものには入れない。(生島治郎「片翼だけの青春」)

(128) 文楽内部の相互扶助を目的とすると最初に声明したのだし、その後もその努力で今日
まで続けてきたものではなかったか。赤字の中で、ともかく孤塁を守るには、よほど強
い結果がなくては文楽を明日に伝えることはできない。(有吉佐和子「人形浄瑠璃」)

c) 望ましくない事態

語彙的な手段によってあらわされるため十分な形式化はあたえられないが、次のような
表現をとりやすい。

～してしまう／～するおそれがある／～する危険がある／～することになりかねな
い／～するしかなくなる

(129) 同じげたでも、後ろの歯の手前で鼻緒を結ぶのが関東、後ろで結ぶのが関西流と違
いがあったが、今ではほとんど関西流。足が大きくなったのが理由のようだ。「足の大き
さが同じでも、今の人は、よほどゆるくすぎないと指の皮をむいてしまう。(毎日新聞
95.06.21)

(130) 六甲縦走路はまだ完全ではない。よほど調査してないと道に迷うおそれがある。(新
田次郎「孤高の人」)

(131) このマルメでは弱者の中の弱者は施設を十分に利用することができなくて、いわば弱
者のなかの“優者”のみが利用しているということである。物中心の福祉サービスはよほ
ど気をつけないとこういう結果を招くことになりかねない。(吉田寿三郎「高齢化社会」)

(132)「あなたねえ、この会社を受けたいっていうけど、どんなところか分かっとなのかねえ。エッ!」。大きな声が職安に響く。声の主は地元職業安定所の男性職員である。面接を希望し、彼に紹介状を書いていただこうと、おずおず依頼しようものなら、よほど気を確かに、そして強く持っていなければ、赤面し、恐縮してしまい、あげくにその希望を引っこめるしかなくなる。(毎日新聞 95.02.28)

このように、主節の事態が「望ましい事態の非実現」「望ましい事態の不可能」「望ましくない事態」というマイナス評価を帯びたものである場合、その従属節である否定条件をとってあらわれる事態をみると、多くは従属節述語（網掛け部分）が意志動詞による意志的な行為である（(124)～(127)、(129)～(132)）が、次のように、無意志動詞(133)、形容詞(134)（否定形容詞の例は上の(128)）、名詞(135)によるものも少数ある。また、否定条件の形式自体は「ないと」「なければ」など、分析的形式（「ないといけない」「なければならぬ」）を形成しうるものが主であった。

(133) 司馬 似たような人が自治体の知事や市長さんあたりにいても、よかりそうなものなんだけどな。度胸が要るからな。度胸というのは、やくざのような、ああいうものじゃないですね。人間がよっぽど透きとおらなければ、出来あがらないものですから、ほぼ無理かな。(司馬遼太郎対談集「日本語と日本人」)

(134) 捜査本部が解散されると、あとは任意捜査となるが、ともすると、事件捜査は半分打ち切られた形になる。刑事が個人的によほど熱心でないと、捜査の継続はむずかしいのだ。(松本清張「砂の器」)

(135)「藤吉郎、おん前に」「工夫がついたか」 と、信長は、唐突にいった。信長はほとんど前置きをいわない。ときに言語の主格をさえはずして、藪から棒にいう。よほど機敏な頭脳とかんをもった男でなければ、この男の家来にはなれない。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

以上、主節がマイナス評価を帯びた事態である場合について具体的にみてきたが、これらの従属節の内容と主節の内容との関係は、従属節の述語の種類によって次のようにとらえることができる。

(従属節の述語)	従属節 (否定条件節)	主節
意志動詞 (※多い)	… 求められる《手段》の欠如	— { 望まれる事態の {非実現／不可能}
無意志動詞		
形容詞	… 求められる《状況～資質》の欠如	— 望ましくない事態の生起
名詞		

主節の内容が「望まれる事態の非実現／不可能」「望ましくない事態の生起」というマイナス評価の事態である場合、その従属節にあたる否定条件節にあらわれる内容は、それらを望ましい状態にする（非実現を実現し、不可能を可能とし、望ましくない事態を回避する）ために求められる事態であり、そこには必要性が読み込まれることになる。また、求められる事態とは、否定条件節の述語の種類によって、意志動詞の場合は《手段》、無意志動詞、形容詞、名詞の場合は《状況～資質》である。用例の中では意志動詞が多く、より典型的だと思われる。このような必要性を帯びる事態を提示する必要判断に用いられる用法を《必要判断用法》とする。

4. 4. 3. 2 必要～当為をあらわす形式

「よほど」が否定条件節で用いられる場合についてみてきたが、4. 4. 2であげた「よほど」と共起する否定条件の形式の中には、「ないといけない」「なければならない」など、否定条件形式をもとに形成された分析的形式をとるものが 20 例見られた。これらは、前接する述語の種類によって意味が分化すると思われるが、いずれも広い意味では必要性をあらわす形式である⁴²。

(136) 北海道も月に年に開発されつづけるので人家の见えないところまでいくにはよほど遠走りしなければならないが、おそらくこの原野には農薬も、廃液もあるまいから、雪のしたを流れる水は渦の縞目だけしか持っていない《水》そのものであるはずだと思わせられる。(開高健「新しい天体」)

(137) 田辺 少なくとも曲がったことはしないね、自分がちょっとでも得をしようといううなことに含羞があるわけね。そんないい女に対抗するには、男もよっぽどよくないといけないからつらいな。(田辺聖子ほか「おせいカモカの対談集」)

⁴² 工藤浩(1989)では「デなければならない」は「必然」、「しなければならない」は「義務」の叙法性をあらわす形式であるとされている。

(136)(137)において、「よほど」は「なければならない」「ないといけない」という必要性をあらわす分析的形式と共起しており、前にはその〈目的〉(点線部分)が示されるが、〈目的—必要〉というこの関係は、それぞれ次のように否定条件をとる従属節と主節であらわされる関係におきかえることができる。

(136)' 人家の见えないところまでいくにはよほど遠走りしなければならない。

→(136)" よほど遠走りしなければ、人家の见えないところまでいくことはできない。

(137)' そんないい女に対抗するには、男もよっぽどよくないといけない。

→(137)" 男もよっぽどよくないと、そんないい女には対抗できない。

用例の中には、主節が「無理だ(4例)／だめだ(3例)／困る(3例)」のように、マイナス評価そのものであり、その事態性が薄れているものがあるが、その中で、〈目的〉(点線部分)をとる次のような例が、構文的にも上の(136)' と(136)"、(137)' と(137)" をつなぐものとしてある。

(138) こういう環境にいるナースたちは医療そのものには意欲もなく、なにもなければこれ幸いといった病院であった。もっとも、こういった老人病院で、やる気がでるような雰囲気にするには、よほど院長が先頭切っていかなくては無理というものである。(米山公啓「午前3時の医者ものがたり」)

このように、必要性という観点から、「ないといけない」「なければならない」等の分析的形式をとるものと、主に主節がマイナス評価の事態であり、従属節でそれを回避するための《手段》～《状況》《資質》が示されるものとは1つの用法としてまとめられる。

さらに、本用法の主たる形式的特徴としてあげた否定条件節との共起という特徴はもたないが、次のように「～する必要がある／～が必要だ」(5例)、「～がいる(要る)」(2例)という語彙的な形式、必要性に準ずる「～すべきである」(1例)「～してほしい」(1例)といった形式も、文構造の中に必要な動作の理由や目的があらわされ、「《必要の意味構造》」(奥田靖雄(1999))が形成されているものとして、同用法に位置づけられる。また、このような例の存在は、否定条件節をとる1つのタイプとして必要性をとりだすことの妥当性を示すものと思われる。

(139) 義竜の内部は平衡をうしなっている。その崩れをかりうじて食いとめて自分のなかに別な統一を誕生させるにはよほど電磁性のつよい言葉をまさぐる必要があった。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

(140)「源氏物語」などでは、いちばん大切な形容詞が省かれているが、そこを頭の中で補って読む手間がある。次のような文例で()の中を補うことができるようになるには、よほど年季がいる。御年のほどよりは、おそろしきまで（賢ク）見えさせ給ふ（金田一春彦「日本人の言語表現」）

(141) ナポリっ子と待ち合せをする時は、よほど腰をすえて、イライラしないように、はじめから心がけておくべきである。そうでもない、ヒステリーになる。（塩野七生「イタリアからの手紙」）

(142) 言うまでもない事だが、三日間にわたる闘争は、成功すれば非常に強力だが、途中で崩れたら大きな損失になるからね。そこは一日だけの闘争計画とちがうところだ。もし失敗したら、組合の実力の貧弱さをすっかり露出してしまふからね。よほど慎重にやっ
てほしいな。（石川達三「人間の壁」）

以上、4. 4. 3. 1で、「よほど」が用いられる従属節の内容と主節の内容との関係において、従属節には主に意志動詞による意志的な行為が否定条件の形（「ないと」「なければ」など、分析的形式を形成しうるものを主とする）で提示され、主節にはマイナス評価の事態をとるという条件のもとで、否定条件節にあらわれる事態は必要性を伴うことを示した。4. 4. 3. 2では、「ないといけない」「なければならない」といった分析的形式と共起するものが必要性をあらわし、構造的にも〈否定条件—（マイナス事態の）帰結〉の関係と重なりがあることを述べた。それらに加え、その他必要性が想定される形式をとる場合も含めて《必要判断用法》としてまとめられることを示した。

「よほど」の使用はこれら必要性という点で共通する構造をとり、同じ条件形式であっても〈肯定条件—帰結〉という構造をとらない⁴³。このことは、「よほど」が「よほど～すれば…できる」という単に可能性を述べる場合に用いられるのではなく、「よほど～しないと…できない」という必要性が生じるような、現状に対する危機的、否定的な認識が前提としてある場合に用いられることを示唆する。

4. 4. 4 状態性をもつ語との共起

4. 4. 4. 1 「よほど」が結びつく語

本用法における「よほど」は、否定条件節、あるいは「ないといけない」「なければならない」などをはじめとする必要性をあらわす形式と共起して必要判断において

⁴³ 対象とした資料には「よほど」が肯定条件と共起する例が8例みられた。これらについては構文的にさらに限定されるなどの特徴があり、本稿では4. 5の《例外提示用法》の用法の広がり周辺のものとして触れる。

用いられるものであることを述べたが、同様の構文環境にあっても、次のように状態性をもつ語を伴わない場合は「よほど」を用いることができない。

- (143) この二、三百年、西欧的科学方式の力づくで支配されてきた有色人種はとかく欧米白人に一目おく癖がついているが、もうそんなへりくだりは止めないと共に地獄におちか
ねない。(吉田寿三郎「高齢化社会」)

→そんなへりくだりは *よほど 止めないと共に地獄におちかねない。

- (144) では、気体はどうか。これは上下左右に仕切りのあるものでないと、保存できない。
気体の食物はないけれど、ビールや炭酸飲料のように二酸化炭素の発生する飲物は、栓
のある容器でないと保存できない。(米山正信「化学とんち問答」)

→二酸化炭素の発生する飲物は、*よほど 栓のある容器でないと保存できない。

つまり、「よほど」には、必要性をもつ事態である、否定条件形式に前接する部分の状態性をもつ語と結びつき、その状態性概念の程度を限定する面があるといえる。なお、否定条件節にあらわれる事態は先にも述べたとおり意志動詞による意志的な行為が典型であり、それらを中心にみる。

4. 4. 4. 2 状態性をもつ語の特徴

先にみた4. 2《推定判断用法》、4. 3《比較評価判断用法》において「よほど」が程度を限定する状態性をもつ語は形容詞を中心とするものであったのに対し、否定条件節や必要をあらわす形式において用いられる本用法においては、状态的な修飾をうける、あるいはそれ自体が状態性を含む、意志動詞に偏る傾向がある。以下、代表的な語例をあげる。特に量的に目立ったものには()で数を示す。

【成果に関わる意志的行為】

{頑張る(3) 踏ん張る 努力する 調査する 注意する 一心になる 遠走りする しっかりする(6) きりっとする 気をつける(6) その気にいる すばやく動く 早く行く 慎重に考える 注意深く確かめる 注意深く見守る 意識的に選択する 丁寧にする しっかり躡ける 熱心に口説く 考えてつくる かわいがってやる (ボールを) きっちり打つ 巧妙に身を処す 大きな声を出す 巧みな対応をする 信頼関係を築く 気持ちを落ち着かせる 生産性をアップする}

【成果に関わる意志的行為】というのは意志動詞によるものだが、状態性と無関係ではなく、動詞が単独であらわれる場合には「頑張る」「踏ん張る」「努力する」など個々の具

体的な行為を総合的にあらわすようなもので、時間や頻度、熱心さなどの量や程度の幅を読み込みやすい要素をもつものに限られる。また、多くは「すばやく動く」「慎重に考える」「注意深く確かめる」など何らかの状態的な修飾をうけるものであり、やはり状態性にかかるものと解釈される。

それに加え、複数の用例が見られた「頑張る」「しっかりする」「気をつける」をはじめ、何らかの目的や成果への意図が感じられやすい行為をあらわす意志動詞であるという特徴がみとめられる。このような意味の偏りがみられるのは、「よほど」が程度を限定する状態性をもつ語を伴う事態というのが、望ましくない事態を回避する、あるいは望ましい事態を目的とするために必要とされるものであり、そこにはそれなりの成果を想定した【意志的行為】があらわれやすいためであると思われる。

4. 4. 4. 3 「よほど」の程度性

《必要判断用法》において、「よほど」は、必要性をもつ事態である、否定条件の形式（「ないと」（「なければ」）や「ないといけない」「なければならない」などの分析的形式に前接する部分の状態性をもつ語と結びつき、その状態性概念の程度をあらわす。

- (145) 足の大きさが同じでも、今の人は、よほどゆるくすぎないと指の皮をむいてしまう。
(毎日新聞'95.06.21) (例(129)再掲)

本用法の「よほど」が否定条件形式や必要をあらわす形式において用いられ、肯定条件で用いられる例が極めて少数であることは先にも触れたが、このことから「よほど」は現状に対して否定的な状況での必要判断に用いられるといえる。その必要の程度は通常程度では十分でなく、「よほど」は普通に想定される程度をはるかに超える程度に「大」である、すなわち〈過度に「大」〉であることをあらわし、そこには通常程度でない＝〈異常性〉といった評価を伴う。

「よほど」と同様、共起する形式の典型であった「～ないと」が同様に必要性を伴って用いられる場合を調べると、程度をあらわす副詞がそれほど自由に多用されるわけではないようだが、たとえば次のような副詞があらわれ得る。

- (146) 「おじいさま」と太った孫娘が横から口を出した。「少しお話を急がないと間に合わないんじゃないかしら？」(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

- (147) この日は鬼やらいの日である。三の宮が元気よく、「鬼やらいだ、鬼は外、福は内。もっと大きな音をたてないとだめだよ……」と走り廻っていらっしやる。(田

辺聖子「新源氏物語」)

(148) 森川は酒をのむとそのハッタリが強くなった。しかし業界紙という闇の猛者たちがうごめく世界ではハッタリや野心というものが多少強くないと周囲に負けてしまふ、というようなところがあったので、森川のそうした強気は我々若手にはかえって逞しく映った。(椎名誠「新橋烏森口青春篇」)

(149) 下りるときはまっ暗で何もわからないままに下りたから怖くはなかったけれど、一段一段と上にのぼっていくとその高さが想像できて顔やわきの下に冷や汗がにじんだ。ビルでいえば三、四階ぶんくらいの高さがあるし、おまけにアルミニウムの梯子は湿気でつるつると足が滑るから、相当に用心をして上らないと大変なことになる。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

(146)の「少し」は「もう少し」の意で、(147)の「もっと」と同様に、現状よりその程度が高くなることをあらわすもので、「よほど」に比べると、より個別一回的な場面に即した必要判断にあらわれやすい。他にも(148)の「多少」、(149)の「相当に」など、必要の程度の度合いによって異なる副詞が用いられるが、これらの副詞があらわす「小」～「大」さまざまな程度の中で、「よほど」は必要とされる状態の程度が極めて高く、通常程度をはるかに超える程度に「大」であることをあらわしている。

4. 4. 5 用法のまとめ

《必要判断用法》について、以上述べてきたことをまとめる。

次の構造で示される《必要判断用法》には以下のような特徴がある。

・ よほど	意志動詞	+	ないと、 なければ、	{ 意味的にマイナスの事態 評価 { 駄目だ・困る }
			否定条件形式	
[必要性のある行為]		(の欠如)	[望ましくない事態の生起]	
・	(望む事態) するには、	よほど	意志動詞	{ないと／なければ} いけない。
				必要がある。
				必要形式
[目的]			[行為の必要性]	

◆構文の形式的特徴

- ・ 主に意志動詞を伴う否定条件形式(「ないと」「なければ」と共起し、主節はマイナスの事態・マイナス評価をとる。

- ・「ないといけない」「なければならない」に代表される、必要をあらわす形式と共起する。

⇒必要判断に用いられる

◆状態性をもつ語

- ・状態的な修飾をうける、あるいはそれ自体が状態性を含む意志動詞。
- ・意味の面で【成果に関わる意志的行為】に偏る。

「よほど」は、〈否定条件—マイナス事態の帰結〉、あるいは〈目的—必要〉という構造の中で2つの事態の関係を前提として、望ましくない事態を回避するために、あるいは目的となる事態の実現に必要とされる意志的行為を提示する必要判断に用いられる。現状に対して否定的な状況で、「よほど」は程度的な意味としては普通に想定される程度を超えて〈過度に「大」〉であることをあらわし、そこには通常程度でない＝〈異常性〉といった評価を伴う。

4. 5 《例外提示用法》

4. 5. 1 用法の構造

4. 5では、次のようにモデル化される《例外提示用法》について述べる。

<ul style="list-style-type: none"> ・ よほど (形容詞) + 名詞 無意志動詞 	<ul style="list-style-type: none"> ない限り、 なければ 以外は 	<ul style="list-style-type: none"> 傾向・習慣・事実 (意味的に中立な事態)。 評価 {大丈夫だ・心配することはない}。
<ul style="list-style-type: none"> ・ (傾向・習慣・事実) のは、 	<ul style="list-style-type: none"> よほど 	<ul style="list-style-type: none"> (形容詞) + 名詞 に限られる。

例1) 実際、イギリスなどでは、よほど田舎っぺか下層出身者でない限り、ほとんど箸の使い方を知っている。(適応の条件)

例2) 小包の場合は知事個人あてのものが多いため、よほど見た目に不審なもの以外は、直接知事室に運ばれる。(毎日新聞 95.05.17)

例3) 箸の使い方を知らないのは、よほど田舎っぺか下層出身者に限られる。

先にも述べたとおり、4. 5 《例外提示用法》として述べる本用法も、4. 4の《必要判断用法》と同様、「よほど」の用いられる構文特徴の中で④否定条件節と共起するという形式的特徴に関わる。否定条件の形式は「ない限り」「なければ」をとりやすいという偏りがあるが、この否定条件の形式、「よほど」がかかる状態性をもつ語のタイプ、それによってあらわされる従属節の内容と主節の内容との関係を総合して、用法の構造の典

型をとらえた結果を上にあげたモデルとして提示する。

以下、4. 5. 2で共起する否定条件形式の傾向について述べ、4. 5. 3では主節の内容を整理したうえで、従属節の事態と主節の事態の関係を明らかにし、本用法とみなしうその他の構造について述べる。4. 5. 4では本用法で「よほど」が結びつく状態性をもつ語を提示し、その特徴をみる。さらに、4. 5. 5では《例外提示用法》からの拡張として位置づけられる例をもとに用法の広がりについても考察する。

4. 5. 2 構文の形式的特徴 ④否定条件節との共起

4. 5. 2. 1 共起する否定条件の形式

「よほど」と共起する否定条件の形式の用例数の全体は4. 4. 2. 1の表14で示したとおりである。このうち、「ないといけない」「なければならない」など〈必要～義務〉をあらわす分析的な形式と、それらを形成する否定条件の形式は主に《必要判断用法》に偏ることを述べた。一方で、「ない限り」という形式があり、164例中46例(28.0%)を占めるが、この形式が本用法《例外提示用法》に偏り、典型とみなされる形式である。

4. 5. 2. 2 否定条件形式の検討

先に、「よほど」と共起する用例数の多い代表的な形式「ないと」「ない限り」「なければ」について否定条件に前接する語と主節の内容を検討し、「ないと」「ない限り」という個別の形式がそれぞれにとりやすい傾向にもとづいて、次の2つのタイプを対極にある典型としてとりだせることを述べた。

A: よほど 意志動詞 + ないと, $\left\{ \begin{array}{l} \text{意味的にマイナスの事態} \\ \text{評価(だめだ／困る)} \end{array} \right\}$

B: よほど (形容詞)+名詞 + ない限り, $\left\{ \begin{array}{l} \text{意味的に中立的な事態} \\ \text{評価(大丈夫だ／心配することはない)} \end{array} \right\}$
無意志動詞

そして、《必要判断用法》の典型であるAのタイプについては、すでに4. 4で詳述した。本節4. 5でとりあげるのは《例外提示用法》の典型であるBのタイプである。

以上は否定条件の形式を手掛かりに、見出される傾向を示したものであるが、この2つのタイプは否定条件の形式のみによって区別できるものではない。《例外提示用法》のパターンであるBについて、4. 5. 3で従属節の事態と主節の事態との関係、4. 5. 4で従属節の否定条件形式に前接する語についてさらに詳しく述べる。

4. 5. 3 除外性をあらわす構造

4. 5. 3. 1 従属節の内容と主節の内容の関係

《例外提示用法》の「よほど」が否定条件節（「ない限り」を主とする）と共起する場合、その複文の主節の内容は、中立的な事態、話者の意見、プラスの評価である。これは《必要判断用法》においてその主節の内容が望ましくないマイナス評価の事態であるのに対して対照的である。以下、タイプごとに整理し、それぞれ該当例をあげる。

a) 中立的な事態（一般的な傾向・習慣など）

- (150) 私は欧米滞在中、日本式で夕食に人を招くときは、いつも箸をおくことにしていた。もし箸が使えなかったらフォークを出して上げることにしている。実際、イギリスなどでは、よほど田舎っぺか下層出身者でない限り、ほとんど箸の使い方を知っている。（中根千枝「適応の条件」）
- (151) 「たとえば、あなたが、誰かをだますために寝もしない布団にはいったように見せかけるとしますな。すると、どうされます。百人中百人が掛布団ぐらい、乱雑にしますよ。百人中、六十人がシーツに皺を寄せる細工もするでしょう」「はア」「しかし、枕を凹ますことは百人のうち百人が気がつきません。実際、寝れば、よほど、かたい枕でないかぎり、真中に凹みのあとが残ります。……」（遠藤周作「闇のよぶ声」）
- (152) アパートから学校へは自転車で十分。小学生は自転車に乗ってはいけない決まりなので、祖母（62）が毎日送り迎えをする。「車が多くて危ないので、よほど家が近くない限り、みなそうしています」と汪さん。（毎日新聞 95.01.27）
- (153) パーティ、忘年会のたぐいは面倒くさいからよっぽど親しい人が関係していない限り全部欠席。アンケートや電話取材はすべて断り、チャリティ系も関係者関与以外はきりがないので断る。（椎名誠「時にはうどんのように」）

b) 意見

- (154) 「ポルノって、ホラ、要するに欲望だろ。人間が本能的に持っている欲求であって、それはよほどマニャックなものじゃない限り、普遍的すぎるものじゃないか。」（素樹文生「旅々オートバイ」）
- (155) みなさんはみなさんで、自分流の漢字仮名まじり文を工夫なさるといいのですが、そのさい、漢字はひかえめに、という気持ちを持っていただくのがよいのではないかと思います。……「有る」「無い」なども、よほど必要がなければ使わずにすませたい漢字で

す。(高田宏「エッセーの書き方」)

- (156) 私の経験からいうと、十代、二十代のときに物を食べないのはよくない。よっぽど体に悪い太り方をしているない限り、食事制限はしないほうがいいんじゃないかと思う。(群ようこ「日常生活」)

c) プラスの評価：(大丈夫だ／心配することはない)

- (157) 吸気系のエアクリーナーが汚れていると空気の通りが悪くなり、燃費に影響を及ぼすと考えがちだが、よほどひどい汚れでない限り大丈夫だ。(毎日新聞 95.08.18)

- (158) ノックさんは無党派なのだから「オール野党」という言い方は当たらない。共産府政ではないのだから、議会も正面切っては攻撃できないはず。よほど強引なことをしない限り、心配することはないのでは。(毎日新聞 95.04.14)

このように、主節の内容が中立的な事態～プラスの評価である場合、その従属節である否定条件にあらわれる事態は、(150)や(151)、(157)のように特徴づけられた名詞を中心に、形容詞(152)(154)、無意志動詞(153)(156)が述語になる。(158)のような意志動詞は極めて少ない。また、否定条件の形式に注目すると、「ない限り」に偏り、「なければ」も少数見られるが、特に「ないと」では言い換えにくい傾向がある。これらの従属節の内容と主節の内容との関係は、否定条件節で例外として限定される範囲が提示され、主節では、それ以外の大部分がどうであるかということが、一般的な傾向や習慣としての事態、話者の意見、プラス評価、として示されるというものである。つまり、一部の極端な例外を除いた大部分が標準としてみなされるという関係において、「よほど」が直接かかる否定条件であらわれる事態は、例外として除外される範囲を提示しているといえる。このように、通常の範囲であれば標準とされる判断において、その例外を提示する用法を《例外提示用法》とする。

4. 5. 3. 2 例外提示～範囲限定をあらわす形式

否定条件であらわれる従属節と主節との関係から、本用法の「よほど」は例外の提示に用いられ、除外性を帯びたものであることを示した。このことから、否定条件節をとらずに「よほど」が「～以外は」と共起する例(3例)も例外提示の1つのタイプとして位置づけられる。

- (159) 今回の包みは知事の仮公館に届いたとみられるが、一般に、都庁への郵便物は新宿郵便局から毎日午前九時と午後一時半に第一本庁舎地下一階の文書交換室へ運ばれ、各局

分が仕分けされる。小包の場合は知事個人あてのものが多いため、よほど見た目に不審なもの以外は、直接知事室秘書課に運ばれる。（毎日新聞 95.05.17）

また、「～しか……ない」という形式をとる場合もある。

(160) ストさんはよほど機嫌の良いときしか笑わない。いひひひひと息を吸い込むような笑いで、本当にいい笑顔だが、それは月に一度あるかないかだ。（帚木蓬生「閉鎖病棟」）

(160)は、「よほど機嫌の良いとき」が例外として提示され、それを除くと「笑わない」、という除外性が感じられるとともに、「笑う」のは「よほど機嫌の良いとき」だけである、という範囲限定としても解釈しうるものである。このような例からさらに、範囲限定の面が前面に出たものとして「～に限られる」と共起する例（3例）がある。

(161) 彼はごくたまにだが、妻や娘より庭木や果樹の方が育てがいがある、と思った。勿論、何よりも平和を愛し、冒険心や好奇心を日常の枠から飛び出させる人間を、頭の悪い未熟者と考える彼のことだから、家族と庭の植物を較べるのは何かでよほど腹が立ったときに限られていた。（高樹のぶ子「白い光の午後」）

(162) 真夏には、彼女自身が「アッパッパア」と呼んだ、寸たらずのムーミーのような普段着を着ていた記憶はあるが、それもよほど蒸し暑い日の夕涼みなどに限られていたと思う。（浅田次郎「雛の花」）

これらの例は、「よほど」が「～に限られる」という語彙的に限定をあらわす形式と共起するものであり、「腹が立ったとき」「蒸し暑い日の夕涼み」がそれぞれ限定された範囲として扱われる。つまり、これらを例外として提示する〈否定条件一帰結〉の関係であらわされる文(161)' (162)' とそれぞれ内容としては等価であり、それが「ひっくり返し文」をとる、あるいは文脈に示される内容をうける形であらわされたものと解釈される。

(161)' よほど腹が立ったときでない限り、家族と庭の植物を較べることはない。

(162)' よほど蒸し暑い日の夕涼みなどでない限り、寸たらずのムーミーのような普段着を着ることはない。

先の(159)～(162)のような例の存在は、否定条件節をとるタイプの1つとして4. 4で扱った《必要判断用法》に対し、もう1つのタイプとして例外を提示する（≡範囲が限定

された特例として扱う) 除外性～範囲限定性をひとまとまりとして《例外提示用法》をとりだすことの妥当性を示すものと思われる。

以上、少数だが、否定条件節との共起という特徴はもたないものについても、例外提示の1つのあらわれ方として除外性～範囲限定性という方向で《例外提示用法》としてまとめられることを述べた。

4. 5. 4 状態性をもつ語との共起

4. 5. 4. 1 「よほど」が結びつく語

本用法における「よほど」は、一部の極端な例外を除いた通常の状態であれば標準とみとめられる、という関係において、否定条件節を代表とする諸形式(「～以外は…」「～しか…ない」「…のは～に限られる」)であらわされる、例外として特別に扱われるものを提示する場合に用いられることを述べた。「よほど」は例外とする対象の範囲を定めるために、ある特徴づけとなる性質や状態をあらわす状態性をもつ語と結びつき、その程度を限定している。

(163)「……実際、寝れば、よほど、かたい枕でないかぎり、真中に凹みのあとが残ります。……」(遠藤周作「闇のよぶ声」)(例(151)再掲)

4. 5. 4. 2 状態性をもつ語の特徴

《例外提示用法》においても「よほど」は状態性をもつ語と共起してその程度を限定することを述べたが、「よほど」によってある特徴づけの程度が限定され例外扱いされる事態は、状態的な修飾をうける、あるいはそれ自体が状態性を含む名詞を中心に、形容詞、無意志動詞によるものである。これは、先にみた《必要判断用法》において、「よほど」が程度を限定する状態性をもつ語に、典型として、状態的な修飾をうける、あるいはそれ自体が状態性を含む意志動詞に偏る傾向をみとめたのと対照的である。以下、代表的な語例をあげる。

【ある特徴づけを示すもの】

{すぐれた句だ かたい枕だ ひどい汚れだ 不審なものだ 特殊なものだ マニアックなものだ 贅沢なことだ 特別な場合だ フォーマルなときだ 鈍感な医者だ 立派な男だ 我の強い者だ 見苦しい醜女だ 感覚の鋭敏な人だ 余裕がある人だ 出来がすぐれているものだ 気に入った場所だ 田舎っぺだ 下層出身者だ 病弱だ 危険だ(家が)近い 変わっている 体に悪い太り方をしている 親しい人が関係している 評判になる 病変が進行する 確実な条件がそろふ 水温があがる ヘマをやる}

本用法では「よほど」が例外として特別なものとして扱われる事態の程度を限定するため、状態性をもつ語で、なんらかの特徴づけをあらわすものであれば幅広くあらわれるのだと思われる。

4. 5. 4. 3 「よほど」の程度性

《例外提示用法》において、「よほど」は、除外性を帯びる事態である、否定条件の形式（「ない限り」「なければ」）や「～以外は…」「～しか…ない」「…のは～に限られる」といった除外～範囲限定をあらわす形式に前接する部分の状態性をもつ語と結びつき、その状態性概念の程度をあらわす。

(164)「……実際、寝れば、よほど、かたい枕でないかぎり、真中に凹みのあとが残ります。……」（遠藤周作「闇のよぶ声」）（例(151)(163)再掲）

(165) 吸気系のエアクリーナーが汚れていると空気の通りが悪くなり、燃費に影響を及ぼすと考えがちだが、よほどひどい汚れでない限り大丈夫だ。（毎日新聞 95.08.18）（例(157)再掲）

「よほど」が用いられる文全体をみると、「よほど」は通常の状態であればそれが標準であるとみとめられるという判断を前提に、その例外となる極端な場合を提示するのに用いられている。(164)(165)の例でみると、通常程度の状態（「通常程度のかたさの枕」「通常程度のひどさの汚れ」）であればそれは標準～安心（波線部分）であるとされる判断において、その例外、つまり標準からはずれる扱いをうける特徴づけの程度が「よほど」であらわされる。したがって、「よほど」は通常の範囲を超えて例外扱いされるほどに〈過度に「大」〉という程度的意味をもち、そこにはやはり通常程度でない＝〈異常性〉という評価を伴っている。

4. 5. 5 用法の広がり 例外提示～例外否定へ

4. 5. 5. 1 肯定条件形式と共起する場合

「よほど」が《例外提示用法》として用いられる場合は「ない限り」を中心に否定の形が通常であるのに対し、少数だが肯定条件形式と共起する例が8例ある。

(166) 七瀬は微笑してかぶりを振った。「学校に提出するだけですから、外部の人が読むということはほとんどない筈です。よほど評判になれば別ですが、わたしにはとてもそんな論文は書けないでしょう。それにわたしの先生は、今の日本の画家にはあまり興味を持っていない人ですから」（筒井康隆「エディプスの恋人」）

(167) よほど穿った見方をすれば、これは、日本艦隊を招き寄せるためにアメリカが仕掛けた罠であったということになるが、其処まで考えるのは、或は行き過ぎかも知れない。
(阿川弘之「山本五十六」)

(168) 彼なら突如としてマイコのそばに行って、「ぼくは君のことがとても好きなんだ。だから交際してください」などというぐらいのことは難なくやってしまうだろうと思った。
しかしよほど酒に酔って、ということならまだしも普通の状態では自分にはとてもそんなことはできないだろうと思った。(椎名誠「新橋烏森口青春篇」)

「よほど」が肯定条件で用いられる場合、「～ば」「～なら」の形が主である。そして、〈条件―帰結〉という関係にとどまらず、肯定条件節を伴う主節部分はさらに何らかの逆接の形式をとって(例の波線部分)、後続の内容に続くという特徴がある。つまり、後続の内容(例の点線部分)が本題だとすると、「よほど」で程度が強調される肯定条件節の事態はその前置きにあたり、例外として否定的な扱いをうけていると解釈される。これらの例は、多くは「～ない限り、……」の形で極端な例外を除くことを示す《例外提示用法》の中で位置づけることができると思われる。

4. 5. 5. 2 肯定逆条件形式と共起する場合

本稿の資料には、少数だが「よほど」が肯定逆条件形式「～ても(でも)」と共起する例が7例、それに準ずると解釈される例(171)が1例見られた。

(169) 「彼は四時ごろにならなければ帰りません」日本語としてごく普通の言い方であるが、これはよほど日本語に熟達したアメリカ人でも通じにくいようである。「ならなければ」「帰りません」と二度否定表現が用いられると、帰るのか帰らないのかわからなくなってしまうという。(金田一春彦「日本人の言語表現」)

(170) 裏ビデオ屋の雇われ店長など、パクられたところで一泊二泊、仮によほど検事の情が悪くて起訴されても、たかだかの罰金刑である。(浅田次郎「ラブ・レター」)

(171) 寮で飲み、飲みたりなくて、街へ出た。街では、たいていガード下のオデン屋や、線路沿いの飲み屋で、つよい酒を飲んだ。よほど気ばって、寿司屋であった。(三浦哲郎「忍ぶ川」)

これらは「よほど」で程度を強調することによって通常は例外扱いされるような極端な

場合が示されるが、それも例にもれないという内容を述べるものである。これらは用例数としても多くなく、一見極端な例外と思われるものを提示するという面から、本稿では《例外提示用法》の広がりとして位置づけておく。

以上、4. 5. 5では、《例外提示用法》の典型とは文の構造から直接的には関連づけにくいものの、「よほど」が程度限定する事態が極端な例外として扱われるという共通点から本用法からの拡張として位置づけられる2つのタイプについて述べた。

4. 5. 6 用法のまとめ

《例外提示用法》について、以上述べてきたことをまとめる。

次の構造で示される《例外提示用法》には以下のような特徴がある。

・ よほど { (形容詞) + 名詞 無意志動詞 }	+	ない限り、 以外は、	{ 意味的に中立的な事態 評価 {大丈夫だ・心配することはない}
[ある特徴づけ] (の除外)			[標準～安心]
・のは、 よほど (形容詞) + 名詞			に限られる。
[標準でない事態]			[ある特徴づけ]

◆構文の形式的特徴

- ・ 主に形容詞によって修飾された名詞を伴う否定条件形式（「ない限り」「なければ」）と共起し、主節は中立的な事態・プラス評価。
- ⇒それ以外は通常で標準であるとみとめられる状態にあてはまらない例外を提示

◆状態性をもつ語

- ・ 状態的な修飾をうける名詞。
- ・ 意味の面では何らかの【特徴づけを示すもの】である。

「よほど」は、通常の状態であればそれが標準としてみとめられるような状況で、その例外となる極端な場合を提示するのに用いられる。通常程度であれば特に問題なく標準～安心とされるという現状に対する肯定的な評価のもとに、その例外、すなわち標準からはずれる扱いをうけるある特徴づけの程度は、通常程度を逸脱するものであり、「よほど」は普通に想定される程度を超えて〈過度に「大」〉という程度的な意味をあらわす。そこにはやはり通常でない＝〈異常性〉という評価を伴う。

4. 5. 7 《必要判断用法》と《例外提示用法》

4. 4 《必要判断用法》と4. 5 《例外提示用法》のそれぞれについてまとめたところで、再度この2つの用法の関係について述べておく。《必要判断用法》と《例外提示用法》はそれぞれの節でみたとおり、典型としては区別しうる2つの用法とみとめられる。これらは主に次の3つの要素が関わるものであり、対極をそれぞれ《必要判断用法》《例外提示用法》の典型とみなせることを提示した。

《必要判断用法》—————《例外提示用法》	
【否定条件節の形式】	ないと←—なければ→ない限り
【条件節に前接する語】	意志動詞←————→無意志動詞・形容詞・(形容詞＋)名詞
【主節の内容】	マイナス事態・評価←————→中立的な事態・プラス評価

主節の事態がマイナス要素をもつ場合に、否定条件節であらわされる事態には必要性が強く感じられ、それは意志的な行為をあらわす意志動詞が「ないと」という否定条件形式であらわれることが多い。また、主節の事態にマイナス要素がない場合には、否定条件節には形容詞等によって何らかの特徴づけをうけた名詞が「ない限り」という形式であらわれることが多く、その事態には必要性ではなく、除外性が読み込まれやすくなる。このように3つの要素が相関する形で対極にあるそれぞれの用法の典型をなしており、そこに実例の用例数も偏っている。

一方で、否定条件の形式、否定条件形式に前節する語、主節の内容によって、この2つの間に位置づけられる用例が段階的にある。

(172) 一線で働くある税関職員は「よほど正確な通報があるか、金属探知機でも使わない限り、巧妙に隠された密輸品の摘発は極めて困難」と打ち明ける。(毎日新聞 95.11.04)

(173) 信長はほとんど前置きをいわない。ときに言語の主格をさえはずして、藪から棒にいう。よほど機敏な頭脳とかんをもった男でなければ、この男の家来にはなれない。(司馬遼太郎「国盗り物語」)(例(135)再掲)

(174) 「うちの大学は、音大なので『音楽一筋』という人が多い。よほど興味がある人でないと、こういった講義を聞きに行く人はいないでしょう。(毎日新聞 95.06.09.)

「ないと」「なければ」「ない限り」などの形式の使用にも幅があり、主節の内容がマイナス事態であるかどうかは、文脈や解釈の仕方による部分もある。また、従属節の述語の意志的な動作性が薄れ、形容詞述語、名詞述語になるにしたがって、必要性とともに除外

性も読みとりやすくなる。たとえば、次の(173)'（上の(173)を再掲）の場合、否定条件節における「機敏な頭脳とかんをもった男」である必要と同時に、「機敏な頭脳とかんをもった男」以外は家来になれない、という除外性も読みとれるだろう。

(173)' よほど機敏な頭脳とかんをもった男でなければ、この男の家来にはなれない。

このように、両用法は明確に区別できるものではないことをみとめたうえで、本稿では対極にある典型として区別されるそれぞれを《必要判断用法》《例外提示用法》として提示した。

4. 6 《意志不実行用法》

4. 6. 1 用法の構造

4. 6 では、次のようにモデル化される《意志不実行用法》について述べる。

よほど	{	意志動詞	しようかと思った	{	が／けれど、	…(事態の不実行の描写)。
			したかった。		しかし、	

例1) 柳はよほど無視してやろうか思ったが、ここが我慢のしどころと、ぐっと抑えて、社長室へ向かった。(女社長に乾杯！)

「よほど」の用いられる構文特徴の中で、⑤意志・願望形式と共起するものについて検討する。意志・願望形式と共起する例は 1005 例中 35 例（3.5%）と多くはないのだが、特定の構文環境で用いられるものであることから、1つの用法としてたてられると思われる。4. 6. 2 ではどのような意志・願望形式と共起するかを示し、その特徴をみる。さらに4. 6. 3 ではあらわれる意志動詞の意味の傾向とそれらが伴う補助動詞を手がかりに、「よほど」が結びつく語の特徴を考察する。

4. 6. 2 構文の形式的特徴 ⑤意志・願望形式との共起

4. 6. 2. 1 共起する意志・願望形式

共起する意志・願望形式は、実際には「～しようと思った」「～したかった」と過去をあらわす形をとる。意志・願望自体の形式ごとの用例数は次の表 15 のとおりである。

表 15 : 「よほど」と共起する意志・願望形式と用例数

意志・願望形式	用例数
しよう（か）と思う	32
しようとする	1
したい	2
計	35

「～したかった」という願望形式も 2 例見られたが、多くは「～しよう（か）と思った」という意志をあらわす形式である。

4. 6. 2. 2 意志・願望形式の検討

4. 6. 2. 1 で「よほど」と共起する意志・願望形式をみたが、それらは、次の(175)(176)(177)のように、「～しようかと思った」「～したかった」とシタ形であられる。さらに、それらが逆接をとって、主節では、実際にはそれを実行しなかったという事実（点線部分）が示される、という特徴がみられる。

(175) 柳は憤然として席を立った。そこへまた電話が鳴って、柳はさっさと行ってしまうので、隣の席の女の子が出た。「はい。――柳さん！」「え？」「社長室へ来て下さいって」柳はよっぽど無視してやろうかと思ったが、ここが我慢のしどころと、ぐっと抑えて、社長室へ向かった。（赤川次郎「女社長に乾杯！」）

(176) 私は T V の前を離れてベッドに腰を下ろし、電話機を膝の上に乗せて仕事の日程をたしかめるために『組織』のオフィシャル・エージェントの番号をまわした。私の担当者が出て、私の仕事は四日後に一件予定されているがそれで問題はないか、と言った。ない、と私は言った。私はあとあとの問題を避けるために彼に余程シャフリング使用の正当性を確認してみようかとも思ったが、話が長くなりそうなのでやめた。（村上春樹「世界の終わり」とハードボイルド・ワンダーランド」）

(177) 三石隆之進は、昔はとも角、現在はなんの力も持っていない筈であった。よほどそのことを言ってやりたかったが、さすがに高男はそこまでは口に出せなかった。（井上靖「射程」）

複文形式をとらない場合でも、次のように意志した事態が実行にうつされなかったことが文脈から明らかであることが多い。

(178) 「よっぽどお耳に入れようかと思いましたのよ。」でも先生は貴女のお名が一寸でも出たあとは、そりゃ御機嫌が悪いの。二階へお上りになるのよ、すぐ。あの暗い部屋へ。もう困っちゃう。察して下さいよ。だから」重々しく結論した。「申し上げなかったの」 (有吉佐和子「地唄」)

したがって、「よほど」は結果的に実行しなかったことが既に確定した、過去における意志や願望に用いられるといえる。つまり、意志される事態は、意志主体にとって望ましい反面、たとえば次の(179)(180)に明示されているような、なんらかの理由で実行にうつすことが憚られる面をもち、「よほど」はそのような意志・願望に用いられるのである。

(179) 彼女はしばらくして泣きやんだ。「いいえ、私は駄目なの、私はこの人に愛して貰える資格のない女なのよ、もう、いいわ、——何にもいわないで」そんな捨台辞をくどくどといていた。私はよっぽど喧しいから明日にしろといってやろうかと思ったが、そうなるとかえって彼女を興奮させるだけだと思い、やっぱり黙っていた。(田村泰次郎『街の天使』系譜)

(180) あの時は、疲労して頭が霞み渡り、夢でも見ているようで、ともかく取調をまぬがれなくて、相手の言う通りに、はいそうですと答えていった。警察から検察に移った時、よっぽど前言を翻そうと思ったがまた警察に突き戻されるのが恐く、相変らず、はいそうですと鸚鵡返しに答え、おかげで取調はすぐすんだ。(加賀乙彦「湿原」)

「よほど」と同様に、次の(181)のように意志・願望形式と共に用いられ、その意志する事態に望ましい面と憚られる面とがある点で類似する副詞に「いっそ」という副詞がある。「よほど」の特徴を確認するため、いくつかの点について比較する。

(181) 郡司道子は、秀子の肩に手をおいたままで、「あたしにも、失恋の経験があるのよ」と、独り言のようにいって、「そんなときは、つらかったわ。悲しかったわ。いっそ、死んでやろうかと思ったわ。だから、今の小高さんだって、そうじゃアないかと……」 (源氏鶏太「停年退職」)

「いっそ」も「よほど」と同様、意志・願望形式と共に用いやすい副詞である。「いっそ」全 143 例について、意志・願望に関わる形式、さらにそれ以外にあらわれる叙法形式と共に起する 84 例について用例数をまとめると表 16 のようになる。(対象とした資料は 3. 2. 1 であげた(1)(2)(4)である。)

表 16 : 「いっそ」と共起する意志・願望、その他の形式と用例数

意志・願望形式	用例数	計
しよう（か）	21	56
しよう（か）と思う	11	
したい	5	
したいと思う	2	
する（か）	7	
する（か）と思う	1	
しようかしら	3	
しようかしらと思う	1	
してもいい	5	

勧誘・依頼・命令・提案の形式	用例数	
しないか／しない？	8	23
してください	2	
命令形	1	
するのだ（命令の意）	1	
したらどうか	6	
してはどうか	4	
その他	1	
省略	5	5
	84	84

先の表 15 でみたとおり、「よほど」は意志・願望をあらわす形式がかなり限定されているのに対し、「いっそ」が共起する意志・願望形式は、特に意志をあらわす形式の場合に「～と思う」をとる場合もとらない場合もみられる。これは、「よほど」が用いられる意志や願望は過去のものに限られるのに対し、「いっそ」が用いられる意志や願望は「過去」のものでも「現在（発話時）」のものでもありうるという違いがあるためである（「いっそ」が用いられる意志や願望が「～しようと思った」「したかった」とシタ形をとって過去のものであるのは 56 例中 13 例であり、多くは現在（発話時）のものであった。）さらに、「いっそ」は意志・願望を中心に、それ以外にも勧誘、依頼、命令、提案等のはたらきかけに関わる形式とも幅広く共起する⁴⁴。つまり、「いっそ」は意志・願望その他、未来を志向すること

⁴⁴ 本稿では、さらに詳しくは触れないが、「いっそ」には表 16 にあげた形式と共起するもののほか、仮

にのみ関わり、結果としてどうなったかということは前提とされない。そのため、過去における意志や願望に用いられる場合でも、それが実行されたかどうかは次の(182)(183)のようにいずれの場合もありうる。

(182) 私は和田金牛で仮死したんです。精液を洩らさないで失神したんです。そのあと高知でカツオを食べてみたんですが、どうもバランスがとれないので、ではいっそ両極端をやってみるかと思い、土和田へいって山菜をやってみました。(開高健「新しい天体」)

(183) 苔の庭で名高い西芳寺へ久振りで行って見ようと思い立ちながら、さて、それを実現するまでには急に物臭くなり、意志が鈍って、いっそ、どこへも出かけずにホテルで夕方まで寝ころんでいようかと思ったりした。来て見ると、休日のことで、渡月橋のあたりは、かなりの人出が見られた。久振りで眺めて、川の眺めも嵐山の姿も、やはり美しく、微風に吹かれながら橋の上に立ち止っていて、やはり来てよかったと思った。水の上に貸ボートが幾つも出ていた。(大佛次郎「宗方姉妹」.)

先に例を示したように「よほど」が、結果的に実行しなかったことが既に確定した過去における意志や願望にしか用いられないという制約は、「よほど」に特有のものであることが「いっそ」との比較からも確認された。

以上、「よほど」が用いられる意志・願望形式と文の構造の検討、類似する副詞「いっそ」との比較を通して「よほど」が意志・願望とその不実行という2つの事態の関わりを前提として用いられる副詞であることを述べた。このように、結果的には不実行に終わる意志・願望に用いられる用法を《意志不実行用法》とみとめる。

4. 6. 3 状態性をもつ語との共起

4. 6. 3. 1 「よほど」が結びつく語

本用法における「よほど」は、結びつく語が「(意志動詞) しようかと思った」に代表される固定された表現であり、4. 2 から4. 5 にかけてみた、形容詞を中心に、形容詞的な要素による状態修飾をうける、あるいはそれ自体が状態性をもつような名詞や動詞の状

定条件で未来への志向が示されるような例もあり、述語の動詞も意志的なものに限らない。

- ・もうかえろうや、と、だれかがいえばよいのだ。しかしだれも、それさえいいだす力がなかった。マスノや小ツルさえ、困惑の色をうかべていた。かの女たちにしても、なきだしたかったのだ。しかしなかった。いっそ、みんなでなきだせば、どこからかすくいの手がのべられるだろうが、それにも気がつかなかった。(壺井栄「二十四の瞳」)
- ・やあ降ってるな、これは凄いい、まるで夢でも見ているみたいだ、そんなに飲んだとも思わないが畜生、ふらふらしやがる、いっそ雪の中に埋もれてしまえば生きるも死ぬも騙すも騙されるもないんだが。(福永武彦「死の鳥」)
- ・畜生、いっそ心臓か頭にその流れ弾が当たってくれりゃよかったのに、と何度思ったか知れやしない。(井上ひさし「下駄の上の卵」)

態の程度を限定する他の用法と比べるとやや特殊である。このような特殊性からか、《意志不実行用法》は、いくつかの先行研究でも他の用法から程度に関わるか否かという点で区別されて扱われる面があった⁴⁵。これまで見てきた他の用法と比べると、共起する語が状態的な修飾をうけない意志動詞であるため、状態性をもつ語とはみなしにくい面もあるのだが、「よほど」が結びつくのは常に「～しようと思った」「～したかった」という〈意志動詞＋意志・願望形式〉であり、これらの意志的な精神作用の度合いを段階的にとらえられるとすれば、意志や願望の強さという主観的な面での状態性とみなしうると考え、状態性をもつ語との共起という観点から考察しておく。

4. 6. 3. 2 意志・願望形式にあらわれる動詞の特徴

4. 6. 1で「～しようと思った」「～したかった」などの〈過去における意志・願望をあらわす形式〉をとることを見たが、これらの形式にあらわれる動詞の特徴について述べる。

「よほど」が共起するのは意志・願望形式であることから、あらわれる動詞は意志動詞である。語例をあげる。

{言ってやる(4) 怒鳴ってやる 脚を蹴とばしてやる 無視してやる (お巡査さんに) 引き渡してやる 一滴入れてやる 歌ってやる 呼んでやる 言ってあげる(2) 声をかけてあげる / お断りする (「できない」と) 言ってしまう 前言を翻す (～に) 確認してみる 頼む 予告しておく 答える お耳にいれる 辞退する 席を立つ 帰(2) 車を降りる 食事をとる 引き返す 行くのをやめる やめてしまう 飛びこむ ネクタイを焼いてしまう 気を失ってしまう}

意志・願望形式にあらわれる動詞についても「いっそ」と比較する。「いっそ」が意志・願望形式と共起する際にあらわれる動詞の語例は次のとおりである。

{死んでしまう(7) 盗んでしまう かたづけてしまう 手放してしまう さらけだしてしまう 破いてしまう 引き裂いてしまう 捨ててしまう ぶちこわしてしまう 鬼になっ

⁴⁵ たとえば、辞書の記述では『大辞林』では他の程度に関わる意味記述とは別に「すんでのところでそうになってしまいそうなさま」とされ、程度の面での記述はなく、『日本国語大辞典』ではこの用法については言及されていない。

森田(1977)は「よほど」の全体に「こちらの想像や世間一般の標準をはるかに越えるほどに程度がはなはだしいこと」(p.462)という意味をみとめたうえで文型を区別しており、この用法にも程度をあらわす面をみとめていると解釈される。

一方、渡辺(1987)は「程度副詞であるという本性は、ここではほとんど失われている」とし、その失われた性質と引きかえに「ムード性」を得たと述べており、他の用法と区別している。飛田・浅田(1994)のこの用法にあたる用例の扱いや、田野村(2000)のこの用法の記述も、程度性を積極的にみとめていない点で渡辺の立場に近い。

尼になってしまう 奥さんにしてしまう (香港へ) 飛んでしまう 黙って行ってしまう /
死んでやる(2) (会社を／部を) やめてやる(2) 見せてやる 両極端をやってみる 来る(3)
帰る(2) 死ぬ(2) 世を捨てる 一家心中する 討伐する 噛みちぎる 絞め殺す 断ちきる あ
きらめる 店をたたむ 結婚する 白状する 泣き出す 黙って入る なかったことにする
(死ぬと／殺すぞと) 言う はっきり言う はっきり書く 寝転んでいる (一日中) 眠り
こけている}

「いっそ」は極限状況で常識から外れるような思い切った事態をあえて選択する場合に
用いられる副詞であり、その意志する事態が憚られる面をもつほど極端なものである点で、
「よほど」と類似している。しかし、個別に動詞を検討していくと、異なる傾向もある。

まず、「よほど」は形式的な面で「～てやる」(11例)「～てあげる」(3例)などの人
に対して影響を及ぼす行為であることをあらわす補助動詞を伴う例が目立つ(全35例中14
例)のに対し、「いっそ」に多いのは「～てしまう」(全55例中21例)であり、「～てや
る」はそれほど多くない。

さらに、「よほど」の場合、「～てやる」「～てあげる」という補助動詞を伴わない場合
でも、語彙的な意味のタイプとして「お断りする」「頼む」「お耳にいれる」など、人に対
して意志を表明したり何らかの働きかけを行ったりする行為をあらわすものが多い。そして、
「帰る」「食事をとる」などのように動詞自体が人に対する行為とはいえないものであつて
も、次の(184)(185)のように、「(～に従わずに) 一人で帰る」「(～を待たずに) 先に食
事をとる」という状況があり、やはり他人の存在を前提とする行為として解釈される。

(184) 今の信夫にとって、吉川はひとつの良心の基準でもあった。(あいつのしないことを、
おれはしようとしている) 信夫は、よほど一人で家へ帰ろうかと思った。しかし、足は
依然として、隆士の後に従っていた。(どうして帰ることができないのだろう) そう思
いながらも、歩みをとめることはできなかった。(三浦綾子「塩狩峠」)

(185) その夜、奈緒実は一の好物の塩鮭に、馬鈴薯や人参、大根などを入れた三平汁を作
って待っていた。九時をすぎ、十時をすぎても良一は帰ってこなかった。よほど先に食
事をとろうかと思ったが、三平汁を見て「ほう」と喜ぶ良一を思うと、もう少し待とう
と、奈緒実はどうとう十二時すぎまで食事をとらず良一を待ってしまった。(三浦綾子
「ひつじが丘」)

この点、「いっそ」には、「～と言う」「白状する」「絞め殺す」「討伐する」など相手を前
提とする人に対する意志的行為をあらわす動詞も見られるものの、用例数の多い「死んで
しまう」をはじめ、「一日中眠りこけている」などある面で極端な選択にあたる行為であれ

ば、幅広くあらわれるのとは対照的である。

以上、「よほど」は「いっそ」と同様に切迫した状況で極限的な事態を意志する状況で用いられるが、その事態をあらわす意志動詞を比較すると、後接する補助動詞、動詞の語彙的な意味のタイプから、【人に対する意志的行為】をあらわすものに偏するという特徴がみられることを確認した。これは、意志願望の対象である反面、何らか憚られるものであるために自らの意志で思いとどまるような事態には、対人関係を前提とするものが多く、あらわれやすいということだと思われる。

4. 6. 3. 3 「よほど」の程度性

「～しようと思った」「～したかった」という〈意志動詞＋意志・願望形式〉による意志や願望について、その精神作用の強さの度合いを段階的にとらえられるとしたうえで「よほど」のあらわす程度性を考えると次のようになる。

意志・願望の形式にあらわれる動詞には形式的に「～てやる」という補助動詞を伴う例が目立った。次の(186)のように、相手に対してなにか思い切ってしまう状況で用いられることが多く、意志・願望を抱いた時点でその強さは少なくとも「大」であることが感じられる。したがって程度的意味としては程度が〈「大」〉であることをあらわす。ただし、その意志された行為は結果的に自らの意志により思いとどまったことが前提となる過去のものに限られ、望むべき行為である反面、何らか憚られる面をもつものでもある。つまり、冷静に考えると自らも思いとどまるような行為を一時的に意志願望として抱く、その精神作用の程度〈「大」〉には冷静な判断からみて〈異常性〉といった評価が伴われると考えられる。

(186)「はい。――柳さん！」「え？」「社長室へ来て下さいって」 柳はよっぽど無視してやろうかと思ったが、ここが我慢のしどころと、ぐっと抑えて、社長室へ向かった。(赤川次郎「女社長に乾杯！」)(例(175)再掲)

4. 6. 4 用法のまとめ

《意志不実行用法》について、以上述べてきたことをまとめる。

次の構造で示される《意志不実行用法》には以下のような特徴がある。

よほど	{ 意志動詞	しようかと思った したかった。	{ が／けれど、 しかし、 }	……(事態の不実行の描写)……。
		意志・願望の過去 [過去の意志・願望]	逆接表現	[意志・願望の不実行]

◆構文の形式的特徴

- ・「～しようと思った」「～したかった」という意志・願望形式のシタ形と共起する。
- ・逆接表現をとり、文脈に自らの意志による不実行が示される。
⇒結果的に実行にうつすことが憚られ、不実行が確定した過去の意志・願望

◆状態性をもつ語

- ・意志動詞の意志形（しよう）・願望形（したい）（＋と思った）
- ・意志動詞は形式的には「V てやる」「V てあげる」という補助動詞を伴うものが多い。
意味の面でも【人に対する意志的行為】に偏る。

「よほど」は、自らの意志によって不実行に終わった過去における意志・願望に用いられる。結果的には実行に移すことが憚られたものである、という前提のもとで、意志・願望を抱いた時点の切迫した状態を、程度の強さとしてとらえられるとすれば、その程度が〈「大」〉であることをあらわす。そこには、行為を思いとどまる冷静な判断からみて〈異常性〉といった評価を伴う。

4. 7 位置づけ未詳の例

4. 2から4. 6まで、本稿の分析対象とした 1005 例について分析し、記述を行った。その大部分は分類の一次的指標をもとに、それぞれの用法の意味の面からの検討を通して、いずれかの用法の典型、あるいは周辺のなものとして位置づけられた。しかし、資料の中にはいずれの用法ともつながりが見出しにくく、位置づけにくい例が 36 例残る。これらはいくつかのまとまった傾向を示すものがあり、本節ではその特徴を整理してあげる。

○量に関するもの

「よほど」が動詞（句）と結びついて、程度とも量ともつかないような例があり、「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」に偏る。以下、結びつく語と例を順にあげる。

【変化量】8 例

軽くなる 重くなる よくなる 少なくなる 易しくなる 楽になる (屈辱の念が) 薄れる (光が) 薄れる

(187) なにほどこか経って目が覚めた。眩暈は治まり、胸の悶えもよほど軽くなっていた。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)

(188) 学校までは上り下りの坂があり、石ころの多い岩道はいねの歩行を円滑には運ばせな

い。歩きながらいねは、一年の間によほど自分の足が重くなっていることに気づいた。
(壺井栄「暦」)

【相違量】 2 例

違う(2)

(189) 海軍には、政治に携わる者は部内で大臣一人だけ、大臣の政治的決定は必ずこれに従うという伝統が、比較的ではあるがよく守られていて、それが陸軍とよほど違っていたところであり、山本もその点は折り目正しい方であった。(阿川弘之「山本五十六」)

【時間量】 5 例

かかる(2) たつ する(してから) 前から

(190) 少年は、わずかな岩角を手足の先きでさぐりさぐり、長い時間かかって、そこまでたどりついた。手につかんでみると、葛であったが、まだ細くて、弱い。しかし、いくらかの力にはなる。またよほどかかって登ると、大分太くなり、大分丈夫になる。(海音寺潮五郎「おどんな日本一」)

(191) 空には星がぎらぎらがやいているので、そのうしろ姿は木の枝の間にかなりながく見えていましたが、まもなく崖の上の岩影のかなたに消えました。それを見送ってからすぐのようでもあり、またよほどたった後だったようにも思えましたが、不意に、われわれの坐っているところから十メートルほどの木立の中で、木の枝が折れる音がしました。(竹山道雄「ビルマの豎琴」)

【空間量】 2 例

あるく 離れる

(192) もうよほどあるいてから、わたしはふと、靴で踏んでいる枕木の音が急に変わったことに気がつきました。(三浦哲郎「團欒」)

(193) 「この村の近くには、イギリス軍も印度兵もグルカ兵もいません。今晚はゆっくりお休みになれます」と案内人はいいました。たしかに、ここは心配がなさそうでした。他の村とはよほど離れています。(竹山道雄「ビルマの豎琴」)

以上のような「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」をあらわす例は、筆者の感覚では

やや古めかしい感じのする使われ方であるが、昭和戦後の作品を対象とした本稿の資料の中でも作者の生年が 1900 年前後であり、作品の年代も古いものに偏っている⁴⁶。

○推量形式と共起するが、《推定判断用法》が用いられる既実現の事態とその原因・理由の推定判断という判断構造とは異なるもの

先に 4. 2. 3. 2 で共起する推量形式を検討した際に、「だろう」が動詞述語文である例（5 例）と「だろう」以外が動詞述語文をとる例のうち 7 例のあわせて 12 例は、「よほど」が推量形式と共起する中でも多くを占める、既実現事態を根拠にその原因・理由を推定する（「らしい」を代表とする）推定判断とは異なり、条件にもとづいて、その結果・帰結を推量するものであった。

(194) “飛び道具”といえは弓ぐらいしかなかった時代の戦争は、この風向きというものが、戦闘の死命を制する重大なカギであつたろうことは想像に難くない。当時の軍師は、今日以上に真剣に天気の詳細をみたにちがいないのだ。おそらく、風向きを占うことの出来る人がいたら、よほど大事にされていただろう。（本田宗一郎「私の手が語る」）（例(26)再掲）

(195) 庄九郎がもし、少年のころを浄土教（浄土宗、一遍宗、浄土真宗）の本山で送ったとすれば、よほどちがった人間になっていたであろう。（司馬遼太郎「国盗り物語」）（例(27)再掲）

(196) またしてもここに、継母の問題が出てきた。継母子という不自然な関係は、どうしても解決の道がないものであろうか。彼女自身にしても、もしも沢田安次郎先生に子供がなかったとすれば、今とはよほど考えが変わっているはずであった。（石川達三「人間の壁」）（例(30)再掲）

(197) ……もうそろそろ、差別用語に神経を尖がらせるような不毛なエネルギーの消費はやめにしてはどうか。Mr s でなく Ms とつけられた手紙など来るとぞっとする。「おれはクロンゴ、あんたはキイロ」式で国際関係も動きはじめたら、成果はよほど確かなものになると思うのです。（塩野七生「人びとのかたち」）（例(29)再掲）

これら 12 例には、反事実のことを述べる例が目立つ。共起する状態性をもつ語にも「違う」「変わる」「～になる」など異同や変化をあらわすものが多く、(196)の「今とは」にあ

⁴⁶ 次の作者による次の作品である。作者の生年と作品の発表年を示す。（井伏鱒二(1898 生)「黒い雨」(1965 (『姪の結婚』))／壺井栄(1899 生)「二十四の瞳」1940／石坂洋二郎(1900 生)「石中先生行状記」1949／海音寺潮五郎(1901 生)「おどんな日本」1966／竹山道雄(1903 生)「ビルマの竊琴」1947-1948／福永武彦(1918 生)「草の花」1954／阿川弘之(1920 生)「山本五十六」1965／司馬遼太郎(1923 生)「国盗り物語」1963-1966／三浦哲郎(1931 生)「團欒」1964)

られるように現状が比較対象として想定しやすい、という傾向がある。

○その他 7 例（うち 1 例は省略による。）

その他 7 例についてはまとめることが難しく、上にあげた例とともに第 5 章の通時的な考察をふまえて 5. 5 で再度触れるため、ここでは詳述しない。

以上、位置づけ未詳の例を整理してあげた。これら 1005 例中 36 例については、古い用法から現代語の用法への変化の中で位置づけられるものもあると思われる。第 5 章で通時的な観点からの考察を行い、再考する。

4. 8 連体用法「よほどの」について

4. 8. 1 副詞派生の連体用法

文の中で連体修飾の位置で用いられる語の中には、「副詞+の」「副詞+な」という形をとる副詞派生のものがある。「よほど」「よっぽど」という副詞についても、「よほどの」「よっぽどの」という連体用法での使用が見られる。これらは形態の面でも機能の面でも純粋に副詞とはいえないため、4. 7 までに述べてきた他の用法と同列に扱うことはできないが、副詞としての「よほど」の性格が反映される面もあると考えられる。たとえば、連体用法として名詞を修飾するが、(198)は現代語としては落ち着きが悪く、(199)のように用いられる文構造には制約がある。このことから「よほどの」が名詞の修飾にとどまるものではないことがわかる。

(198) バスは夜の高速道路を {かなりの／相当の／??よほどの} スピードで突っ走った。

(199) こんな大事故になるなんて、よほどのスピードで走っていたのだろう。

このような文構造にも注目しながら、「よほど」と比較しつつ「よほどの」のふるまいについて記述する。以下、対象とする実例は 3. 2. 1 の表 2 で提示したとおりである。形式別の用例数を再掲する。

表 17：現代語の形態別用例数（「よほどの」「よっぽどの」）（表 2 再掲）

よほどの	よっぽどの	計
182	11	193

4. 8. 2 「よほどの」の全体像

連体用法「よほどの」を「よほど」と同様、形式的な構文特徴によって分類すると次のようになる。

《推定判断用法》

よほどの (状態性) 名詞 らしく、..... (既実現の事態).....
..... (既実現の事態).....。よほどの (状態性) 名詞 なのだろう。

構文特徴：推量形式と共起する

例) 二條の邸に、源氏の君は女を囲っていらっしゃる……至れりつくせりに大事に、かしずいていらして、まるで北の方をお迎えになったようなありさまだと申しますよ。……そここのお忍びあるきでまだ足らず、わざわざ自邸に迎え取っていられるからには、よほどのご執心の女人なんでしょうね……。 (田辺聖子「新源氏物語」)

《必要判断用法》

よほどの (状態性) 名詞 が／で ないと (マイナスの事態).....。

構文特徴：否定条件節「ないと」と共起する

例) 最近の政治家は饒舌である。情報を持っていない政治家ほど、よくしゃべる。だから、それを分析するこちら側によほどの識別能力がないとだまされることになる。(田勢康弘「政治ジャーナリズムの罪と罰」)

《例外提示用法》

よほどの (状態性) 名詞 で ない限り (標準的な事態).....。

構文特徴：否定条件節「ない限り」と共起する

例) これまで、レシーブといえば両手を組んで下から打つアンダーハンドが主流だった。これは、オーバーハンドだとドリブルの反則を取られやすいため、よほどのチャンスボールでない限り、下からレシーブするのが常識だった。(毎日新聞95.07.18)

《上記以外の用法》

例) 石中先生の記憶に残っている祖母の印象は、六、七歳のころのものだが、もうそのころ、祖母はよほどの年齢であった。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)

「よほど」には4. 2から4. 6まで《推定判断用法》《比較評価判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》《意志不実行用法》の5つの用法をみとめた(「その他」として残る例はある)。「よほどの」は、このうち《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》の3つに限られる(それ以外の使用については最後に触れる)。

以下、順にそれぞれの用法について述べる。

4. 8. 3 《推定判断用法》

「よほど」と同様、「よほどの」の場合も形式的には推量形式と共起する例が多い。全体の用例数は少ないが、本稿の資料に見られた形式と用例の分布を「よほど」に準ずる形で〈推定〉系（表左上）、〈推定〉系以外（表左下）、「のだ」を含む形式（表右）、に分けて表18に示す。

表 18 : 「よほどの」と共起する推量形式と用例数

叙法形式	共起する用例数			
	名詞	形容詞	動詞	計
らしい	5		2	7
みたいだ			1	1
語彙的推定表現 ⁴⁷				5
計				13
にちがいない	4		4	8
だろう	5		2	7
か	3		2	5
と思う	1			1
はずだ			1	1
計				22

叙法形式	共起する用例数			
	名詞	形容詞	動詞	計
のだろう	5		1	6
のだ	4		2	6
のか			1	1
のかもしれない	1			1
計				14

個々の用例を検討すると、「よほど」の分析で得られた観点からの考察が「よほどの」においても可能である。以下、〈推定〉系の推量形式と共起する場合、「のだ」を含む形式と共起する場合の順に例をあげる。

(200) 「そこで三原製薬に持っていったのだが、そのご、追加の注文をくれない。どんなようすか聞いてみると、精製が困難で割があわないと、さじを投げてしまったそうだ。コカインはよほどの難物らしいぞ。……」(星新一「人民は弱し官吏は強し」)

(201) 伏見宮は、碁、将棋の好きな宮様で、誰か手頃な相手の噂を聞くと、すぐお相手がかかって来るのだが、勝って悪し、あまり負けつづけても悪しという、厄介なおつき合いであった。それで伏見宮は、自分で将棋はよほどの腕前だと思っていたら

⁴⁷ 語彙的推定表現とは、叙法形式にはなりきっていないが、前接事項が推定されるものであることを語彙的に表現する手段をとるものである。「～と察せられる」など

しい。山本五十六が強いそうだという評判を聞いて、早速山本が呼ばれることにな
った。（阿川弘之「山本五十六」）

(202) 御茶ノ水で電車から下り、駅から出ると、ちらちら粉雪が降りはじめた。よほど
の寒さなのだろう。霧子は格子縞のマフラを少しひっぱりあげて、顎を埋めるよう
にして歩道を小走りにいそいだ。（藤原審爾「さきに愛ありて」）

(203) しかし、加能重役はいい人だよ。見ていると、あの人の怒りかたは本気なんだな。
社長の息子だからといって容赦をしていない。そこで俺達は、あいつはよほどのど
ら息子なんだな、と判断したわけさ。（立原正秋「冬の旅」）

これら「らしい」に代表される〈推定〉系の推量形式と「のだろう」に代表される「のだ」を含む形式は、「よほど」の分析の際に4. 2で詳しく検討し、「らしい」にとっては「（推定）根拠」として、「のだろう」にとっては「（説明される）対象」として、前提となる事実が必要であることから“既実現の事態に関わる判断”という点で共通することを述べた。(200)～(203)の例においても、前提となる事実（点線部分）が明示され、「よほどの」を伴う判断はその原因や事情をあらわす内容である、という関係にある。

また、〈推定〉系以外の推量形式についてみると、「にちがいない」（7例）「だろう」（7例）「か」（5例）が目立つ。これらも「よほど」の場合にも同様に見られた傾向であったが、「にちがいない」については「たしかさ（奥田靖雄(1984)）」「確信度（工藤浩(1989)）」をあらわす一方で、その確信度の高さゆえに、既実現事態である根拠が示され、それにもとづく判断に用いることも可能であることを4. 2でも考察した。事実、「よほどの」が共起する「にちがいない」を伴う文の例も述語の種類に関わらず、次のように既実現の事態（点線部分）が示され、それを根拠としてその原因が推定されるものであった。

(204) 五分か十分でいい、大阪からわざわざ駆けつけたのだ。すぐに帰るから逢わせてもら
えないか、と頼んだが、いっこうにとりあってくれず、冷たく「三時までお待ち下さい」
と言って窓を閉められてしまった。たった五分でも逢わせてくれないほどだから、これ
はよほどの重傷に違いないと私は推測した。（宮本輝「命の器」）

「だろう」、「か」と共起する例は、それぞれ7例中5例、5例中3例は名詞述語文の例であり、名詞述語文の場合はその判断文的な性格から形式的にも「のだ」を含む形式相当であると考えられる。個々の例をみても、次のように根拠となる既実現の事態が文脈にあらわれている。

(205) 広場は百人も集まれば埋まるほど。なのに、これだけのパフォーマーたちが日々、入れ代わり立ち代わり訪れるのは、ここによほどの魅力を感じてのことだろう。（毎日新聞95.03.15）

(206) 新進党の小沢一郎さんが私的上海滞在“二泊二日”のとんぼ返り。よほどの私的大事か。要注意か。（毎日新聞95.10.09）

さらに、動詞述語文の場合も典型的な動作動詞の例はなく、(207)(208)のようにいずれも動作性のない状態動詞の例であり、点線部分で示した事実を根拠とする判断性がみとめられる。

(207) —参加の動機は？「こういう突拍子もないことに参加するんだから、よほどの動機があるだろうと思われるようですが、私にはみなさんがビックリするような動機はありません。（佐藤嘉尚「伊能忠敬を歩いた」）

(208) 鬼界ヶ島の俊寛のように、わかめを拾い貝をあさって、命をつないでいるような生活だった。……しかしそんな所へも女房に来る女がいたのだ。赤貧は今もつづいているに違いない。そこへ入って来るからには、二人のあいだによほどの深い愛情があったか、またはけだもののような情痴の行為であったか。（石川達三「人間の壁」）

「よほどの」が共起する文末の推量形式についてみてきたが、特定の形式をもたない無標形式の例が14例ある。これらについてはすべて名詞述語文であり、次の(209)のように既実現の事態が示されるものを中心に、(210)のようにある事態を仮定した条件のもとでその原因や事情を判断するような2つの事態の関係がみられる。

(209) その監督室から本音が漏れてきた。「点をとられちゃう。主導権が握れない……」「五回までは抑えてくれないと、ウチは必ず追っかけだ。8割はそれで負けている……」「明日から何とかしないと。方法はないのか……」コーチ陣に愚痴る様子。スチール製のドア越しに聞こえてくるのだから、よほどの大声だ。（毎日新聞95.08.04）

(210) 霧の中に人の声が聞えた。「ひどい霧だな、こんな霧の中に入ったら出られっこないぞ」「まず、こういう霧の中を登って来る者はいないだろうな、いたとしたら、そいつはよほどのバカか生命知らずだ」（新田次郎「孤高の人」）

以上、共起する推量形式をはじめ、推量形式を伴わない場合までを検討し、連体用法の

「よほどの」についても全191例中64例が、「よほど」の《推定判断用法》と同様、既実現の事態からその原因・理由を判断内容として推定するという構文的な制約の中で用いられていることを確認した。

このように、「よほどの」は、本来の副詞として機能する「よほど」と構文的にもかなり類似した環境で用いられる性格をもつのだが、連体用法であるという機能の違いによって異なる点についても指摘しておく。「よほどの」は、先にあげた例のように「腕前」「寒さ」「どら息子」などそれ自体が状態性をもつ名詞や、状態修飾をうける名詞にかかり、直接的にはやはりその程度が「大」であることを限定すると思われるが、一方で「よほどの」がかかる名詞には「事情」「こと」など具体的な状態性が希薄なものも多い。

(211) 「実は……相談したいことがあるんです」 その口調の重さに、また何かが起きたのではないかと不安になった。内藤があらたまって相談したいというからにはよほどのことに違いなかった。（沢木耕太郎「一瞬の夏」）

(212) 朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）へのコメ支援をめぐる実務者協議が三十日合意に達した。食糧難を訴える隣人へのコメの支援は当然である。誇り高い隣人が、これまでの立場を変え日本にコメ支援を要請した背景には、よほどの事情があったのだろう。（毎日新聞95.07.01）

これは「よほどの」が時間性のない体言を修飾する連体機能をもつという機能により、たとえば「過度に特別な」「過度に異常な」といった意味を独自に獲得したことによると考えられる。

4. 8. 4 《必要判断用法》《例外提示用法》

連体用法「よほどの」についても、「ないと」「なければ」「ない限り」といった否定条件節と共起する例が193例中98例と高い割合で見られ、「よほど」と同様、《必要判断用法》と《例外提示用法》の区別がみとめられる。

4. 4でも述べたとおり、この2つの用法は典型としては区別されるが重なりがあるため、「よほどの」については4. 8. 4で両用法をまとめて述べる。

4. 8. 4. 1 否定条件形式の検討

まず、共起する否定条件節は次の表19のとおりである。表中に※で（ ）に示した形式とその（ ）内の用例数は、それぞれの否定条件形式のうち、「なければならない」「なくてはならない」のように、ひとまとまりとして文のモダリティをあらわすとされる分析的な形式になっているものが何例あるかを示している。（したがって、たとえば「なければならない」の1例は「～なければ」16例に含まれる。）

表 19 : 「よほどの」と共起する否定条件の形式と用例数

否定条件の形式	用例数	%
～ない限り	61	62.2
～ないと	18	18.4
～なければ	16	16.3
(※なければならぬ)	(1)	
～なくては	3	3.1
(※なくては行けない)	(1)	
計	98	100
	(2)	(2.0)

「よほどの」においては「ない限り」と共起する割合がもっとも高い。「よほど」の場合と比較するため、表 20 として 4. 4. 2. 1 であげた表 14 を再掲する。

表 20 : 「よほど」と共起する否定条件の形式と用例数 (表 14 再掲)

否定条件の形式	用例数	%
～ないと	62	37.8
(※ないと行けない)	(3)	
～ない限り	46	28.0
～なければ	36	22.0
(※なければならぬ)	(11)	
～なくては	13	7.9
(※なくては行けない)	(4)	
～なかったら	2	1.2
～なきや	2	1.2
(※なきや行けない)	(1)	
～(せ)にや	2	1.2
(※(せ)にやいかん)	(1)	
～ないことには	1	0.6
計	164	100
	(20)	(11.6)

「よほど」と比較すると、「よほどの」においては「ない限り」と共起する割合が圧倒的に高い。このことは「よほどの」が連体用法であり名詞を修飾することと関わっていると思われる。

4. 8. 4. 2 2つの用法のあらわれ方

4. 4と4. 5で「よほど」について記述した際に、《必要判断用法》と《例外提示用法》とを典型としては区別しうる2つの用法とみとめ、これらは主に次の3つの要素に関わるものであり、対極にあるそれぞれを《必要判断用法》《例外提示用法》の典型とみなせることを示した。

《必要判断用法》—————《例外提示用法》	
【否定条件節の形式】	ないと←—なければ—→ない限り
【条件節に前接する語】	意志動詞←—————→無意志動詞・形容詞・(形容詞＋)名詞
【主節の内容】	マイナス事態・評価←—————→中立的な事態・プラス評価

「よほどの」と共起する否定条件節の形式には「ない限り」が圧倒的に多いことは先に示した。また、従属節である否定条件に前接する語についてみると、表19の98例中55例が「よほどのNが{ない限り／ないと／なくては}～」という名詞Nの非存在をあらわす形式、27例が「よほどのNで{ない限り／ないと／なくては}～」という名詞Nの否定をあらわす形式であった。主節の内容は習慣や一般的な傾向などそれらが標準であることを示す事態であり、その標準的な事態や状態からはずれる極端な程度をもつものを例外として提示する《例外提示用法》に偏りをみせる。これは、「よほどの」が直接的には名詞にかかる連体用法であることによるためであろう。

(213) これだけ大きな音がしても、アパートの住人は誰一人として様子をうかがいにはなかった。この階に住んでいるのは殆んどが独身者で、よほどの例外的な事情がないかぎり平日の昼間は殆んど誰もいなくなってしまうのだ。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」)

(214) ……冴子はこの村の人たちに最初から憎悪に似た感情を持っていて、よほどの用事でもない限り家から出歩くことはなかった。村人の誰にも会うのを、彼女は極端に嫌っていた。(井上靖「あすなろ物語」)

(215) 万一、洪水になったときの支度である。城は、やや小高い丘を根にしている。よほどののことがないかぎり安心なのだが、用意だけはしておく必要があった。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

そして、「よほど」の場合と並行して、これら「よほどの」の用法にも(216)のように「～以外(は)」(3例)と共起して例外を提示することがより明確な例がでてくる。

(216) 株主の利益保護を第一とする米国の企業社会は、合併によって株価が上がるならば歓迎されるというドライな風土がある。さらに金融手段も豊富で、よほどの引き締め期以外は買収資金の調達も容易だ。(毎日新聞 95.08.08)

また、「よほどの」が直接かかる名詞は次のようなものである。

{物好き ヘそまがり バカ ヘビーユーザー 年寄り チャンスボール 山奥 大雨 悪天候 情勢変化 怠慢 失策 違法行為 / こと(36) 事情(2) 用事(2) 事件(2) 出来事 場合 条件}

《例外提示用法》では、「よほどの」が、特別なもの、極端なものとして例外的に扱われる事態や状態を限定するため、「よほど」の場合と同様に、人やもの、現象や行為などのある特徴づけをあらわす状態性をもつ名詞が幅広くあらわれる。ただし、一方で「よほどの」がかかる名詞には「こと」(36 例)を中心に、「事情」「用事」「事件」「出来事」など指し示すことからの具体性が希薄なものも目立ち、「よほど」の場合とは異なる。特に「こと」には目立って用例数に偏りがあり、「よほどのことがない限り」という固定された形で用いられやすいものとなっている。このようなことは、同様に程度が比較的「大」である「かなり」「相当」などの連体用法「かなりの」「相当の／な」などにはみられないことであり、程度が過度に「大」であることをあらわす「よほど」が、「よほどの」という形で連体機能をもつことにより、単に程度を限定するのみならず、たとえば「過度に特別な」「過度に異常な」といった意味を独自に獲得していることによると思われる。

以上のような《例外提示用法》が多くを占める用法としてみとめられる一方で、「よほどの」が連体用法でありながら、次のように「Nをする」という意志的行為をとる否定条件節で用いられ、主節の内容が望ましい事態の不可能や非実現などマイナス的な事態である場合が、98 例中 7 例と少ないが見られる。このような従属節(条件)と主節(帰結)の内容の関係は、副詞として用いられる「よほど」においても同様にみられ、否定条件節にあらわれる意志動詞による意志的な行為が必要性を帯びることから《必要判断用法》として《例外提示用法》と区別したものである。「よほどの」においても《必要判断用法》に相当するものがみとめられる。7 例のうち 2 例は(219)のように「なければならない」「なくてはいけない」といった必要性をあらわす分析的形式をとるものであった。

(217) 急性アルコール中毒の場合、血中アルコール濃度五～八パーセントで九〇パーセント以上が死亡するが、それにしても個人差や体調、まわりの環境や飲む速度など

が大きく影響して、よほどの一気飲みでもしないと、そう簡単には死ねない。(中島らも「今夜、すべてのバーで」)

- (218) 記者会見は首相側からの要望で行われた。首相としては政策的に新味がなくても、国民に震災についての自身の見解を伝えたい、との気持ちがあったようだ。しかし、よほどの捨て身の姿勢を見せない限り「復興を進めることが責任」との理屈は国民には受け入れられない。(毎日新聞 95.02.10)

- (219) 「……これから出直してみて、一年なり二年して、そこでまたやって行けそうなら、もどって来るというのは、どうかな?」「とてもありがたいですわ。でも、わたくしは、どこかの病院に勤めて働く気なんですわ。これまで楽な生活ばかりしていましたから、よほどの覚悟をしなくてはならないんです。……」(藤原審爾「さきに愛ありて」)

意志動詞が典型であるが、「努力」「熱意」「辛抱」「天才」「識別能力」など何らかの目的のために必要な心構えや資質をあらわすような名詞であり、主節の内容がマイナス的な事態の場合は、やはり必要性が読み込まれやすい。

- (220) 大幅な記録短縮は伸び盛りの中・高校生ならよくあることでも、黒鳥のように二十歳の大学生ともなるとよほどの努力がないと難しい。(毎日新聞 95.08.13)

- (221) 最近の政治家は饒舌である。情報を持っていない政治家ほど、よくしゃべる。だから、それを分析するこちら側によほどの識別能力がないとだまされることになる。(田勢康弘「政治ジャーナリズムの罪と罰」)

そして、「よほど」の場合と並行して、これら「よほどの」の用法には(222)(223)のように「必要だ／必要がある／要る／要す」(8例)と共起して必要判断であることがより明確な例がでてくる。

- (222) それどころか多くの人は、彼女が健常者と同じに見えるところから、タオルを絞ったり、缶を開けたりすることに、どうしてそんなに手間どるのかと苛立ち、なかには怠けていると思う人もいる。そういう状況のなかで、明るさを失わず、仲間と対等に仕事をしていくには、余程の気力と忍耐力が必要になる。(渡辺淳一「手書き作家の本音」)

(223)「おまけにこのくぼんだところには、厚味があって、熱さをしのぎやすくしてあるんだ。ろくろで、薄い厚いをつくるのは、よほどの腕が要るんだよ。とても普通の腕では出来ないね。(藤原審爾「さきに愛ありて」)

以上、「よほどの」についても「よほど」と同様に《必要判断用法》《例外提示用法》という必要性と除外性という2つの方向の区別がみとめられる点を確認した。そのうえで、「よほどの」に特徴的な点として、「よほどの N がないかぎり～」「よほどの N でないかぎり～」という形で《例外提示用法》に大幅に偏りがみられること、その中でも被修飾名詞には「出来事」「事情」「場合」など具体的な状態性が希薄なものがあり、特に「こと」である場合に「よほどのことがない限り」という形で固定化して用いられる例が目立つことを指摘した。このことは、「よほどの」が「よほど」とは異なり、基本的には時間性をもたない名詞を修飾する連体機能をもつことにより、単に程度をあらわすのではなく、たとえば「過度に特別な」「過度に異常な」といった意味を独自に獲得していることのあらわれであると考えられる。

4. 8. 5 《程度量用法》

本稿の資料における「よほどの」の用例は、4. 8. 3《推定判断用法》と4. 8. 4《必要判断用法》《例外提示用法》で大部分を占めるが、いずれの用法としても解釈しにくい例が10例残る。(うち1例は省略により判定不可であるため触れない。)

次の(224)(225)のように「よほど」にも見られた、やや古めかしさが感じられるものが4例ある。

(224) 石中先生の記憶に残っている祖母の印象は、六、七歳のころのものだが、もうそのころ、祖母はよほどの年齢であった。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)

(225) 薄曇った日で行楽日和という程ではなかったが、遊園地の中は子供連れの客で満ち、蜂の群の飛び交うような騒然とした空気に包まれていて、相馬鼎の期待していたものとは余程の相違があった。(福永武彦「死の鳥」)

(224)は祖母の年齢について、(225)は予想との相違について、それぞれ程度がある程度「大」であることを示すものだが、特定の構文的制約をもたない。

また、これらとの区別は難しいが、特に(226)(227)(228)などはより〈意外性〉や〈異常性〉の感じられやすい例といえるだろうか。それぞれにタイプとしてまとめられるだけの数がないため、積極的な位置づけが難しいが、上の2例が既定の事態や状態として述べるのに「よほどの」が用いられているのに対し、何らかの判断に用いられているものである。

(226) あるとき、昔からゴルフが好きで、協力会社などのおつきあいのためウィークデーにもでかけていた役員へカミナリを落としたことがあった。「あんなのは、よっぽどのヒマ人がやるもんだ。やめちまえ。どうしてもやるんだったらコソコソやれ」（本田宗一郎「私の手が語る」）

(227) 道は、多少の起伏はあるが真直ぐだ。真直ぐな道路というのは普通退屈なものだが、これだけ徹底的に真直ぐだとなぜか心地良い。こんな砂漠をさえ、かくも素晴らしい道路が貫いているのであるから、都市周辺ではよほどのものだろうと思い、あくびを連発していた隣の男に、「こんなすごい道路がアメリカにはどのぐらいあるのですか」と聞くと、「Many,many,everywhere.」と得意そうに答えた。（藤原正彦「若き数学者のアメリカ」）

(228) 三国一の婿だとさがれてみると、なるほど玉の輿であった。東土佐一といわれている豪家で、しかも登米子が人並すぐれた美しさであったのだから、貧しい暮らししか身に覚えのない啓明は、自分で自分が信じられなくなったのも、むしろ当然のことであったかもしれない。――啓明は重明のその厚誼を余程のことと思った。（田宮虎彦「土佐日記」）

(229) いましがた妻に与えた五千円がよほどの大金のように彼は思っているのだが、彼女が京都駅に降り立つまでには、それが三分ノ二ほどに減ってしまうことは、まず間違いがないのだ。（青山光二「われらが風狂の師」）

4. 8. 6 連体用法「よほどの」のまとめ

「よほど」による副詞派生の連体用法「よほどの」について、以上の分析を通して次の点を指摘した。

- ① 用いられる用法はほぼ《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》に限定される。
- ② 「よほど」においては《推定判断用法》が全用例の約半数を占めたが、「よほどの」においては、否定条件節と共起する例が半数以上を占め、それらを中心とする《必要判断用法》《例外提示用法》のうち、特に《例外提示用法》に偏る。
- ③ 《例外提示用法》の中でも被修飾名詞には「（よほどの）出来事」「（よほどの）事情」「（よほどの）場合」など、状態の具体性が希薄なものがあり、特に「こと」である場合に「よほどのことがない限り」という形で固定化した表現で用いられやすい。

- ④ 「よほどの」の用法は全193例中10例（《程度量用法》他）を除く183例が《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》のいずれかであることから、副詞「よほど」の特徴である2つの事態の関係を前提として用いられる点は連体用法「よほどの」においても保持されているといえる。

「よほど」については《推定判断用法》《比較評価判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》《意志不実行用法》の5つの用法を区別してみとめたが、「よほどの」は、そのうち主に推量形式と共起する《推定判断用法》と、否定条件節と共起する《必要判断用法》《例外提示用法》にほぼ限定されている。《比較評価判断用法》は明示されるか否かに関わらず、明確な比較対象を基準とする差の程度に「よほど」が用いられるものである。そのため、「YよりXのほうがよほどAだ」「XはYよりよほどAだ」というようには用いられても、連体用法の「よほどの」では「Yより」という比較対象を直接の基準とする理解が難しいため、「YよりXのほうがよほどのNだ」「XはYよりよほどのNだ」とは用いられない⁴⁸。また、「よほど」の《意志不実行用法》も、意志動詞が「～しようと思った」「～したかった」という過去の意志や願望の形式をとるものと共起するため、「よほどの」という連体の機能では用い得ない。

「よほど」において《推定判断用法》は“既実現の事態にもとづく判断”という判断構造を根底にもつものであり、既実現の事態と判断という2つの事態を前提とする用法であったが、連体用法「よほどの」においてもその判断の性格は共通するものであった。同様に、《必要判断用法》と《例外提示用法》も否定条件節と主節であらわされる2つの事態の関係にかかわる用法であり、「よほど」によって程度限定される事態が帯びる必要性あるいは除外性への広がり「よほどの」にも見られた。これら3つの用法は、通常程度といった基準を過度に超えた程度をあらわすものであり、そのような程度をはかり得る状態性をもつ名詞にかかる場合として「よほどの」の使用があるのだと考えられる。

また、「よほど」においては《推定判断用法》が「よほど」全体の半数以上を占め、《必要判断用法》《例外提示用法》をあわせた約3倍の用例数が見られたが、「よほどの」においては、否定条件と共起する《必要判断用法》と《例外提示用法》とで「よほどの」全体の約6割を占める。否定条件節との共起においては「～ない限り」に用例数が偏り、特に「よほどのことがない限り」という形式で用いられる例が目立つ。このことは、「よほどの」が本来の副詞として機能する「よほど」と構文的にもかなり類似した環境で用いられる性格をもちながらも、やはり体言を修飾するという機能の差に起因するものであろう。

⁴⁸ 現代語には1例もみられなかったが、時代を遡ると、連体修飾「よほどの」の形で《比較評価判断用法》として用いられていると思われる例が明治期の用例に1例のみ確認された。

・それでも汗になって修行をして、坊主で果てるよりは余程の増じゃと、思切って戻ろうとして、石を放れて身を起した（泉鏡花「高野聖」）

連体の機能において、たとえば「過度に特別な」「過度に異常な」といった意味が読み込まれやすく、そのような意味を獲得することにより、用法や共起する形式にも「よほど」とは異なる偏りが見られると考えられる。

このように、形式面では連体であるが、意味機能の面では単に連体修飾にとどまらない、副詞派生の連体用法（例えば「ろくに>ろくな」「せっかく>せっかくの」など）はその性格が複雑であるため、個別に調査が必要である。ただ、本稿の調査の範囲でも「よほど」に準ずる《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》での使用が中心であり、「よほど」の特徴としてみとめられた、2つの事態の関係を前提として用いられる点は、「よほどの」の連体の機能においても保持されていることが確認された。

第5章 「よほど」の意味と用法の通時的变化

5. 1 通時的な考察の目的

本章では、「よほど」の意味と用法について、通時的な観点からその変遷について述べる。本研究の対象は現代語であり、第4章でも現代語の「よほど」について用法記述を行った。その際に現代語を対象とした本稿の資料においても、(1) 現代の用法の典型とみなせるもの、周延的であれ、ある用法からの拡張としてみなせるもののほかに、(2) 年代の古い作品に偏るやや古めかしさが感じられるもの、各用法のいずれにも位置づけにくいものがあった。(1) については第4章の各用法の記述において示し、(2) については4. 7の位置づけ未詳の例でまとめて示した。

意味や用法が歴史的な変化のなかにあるものであれば、現代語の「よほど」の用法の相互のつながりや典型からはずれる用例の位置づけを考えるにあたっても、「よほど」の意味と用法がいつごろどのように変化して現代に至るのかという道すじをとらえておくことは重要である。本章では、現代語の共時的な記述のために、大まかにでも現代語に通じる通時的な変化を時代を遡って把握することを目的に、通時的な考察を行う。

本稿は通時的变化そのものを直接の対象とするものではなく、「よほど」の成立にまで遡った詳細な調査を行うことはできない。それについては『日本国語大辞典』第2版(2000-2002)、山口堯二(2006)を参考にする。山口(2006)は、「よほど」の形成、副詞としての成立とそれ以降の意味の変遷について詳しい。現代語に至る「よほど」の意味と用法の具体的な変化を直接扱った先行研究は見られないが、山口(2006)で、「江戸後期ごろから、他と比較された相対的な程度差や、推量・推定・仮定、意志の持続の事後表現などの、志向性のめだつ表現にも用途が広がっている」(p.154)との指摘がある。この指摘をもとに、現代の用法へのつながりがうかがわれる江戸後期を境に、近世後期以前については、『日本国語大辞典』第2版(2000-2002)、と山口(2006)の記述に拠る。近世後期以降については、対象となる資料をもとに使用実態の調査を行い、古くどのように用いられていたか、そして、現代語の用法への定着がどのようにみられるかについて述べる。

5. 2 近世後期以前の「よほど」

5. 2. 1 辞書における記述

『日本国語大辞典』第2版(2000~2002)には「よっぽど」「よほど」の項にそれぞれ次のような記述がある。

よっぽど⁴⁹（「よきほど」の変化した語。「余程」は江戸時代以降のあて字）

⁴⁹ 「よっぽど」の項は《形動》と《副》に分けて記述されている。《形動》には①程度や数量が適當す

《副》①よい程度に。ほどよく。ちょうどよく。

②ほとんどそれに近いさま。おおよそのところ。だいたい。おおかた。

「昭襄王からはよっほと百余年であらうぞ」(史記抄(1477)五・秦始皇本紀)

③かなりの程度であるさま。ずいぶん。相当に。

「この四つのあしき覚悟のなきはよっぽど仁の道なれども、まだ向上にはいたらぬぞ」(春鑑抄(1629)仁)

「其の儒者に比べては、出家の方がよっぽど広い」(古道大意(1813)上)

「手めへから了簡つけてよっぽど勘弁せねばならねへ」(滑稽本・浮世床(1813-23)初・中) (p.650)

よほど⁵⁰

《副》①よい程度に。ほどよく。頃合いに。

「迦楼の色の衣をかけて大路持鉢してとをらるるをせいは仏とよほど同ほとなり」(玉塵抄(1563)三二)

「当年ほど瓜の見事に出来た事は御座らぬ。是は、よほど色付た」(虎寛本狂言・瓜盗人(室町末-近世初))

②かなり。相当。ずいぶん。たいそう。非常に。

「悟のよほどいた人の衣の上に花がたまらいでちりてをちたぞ」(玉塵抄(1563)一八)

「やあ、よほど持た。さあ又汝もて」(狂言記・荷文(1700))

「日月五星の測度も、唐日本とは余ほどかわれり」(紅毛談(1765)上) (p.680)

以上の記述によると、「よっぽど」には①～③の3つの意味、「よほど」には①②の2つの意味がたてられている。ただし、「よっぽど」の②の意味「ほとんどそれに近いさま。おおよそのところ。だいたい。おおかた。」については、山口(2006)で「「おおよそのところ。だいたい」などの意をこの副詞に認めて、その例とする辞書がある。しかし、その扱いには文脈上、偶然認められる意味が、その語義と誤認された疑いを持つ」(p.157 注)と述べられており、認めがたいとする立場もあるようである。(②にあたる例も1例しかあがっていないため、この例のみでは判断しがたい。)したがって、「よっぽど」の②の意味

るさま。よい程度であるさま。ほどよいさま。ちょうどよいさま。②適度を越えてかなりな程度であるさま。ずいぶん。たいそう。相当。③度を越えて十分すぎるのもうやめたい。やめてもらいたいさま。大概。いいかげん。の3つの意味がたてられ、「よっぽどの」「よっぽどな」「よっぽどに」「よっぽどで(ある)」「～はよっぽど也」などが扱われる。

⁵⁰ 「よほど」の項も《形動》と《副》に分けて記述されており、《形動》には①ほどよいさま。ちょうどよいさま。②かなりな程度であるさま。相当。ずいぶん。の2つの意味がたてられている。

を除くと、「よっぽど」と「よほど」のいずれにおいても、「よい程度」とされる〈適度である〉という意味と「かなりの程度」とされる〈程度「大」である〉という意味が共通してみとめられている。特に、「よほど」の①と②には、『玉塵抄』(1563)からの例があがっており、同時期にいずれの意味でも用いられていたと解釈される。

5. 2. 2 「よほど」の形成、成立に関する記述

「よほど」の形成、副詞としての成立については山口堯二(2006)に詳しい記述がある。山口(2006)によると、「よっぽど」の原形は形容詞「よし」と名詞「ほど」の連語「よきほど>よいほど」に遡り、室町時代にそれらが一語化した「よっぽど」「よほど」の形があらわれたとされる。そして、「よきほど>よいほど」から「よっぽど」「よほど」が形成される過程での意味と用法に関して次の点が指摘されている。

①「よきほど>よいほど」は古くは「なり」や「に」を伴って名詞・形容動詞的に用いられたが、室町時代に「よっぽど」「よほど」の形が現れ、それ以降「に」を伴わない形が一般化し、副詞としての用法が中心となる。

②「よきほど>よいほど」は次の3つの意味を担っていたが、室町時代以降、「よっぽど」「よほど」と一語化するとともに、(2)《適当な程度》をめざす営みの中で培われ形成された(3)《相当な程度》の意味をあらわす傾向が強まり、意味の上ではそれが優勢化していく。

(1) 適当な時期を表す

夜よきほどにて、みな帰る音もきこゆ(蜻蛉)

(2) 適当な程度を表す

※物事の兼ね合い、調和にかかわる程度のありようがめだつ

宰相の君の、……丈だちよきほどに、ふくらかなる人の、(紫式部日記)

人のほど、ささやかにあえやかになどはあらで、よきほどになりあひたる心地したまへるを、(源氏・宿木)

(3) 相当な程度を表す⁵¹

※適不適の観点を離れ、高度寄りの程度を大づかみに概括する程度把握⁵²。相当度。

⁵¹ ここでの「相当な程度」というのは、極端な高度との対比を中心とする文脈における、極端な高度を除いての「次位的な高度性」、両極との対比などの文脈における「中間度性」という、文脈に依存して「よきほど>よいほど」が担える程度に共通する程度のありようである。山口(2006)では「その程度のありようは、そういう高度寄りの大づかみな概括性において、「相当な程度」という、かなり含みのある呼び方で呼ぶしかなさそうなものである。」(p.149)と述べている。

⁵² 次位的な高度、中間度をまとめて概括する程度把握。次位的な高度性、中間度性は文脈に大きく依存するものであるとされ、それぞれ次のような例があげられている。

・さりながら、これもただよき程の上手のことにての料簡なり。まことに能と工夫との極まりたらん

そして、このような変化について「語義や用法の大きな変化は、表現に際して選択肢になる、別の言い方との競合によって生じたり、進行したりすることが多い」(p.153)とし、「よきほど>よいほど」～「よつぽど」「よほど」の意味と用法の変化にも周辺にそのような事情があったことを指摘している。

室町時代以降、「よつぽど」「よほど」には副詞の用法がめだち、副詞としては意味上《相当な程度》をあらわすものに集中することについても、室町時代ごろから《適当な時期》をあらわすものに「よきころ>よいころ」、《適当な程度》をあらわすものに「よきころ>よいころ」「よきかげん>いいかげん」という類義の新しい言い方が出現し普及したことによって、「よきほど>よいほど」～「よつぽど」「よほど」系の形式の用途が浸食され制限されるようになったことが実例をあげて述べられている。また、《相当な程度》をあらわす副詞はこの「よつぽど」「よほど」の成立後は「だいぶん（大分）」「かなり」などの類義語が出てくるものの、「よきほど」から転じた語形以前にはそれに先行する類義の副詞は見られないことから、「程度副詞の表す相当度という程度のありようは、形容詞「よし」と程度を表す「ほど」の連語に始まる言い方をその先駆けとして、日本語副詞史の上に出現したとみてよからう。」(p.154)との見方が示されている。

山口(2006)の以上の見解は、「よほど」という副詞の成立をうかがい知るのに大変参考になるものである。本稿の範囲ではこの副詞の成立の背景自体を歴史的に検証することはできないが、このような意味と用法の変化、副詞としての成立をふまえたうえで、特に現代語の意味と用法にどのように至ったかを探ることは重要である。山口(2006)の調査によると、江戸時代以降の用法には種々の広がりが見とめられ、江戸時代前期ごろまでは既定の状態に用いられることが多いとされる。そして、江戸時代後期以降について、「他と比較した相対的な程度差の表示や、推量・推定・仮定の表現、意志の持続の事後表現など、総じて志向性のめだつ表現にも用途が広がっている」(p.154)との現代語へのつながりを示唆する記述がある。

以上、近世後期以前の「よほど」に関しては、副詞としての成立と近世後期までの動向について詳しい山口(2006)に拠った。

5. 3 近世後期の「よほど」

5. 3. 1 近世後期の使用の実態

5. 2でとりあげた、通時的な考察を行っている山口(2006)によると、江戸時代前期ごろまでは既定の状態に多く用いられていた「よほど」が、江戸時代後期以降、他と比較した相対的な程度差の表示や、推量・推定・仮定の表現、意志の持続の事後表現など志向的

上手は、などかいずれの向きをもせざらん。(風姿花伝・三)
・桜襲を、……又こくすく水色なるを下にかさねて、中に、花桜の、こく、よきほどに、いとうす
きと、みな三重にて、(夜の寝覚・三)

な表現にも用いられる例が見られることから、用途の広がりとともにその存在が程度副詞の世界に深く定着してきたことが指摘されている。山口(2006)では江戸時代後期以降についてはいくつかのタイプごとに用例が列挙されるにとどまるが、その中には現代語の用法に通じると思われる用例も見られた。山口の指摘のとおり、近世後期において仮に相当度をあらかず程度副詞として用途が広がり一旦は定着したという事実があったとしても、現代語の「よほど」の用法記述を行ってみるとそれらは構文的にも制約の強いものであり、おそらく近世後期以降にあらわれた他の類義語との関係の中で、現代にかけては用法が限られる方向で変化していると思われる。5. 3 では近世後期の「よほど」について江戸語の資料をもとにその使用実態を調査する。

5. 3. 2 形態の違い「よっぽど」と「よほど」

近世後期においても「よっぽど」と「よほど」という形態の違いはみられる。表 21 として先に 3. 2. 2 であげた表 3 を再掲する。

表 21：近世後期の形態別用例数（「よほど」「よっぽど」）（表 3 再掲）

	よっぽど	よほど	計
用例数	71	34	105

用例の分布のみを見ると、「よっぽど」という形態で用いられる例が「よほど」に比べて多いが、これらは資料の性格による可能性が考えられる。本稿で扱った近世語の資料は、洒落本、黄表紙、滑稽本、人情本などが中心であり、主に会話文体（登場人物のセリフ）からなり、その間に解説の地の文（ト書きにあたる部分）で場面の状況説明、登場人物の容姿、動きの描写、などが挿入される形式をとるものがほとんどである。105 例中 22 例がその解説の地の文に該当するものであり、うち 22 例すべてが「よほど」であった。したがって、主に会話の部分には「よっぽど」が、解説の地の文には「よほど」が用いられやすかったという傾向は指摘できる。（以下、用例をあげる際には解説の地の文は斜字体で記す。）

5. 3. 3 「よほど」が用いられる構文環境

山口(2006)によると、室町時代以降、「よほど」には副詞の用法が目立ち、副詞としては意味の上でも《相当な程度》をあらわすものに集中するとされることは先に述べた。「よほど」は近世後期においても現代語と同様、共起する語の状態性の面に関わり、その度をあらわす。しかし、度をあらわすという性格は共通するものの、本稿で調査した用例 105 例のうち、現代語の用法に通じると解釈される例はわずか 12 例（11.4%）であり、現代語の用法とは異なる使用が多く見られた。以下それらについて述べるが、近世後期の「よ

ほど」の使用は現代語と比較すると幅広く、意味や用法の一定の基準での分類や一般化が現代語ほど明確にできるわけではない。現代語の用法に至る変化を把握するために、現代語との違いを意識しつつ、5. 3. 3. 1では「よほど」が用いられる文について、5. 3. 3. 2では「よほど」が共起する状態性をもつ語について目立った傾向を指摘する。なお、用例数については、対象とする用例も105例と限られていることから数値をもとに一般化することは難しいため、具体例を示すことに重点をおき、数値については必要に応じて適宜触れるにとどめる。

5. 3. 3. 1 「よほど」が用いられる文

現代語の「よほど」の用法は第4章で記述した5つの用法にほぼ限られ、比較的年代の古い作品に目立った数例を除くと、いずれの用法も構文的にはかなり限られた特徴をもつものであった。本稿の近世後期の資料には、《例外提示用法》《意志不実行用法》は見られず、現代語の本稿の資料において使用頻度が高かった《推定判断用法》《比較評価判断用法》《必要判断用法》に通じると見られる例も12例(11.4%)にすぎない。それ以外にどのような文に用いられていたのか、以下、「よほど」が用いられる文のタイプに注目し、目立ったものを取りあげて述べる。

〈1〉既定の状態や事態の描写

現代語においては、既定の状態や事態を描写する記述の文に用いられることはほとんどないが、近世後期の用例には多く見られる。推量形式などを伴わず、動詞のシタ形で過去のことを述べる場合がまずあげられる。

(230) 鼓八「あなたはモシ、^{すいび}衰微さんではござへませんか すい「^{こはかう}ホウ、^{これ}鼓八公か こ「^{これ}ヤ是はおめづらしいト^{よこで}げうさんに^{いちべつらい}横手を打 すい「一別来だの こ「モシまあ、どヲうなさりしました。きつい事でござへますネエ。私も先刻からなんでも^{ききほど}衰微さんだが、ト存ましたけれど、^{ごぞんじ きんがん}御存の近眼でござへますから、よつぽど^{しあん}思案致ました(浮世風呂)

(231) 通り者...こりや大ぶ舟がおそいは。やうやう首尾の松じやないかの。船頭首尾の松は、よつぽど跡に通り過やした。通り者なるほど、よつぽど來た。あこゝは、此君山ぶしが河岸だ。(遊子方言)

(232) 弥次「ア、まってくれ／＼。腰骨がおれるよふだ。コリヤ、やつぱり前のほうから引出してくれトいふゆへ^{北八}、又^前へ廻り、^{兩手}をとらへて^{引く} ^{北八}「ヤアゑんさア／＼。ソレまたこつちへよつぽど出て來た 弥次「コリヤたまらぬ。アイタ／＼／＼。(東海道中膝栗毛)

(230)は、「衰微」に声をかけた「鼓八」が、自分が近眼であるために声をかけるのに思案したことを伝えるのに「よほど」が用いられている。(231)は船頭が「首尾の松は既に通り過ぎた」という事実を、(232)は柱の穴にはまり動けないでいる「弥次」を引っ張りだしている「北八」が「体がこっちへ出てきた」という事実を相手に伝えるのにそれぞれ「よほど」が用いられている。

状態や事態の描写は、解説の地の文（ト書きにあたる部分（斜字体で記す））によく見られる。解説の地の文というのは、セリフの合間に状況を描写したり説明を加えたりするものであるため(234)(235)(236)のようにスル形であらわされることも多いが、やはり既定の状態や事態を描写しているといえる。

(233) 芦清も六十にちかくなれば、素人^{しろウト}狂言もあまりたわけと心づきて、それより亂舞^{らんぶ}にかゝり、又舞臺^{ぶたい}をこしらへてたび／＼の能なり。これ又金にあかして、傳授事^{でんじゅ}などすまし、能の装束何不足なくこしらひ、それよりよほど見識^{けんしき}たかくなりけり。(見徳一炊夢)

(234) 次郎^{それ}夫／＼、そつからなげておくんなんし。女房^{それ}そんならなげるによ。そりや。次郎^{それ}おつと來やした。文をふところへ入、船はよほど出る。(辰巳之園)

(235) げい^{それ}何さ、あんばいがわるふござりやす。いつてへ河東^{かとう}のばちさ。ト此うちよほど時^{それ}うつる。(傾城買四十八手)

(236) 新ぞう^{それ}はしごをば、しづかに、おあがりなんせ。客^{それ}よほど酔^{それ}ている。心得ました。(遊子方言)

(233)は、六十ちかくなった「芦清」について解説する地の文だが、素人狂言がばかげている、と舞や能楽をするようになり、また金をかけて芸の秘伝をすませ能の装束を拵えて、気位高くかまえるようになった、という「芦清」の既定の状態を述べている。(234)(235)(236)は場面の解説にあたる描写であり、船が出たこと、時がうつったこと、客が酔っている状態をやはり既定のこととして述べていると解釈される。

形容詞文、名詞文の場合も、次のように従属節にあらわれ、主節で述べられる主張の理由であるような場合は、やはりそれが既定の状態であるという前提で述べられる。このような使用は現代語には見られない。

(237) よね「ナニサ他^{ひと}はなんだか気が付きやアしませんはネ。そして飯^{おまんま}はありますかへ 主
「ム、おめしはゆふべ向のおばさんが來て焚^{たい}てくれたからいゝが、手めへ腹がへつたら

うが此近所にはどふも鳥渡喰せるものもねへ。余ツほど遠いからこまる（春色梅兒譽美）

- (238) 作「……現銀といふ中にも、こちのは前錢ぢやさかい、二割も引にや歩合に廻らぬ。ケドモ、錢相場が安うて、的さんも引合うまいと思ふさかい、こちら負てやるぢや びん「おまへの天窓はよつほど大あたまだから、三割ましをかけねへきやア合ません（浮世床）」

また、次の(239)(240)は形容詞文の例だが、(239)は「太鼓持の万里」が「春あふみ」の容態について会話の相手である「八重次郎」に伝える場面で、自身が確認した状態を述べている点、(240)は自身の体調を既に自覚している状態から述べている点で、既定の状態や事態の描写として解釈できるだろうか。

- (239) ……太鼓持の万里来り、「さてとんだ事がござります。山門ではござりませんが、春あふみさんが二三日あとから、かぜの心地でひつこまれましたが、今日なぞはよほどお悪うござります。先 こつちものとは見へませぬ」と知らせ、八重次郎は、さてこそ人相や占といふものも争はれぬもの、なんでも追善の河東節・荻江のめりやすを弘めんと、蘭洲・藤兵衛をよび相談する。（三筋緯客気植田）

- (240) △○「仇さん、おめへはまぼしかろう。少し斯いふあんばいに置ふの 仇「ア、ナニそんなじやアないヨ。今日はよつほど能ヨ。いつも日のくれる時分になるとしきりに痛くなるが、けふはそんなでねへからもふよかろうヨ（春色辰巳園）」

動詞文の場合にも触れたように解説の地の文には状態や事態の描写が多く、(241)(242)は名詞文の例だが、既定の状態として登場人物の説明に用いられている。

- (241) 一座きやく今夜はでへぶはださむいばんだ。ゲイ、いつでもよしかへ。ト来る。此きやくは四十ぐらゐ。これはこゝへよほどなじみなり。万事ゆきわたった氣なれど、じつは大のはんかなり。（傾城買四十八手）

- (242) あいかた女郎くらの戸よほどとしま。髪毛うすく、ひたい大きく、ひきまみへ。病身とみへていろ青く、やせがたち。……（傾城買四十八手）

以上、現代語には用いられにくい1つのタイプとして既定の状態や事態に広く用いられる場合があることをみた。

〈2〉判断

現代語の用法はいくつかのタイプの判断に用いられるが、それは「推定判断」「比較判断」「必要判断」といった特徴をもつものに限られていた。近世後期の使用例には、構文的にそのような特徴を伴わない、相手や第三者に評価をくだす判断、より広い推量判断に用いられる例が見られる。

〈2-1〉評価判断

何らかの評価をくだすものであるが、多くは直前の相手の言動をうけての相手への評価判断や直前の話題による第三者への評価判断に用いられるものである。

(243) ……さすが利発な女ゆゑ、ウントこたへて落ついたものいひ 米「ヲヤそうかへ、わりいことをいつたツけの。仇^{あだ}さん堪忍^{かんにん}してくんなよ。なる程婦多^{ふたがわ}川の水のしみた唄妓衆^{げいしやし}はまた格別ちがつたもんだのう トにつこりわらひ、落つきはらつて居る。仇吉^{あだきち}はごうはらそうに 仇「どうもよくそうすまして、他^{ひと}をさげすんでゐられるの。なんだか知らねへが、其^{その}おんびんのわけを聞せな、ヨウ、コレサ 米「モウおめへもよつぽどただけしいのう。(春色辰巳園)

(244) 五郎…またおれにかぎらず、手前のよぼうとおもふきやくは、ちつとは地切^{じきり}をきらねへけりやアならねへ。それとも、あたまのものは借物なら、あすのばんまでに、壹兩貳分ばかりかしておいてくりや。これ、だまつているは、できねへか。すまそんならぬしは、よくどくづくだね。五郎できざあいゝが、手前もたゞよぼうとは、よつぽどむしのいゝものだ。(傾城買二筋道)

(245) 梅「イヤ実にお花^{ほん}さんはとんだ評判がいゝねへ。おまへはお仕合せだ。いゝ 娣^{いもふと}をおこしらへなさつた くま「ハイありがたふございます。寔^{まこと}に衆人^{みな}さんが御ひみきになすつて呼で下しますから、私も仕合でございますヨ。そして当人が素直^{じつめい}で実情ものでございますヨ 梅「容義^{きりやう}はよし、芸は出来、それで実があつて言分なしだ。余^{よつ}ぽど愛くろしいかはひらしい子だねへ(春告鳥)

(246) 甘「ドレ／＼、ハハア、夫婦とおぼしき者、相合傘^{あひやいがさ}で、しかも欣々^{きん／＼}然として通る むだ「何だらうネ。男は凡^{およそ}中位の好男だが、頸^{いろをとこ}へ青黛^{あたま}を泥つて、チト否身^{せいてへ}たつぷりの拵^{なす}へ。ソシテ女は、いづれあやしき者の果^{はて}と見えるが、高慢^{つら}な面をして相合傘は出来さねへネ。よつぽど鉄面皮^{あつかましい}やつらだ。(浮世風呂)

(243)(244)は「おめへ」「手前」という二人称、(245)(246)はそれぞれ話題になっている

第三者「お花さん」「夫婦とおぼしき者」への評価をくだすものである。これらの例は、いずれもその評価が直前の言動や話題にもとづいてなされるものであり、現代語の《推定判断用法》と近い面もある。ただ、判断の内容が直前の言動や話題になっていることの原因や事情としては解釈しにくく、やはり評価である点で、現代語の用法とは異なると思われる。

このように特に具体的な人物に対する評価に用いられる例が目立つのだが、少数だが(247)のように仮定の不特定の人物に対する評価をくだすもの、また、(248)(249)のように「先妻の死霊」「女郎たちによる浮気な客への見せしめ」に対する過去の感情をあらわすものも見られ、より広く用いられるようである。(248)(249)については、先に述べた〈1〉既定の状態や事態の描写とみることもできるかもしれない。

(247) 山「江戸じやア、そんなけちな事は流行らねへのさ。^{えどめへ}江戸前の樺焼は、ぽつぽつと湯気^{たつ}の立^さのを皿へならべて出す。たべるうちにさめたら、その儘^{まま}置いて、お代りの焼立^{やきたて}をたべるが江戸子^{えどっこ}さ。さめると猫に持^もつて^つや^やらと、竹の皮へ包で帰る人は、よつぽど^{かんちやうだか}勘定高な人さ（浮世風呂）

(248) 土龍「なんだ／＼何がおそろしい 錢右衛門「イヤ土龍^{どりう}さん、お出^{いで}。ウンニヤヨ、今^よ寄せた^{へんすけ}変助が先妻の死霊は、よつぽど^{おそろ}怖^{おそ}しかった（浮世床）

(249)（浮気な客に対し、見せしめで女郎たちが頭をむしり、客の付け髪だったまげやびんも落ちてしまう、という事態が弥次郎と北八の目の前で起き、ようやく落ち着いた場面）客「ヤレ／＼ゑずいめにあつた みな／＼「ヲホゝゝゝゝト是より中なをりの酒になりて、いろ／＼あれども、事長ければりやくす。弥次郎北八ははらのかはをよじり 弥二「いづくのうらでもあるやつだが、よつぽどおもしろかつた。てうど去年のはる、一丸が中田やの勝山にしばられた時、あんなざまであつた。（東海道中膝栗毛）

〈2-2〉推量判断

現代語の《推定判断用法》は、既実現の事態を根拠とし、その原因を推定する判断において「よほど」が用いられるものであったが、近世後期には、特にそのような明確な根拠がない、より広い推量判断に用いられている。典型的には推量形式を伴う。

(250) いぬ「イエサ、やんちやんが能^ようございますのさ。しかし、お乳母^{んば}どのが大体^{たいてへ}ではございませんネ。何は、御稽古^{ごけいこ}はどうなさいますへ きち「ハイ。藤間^{ふちま}さんがお屋敷へお上^あんなさいますから、やはりお屋敷で致します いぬ「それは、幸ひなことでございます。モウよほどお上^あなさいましたらう^{らう} きち「ハイ。何か埒^{らち}もござりません。それでも此子

は好でござりますから^{おぼえ} 覚もよい様でござります。へゝゝゝゝゝゝ (浮世風呂)

(251) 北八「コウ弥次さん、もつとあとへさがつてゆかふト弥次郎がそでを引て、こへとりのおやぢをさきへやらんと、わざと小べんをする。此内、しばらくしてかのおやぢをさきへやり 弥次「いめへましいおやぢめだ。おいらに^{こへ}糞のねだんをきいたとて、何わかるものだ。気のきかねへトいひつゝもはやよほどへだゝりしならんと、さつさつとゆく (東海道中膝栗毛)

(252) 弥次郎がにもつと、北八がつゝみを、りやうほうにくゝりつけて 北八「先ヅとしやくにおめへ旦那よ。おいらは上下といふもので出かけよふ。ナントよつぽど、気がきいてゐるだろふ (東海道中膝栗毛)

(250)は、子どもの踊りの稽古が話題となっているところで、「モウよほどお上なさいましたらう」とその上達ぶりを、(251)は忌々しく感じている「こへとりのおやぢ」を先に行かせようとしている 2 人がその距離ができたことを、それぞれ推量する場面である。最後の(252)は旅の道中で旦那と家来の役をつくって荷物を代わる代わる持つことにした場面で、「北八」が、まず「おめえ (弥次)」が年上であることから旦那を、自分が家来という設定ではじめることを提案し、そのことを「よつぽど、気がきいてゐるだろふ」と推量する形式で述べている。(ただし、この例は「だろふ」は推量より確認要求の面が強いものと解釈されるため、一方で自分の提案に対する評価判断でもある。)

また、次のように引用節内での判断に用いられる例が 2 例あったが、これも広い推量判断の一つと見ることができる。

(253) 仇「わたやアもう七福神といふものは、余程^{よつぽど}ゑんぎのいゝものだと思つてゐたけれど、まことに嫌ひになつたは (春色辰巳園)

(254) でんぼう「エゝコウ^{じゆしや}儒者といふ奴は余程^{よつぽどものしり}博識な者だと思つたら、一向^{いつかう}しきなトンチキだぜ。(浮世床)

以上、近世後期の用例に見られた〈1〉既定の状態や事態の描写、〈2〉判断、のそれぞれのタイプの文を例をあげて示した。これらはあくまで近世後期の「よほど」が現代語には用いにくいどのようなタイプの文に用いられていたのか、という観点で目立ったものを具体的にとりあげたにすぎないが、用いられる文には現代語の用法にみられたような制約がなく、量や程度をあらわすのに広く用いられていたといえる。ただし、広くといっても対象とした資料においては全て平叙文において用いられるものであった。近世後期の同じ

資料の中には、「よほど」と近い程度をあらわす使用頻度の高い副詞に「おおきに」「だいぶ」「ずいぶん」などがあり、その使用には重なりもあるが、それぞれに異なる使用傾向もみられた。特に、「ずいぶん」には(255)のように既定の状態に用いられるものもあるが、平叙文だけでなく命令(256)、依頼(257)、意志(258)、願望(259)の文に用いられる例も少なくない⁵³。

(255) 弥次「かん平は三十に、なるやならずにしにやした てい主「ハアそれはおちからおとし。おかる様は 弥二「ずいぶん達者でゐます（東海道中膝栗毛）

(256) 弥二「ひさしぶりで目があいたら、みんなしらぬ人ばかりだろふ あんま「おさやうでおざります 弥二「見へないほうもずいぶんりやうちをしなさい。なをりさへすりやア見へるもんだ。（東海道中膝栗毛）

(257) 兵五「……このいんもふとめを、きさまの所へ嫁入につれてまいつたのでおざるヤア。……此うへからは、随分といんもふとめを不便がつてやつて下さい。（東海道中膝栗毛）

(258) むすこ……どふもたばこを呑んは、わるいもので御座ります。それで此間、ずいぶんたばこのみならをうと存ます。（遊子方言）

(259) 「とんだいそぐね。骨はしげ骨にして、側わ本塗に眞鍮の金物。いくらかゝつてもいゝから、ずいぶんりつぱにしてへの。」（江戸生艶気樺焼）

(256)は「りやうちをしなさい」と目の治療をすることの命令に、(257)は「不便がつてやつて下さい」と妹をかわいがることの依頼に、(258)はたばこをのみならおうという意志、(259)は奉納する提灯を注文する場面で、提灯の骨の目を細かく本式に塗り、りっぱなものにしたいという願望に、それぞれ用いられている。

このように、命令・依頼・意志・願望といった未実現事態を志向する文に多用されている「ずいぶん」に比べると、「よほど」の使用は現代語の用法ほどの制約はないものの、平叙文に用いられることが主だったのではないかと思われる。

⁵³ 「ずいぶん」が命令、依頼、意志、願望において用いられることは、現代語においてはみとめられず、このような用法は近代以降衰退していったと思われる。「随分」の通時的な変化を考察している鳴海伸一(2012)でも、「随分」が主体動作動詞にかかり、「〈自分にできる限り、せいいっぱい〉」と解釈できるような、命令・依頼・意志の表現を伴う用法が江戸時代を通じて多数使用されていたことが指摘されている。そして、その後使用されなくなっていくこと背景について、「随分」が程度の高さだけでなく、評価的意味を獲得し、そうした用法が拡大していくことで、すでに実現した事態に対するものに使用が偏り、それとともに、命令・依頼、意志といった未実現の事態や結果があ未定の事態を表しにくくなったという事情があると考えられる」(p.(26))と述べられている。

5. 3. 3. 2 共起する状態性をもつ語

現代語においては「よほど」が共起する状態性をもつ語にも用法ごとにそれぞれの構文環境を反映するような偏りがみられた。(第4章の各節で用法ごとに詳述したが、たとえば、《推定判断用法》では形容詞を中心とする人の内面(感情や心情)～内情をあらわす語、《比較評価判断用法》では主観的評価的な語、《必要判断用法》では成果に関わる意志動詞、など。)近世後期には現代語の用法が定着しているとはいえず、共起する状態性をもつ語にも違いがみられる可能性があるため、共起する状態性をもつ語にどのようなものがあらわれているかという観点で用例を検討する。

近世後期の用例には、感情や心情をあらわす語はわずかしは見られず(おそろしい、おそれている、気がある、の3例)、意志動詞も少ない(厳しく育てる、いそぐ、勘弁する、陰徳をほどこす、気をつけてやる、の5例)という点が異なる。意志動詞5例のうち3例は現代語の③-1の用法に通じる必要判断に用いられている例であり、それらを除くと、意志動詞と共起してはほとんど用いられていないようである。

以下、用例に目立ったものや、現代語とは異なる傾向をとりあげて「よほど」が程度をあらわすものから量をあらわすものという順に述べる。例示する語彙は近世の語彙だが、出典のままでわかりにくいものもあるため、現代語の表記にあらためて示す(例 愛くるしいかはひらしい子だ→愛くるしいかわいらしい子だ)。また、解釈しにくいと思われる語については補足や現代語の解釈を()に示す。

【評価的なもの】

(体の調子が)よい (えんぎが)いい きりょうがよい おもしろい 徳だ(立派だの意) 上手だ ましだ たけだけしい(ずぶとい) 意地が悪い むしがいい 手まえ勝手だ 利口なやつだ のろい男だ 博識な者だ 勘定高な人だ あつかましいやつらだ 人がらよき女郎だ 惚処のない女だ ちえのない男だ 灰汁のぬけた人だ よく出来たおかしい子だ 愛くるしいかわいらしい子だ 馬鹿者だ 世話役だ(世話焼の意) 気が利いている

評価的な語というのは、そのなかに「いい」「わるい」といった価値づけを含んで形容する語である。現代語には、4. 3でみた《比較評価判断用法》において、人やものごとなどに対する評価的な語が幅広く見られたが、本稿でみた近世後期の用例には、特に人の性格や資質に対して評価するものが目立った。このことは、5. 3. 3. 1でみた用いられる文のタイプの代表的なもののうち、〈2-1〉**評価判断**としてあげた、直前の相手の言動をうけての相手への評価や、直前の話題による第三者への評価判断に用いられることが多いこととも関わっていると思われる。

【知覚しやすい状態】

(水の音が) はやい きりょうがよい 大あたまだ としまだ ねうちがみえる

現代語では、《推定判断用法》においては、人の内面（感情や心情）～内情をあらわすものと共起しやすく、また《比較判断用法》においても 主観的な価値基準や感じ方によって定められる評価的なものと共起しやすいという偏りがあり、客観的に明確な状態をあらわす直接知覚しやすいものはそれほど多くない。しかし近世後期の資料には少ない用例の中にも見られた。たとえば次のような例だが、これらは5. 3. 3. 1で検討した用いられる文のタイプにおいて、現代語には見られない〈1〉既定の状態や事態の描写に用いられることがあるためであると思われる。

(260) 北八「さやうさやう。しかし水が早いから、おめへがたアあぶない。用心してわたりなせへ 犬市「ハアなるほど、水のおとがよつぽどはやい（東海道中膝栗毛）

以上は、形容詞や状態性をあらわす名詞が中心であったが、近世後期の用例には状態動詞や無意志動詞と共起する例も多い。これらの動詞と結びついて、「よほど」が【時間量】【空間量】【変化量】など程度よりも量の面をあらわす場合も少なくない。

【時間量】

時うつる(3) 過ぎる、さきになる / ひさしぶりだ おおむかし

(261) ……酒のことを「ヘル」、よい女郎のことを「ト一チ」、わるい女郎を「くはをり」、げいしやの事を「かは」と申やす。まだいろ／＼穴もござりやすが、くはしくは申されやせん 客「コリヤゑらい穴じやわい。ハ、ハ、ハ、ハ、トむだばなしのうち、よほどときうつりければ 朝 十 団三人おきて、ところ出る。(仕懸文庫)

(262) 隣座敷 客は田舎座頭、女郎は新ぞう、たわいなくねてゐる。手を打ても、たれも来ず。ひとりごとに、あゝおもしろくない事だと、たばこ盆をいぢりみて、七ツを打て、よほど過るに、さきからおこすが、とかく埒があかん、といふ／＼枕をほち／＼はぢきながら座頭これ／＼おきなさい／＼（遊子方言）

【空間量】

(距離が) ある(2)・ござる 通りすぎる でる 来る へだたる

(263) 藤「ナニ朝湯から婦多川へ直にか 蝶「イ、エ、ナニ土手下の、アノお屋敷の際の 藤

「ウ、やつぱり小梅の瓦を焼手前だの。しかしそれでも余程あるの 蝶「三町ばかりありませうが、此所等では衆人隣家へ行くらゐに思つて居りますヨ（春色梅兒譽美）」

- (264) 此所のやどや「モシおとまりかいな。やどをとつてかんせ 弥次「コレ妙見町といふは、まだよつぽどございやすかね やどやのおんな「イエいんま少し此さきじやわいな（東海道中膝栗毛）」

時間量をあらわす例が 6 例、空間量（距離）をあらわす例が 8 例で、どちらとも解釈する例が 2 例あった。現代語の用例にも 1005 例中 15 例（1.5%）見られたが、近世後期に比較的多く用いられていたこれらの用法の残存として解釈されるものであろう。

【変化量】

愚痴っぽくなる 利発になる 見識高くなる 快気なる（番数を）お上なさる（習得するの意）
酒がまわる

- (265) 古「あれは子どもの頃は吉五郎といひました。扱其家橋がした時は舞台一面の宝船で、今おはなしの通り惣役者残らず乗居て、せり上になるト、下から家橋が角臺の荒事出立で、両手をぐつとのぼして、彼宝船をさし上ながらのせり出しさ。してみれば家橋が時分から最うよほど利発になりましたネ きも「狂言と地との差別がかんじんだ（浮世風呂）」

- (266) くま「ヲヤお前さん、お薬があるぢやアございませんか 梅「ヲゝほんに左様だッけ くま「それは余まり冷たではありませんか。マアお出し被成まし。温て上ませうト薬茶碗を火鉢にかけてありし土瓶へのせて、湯せんにして服用ながら くま「それでもマア、少しづゝでも余程快気おんななさいましたねへ。（春告鳥）」

変化をあらわす語は「形容詞の連用形＋なる」という動詞句に代表されるが、(265)のよに、変化前の状態が基準としてあり、ある時点との比較性が裏にあると解釈できるものである。比較との関わりについては 5. 3. 3. 3 でも触れる。

最後に、その他、無意志動詞をまとめてあげる。

【その他】

うき名がたつ いきつく（身代が尽きるの意）（目方が）ある（似ているところが）ある ふめる（値踏みすることができる、上等だの意）有卦にいる 引けて居る（うまくあやつられて
いるの意）

(267) 艶二郎^{えん}はのぞみ^{のぞみ}のとふり、勘當^{かんどう}をうけけれども、……なんぞうわきな商賣^{しやうばい}をしてみたく、色男^{しきお}のする商賣^{しやうばい}は地紙賣^{ちかみうり}だろうと、まだ夏も来ぬに、地紙賣^{ちかみうり}とでかけ、一日にあるいて大キにあしへ豆をでかし、これには懲り／＼とする。此時大キな粹狂者^{すいきやうもの}だと、よほどうき名立けり。(江戸生艶氣樺焼)

(268) 梅「なるほど、左様いつて見ると、忠さんの顔はお花女^{はなな}に似て居る所が余程^{よつほど}あるヨト少し考がへて(春告鳥)

状態をあらわす形容詞ではなく、存在動詞や無意志動詞であるため、「よほど」があらわすのは程度よりも量的になることが多い。

以上、「よほど」が共起する状態性述語という観点から、現代語と比較して目立った異なる傾向をとりあげた。

5. 3. 3. 3 現代語につながる用法

現代語の用法に通じると思われる例は近世後期の用例には、12 例（全体の 11.4%）とわずかであるが、最後にそれらを取りあげる。以下、用例数の順に述べる。

《推定判断用法》に通じるもの（5 例）

次のように既実現の事態（点線部分）が明示され、それを根拠とする推定判断に用いられる例が 5 例見られた。

(269) (はじめ値段を聞いたときに三百と言われたものを、弥次郎が最終的に四百で買った状況で) 北「ハヽヽヽヽ、三百のものを、四百に買うとはあたらしい／＼ 弥「それでもおしくねへ。アノ娘はよつほどおれに、きがあつたとみへる 北「おきやアがれ。ハヽヽヽヽ、弥「それでも初手^{しよて}から、おれが顔ばかり見ていたハ(東海道中膝栗毛)

(270) 庇間^{ひあはひ}の地瓦^{ちかはら}はよつほど安瓦^{つか}を遣つたと見えて、ぺん／＼草^{しやうねくさ}や性根草^{こたくさん}が小沢山^{はへ}に生たが、猫^{けがれ}の穢物^ひの乾かたまりと一緒^{はひ}に、ふん／＼と鼻へ這入る。(大千世界楽屋探)

(271) 鳥「ヲヤそれでモウお仕舞か。大そふに前書^{こと}が長ひから、余程むづかしい変かと思つたらば、余り短ひはなしで力が落た。(春告鳥)

(272) 藤は余程^{よほど}酒^{さけ}がまはりし風情^{ふぜい}、すこし^{てうしだか}調子高^{たか}に 藤「ヲイ米八さん、今日はどふぞその突^{つゝ}かゝり口上^{こうじやう}は一條^{ひとくだけぬい}抜てもらはふよ。……(春色梅兒譽美)

推定判断をあらわす形式は(269)(270)のような「と見える」をとる例が 3 例である。(272)については、「風情」という推定をあらわす叙法形式とはいえないものだが、「～した様子で」とその酒がまわっている様子を感じ取ることをあらわすものであり、また、その結果生じた事実（点線部分）が明示されるという構造に支えられて、上の 2 例と同様に考えられる。

このような典型的な推定判断の例はまだ 105 例中 5 例と少数であるが、現代語において最も使用頻度が高い用法に通じると思われる使用が確認できた。これらの出典をみると、いずれも 1800 年以降の滑稽本、人情本であり、江戸語が完成され共通語的性格をもつに至る時期であるといえる。

また、根拠となる部分が実際に実現していることではない点で上の 3 例とは異なるが、ある事態をもとにその原因を「のだ」という説明形式を伴う形で述べるという構造で用いられる例があり、近いものとして注目される。

(273) よね「藤さん、それほど憎けりやアぶつとも殺ともおしな。あんなに事をわけていふのに、おまはんの胸にやアまだわからねへのかエ。じれつてへ、爰でおまはんにくろされりやア私も^{よつぽど}有卦にいつたのだ」（春色梅兒譽美）

《比較評価判断用法》に通じるもの（4 例）

比較対象を伴って用いられる例は 6 例見られたが、そのうち現代語の用法の典型に近いとみとめられるものは 4 例と限られる。

(274) 弥次郎大あせをふき／＼、ほつとためいきをつきながら「ヤ／＼ありがてへ。コリヤどなたも御苦労でございやした。わつちやア伊勢の泊^{とまり}で産^{さん}をしやしたが、うむよりか生れる身は、よつぽどせつねへ。コレ着物がすりきれて、あばら骨が今にぴり／＼する（東海道中膝栗毛）

(275) 徳「さういはれては論なしだが、しかし足下もおれが異見^{いけん}について、ちつとは物まなびをしなせへ せい「うきよ物まねか^{もの} けん「ナニサ 徳「学問をよ せい「ナニ。論語読の論語しらずよりか、論語よまずの論語しらずの方がよつぽど徳よ（浮世床）

(276) めくいち「コリヤ／＼／＼／＼、朝来出島はさて色所^{いろどころ}、アきた／＼／＼／＼ うたよむ「ヤ是は殺風景だぞ。妓に俗事^{ぎ ぞくじ}を談ずるよりよほど^{だん}上なるものだトいふ所へかみ方ものけち助わらひながら入り来る（浮世風呂）

(274)は、柱の穴にはまって身動きがとれない状態から助けだされた弥次郎が、やっとの思いで引っ張りだされた自分の身を「生まれる身」と表現し、思いを述べている場面である。ふつうは産むほうがせつない（ここでは苦しいの意）という常識のなかで、それよりも「生まれる身」の方がせつない、と常識に反する比較判断を述べている。同様に、(275)は学問をしろという相手の勧め、(276)は「妓に俗事を談する」ことが殺風景であるという文献の一節に対してそれに反することを述べるのに用いられた例であり、現代語の典型的な用法に通じるものである。

さらに、比較対象が表示されるが、それらが以前の状態や普段の状態との比較であり、比較対象間の関係に対する判断が現状（常識や相手の主張なども含む）に反する、という評価的な面がそれほど感じられないものもある。(277)(278)はそれぞれ「最前よりも」「いつもより」という比較表現を伴う例である。

(277) 女房……それにつみて、おはなしが御座りんす。さっきね、平^{ひら}さんのおッしやりんすに、よ。と、客人の顔を見ていわふとする。平は^{さいぜん}最前よりも、酒よほどまはり、大げんきとなり、うたい声にて、平さやうな事は船中にては、申さぬ事にて候。(遊子方言)

(278) 幸「手めへもうちつと、仇吉、だまつてゐてやればいゝ。^{よつほど}余程三孝がいつもよりいゝ男のやうに見えたものを、大しくじりだ。(春色辰巳園)

また、比較ということに関連して、「～より」といった比較対象をとらないが、(279)(280)のように以前の状態や普段の状態との比較が想定されるような例も見られる。

(279) してみれば家橘が時分から最うよほど利発になりましたネ（浮世風呂）

(280) △●「仇さん、おめへはまぼしかろう。少し斯いふあんばいに置ふの△仇「ア、ナニそんなじやアないヨ。今日はよつほど能ヨ。いつも日のくれる時分になるとしきりに痛くなるが、けふはそんなでねへからもふよかろうヨ（春色辰巳園）

(279)のような変化をあらわす述語の場合にはある時点が基準としてあり、そこからの差が想定され、(280)も普段の状態との比較が想定される。このような例は、現代語においていずれの用法ともみとめがたい位置づけ未詳の例としてあげた中に数例見られたが、近世後期においては比較的多いことも、「よほど」という副詞の変遷を考える上で重要だと思われる。

《必要判断用法》に通じるもの（3例）

現代語における必要判断用法は、「よほど」が「ないと」「なければ」といった否定条件節と共起して主節に否定的な事態をとる例が、「ないといけない」「なければならない」等の、ひとまとまりで文のモダリティをあらわすとされる分析的な形式と共起する例よりも圧倒的に多い。しかし、近世後期に見られた必要判断に用いられる用例の3例中2例が分析的な形式と共起する例であり、「ないといけない」「なければならない」と共起する用い方が先行していた可能性も考えられる。

(281) 長「遊^{あそび}といふものは、面白^{おもしろい}づくしにして金をつかはねばならぬやうにしかけた物だから、手めへから^{りやうけん}了簡^{かんべん}つけて、よつぽど勘弁せねばならねへ（浮世床）

(282) 蝶「姉さん^{ねへ}と私^{わちき}と、同道^{いつしよ}につれてお出^{いで}なさいな 藤「イヤおそくなつたから今日はよしねへ。余程^{よつぽど}いそがなければならねへといふ折から、セツのボウ^ん（春色梅兒譽美）

また、否定条件節と共起する例は次の1例見られた。（ただし、これは上方の者が描かれている場面での発話であり、この人物の発話には上方方言との注釈がある。）

(283) 作「...今のやうな事しては、短気^{たんきもの}者の大ごくどう、軍書^{ゑいし}でいはゞ猪武者^{いのしゐしや}、ぢやによつて、世の中は化物^{こを}は怖ないが、馬鹿^{ばか}ものがこはいといふ。そこちやて。江戸の親たちが男の子持たら、余程^{よほどきび}厳しう育てにや役^{やく}たゝぬ。自慢^{かみがた}ぢやないが、上方には其様^{そない}な馬鹿者^{でけ}は出来ぬぢや。（浮世床）

以上、近世後期の資料の中には少数ではあったが、現代語の用法に通じると判断される例についてとりあげて述べた。

5. 3. 4 近世後期の「よほど」の使用実態のまとめ

5. 3では、近世後期の江戸語資料における「よほど」の使用実態を調べ、主に、「よほど」が用いられる文のタイプと共起する状態性をもつ語について、現代語との違いに着目しながらその傾向について述べた。調査で明らかになった点をまとめる。

①近世後期の「よほど」が用いられる文には、現代語には見られないような例も多く、

〈1〉既定の状態や事態の描写

〈2〉相手や第三者への評価判断、広い推量判断

に用いられている例が特に多く見られた。現代語と比べると構文的な制約は緩く、少なくとも平叙文において、より広く用いられていたといえる。

②「よほど」が共起する状態性述語には、形容詞を中心とする【評価的なもの】が多い点は現代の用法と共通する。一方、現代語の用法に多い【人の感情や心情】をあらわすような語は少なく、現代語にはほとんど見られない【知覚しやすい状態】をあらわす語が見られた。また、意志動詞はほとんどないが、状態動詞、無意志動詞と共起して、特に【時間量】【空間量】【変化量】をあらわすものが目立ち、程度だけでなく量の面もあらわしていたことがうかがわれる。

③現代語の用法につながると思われる例が全体の中で占める割合は、105 例中 12 例（全体の 11.4%）とわずかであり、近世後期においてはこれらが用法として定着しているとはいいがたい。しかし、《推定判断》《比較評価判断》《必要判断》に用いられている例がそれぞれ 3～6 例ずつみとめられ、以降現代へと拡大していくことが予想される。

以上のことは、近世後期の江戸語資料として残されたもののうち限られた範囲での調査によるため、「よほど」の使用が、用いられる文のタイプ、共起する状態性をもつ語において上で指摘したものに限られることを主張するものではない。しかし、対象とした資料の範囲においても、現代語の用法にみられるような制約はなく、平叙文において程度や量をあらわす副詞としてより広い用いられ方をしていたこと、そしてそれが具体的にどのようなあらわれていたかということを実例をもって示した。

5. 4 近世後期以降～明治期・大正期～現代への変遷

5. 3 では近世後期の「よほど」の実例を調べ、平叙文においては現代語より広く用いられるなかで、現代語のいくつかの用法につながると思われる例がわずかながら見られることを確認した。5. 4 では明治期、大正期の「よほど」の分析を通して、現代に至る用法の変遷をみる。明治～大正期は 5. 3 でみた近世後期の使用状況から現代語の用法へと変化し、定着していく過渡期にあると考えられ、この時期の「よほど」の用例を分析することは、本稿の考察の中心である現代語において少数例にとどまるものや位置づけ未詳とした例を検討する手がかりになると考えられる。

5. 4. 1 現代語の用法への変化

5. 3 でみた近世後期から、現代語への変化を考えるにあたり、明治期、大正期の資料を加えて分析を行う。対象とする用例数は次のとおりである。表 22 として、3. 2. 3 であげた表 4 を再掲する。

表 22：近代語の形態別用例数（「よほど」「よっぽど」）（表 4 再掲）

	よっぽど	よほど	計
明治期	200	296	496
大正期	95	228	323

明治期、大正期になると、現代語の用法と同様に解釈されるものが目立ってくる。以上の用例について、第 4 章で提示した《推定判断用法》《比較評価判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》《意志不実行用法》のそれぞれの構文的特徴をもつかどうかを検討した。5. 3 でみた近世後期から、明治期、大正期を経て、現代語の用法に至る用例の分布を表 23 に示す。数字は該当する用例数であるが、近世後期（105 例）、明治期（496 例）、大正期（323 例）、昭和戦後（1005 例）と対象とした用例数にばらつきがあるため、それぞれの時期ごとに（ ）にその時期の用例全体に対する割合を示す。

《推定判断用法》《比較評価判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》《意志不実行用法》は、いずれも現代語において構文的な制約が強い用法であり、これら 5 つの用法をあわせると現代語の用例全体の 96.4% を占める。これらの用法のそれぞれの時代の用例の分布を順に示した。（ここでは用法の変化や定着の変遷を大きく把握することが重要であるため、実際には複数の構文特徴をあわせもち用法間にまたがると解釈すべき境界的な例も、便宜的にいずれかの用法に振り分けてある。そのような境界的な例はごく少数であり、全体にさほど大きく影響を及ぼすものではないと思われる。）

表 23：近世後期から現代までの各用法の用例数と割合の変化

	近世後期	明治期	大正期	昭和戦後(現代)
《推定判断用法》	5 (4.8%)	102 (20.6%)	84 (26.0%)	478 (47.6%)
《比較評価判断用法》	4 (3.8%)	105 (21.2%)	41 (12.7%)	260 (25.9%)
《必要判断用法》	3 (2.8%)	29 (5.8%)	33 (10.2%)	120 (11.9%)
《例外提示用法》	0 (0 %)	0 (0 %)	5 (1.5%)	76 (7.6%)
《意志不実行用法》	0 (0 %)	8 (1.6%)	13 (4.0%)	35 (3.5%)
上記用法以外の使用	93 (88.7%)	252 (50.8%)	147 (45.6%)	36 (3.6%)
計	105	496	323	1005

表 23 から、現代語の 5 つの用法それぞれの割合が現代語に至るにつれて高くなる傾向にあり、定着していくことが読みとれる。5 つの用法をあわせた割合は、近世後期の資料においては全体の 11.4% であったのが、明治期には 49.2%、大正期には 54.4%、現代語にお

いては 96.4%とそのほとんどを占めるに至る⁵⁴。

5つの用法以外の使用については、近世後期～明治期・大正期においても、平叙文であれば、既定の事態や状態、評価、推量判断、さらに主節だけでなく従属節にもあらわれるなど、近世後期の資料に見られたように幅広く用いられ、「よほど」は構文的な面には積極的に関わらずに程度や量をあらわしていたようである。近世後期にはほとんどがこのような使用であった。(現代語の用法につながると思われる例についてもこの時期に用法として定着しているといえるほどの割合ではなく、たまたまそのような構文において用いられたものがあつた、と考えるべきかもしれない。)それが、明治、大正期には約半数になり、現代語に至っては、構文的に制約のある用法に使用が限定されていくのに伴い、わずか 3.6%となる。

さらに、5つの用法以外の使用に注目し、「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」をあらわすと解釈されるものを取りだして表 24 に示した。これは、現代語において特定の積極的な構文的制約をもたない例や位置づけ未詳とした例に、「よほど」が結びつく状態性をもつ語によって「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」をあらわすものが目立ったこと、同様の例が 5. 3 でみた近世後期の用例に少なくなかったことによる⁵⁵。

⁵⁴ なお、佐々木文彦(2010)でも副詞「よほど」に関して、明治時代の「よほど」を中心に、中世末期～現代への用法の変化についての観察がなされている。佐々木(2010)では、それぞれの構文的な具体的な規定はないものの、a)因果関係、b)条件表現、c)比較表現、の3つを現代語のデータに見られるパターンであるとする。これらはあがっている用例から、a)が本稿の《推定判断用法》、b)が《必要判断用法》と《例外提示用法》、c)が《比較評価判断用法》にほぼ対応すると思われる。中世末期の室町時代にはd)単純強調のみであった用法が、明治時代にかけて約半数になるとともに、先のa)b)c)3つの用法とe)疑問表現(本稿ではたてていない)、f)仮想表現(本稿の《意志不実行用法》に対応)に広がり、その後、現代語の「典型的な用法」としてはa)b)c)の3つに限られるようになることが、用例数の分布のグラフで示されている。佐々木(2010)では、このような変化について、「わざと」「強いて」などとともに「話し手・書き手の表現意図を強調するため」のレトリック表現への変化ととらえる見方が示されている。レトリカルな表現意図を強める方向での変化というのはやや漠然としており、このとらえ方の是非はここでは議論できないが、「よほど」自体の近世から現代にかけての変化の大まかな道すじは、本稿の資料による分析でも同じ傾向がみとめられた。

⁵⁵ 播磨桂子(2006)は「よほど」の使用条件の変化に注目したものであり、中世までの「よっぽどに(過不足なく、ちょうどよい程度に)」「よっぽど(ほとんど、大部分)」「()内は意味」のそれぞれの用法は「何らかの基準に対し一致不一致をはかるといふあり方」(p.353)が共通しており、それが、明治、大正期に比べて用法が縮小した現代語に至っても「ある基準の存在を前提に、それを満たすに足る程度の、という原義を引き継いだ用法を持っている」(p.361)という見方を示している。播磨(2006)の考察は使用条件の変化を認めつつ、現代までの用法とのつながりを見出そうとするものと思われるが、その中で、現代語と同じ用法が出揃うとされる明治・大正期の例の分析において、現代語の用法に直接つながるもののほか、「ある事物からの変化」「ある事物・状態との異なり」「ある時点・地点からの隔たり」「その他」とされるものがあつた。これは、本稿では、現代語の分析で「位置づけ未詳」とした例にめだったことから表 24 でとりだした「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」に相当する。播磨(2006)では明治期・大正期における用例数等は示されていないが、やはりこのようにグループ化して提示する程度にまとまった数の用例が存在するタイプであつたのだと思われる。

表 24：近世後期から現代までの 5 つの用法以外の使用に注目した用例数と割合の変化

	近世後期	明治期	大正期	昭和戦後(現代)
5 つの用法の合計	12 (11.4%)	244 (49.2%)	176 (54.4%)	969 (96.4%)
上記用法以外の使用				
基準あり ⁵⁶ { (変化量)	7 (6.7%)	24 (4.8%)	41 (12.7%)	12 (1.2%)
{ (相違量)	0 (0 %)	9 (1.8%)	17 (5.3%)	4 (0.4%)
(時間量)	7 (6.7%)	53 (10.7%)	9 (2.8%)	6 (0.6%)
(空間量)	9 (8.6%)	11 (2.2%)	8 (2.5%)	2 (0.2%)
(その他)	70 (66.7%)	155 (31.3%)	72 (22.3%)	12 (1.2%)
計	105	496	323	1005

「よほど」が「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」をあらわす場合にそれぞれが結びつく状態性をもつ語の代表的なものは次のとおりである。

変化量：[以前より] Adj {く／に} +なる V てくる 変わる 変化をあらわす動詞

相違量：[～と] 違う 異にする かけ隔てる 離れる

時間量：経つ かかる 過ぎる まわる 続く 間がある ／ {前 以前 昔} から 後に

空間量：(距離が) ある いく くる 離れる

現代語において 5 つの用法の構文特徴を積極的にもたない例、1005 例中 36 例 (3.6%) のうち、「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」をあらわすものを取りだして提示すると、数にばらつきはあるものの、近世後期から明治、大正期にも比較的まとまった数用いられていたことがわかる。しかし、大正期から現代にかけては 5 つの用法が定着していくなかで、やはり数を減らしてきている。これらは現代語の資料として対象とした用例の中に確かに存在するものであるが、割合の推移をそのまま読みとれば、明治、大正期に用いられていた使用の残存～保存であるとみなしてよいのではないかと思われる。

また、表 24 は用例数全体に対するそれぞれの割合を示したものであるため直接読み取りにくい、5 つの用法以外の使用の動向に注目すると、表 24 でとりだした「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」をあわせたものが 5 つの用法以外の使用全体に占める割合は、近世後期に 24.7%、明治期に 38.5%、大正期に 51.0%、現代では 66.7%であり、この点でも、「よほど」の使用の条件、環境が近世後期から現代にかけて限られてきていることがわかる。

以上、近世後期から明治期、大正期、現代のそれぞれの用例数の分布の変化の観点から、

⁵⁶ 「基準あり」というのは、「変化量」については以前の状態が、「相違量」については相違のある対象がそれぞれ基準として常に想定しうるものである、ということである。

「よほど」の使用が、構文的な面には積極的に関わらずに広く程度や量をあらわしていたものから、構文的な制約のある用法のなかでの程度をあらわすものへと変化し定着してきたこと、また、現代語においていずれの用法の特徴ももたない例に目立った「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」をあらわすものについても、明治期、大正期には比較的よく用いられておりその後使用が減少する傾向にあることを確認した。

5. 4. 2 各用法にみられる現代語との相違

5. 4. 1 では、用例数の分布という量的な側面から用法の変化の大まかな方向性をみたが、共通する構文特徴によって整理した同じ用法内においても個々の用例をみていくと時代ごとに現代語の用法とは異なる点が指摘され、用法の変化と定着の過程を示すものと思われる。以下、用法ごとに述べる。

5. 4. 2. 1 《推定判断用法》

本稿第4章の現代語の「よほど」の用法記述において《推定判断用法》としたのは、次のように既実現事態（点線部分）が明示され、それにもとづいた、その事態の生じる原因や事情として解釈される状態～事態の{推定／説明}的判断において、程度が〈過度に「大」〉であることをあらわすのに用いられるものであった。

(284) 焼跡の上の人々は、余程熱いらしくしばしば汗をぬぐっている。(椎名麟三「永遠なる序章」)

(285) 薬の効き始めによほどひどく暴れたのだろう、膝の下と足首の、例の縛り方をした箇所には青痣が残っていた。(有吉佐和子「華岡青洲の妻」)(例(40)再掲)

このような判断構造において用いられることのあらわれとして、「よほど」が共起する叙法形式は(284)のような「推定」をあらわす形式、(285)のような「説明」をあらわす形式に偏るが、それ以外の推量形式と共起する場合にも多くは既実現事態と{推定／説明}的判断という関係がみとめられた。さらに、無標形式である場合も同様の関係がみとめられたことから、この《推定判断用法》として位置づけられることは第4章で述べたとおりである。

無標形式と共起する場合は次のような例であるが、より確信的な述べ方になることから、実例においては会話や独話で、ある事態をもとに相手や自分に対する評価をくだすような場合に「わ」「ね」「な」などの終助詞を伴って用いられることが多いという特徴があった。ただし、これらもやはりその判断（ここでは評価）の内容（「親不孝だ」「ウブだ」「間がわるい」「夕立荘に縁がある」）は点線部分で示した既実現の事態に対して原因、事情として

の解釈が可能であり、また、(284)(285)のように「らしい」「のだろう」といった特定の形式によって{推定／説明}的判断であることがマークされる典型例に比べると用例数も限られることから《推定判断用法》の周辺のなものとして位置づけた。

(286)「.....なあ、新さん、いくら相手が頭巾をかぶって目だけ出してたって、何十年も連れ添うた自分の女房に気がつかないなんて、お前よっぽど親不孝者だな。匂いとか素ぶりでもわかりそうなもんじゃないか！」(石坂洋次郎「石中先生行状記」)(例(32)再掲)

(287) 用事を言いつけた二人を追いたてるとマスターはそのまま坐りこんで、「お前、あの子に乗っけて何するつもりだったんだ」「こ奴ホレてんだよ。昨日あれはお前の恋人かって言ったらうんて言いやがった」杉山が言った。「お前もよっぽどウブだなあ」(石原慎太郎「ヨットと少年」)

(288)「誠ちゃんに、見られちゃったわ。あの子、この頃ませてるの。好奇心が強くて困るの。新婚さんの部屋をのぞいたり、つまらないことにばかり、興味をもつ。あの子に見られるなんて、今日は、よっぽど、間がわるいわ。それでなくとも、あることないこと、おしゃべりよ。困ったわ、どうしましょう」(舟橋聖一「雪夫人絵図」)(例(33)再掲)

(289) 八六年から二年連続で夏の大会に出場した東亜学園(東京)の川島堅投手は、ベスト4まで勝ち進んだ八七年夏に宿泊した。ドラフト一位でカープに入団。二軍で再び夕立荘を訪れた川島投手は「おばちゃん、僕はよほど夕立荘に縁があるね」と笑った。(毎日新聞 95.03.31)(例(34)再掲)

以上のことをふまえたうえで近世後期に遡ると、現代語の《推定判断用法》に通じる特徴をもつ次のような例は5例(4.8%)とわずかであり、1つの用法として確立しているとはいいがたい。

(290) 北「ハヽヽヽヽ、三百のものを、四百に買うとはあたらしい／＼ 弥「それでもおしくねへ。アノ娘はよっぽどおれに、きがあつたとみへる」北「おきやアがれ。ハヽヽヽヽ 弥「それでも^{しよて}初手から、おれが顔ばかり見ていたハ」(東海道中膝栗毛)

一方、直前の相手の言動や話題といったある事態をうけ、それをもとに評価をくだしていると解釈される例があり、105例中23例(21.9%)と比較的目立つものであった。

(291) 〔五郎〕...またおれにかぎらず、手前のよぼうとおもふきやくは、ちつとは地切^{じきり}をきらねへけりやアならねへ。それとも、あたまのものは借物なら、あすのばんまでに、壹兩貳分ばかりかしておいてくりや。これ、だまつているは、できねへか。〔すま〕そんならぬしは、よくどくづくだね。〔五郎〕できざあいゝが、手前もたゞよぼうとは、よつぽどむしのいゝものだ。(傾城買二筋道)

(292) 丹「そりやアいゝが、ひもじくなつてきた。はやくなんでも喰^くしてくれりやアいゝ。仇「おまへは余程^{よつぽど}手まへ勝手^{がつて}だヨ (春色辰巳園)

(293) 甘「ドレ／＼、ハハア、夫婦とおぼしき者、相合傘^{あひやいがさ}で、しかも欣^{きん}然^{ぜん}として通る むだ「何だらうネ。男は凡^{およそ}中位^{いろをとこ}の好男^{あたま}だが、頸^{せいてへ}へ青黛^{なす}を泥^なつて、チト否身^{いやみ}たつぷりの拵^{こしら}へ。ソシテ女は、いづれあやしき者の果^{はて}と見えるが、高慢^{つら}な面^でをして相合傘^かは出来^でさねへネ。よつぽど鉄面皮^{あつかましい}やつらだ。(浮世風呂)

これらはある事態をもとに評価をくだしている点で、先にあげた現代語の例(286)～(289)と共通する面がある。現代語の多くの例のなかで(286)～(289)をみる限りでは《推定判断用法》のなかで位置づけるのが妥当であると思われた。ただし、近世後期においては《推定判断用法》が用法として確立しているとはいいいがたいこと、それに対して(291)(292)(293)のような例が 105 例中 23 例 (21.9%) とむしろ多く、前提となる事態からその原因や事情が推定されているというよりは単に評価をくだしていると解釈するのが自然であると思われること、特に(291)のように、先行するある事態(点線部分)に対して判断(評価)の内容が原因や事情として解釈しにくい例もあることから《推定判断用法》とは別扱いし、表 23、表 24 でも「上記以外の使用」として扱った。これらの扱いについては再考の余地もあるが、重要なのは、現代語の《推定判断用法》が用法として定着するのに先行して、ある事態をもとに評価をくだすような例が多く用いられていたということである。

明治期、大正期には、表 23 から、《推定判断用法》がそれぞれ全体の 20.6%、26.0% と増加の傾向にあり、まとまった用法として定着してきたことがうかがわれる。既実現事態(点線部分)が明示され、それにもとづいた、その事態の生じる原因や事情として解釈される状態～事態の{推定/説明}的判断に用いられ、共起する形式が「推定」をあらわす形式(「と見える」「らしい」「ようだ」など)、「説明」をあらわす形式(「のだろう」「のにちがいない」「のではないか」「のか」など)に偏るのも現代語と同様である。(以下、明治期の用例には[明]、大正期の用例には[大]と記す。)

(294) [明] 山門の裏には物寂びた小さい拝殿があった。余程古い建物と見えて、軒に彫付けた獅子の頭などは絵の具が半分剥げかかっていた。(夏目漱石「行人」)

(295) [明]「御腹が痛むんですって?」「おや—お休みになったばかりのところを起して御気の毒でしたねえ……。急に痛み出したんですって。私ね、成たけ旦那様を起さないようにと思ってね、お駒さんと一緒に介抱したんですけど、余程強くお痛みなんですよ。ついお声が出るもんですから、旦那様も奥様も起きていらしって……」(田山花袋「生」)

(296) [大]「困ったなあ」木村は余程困り切ったらしく握った手を鼻の下にあてがって、下を向いたまま暫らく思案に暮れていたが、「いくら程借りになっているんです」「さあ診察料や滋養品で百円近くにもなっていますかしらん」(有島武郎「或る女」)

(297) [大] 奥の方の暗い壁へよせて、臥床が敷いてあって、仰に枕している友達の坊主頭がすこし光って見える。まだ岸本は夜の明けたのも知らないらしい。「へえ、よく寝てるね」と青木は微笑みながら言った。「余程御疲れなすったんでしょうよ」と操も笑う。(島崎藤村「春」)

一方で、近世後期に優勢であった、ある事態をもとに評価をくだしていると解釈される次のような例がこの時期にもやはり多く見られた。

(298) [明]「君は小夜さんを手放す話になると、とにかく気の進まないようだが、小夜さんが老父の持物になったからって、何だよ、何もそう落胆することはないよ。小夜さんだってまさかあんな梅干老爺に惚ッ了う気遣は有るまい。ね、そうすりゃ君は兄者人です、随分無断でお閨房へまでも這入り込めようというものだ。何だって好きな真似が出来まさあ」ト妙にニコニコとなって、「これ程言ったら分ったろう」哲也は眉を顰めて、「君も余程邪推深いねえ。あれ程僕がそんな事はないと言ってるじゃないか。そんな乱倫な—大抵考えても分りそうなものだ」「へいへい、御道理様でございます……君も余程捌けねえ男だ。これ程此方が碎けて出たら、もう好加減に暴露して言っちゃっても好きそうなものだ、が、……」(二葉亭四迷「其面影」)

(299) [明] 顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡くなんて、マドンナも余っ程気の知れないおきやんだ。(夏目漱石「坊ちゃん」)

(300) [大]「それぢや、ゆつくりお休みなさい。でも、ほんとによく来て下さったのねえ、

来たくなつたから来たなんて、この雪の降るのに。おほゝゝゝ、よっぽど清さんも粹狂者ね。」と、小菊が床をとつて去らうとした時、彼は泣くやうに頼み、また傲然と命じた。(島田清次郎「地上」)

- (301) [大] 親鸞 善鸞は何のためにお前を呼び寄せたのだろう。唯円 淋しいですよ。私と逢って話したかったですって。私のような者をでも慰めにお呼びなさらなくてはならないとはあの方も余程孤独な方です。(倉田百三「出家とその弟子」)

(298)(300)は相手の言動から相手に対して評価をくだす例であり、(299)(301)は第三者である「マドンナ」「善鸞」に対して、やはり前提とされる事態から評価をくだす例である。いずれも「よほど」が結びつくのは人となりや性格などをあらわす語で、相手や第三者について判定するものであるが、明治期、大正期には同様の例が特に目立つ。語例のみあげる。

{怠け者だ 道楽者だ 剽軽者だ 愚者だ 正直者だ 変人だ 卑劣な方だ 気楽な人だ 妙な男だ 苦労性の方だ 男らしくない性質だ 度胸のない方だ 欲のない男だ 負け惜しみの強い男だ 趣味の低い人だ 話せない奴だ 呑気だ 馬鹿だ 無学だ 愚かだ 薄野呂だ 間ぬけだ 意地張りだ 剛情張りだ 物数寄だ 主人思いだ 物覚えがわるい 法螺が上手だ 変わっている どうかしている 焼きがまわっている 毫碌している 妙な真似をしている 人が悪くなる 減らず口が達者になる}

このような、相手の言動や、認識している事実をうけて評価をくだす例は、その評価の内容が、前提としてある事態の原因や事情としても解釈しうるものであり、《推定判断用法》と近い。しかし、先に述べたとおり近世後期の資料においてもこのような例は多く見られ、また、次のように原因や事情としては解釈しにくく、前提となる事態から引き出された評価としか読めない例がある。

- (302) [明] 「それは何だい？」と時子は冷笑って、「一つ家に居て、朝晩顔を合せていながら手紙を遣り取するなんて、お前様達は余程^{よっぽど}妙な真似をしているねえ」(二葉亭四迷「其面影」)

- (303) [大] 「そんな腕を持っていながら、名古屋くんだりまで苦労をしに行くなんて、余程^{よっぽど}可笑いよ」(徳田秋声「あらくれ」)

このことから、明治期、大正期においても《推定判断用法》とは別に、表 23 では「上記以外の使用」の(その他)に含めて扱った。「上記以外の使用」に一括されるため表 23

には直接反映されていないが、このタイプの例を時代ごとにみると、近世後期（105 例中 23 例(21.9%)）、明治期（496 例中 55 例(11.1%)）、大正期（323 例中 24 例(7.4%)）と減少の傾向にある。

このように、近世後期、明治期、大正期の事例をみてくると、現代語において《推定判断用法》のなかで位置づけた(286)～(289)のような少数例も、この前提とされる事態をうけて評価をくだすタイプと解釈されるものからつながりをみることができるのではないかと考えてくる。そしてこのタイプの、近世後期から現代にかけて減少の傾向にあるという通時的な動向もふまえて現代語の《推定判断用法》が確立する過程を考えると、「よほど」は、相手の言動や、前提としてある事実をうけて評価をくだすタイプも含めて、先行する事態にもとづく判断に広く用いられていたが、その判断の内容が、ある事態からの評価であるような使用は次第に減少し、既実現事態を結果としてその事態が生じた原因や事情を推定する使用が優勢になっていった、つまり、既実現事態と判断内容という 2 つの事態の時間関係、因果関係がより明確になる方向で《推定判断用法》として定着していったとみることができるのではないか。

以上、現代語の《推定判断用法》の実態をもとに、近世後期～明治、大正期の用法の用例数の分布の変化や個々の用例の検討から、用法の確立の過程について考察した。

5. 4. 2. 2 《比較評価判断用法》

現代語の「よほど」の用法記述において《比較評価判断用法》とした構文特徴は、比較対象の表示、すなわち「～より」「～の方が」などの形式で比較する対象が示される比較構文をとるというものであり、「よほど」は比較対象である X と Y の差が〈過度に「大」〉であることをあらわす。

(304)「……臆病者として生きるよりも、馬鹿者として死んだ方がよっぽどました。」（福永武彦「死の鳥」）

(305)「大変なことになる前に、地頭所の役人に来てもらって取締りを強化したらどうか。…役人たちの経費はわれわれが負担すればいい」という意見が多かった。それに対して忠敬は、強い口調で反論した。「冗談ではない。役人が、こんなときに何の役にも立たないのは、江戸を見たってはっきりしている。役人に金を出すぐらいなら、その分村民たちに与えたほうがよっぽどいい。……」（佐藤嘉尚「伊能忠敬を歩いた」）（例(120)再掲）

比較対象は「Y より X の方がよほど～だ」という関係において特に X が「～の方が」という形式で表示される割合が高く、「よほど」を伴う文は無標の言い切りの形で述べられる終止述語であることから、「よほど」が用いられる比較は、一方を積極的に選択して評価す

る比較判断であるという特徴があった。さらに、比較判断の内容（XとYの関係）自体が一般常識や相手の主張といった先行文脈に反するもので、それをあえて主張する状況で用いられやすいことを述べた。

近世後期に遡ると、「よほど」が比較対象が表示される構文で用いられる例は105例中6例（5.7%）とわずかであり、そのうち現代語の《比較評価判断用法》の特徴であった、比較判断自体が一般常識や相手の主張といった先行文脈に反するという評価的な面をもつと解釈しうる例は4例。2例は、そのような評価的な面は感じられない、比較対象が表示されるが「最前より」という以前の状態や「いつもより」という普段の状態との比較に用いられる例であった。

(306) 女房……それにつみて、おはなしが御座りんす。さっきね、平^{ひら}さんのおッしやりんすに、よ。と、客人の顔を見ていわふとする。平は^{さいぜん}最前よりも、酒^{よほど}よほどまはり、大げんきとなり、うたい声にて、平^{ひら}さやうな事は船中にては、申さぬ事にて候。（遊子方言）

(307) 幸「手めへもうちつと、仇吉、だまつてみてやればいゝ。余程^{よつほど}三孝がいつもよりいゝ男のやうに見えたものを、大しくじりだ。（春色辰巳園）

明治、大正期には比較構文で用いられる例が増え、具体的な比較対象が示されることによって「よほど」がその基準からの程度差をあらわす用法として定着してくる。ただし、個々の用例をみると、現代語の《比較評価判断用法》の特徴であった先行文脈（一般常識・相手の主張など）に反する比較判断に用いられる(308)(309)のような例が見られる一方で、この時期には比較対象が表示されるものの、単に比較対象の差について述べているとしか解釈できない(310)(311)のような例も少なくない。

(308) [明] 自分の為に送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜んでくれるんじゃない。みんなが酒を呑んで遊ぶ為だ。自分独りが手持無沙汰で苦しむ為だ。こんな送別会なら、開いてもらわない方が余程^{よつほど}ましだ。（夏目漱石「坊ちゃん」）

(309) [明] 「さいならはいいが西洋人はどうした」「西洋人はあつけに取られて茫然と見ていたそうだハハハハ面白いじゃないか」「別段面白い事もない様だ、それを態々報知に来る君の方が余程^{よつほど}面白いぜ」と主人は巻烟草の灰を火桶の中へはたき落す。（夏目漱石「吾輩は猫である」）

(310) [明] ……彼の足の下には、スマタラ産の黒猫、——天鷲絨の様な毛並と黄金そのままの眼と、それから身の丈よりも余程^{よつほど}長い尻尾を持った怪しい猫が、脊中を山の如く高く

して躊躇まっている訳になっていた。(夏目漱石「彼岸過迄」)

- (311) [明] 安寿は先に立ってずんずん登って行く。厨子王は訝りながら附いて行く。暫くして雑木林よりは余程高い、外山の頂とも云うべき所に来た。(森鷗外「山椒大夫」)

また、現代語の《比較評価判断用法》の典型であった先行文脈（一般常識・相手の主張などに反する意外性をもった比較判断とはいえないような、「普段の状態」「普通の状態」「以前の状態」「現在の状態」などある基準が比較対象としてあらわれ、「よほど」が単にその基準からの差が「大」であることをあらわす場合にもよく用いられている。

- (312) [明] お玉は肌も脱がずに、只領だけくつろげて、忙がしげに顔を洗う。いつもより余程手を抜いてはいるが、化粧の秘密を藉りて、疵を蔽い美を粧うと云う弱点も無いので、別に見られていて困ることは無い。(森鷗外「雁」)

- (313) [明] 安井はこの悪性の寒気にて中てられて、苛いインフルエンザに罹った。熱が普通の風邪よりも余程高かったので、始は御米も驚ろいたが、それは一時の事で、すぐ退いたには退いたから、これでもう全快と思うと、何時まで立っても判然しなかった。(夏目漱石「門」)

- (314) [明] 「お延が来たから晩に藤井でも呼んで遣ろうか」職業が違っても同じ学校出だけに古くから知り合の藤井は、津田との関係上、今では以前より余程叔父に縁の近い人であった。(夏目漱石「明暗」)

- (315) [明] 私は東京へ来て高等学校へ這入りました。その時の高等学校の生徒は今よりも余程殺伐で粗野でした。(夏目漱石「ころ」)

このように、同様に比較対象が表示されるものについても、明治期には現代語の用法よりも広くさまざまな比較に用いられていたことが指摘される。

このことは、比較対象のあらわれ方の違いという点からも確認できる。「X は Y よりよほど A だ」「Y より X の方がよほど A だ」という関係にある「X」と「Y」のあらわれ方をその表示形式ごとに整理すると次の表 25 (第 4 章、4. 3. 2. 1 の表 11 の再掲)、表 26 (明治期) のようになる。

表 25：現代語の「よほど」と共起する比較対象の表示形式と用例数

X		Y	
形式	用例数	形式	用例数
方が	184 (69.7)	より	129 (48.9)
は	25 (9.5)	なら	10 (3.8)
が	4 (1.5)	に比べて	6 (2.3)
こそ	2 (0.8)	も-ないが	1 (0.4)
て	1 (0.4)	どころか	1 (0.4)
となると	1 (0.4)	たって	1 (0.4)
		は-だが	1 (0.4)
明示 小計	217 (82.2)	明示 小計	149 (56.4)
非明示	47 (17.8)	非明示	115 (43.6)
計	264 (100)	計	264 (100)

表 26：明治期の「よほど」と共起する比較対象の表示形式と用例数

X		Y	
形式	用例数	形式	用例数
方が	46 (43.8)	より	73 (69.5)
は	18 (17.1)	に比べて	8 (7.6)
が	3 (2.9)	なら	5 (4.8)
でも	2 (1.9)	からみると	1 (0.9)
では	1 (0.9)	じゃ	1 (0.9)
と	1 (0.9)		
被連体 N	1 (0.9)		
φ	1 (0.9)		
明示 小計	73 (69.5)	明示 小計	88 (83.8)
非明示	32 (30.5)	非明示	17 (16.2)
計	105 (100)	計	105 (100)

「X」「Y」それぞれについて、明示される場合の形式ごとの用例数と、「よほど」が用いられる文の中に「X」と「Y」のいずれか一方しかあらわれない場合に、片方は明示されないことから非明示の用例数も示した。()内は、いずれか一方でも比較対象が表示される全用例に対する割合である。

表 25 から、現代語においては比較対象は「Y より Xの方がよほど～だ」という関係において「X」が明示される割合が高く、特に「～の方が」という形式で表示されやすいこ

とがわかる。これは、「よほど」が用いられる比較が、比較判断の内容（X と Y の関係）自体が先行文脈に反するもので、それをあえて主張する状況で用いられやすく、一方を積極的に選択して評価する比較判断であることのあらわれであると考えられる。

一方、表 26 をみると、明治期においては「Y より X の方がよほど〜だ」という関係において「Y」が明示される割合が高く、現代語とは異なる。これは、明治期にも、現代と同様、比較判断の内容（X と Y の関係）自体が先行文脈に反するもので「X」を積極的に選択して評価する比較判断に用いられるものがあるのだが、それだけでなく、客観的な比較対象の間の程度差を述べる場合や、先の(312)～(315)のように「普段の状態」「普通の状態」「以前の状態」「現在の状態」などある基準からの程度差を述べる場合など、「Y」で示される基準からの差に重点がある比較にも広く用いられており、「Y」が明示されやすいことのあらわれであると考えられる。

以上、個々の例の検討と比較対象の表示形式の傾向から、近世後期から明治、大正期にかけて比較構文における「よほど」の使用の割合は増加したが、明治期には現代語とは異なり、ある基準からの客観的な程度差を示すような比較にも広く用いられていたことをみてきた。

さらに、基準からの差という共通性から、「よほど」の「変化量」「相違量」をあらわす使用について触れておく。表 24 では、現代語に見られた用法のいずれの構文特徴ももたないものについては「上記用法以外の使用」とし、そのなかで特に目立った「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」を別に示した。このうち、「変化量」「相違量」はある基準が想定され、表示されやすいものであり、近世後期から明治、大正期にかけて一定量の使用が確認された。

「変化量」をあらわすのは、発話時以前のある時点が基準としてあり（文中にあらわれる場合もあらわれない場合もある）、「よほど」が「Adj {く／に} + なる」「V てくる」、その他「変わる」「垢抜ける」など変化をあらわす動詞と結びつく、次のような場合である。

(316) [明] 渠は恐る恐る其処らをぶらつき初めた。夢路を歩む心地で古い記憶の端々を辿りはじめた。成程、様子が変った。しかし矢張、変らない。……ただ豊吉の目には以前より路幅が狭くなったように思われ、樹が多くなったように見え、昔より余程淋びしくなったように思われた。

(317) [明] 「それにお前も、もう年頃だから相応なのがあつたら一人嫁を貰って、私にも安心させておくれよ」母はこう言って笑った。清三は以前のように反対しようとしなかった。昨年から比べると、心も余程折れて来た。(田山花袋「田舎教師」)

(318) [大] 快活な母親の笑い声は、急に際立って高く聞えた。……都会の婦女のような低

い優しい声を田舎者に出せと言う方が無理だ、こう言って母親は笑っていたが、それでも出京の当時に比べると余程低く優しくなった分である。(島崎藤村「春」)

- (319) [大] その中には愛知も帰つて来た。彼は予定より半年おくれてわざと突然にひよっこり帰つて来たのだつた。……出発の時から見ると、彼は余程垢抜けはしたが、相変らず珍竹林で風采は上らなかつた。(長与善郎「竹沢先生と云ふ人」)

このような「変化量」をあらわす例は近世後期から見られ、明治期に 496 例中 24 例 (4.8%)、大正期には 323 例中 41 例 (12.7%) と目立つが、現代語では 1005 例中 12 例 (1.2%) と少数例にとどまる。

また、「相違量」をあらわすのは、「～と」で示される対象が基準としてあり、「よほど」が「違う」「異にする」「かけ隔てる」「離れる」などの動詞と結びつく次のような例である。

- (320) [明] 青年士官は大得意で、「こう見えても、ちゃんと立派な御師匠さんが附いているからね」と言って笑った。その立派な御師匠さんは下宿している士族の家の娘であることがやがて解った。嫂さんのとは余程違うという生田流の調子は、その娘の琴の音に聞き覚えたのである。(田山花袋「生」)

- (321) [明] 赤門の前を通る筈の電車は、大学の抗議で小石川を廻る事になったと国にいる時分新聞で見た事がある。三四郎は池の端にしゃがみながら、不図この事件を思い出した。電車さえ通さないと云う大学は余程社会と離れている。(夏目漱石「三四郎」)

- (322) [大] 菅千春という人の噂なぞが出た。この人は雑誌を販す寄稿家の一人で、年齢から言っても、思想から言っても、若い連中とは余程違っていた。(島崎藤村「春」)

- (323) [大] 実際又河童の恋愛は我々人間の恋愛とは余程趣を異にしています。(芥川龍之介「河童」)

「相違量」をあらわす例は今回調査の対象とした近世後期の資料には見られなかったが、明治期に 496 例中 9 例 (1.8%)、大正期には 323 例中 17 例 (5.3%) といったん増える傾向にあり、その後、現代語では 1005 例中 4 例 (0.4%) とごくわずかにとどまる。

これら「変化量」「相違量」をあらわす「よほど」の使用についても、ある基準が必ず想定され、そこからの差をあらわすものとして、近世後期以降に、比較される対象間の程度差をあらわす用法の広がりの中でそれらに準ずるものとして考えられるだろうか。比較対象が明示されるもののうち、単に比較対象の差について述べていて先行文脈(一般常識・

相手の主張など）に反する意外性をもった比較判断とはいえないような例は、明治、大正期～現代へと減少していくが、「変化量」「相違量」をあらわす例もそのあとを追うように、大正期までは一定量の使用があるが、現代語ではわずかに見られる程度にとどまる。

以上、比較対象が明示される個々の例の検討と比較対象の表示形式の傾向、さらに、ある基準からの差である「変化量」「相違量」をあらわす使用の動向から、《比較評価判断用法》とした「よほど」の使用においても、比較自体の性格が変化していることを述べた。近世後期以降、比較構文において2つの対象の程度差をあらわす例が見られはじめ、明治期にはある基準からの程度差を客観的に示すような比較にも広く用いられていたが、大正期～現代と時代を経るにしたがって、比較対象 X と Y の関係自体が一般常識や相手の主張といった先行文脈に反するという評価的な面に重点がある比較判断に偏る方向で変化してきたことを考察した。

5. 4. 2. 3 《必要判断用法》《例外提示用法》

現代語の「よほど」の用法記述において、《必要判断用法》《例外提示用法》としたそれぞれの用法は、否定条件節の形式（「ないと」～「ない限り」）、条件節に前接する語（意志動詞～無意志動詞・形容詞・（形容詞+）名詞）、後続する主節の内容（マイナス事態（あるいは評価）～中立的な事態・プラス評価）の3つの要素が関わり、対極にある、必要性が前面に出る(324)(325)、除外性が前面に出る(326)(327)のような例を典型として区別しうることを述べた。「よほど」はこれら必要性あるいは除外性を帯びる事態の程度が〈過度に「大」〉であることをあらわす。

(324) 六甲縦走路はまだ完全ではない。よほど調査してないと道に迷うおそれがある。（新田次郎「孤高の人」）（例(130)再掲）

(325) 北海道も月に年に開発されつづけるので人家の見えないところまでいくにはよほど遠走りしなければならないが、……（開高健「新しい天体」）（例(136)再掲）

(326) 実際、イギリスなどでは、よほど田舎っぺか下層出身者でない限り、ほとんど箸の使い方を知っている。（中根千枝「適応の条件」）（例(150)再掲）

(327) 小包の場合は知事個人あてのものが多いため、よほど見た目に不審なもの以外は、直接知事室秘書課に運ばれる。（毎日新聞 95.05.17）（例(159)再掲）

近世後期の資料においては、この2つのタイプのうち、《必要判断用法》につながると思われる例が3例見られるのみであったが、うち2例は「ないといけない」「なければならない

ない」などのひとまとまりで必要をあらわす分析的形式と共起するものであり、(324)のような〈否定条件―帰結〉という複文の構造をとるものに先行していた可能性を指摘した。

明治、大正期には、「ないといけない」「なければならない」「～が要る」など、必要をあらわす形式をはじめ、「ないと」「なければ」を代表とする〈否定条件―帰結〉という複文構造をとる例の割合が 496 例中 29 例 (5.8%)、323 例中 33 例 (10.2%) と増える傾向にあり、1 つの用法として定着してきたことがうかがわれる。明治期の用例には典型的な《例外提示用法》にあたる例は見られず、まだ、現代のように《必要判断用法》と《例外提示用法》の 2 つの方向に用法が広がっているとはいえないようである。大正期には、《必要判断用法》とみなしうる例には、〈否定条件―帰結〉という複文構造をとるものを含め、必要をあらわす形式と共起する例(328)のほか、当為をあらわす形式と共起する例(329)(330)のようなものまでがそれに準ずるものとして目立つ。

(328) [大] 母も年をとった、と彼女は書いてよこした。年老いた祖母や母を眼のあたりに見るにつけても自分は余程しっかりしなければ成らないと思うと書いてよこした。(島崎藤村「新生」)

(329) [大] 私は太郎と二人で部屋々々を見て廻るような時を見つけようとした。それが容易に見当らなかった。「この家は気に入った。思ったより好い家だ。よっぽど森さんにはお礼を言ってもいいね」(島崎藤村「嵐」)

(330) [大] 「どうです、寿平次さん、君の意見は。よっぽど考うべき時世ですね」と得右衛門が言う。(島崎藤村「夜明け前」)

一方で、現代語において《例外提示用法》の用例の中心である、(326)のような、主に名詞述語に「ない限り」が後接する〈否定条件―帰結〉の複文構造をとる例はなかったが、現代語の例(327)のような、「よほど」が程度を限定する事態が例外的な扱いを受けることがより明示的に示される表現において用いられる例が数例だけ見られた。

(331) [大] 義雄は、かの女が余ほど情の籠った時の外はおだやかに出ず、どことなく皮肉なやうな、いぢけたやうな物の云ひ振りをするのを、社会一般から見て、不自然な状態に置かれてゐるのを忘れない為めだと受け取つてゐる。(岩野泡鳴「毒薬を飲む女」)

(332) [大] 故意とらしいと釈れば、一種逆手の傲慢とも見誤られるほどに、初対面の人に対する信之の態度は、慇懃を極めたものだった。が、事実それは、どこか世馴れない、人見知りする性分から来ることだった。余程酒でもはいつている場合は別だが、さもな

い限り、生面はもとより一応の知人でも、一皮ふっ切れた感じがもてないうちは、堅く
なって、へんに取片づけた顔をしているのが常だった。(里見弴「多情仏心」)

- (333) [大] 下宿の主婦は客を款待顔に、珈琲を入れて台所の方から持つて来て呉れた。下宿ではめつたに斯ういふことをしなかつた。余程主婦の機嫌の好い時とか、余程めづらしい客でもある時とかに限つて居た。(島崎藤村「エトランゼエ」)

これらと同様の例は現代語にも少数だが確認され、第4章の用法記述においても《例外提示用法》のあらわれ方の1つとして位置づけられるものであった。本稿の大正期の資料にはこのように《例外提示用法》の一角をなす例が確認されたが、現代語においてその多くを占める「ない限り」による〈否定条件—帰結〉の複文構造をとるものはなかった。「～ない限り」という形式自体は明治期にはあり、既に成立していたと考えられる。つまり、《例外提示用法》は、現代語のように「よほど」が「ない限り」と共起して多用されるほどには1つの用法として定着しておらず、その後現代にかけて比較的新しい用法として、主に「ない限り」による複文構造をとるものにまで広がる形で定着してきたものと推察される。

以上、現代語において、連続をみとめながらも対極としてとりだした《必要判断用法》と《例外提示用法》について、《必要判断用法》は近世後期以降、明治、大正期の用例から、その典型とみなしうる例が早い時期から確認されたが、《例外提示用法》については、明治期あたりまでは典型とみなしうる例は見られず未分化であり、大正期以降現代にかけてやや遅れて使用が広がり、定着してきた可能性があることを考察した。

5. 4. 2. 4 《意志不実行用法》

現代語の「よほど」の用法記述において《意志不実行用法》としたのは、次のように「～しようと思った」「～したかった」という意志や願望形式のシタ形と共起し、さらに逆接表現をとり、文脈に自らの意志による不実行が示されるという構文的特徴をもつものであった。他の用法と同様に「よほど」の程度の面をとらえるとすれば、意志・願望の強さの程度が「大」であることをあらわす。

- (334) 「はい。——柳さん!」「え?」「社長室へ来て下さいって」 柳はよっぽど無視してやろうかと思ったが、ここが我慢のしどころと、ぐっと抑えて、社長室へ向かった。(赤川次郎「女社長に乾杯!」)(例(175)(186)再掲)

意志をあらわす形式と共起する例については、山口堯二(2006)でも近世後期以降、「他と比較した相対的な程度差」「推量・推定の表現」「仮定条件」に用いられた例の「後を追う

ように」あらわれるとされ、あげられている例も明治期以降のものである。本稿の調査でも近世後期の資料にはなく、成立自体は他の用法に比べてやや遅かったとみられるが、明治、大正期には次のように「～しようと思った」という意志形式のシタ形と共起し、さらに逆接表現をとり、文脈に自らの意志による不実行が示される、という現代とほぼ同様の例がまとまって見られ、構文的には早くから固定された用法であったと思われる。

(335) [明]「それで君、黙っていたか」ト山口は憤然として眼睛を据えて、文三の貌を凝視めた。「余程^{よっぽど}やっつけて遣ろうかと思つたけれども、シカシあんな奴の云う事を取上げるも大人気ないト思つて、赦して置いてやった」(二葉亭四迷「浮雲」)

(336) [大] ……時子は自分が腑甲斐ない様にも思はれたので、「だつて、私には男のお友達はないんですもの。」と、弁護するやうに云つたが、やがて、ふと一つそれらしいものを思出して、「私一度袂の中へ手紙を入れられたことがあつてよ、お稽古の帰りに入れられたのよ。私、気が付いてから余程父に見せようかと思つたけど、それでは却つて後が怖いやうな気がして直ぐ破つて棄てちやつたの。」と、これで女の資格でも出来たやうに話した。(正宗白鳥「泥人形」)

これら《意志不実行用法》は、構文的な特徴としては早くに定着し、本稿の資料における用例全体に占める割合の推移をみても、明治期に 496 例中 8 例 (1.6%)、大正期には 323 例中 13 例 (4.0%)、現代では 1005 例中 35 例 (3.5%) と、それほど大幅な増減の変化がなく使用量が限られながらも現代まで用いられている。

5. 5 意味と用法の変化のまとめ

5. 2 で近世後期以前の「よほど」について、先行文献(『日本国語大辞典』第 2 版(2000-2002)、山口堯二(2006))の記述をまとめ、5. 3 では近世後期の「よほど」を調査し、その使用の実態について述べた。それらをもとに、5. 4 では、近世後期から明治、大正期を経て現代に至る用法の変化と定着について、用法の割合の分布の変化や用法ごとの用例の傾向を手がかりに考察してきた。5. 4. 1、5. 4. 2 で述べてきたことをふまえて、「よほど」の用法の変化が大きくどのようなようにとらえられるかをまとめる。

山口(2006)によると、原形の「よきほど>よいほど」から室町時代に「よつぽど」「よほど」に一語化するとともに、それ以降「に」「なり」を伴わない副詞の用法がめだつようになり、意味も「相当度(高度寄りの大づかみに概括する程度把握)」に集中していくとされている。そして、この副詞としての用法は、「江戸時代前期ごろまでは、たいてい既定の状態に用いられているが、江戸時代後期には、他と比較した相対的な程度差の表示や、推量・推定・仮定の表現、意志の持続の事後表現など、総じて志向性のめだつ表現にも用途が広

がっている」(p.154)との指摘があり、このような用法の広がりについて「それだけ程度副詞の世界に深く定着してきたことを思わせる」(p.155)と述べられている。

5. 3の近世後期の「よほど」の使用実態の調査でも、現代語の用法につながると思われる例が数例ずつだが見られ、さらにより広い評価や推量の表現に用いられる例が目立つなど、その使用は多岐にわたっていた。近世前期までの使用が既定の状態にほぼ限られていたのであれば、山口(2006)の指摘のとおり、この時点で「よほど」の用法は広がりを見せており、「程度副詞の世界に深く定着してきた」とみることができるのだろう。山口(2006)の指摘は用法の広がりにとどまっているのだが、いったん用法の広がりがみられたという事実があったとしても、現代語の用法記述を通してみると、近世後期以降現代にかけては逆に用法が限られる形で変化しており、5. 4ではその過程について述べてきた。近世後期、明治期、大正期、現代のそれぞれの用法の用例数の分布の変化から、「よほど」の使用が、構文的な面には積極的に関わらずに平叙文においては広く程度や量をあらわしていたものから、現代語の構文的な制約の強い5つの用法に集約され、定着してきたことがわかった。さらに、用法ごとに指摘した点を簡単にまとめると次のようになる。

《推定判断用法》

近世後期には「よほど」が、相手の言動や、前提としてある事実をうけて評価をくだす例が多く見られた。明治、大正期にもこのタイプを含め、先行する事態にもとづく判断に広く用いられていたが、その判断の内容が、ある事態からの評価であるような使用は次第に減少し、現代では既実現事態を結果としてその事態が生じた原因や事情を推定するような使用が優勢になっている。つまり、既実現事態と判断内容という2つの事態の時間関係、因果関係がより明確になる方向で定着してきたと考えられる。

《比較評価判断用法》

近世後期に比較構文において2つの対象の程度差をあらわす例が見られはじめ、明治期には客観的にある基準からの程度差を示すような比較にも広く用いられていたが、大正期～現代と時代が下るにしたがって、比較対象間の関係自体が一般常識や相手の主張といった先行文脈に反するという評価的な面に重点がある比較判断に偏る方向で変化してきた。

《必要判断用法》《例外提示用法》

《必要判断用法》は近世後期以降、明治、大正期の用例にもその典型とみなしうる例が早い時期から確認されたが、《例外提示用法》は明治期あたりまでは見られず未分化であり、大正期以降、現代にかけてやや遅れて使用が広がり定着してきた可能性がある。現代語においては、連続をみとめながらもその対極に《必要判断用法》と《例外提示用法》とをとりだせる方向に分化している。

《意志不実行用法》

本稿の資料における用例全体に占める割合の推移をみても、構文的な特徴としては明治期には既に固定して用いられている例が見られ、それほど大幅な増減の変化がなく使用量が限られながらも現代まで用いられている。

つまり、近世後期に、それまで用いられていた既定の状態に加え、他との比較や推量、推定をはじめ、現代語の用法につながるような例にも広く用いられるようになった「よほど」という副詞は、それ以降、明治、大正期を経て現代では既定の状態にはほとんど用いられなくなっており、さらに、いずれの用法においても2つの事態の関係（たとえば、「既実現事態（結果）—{推定／説明}判断（原因）」、「必要な行為（条件）—望ましくない事態（帰結）」、「比較対象—比較対象」）がより限定される方向で、使用の範囲が限られてきているといえる。

また、それに伴い、「よほど」のあらわす程度自体も「相当度」（山口(2006)によると「高度寄りの大づかみに概括する程度把握」という幅をもった程度というよりは、〈意外性〉〈異常性〉といった評価的な面をもちあわせた、〈過度に「大」〉という程度に変化しているように思われる。これには、「よきほど」が「よつぽど」「よほど」に一語化したのち、江戸時代以降に「余程」と漢字表記があてられた（『日本国語大辞典』2000-2002）ことも関わっているかもしれない。

程度副詞として広く用いられていた「よほど」の用法が、具体的になぜこれだけの用法に変化してきたかについては明確なことはわからないが、近世後期から近代にかけて、変化をうながした要因として他の同程度をあらわす副詞の動向が考えられる。近世後期の資料に比較的目立った、程度がはなはだしいことをあらわす副詞には「おおきに」「だいぶ」「ずいぶん」「ごうぎに」「いっそ」「たいそう」などがあつた。これらに加え「かなり（に）」「そうとう（に）」「ひじょうに」などが、明治期から大正期にかけて、程度がある程度はなはだしいことをあらわす副詞としての用法でも多く用いられるようになる。

次の表 27 は本稿の対象とした資料にあらわれるそれぞれの副詞の用例数を目安として示したものである⁵⁷。時期により資料の量が異なるため、1 MB あたりの用例数を時期ごとに右に示した。

⁵⁷ 近世後期の資料については、本稿の「よほど」の調査の対象としたもののうち、『日本古典文学大系』（岩波書店）にあるものを対象とした。明治、大正期の資料は「よほど」の調査対象と同じである。用例の収集は、想定される表記（ひらがな、カタカナ、漢字（旧字体等含む）、以上のすべての組み合わせ）を考慮して検索し、副詞として用いられる用法のみをとりだした。

表 27：近世～近代の程度をあらわす副詞の用例数

	近世後期		明治期		大正期	
	2.58 MB	／1MB	9.7MB	／1MB	14.8MB	／1MB
おおきに／おおいに	198	77	371	38	226	16
だいぶ	79	31	615	63	326	22
よほど	70	27	496	51	323	22
いっそ	60	23	42	4	90	6
ずいぶん	48	19	451	46	547	37
ごうぎ（に／と）	18	7	0	0	0	0
たいそう	4	2	62	6	58	4
ひじょうに	0	0	325	34	318	21
かなり（に）	0	0	51	5	573	39
そうとう（に）	0	0	8	1	50	3

それぞれの副詞がいつごろ用いられるようになってきたかという点については、さらにジャンルや範囲を広げた調査が必要であるが、近代以降、程度のはなはだしさをあらわす副詞が増えたことにより競合関係が生じ、各々の副詞についても意味や用法に変化がもたらされたことが推測される。

これらの副詞のいくつかについては通時的な先行研究でも指摘がある。たとえば、「そうとう（に）」について、鳴海伸一(2009)ではその意味変化と程度副詞化の過程について論じられている。近代以降、「相当に」「相当 ϕ 」の形での連用修飾に用いられる例が増えるとともに、何に相当するか、という対象が特に想定されない場合にも「相当」という語だけで程度の高さや量の大きさをあらわすようになり、程度副詞化が進行していったことが述べられている。また、用法が程度をあらわすもの以外が中心であったため表 27 ではとりあげなかったが、「とても」についても、吉井健(1993)で、明治期には不可能と呼応する用法（「とても～できない」）に限定されていくが、少なくとも大正期には程度副詞としての使用（「とても美しい」）があらわれ、昭和初年頃には一般的になっていたとの指摘がある。

このように、近代以降、程度のはなはだしさをあらわす副詞への移行がみられるなかで、張り合い関係が生じ、相互に用法の淘汰や変化が起こりやすかった状況が考えられる⁵⁸。

⁵⁸ 「ごうぎに」は近代にはみられなくなる傾向にある。

「いっそ」は近世後期の資料において、次のはじめの 2 例のように程度がはなはだしいことをあらわす例、3 つめの例のように意志やそれに準ずる表現に用いられる例がみられる。

- ・すまヲヤこわいのふ。花園さん、おきゝなんしへ。やばからばけものが出いすとき。いっそ氣味がわるうござんすよ。（傾城買二筋道）
- ・蝶「ヲヤ++おいらんかへ。どうしてマアこゝへ。ヲヤいっそ苦勞をさしつたそうで、おやせなはいましたは（春色梅兒譽美）
- ・弥二「きたや、おらアもふ坊主にでもなりたい。北八「おめへとんだことをいふ△弥二「いっそゑどへかへろふか（東海道中膝栗毛）

明治、大正期の「いっそ」の例は最後の例のような意志やそれに準ずる表現に用いられる例がほとんどであり、程度をあらわす用法は近代以降みられなくなっている。

また、「ずいぶん」について、鳴海伸一(2012)では、明治期以降、単に程度の高さのみをあらわすので

「よほど」は、近世後期にはそれまで用いられていた既定の状態に加え、他との比較や推量、推定をはじめ、現代語の用法につながるような例にも広く用いられていたが、それ以降、明治、大正期を経て用法がかなり限定され、現代では既定の状態にはほとんど用いられなくなっている。この変化も以上のような背景のなかで、江戸時代以降に「余程」と漢字表記が当てられたことと相俟ってもたらされたものではないかと思われる。

以上、現代につながる「よほど」の意味と用法の変化とその要因について述べた。

5. 6 現代語の位置づけ未詳の例の検討

本章では、現代語の用法の相互の関連や、いずれの用法の特徴ももたない例の位置づけを考えるために、現代語へのつながりを意識して、主に近世後期以降の意味用法の変遷をみてきた。以上の通時的な観点からの考察をふまえたうえで、本節では第4章の4. 7で整理した位置づけ未詳の例について検討する。

特定の構文的特徴をもたない位置づけ未詳の例において、「よほど」が結びつく語に目立っていたのが、動詞（句）と結びついて程度というより量をあらわすもの（17例）であり、「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」に限られるものであった。

【変化量】8例

軽くなる 重くなる よくなる 少なくなる 易しくなる 楽になる （屈辱の念が）薄れる （光が）薄れる

(337) なにほどこか経って目が覚めた。眩暈は治まり、胸の間えもよほど軽くなっていた。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)(例(187)再掲)

(338) 学校までは上り下りの坂があり、石ころの多い岩道はいねの歩行を円滑には運ばせない。歩きながらいねは、一年の間によほど自分の足が重くなっていることに気づいた。(壺井栄「暦」)(例(188)再掲)

【相違量】2例

違う(2)

(339) 海軍には、政治に携わる者は部内で大臣一人だけ、大臣の政治的決定は必ずこれに従

はなく「そのような様子であることを発見・認識した話者の驚き・意外さ」といった含意をもつ例が多数みられるようになることから、事態に対する評価的意味を伴った程度副詞となっていることを指摘している。

うという伝統が、比較的ではあるがよく守られていて、それが陸軍とよほど違っていたところであり、山本もその点は折り目正しい方であった。(阿川弘之「山本五十六」)(例(189)再掲)

【時間量】 5 例

かかる(2) たつ する (してから) 前から

(340) 少年は、わずかな岩角を手足の先きでさぐりさぐり、長い時間かかって、そこまでたどりついた。……またよほどかかって登ると、大分太くなり、大分丈夫になる。(海音寺潮五郎「おどんな日本一」)(例(190)再掲)

(341) 空には星がぎらぎらがやいているので、そのうしろ姿は木の枝の間にかなりながく見えていましたが、まもなく崖の上の岩影のかなたに消えました。それを見送ってからすぐのようでもあり、またよほどたった後だったようにも思えましたが、不意に、われわれの坐っているところから十メートルほどの木立の中で、木の枝が折れる音がしました。(竹山道雄「ビルマの豎琴」)(例(191)再掲)

【空間量】 2 例

あるく 離れる

(342) もうよほどあるいてから、わたしはふと、靴で踏んでいる枕木の音が急に変わったことに気がつきました。(三浦哲郎「團欒」)(例(192)再掲)

(343) 「この村の近くには、イギリス軍も印度兵もグルカ兵もいません。今晚はゆっくりお休みなれます」と案内人はいいました。たしかに、ここは心配がなさそうでした。他の村とはよほど離れています。(竹山道雄「ビルマの豎琴」)(例(193)再掲)

これらは現代では極端に減少の傾向にあるが、「変化量」「相違量」「時間量」「空間量」のいずれも近世後期から近代にかけて一定量用いられていたものである。また、戦後の作品を対象とした本稿の資料の中でも作者の生年が 1900 年前後で作品の年代も古いものに偏っていることから、既定の事態、状態においてこの特定の量をあらわす古い用法が残っているものと推察される。

このうち「変化量」「相違量」については、発話時以前のある時点やある対象が基準として想定されるものであり、ある基準からの差をあらわすのに広く用いられていた明治、大正期の《比較評価判断用法》からもつながりを見出せるだろうか。

また、同じく基準が想定されるものとして次のような例が 2 例ある。(344)(345)のように、「今度は」「今夜は」によって「以前の状態」「普段の状態」が比較の基準として想定される。

(344) こうして、シチリア独立運動の鎮圧は成功した。だが、シチリアの人々の心の中の不満が、消えたわけではない。これに対する対策として、ローマの中央政府は、シチリアを、特別州とすることに決めた。大幅な自治を与えるわけである。政治的にも経済的にも。ところが、これにまた、マフィアが食いついてきた。政府に協力した実績がすでにあるから、今度はよほど簡単である。(塩野七生「イタリアからの手紙」)

(345) 「……息子や娘を失ったことよりも、由美子をあんなにしてしまったことが僕には一番応えていますよ。彼女は僕の犠牲者です」信之の口ぶりには多少誇張があると川辺は思った。……「君の加害者意識も相当なものだね」川辺はわざとからかうように言った。普段述懐めいたことを一切言わない信之を知っているだけに、今夜は余ほど気がほぐれている。(円地文子「食卓のない家」)

以上のように、特定の構文特徴をもたない既定の事態や状態に用いられる例については、古くから用いられていた特定の量をあらわすもの、また、「変化量」「相違量」のようにある基準が想定され、明治、大正期における《比較評価判断用法》とのつながりが見出しやすいものは、現代でも比較的用いられやすいのだろう。いずれも古い用法の残存～保存として位置づけられる。

同じく既定の事態、状態として、連体節に用いられる次の 2 例は、比較の基準も想定しにくいものであるが、極めて用例が限られ、いずれも浅田次郎の作品であり作家も限られていることから、やはり古く平叙文において広く程度や量をあらわしていた使用の名残であると解釈される。

(346) 「よう、おにいちゃん。ボート借りないか。朝からお茶っぴきなんだ。夕方まで五百円でいいよ」よほど困った顔をして、男は僕に笑いかけた。(浅田次郎「すいばれ」)

(347) 「それを言うならよ、店の開店祝いとバカの七五三だろ。はいはい、ありますよ。今でも後生大事に鴨居にかかってらあ。開店祝いの写真と、俺の五歳のお宮参り。知ってっか、じじい。ごていねいによ、『伊能夢影撮影』って書いてあるんだぜ」夢影というのは祖父の雅号である。祖父はよほど気に入った写真には、額にその銘板を貼り、代金を受け取らなかった。(浅田次郎「卒業写真」)

次に、推量形式と共起するが、《推定判断用法》の典型である既実現事態を根拠にその原因・理由を推定する（「らしい」を代表とする）推定判断とは異なり、ある条件にもとづいてその結果・帰結を推量する例が、位置づけに迷うものとして 12 例あった。

(348) “飛び道具”といえは弓ぐらいしかなかった時代の戦争は、この風向きというものが、戦闘の死命を制する重大なカギであつたろうことは想像に難くない。当時の軍師は、今日以上に真剣に天気の予想をしたにちがいないのだ。おそらく、風向きを占うことの出来る人がいたら、よほど大事にされていただろう。（本田宗一郎「私の手が語る」）（例(26)(194)再掲）

(349) 庄九郎がもし、少年のころを浄土教（浄土宗、一遍宗、浄土真宗）の本山で送ったとすれば、よほどちがった人間になっていたであろう。（司馬遼太郎「国盗り物語」）（例(27)(195)再掲）

(350) またしてもここに、継母の問題が出てきた。継母子という不自然な関係は、どうしても解決の道がないものであろうか。彼女自身にしても、もしも沢田安次郎先生に子供がなかったとすれば、今とはよほど考えが変っているはずであつた。（石川達三「人間の壁」）（例(30)(196)再掲）

(351) ……もうそろそろ、差別用語に神経を尖がらせるような不毛なエネルギーの消費はやめにしてはどうか。Mr s でなく Ms とつけられた手紙など来るとぞっとする。「おれはクロンボ、あんたはキイロ」式で国際関係も動きはじめたら、成果はよほど確かなものになると思うのです。（塩野七生「人びとのかたち」）（例(29)(197)再掲）

これら 12 例には、(348)(349)(350)のように反事実のことを述べる例が目立つ。つまり、(350)の「今とは」にあらわれるように現状が基準として想定しやすく、条件のもとに仮定される反事実の状態との差に「よほど」が用いられている。また、共起する状態性をもつ語に注目すると「違う」「変わっている」「～になる」など先に述べた「相違量」や「変化量」をあらわすものが多い。したがって、これらは《推定判断用法》に限定される以前に用いられていたより広い推量判断と、ある基準からの差が「大」であることに用いられるという両方の流れをあわせもつ例と考えることができる。

最後に、(352)(353)のように、「{～シテイル／シタ} つもりだ／つもりだった」と共起する 2 例。現代語の資料には 1005 例中 2 例のみであったが、構文的に共通点がみられる。

(352) 言っているうちに、胸がせまって来て、涙をこらえるのに苦心した。よっぽどこらえて、気取られないようにしたつもりであつたが、やはりわかつたのであろうか、伊勢守は感動をこらえる風で、しばらく黙っていた後、微笑をふくんで言った。（海音寺潮五

郎「おどんな日本一」)

- (353)「……自分ではよほど不景気のつまらなさ相の顔をして居るつもりですが夫れでも東京の人からは『内地からメイツたあたまで行つても長官にお目にかかると晴々して帰ります』などゝ不届のことを云つてよこすのもあります。……」(阿川弘之「山本五十六」)

現代語の用法のなかで《意志不実行用法》に近いようにも思われるが、《意志不実行用法》は過去における意志願望とその自らの意志による不実行という2つの事態を前提として用いられるのに対し、これらは意志や願望ではない点、さらに自らの意志による不実行でなく意図したことが叶わない非実現である点で異なる。「～つもりだ／つもりだった」と共起する例は、遡ると明治期(4例)、大正期(1例)の資料にも見られた。これらは意図したことが叶わない場合(354)も叶う場合(355)もあり、その結果には関わらず、平叙文において広く程度や量をあらわしていた古い用法の1つであると判断される。

- (354) [明] 先生は単簡にただ「ええいらっしゃい」と云っただけであった。その時分の私は先生と余程懇意になった積りでいたので、先生からもう少し濃かな言葉を予期して掛ったのである。(夏目漱石「こころ」)

- (355) [大] その時、お種は心の中で、「面白可笑しくして遊ばせるような婦女でなければ、旦那衆の気には入らないのかしらん……ナニ、笑わせようと思えば私だって笑わせられる」こう自分で自分に言ってみた。彼女は余程トボケた積りでいた。嫁が心配していようなどとは思ひも寄らなかった。盛んな喝采が起った。(島崎藤村「家」)

現代語の先の2例(352)(353)も《意志不実行用法》とは区別して、これらの古い用法からつながるものとみたほうがよいと思われる。

以上、現代語の用法記述において位置づけ未詳とした例について、いくつかのタイプごとに通時的な意味と用法の変化の流れのなかで位置づけの可能性を探り、解釈を試みた。これらの使用については現代語の資料に見られる以上、タイプを整理したうえで、第4章で述べた5つの用法に加えて《程度量用法》と1つの用法としてたてる可能性もある。ただし、近世以降の用法の変遷からみても現代にかけて減少する傾向が顕著にみられたものであり、また、現代語の資料(1005例と用例数は限られたものではあるが対象とした範囲は比較的広範囲に及ぶ)においても全体に占める用例数の割合は非常に限られ、さらに作者の生年も作品の発表年も比較的古いものに偏るものであった。このことから、本稿では古い用法もしくは古い用法から現代語の用法への変化のなかでそれら(のいくつか)にまたがるものとして解釈し、位置づけるにとどめる。

第6章 用法間の関連と体系

本章では、第4章で提示した用法記述と第5章で検討した用法の通時的变化をふまえて、実例を手がかりに、現代語の用法間のつながりについてみていく。それぞれの用法には典型的なものから周辺のなものまで広がりがあるが、それらを手がかりに用法間の境界やつながりについて述べ、用法の全体がどのような関係にあるか、また全体に共通するものとして現代語の「よほど」にはどのような性格がみとめられるかについて考察する。

6. 1 現代語の用法

本研究の実例 1005 例にもとづいて得られた現代語の各用法の概略を示す。

I 《推定判断用法》

<p>・ よほど (感情・心情をあらわす形容詞) らしく、(既実現の事態の描写).....。</p> <p style="text-align: center;">推定形式</p> <p style="text-align: center;">[推定内容 (事態の原因・事情)] [推定根拠]</p>	
<p>・ (既実現の事態の描写).....。 よほど (感情・心情をあらわす形容詞) のだ(ろう)。</p> <p style="text-align: center;">説明 (推量) 形式</p> <p style="text-align: center;">[説明される対象] [説明内容 (事態の原因・事情)]</p>	

例1) 焼跡の上の人々は、**余程**熱いらしくしばしば汗をぬぐっている。(永遠なる序章)

例2) 長官は一気にまくしたてる。**よほど**ブンに対する恨みが深いのだろう。(ブンとフン)

「よほど」は、ある既実現の事態が通常でないという認識のもとに、そのような事態に至る原因・事情の{推定/説明}判断に用いられる。既実現事態に通常でない様子を見とめ、その原因、事情である事態にもそれ相応の程度のことが見とめられるであろうという判断から、程度的な意味としては普通に想定される程度を超えて〈過度に「大」〉であることをあらわし、そこには〈異常性〉〈意外性〉といった評価を伴う。

II 《比較評価判断用法》

Y (なんか・など) より	X (の) ほうが	よほど	(主観的・評価的形容詞)。
[比較対象]	[比較対象]	無標形式の終止述語	[評価判断]

例1) 「…臆病者として生きるよりも、馬鹿者として死んだ方がよっぽどました。」(死の鳥)

例2) 地元紙の夕刊の記事よりも、運転手仲間の噂話のほうがよほど速やかに具体的な情報を伝えてくれる。(バニシングポイント)

III 《必要判断用法》

- #### IV 《例外提示用法》

- 178

例1) 実際、イギリスなどでは、よほど田舎っぺか下層出身者でない限り、ほとんど箸の使い方を知っている。(適応の条件)

例2) 小包の場合は知事個人あてのものが多いため、よほど見た目に不審なもの以外は、直接知事室に運ばれる。(毎日新聞 95.05.17)

例3) 何よりも平和を愛し、冒険心や好奇心を日常の枠から飛び出させる人間を、頭の悪い未熟者と考える彼のことから、家族と庭の植物を較べるのは何かでよほど腹が立ったときに限られていた。(白い光の午後)

「よほど」は、通常の状態であればそれが標準としてみとめられるような状況で、その例外となる極端な場合を提示するのに用いられる。通常程度であれば特に問題なく標準～安心とされるという、現状に対する肯定的な評価のもとに、その例外、すなわち標準からはずれる扱いをうけるある特徴づけの程度は通常程度を逸脱するものであり、「よほど」は普通に想定される程度を超えて〈過度に「大」〉という程度的な意味をあらわす。そこにはやはり通常でない＝〈異常性〉という評価を伴う。

V 《意志不実行用法》

よほど	{	意志動詞	しようかと思った したかった。	{	{	が／けれど、 しかし、	... (事態の不実行の描写) ...
			意志・願望の過去			逆接表現	
			[過去の意志・願望]	[意志・願望の不実行]			

例1) 柳はよっぽど無視してやろうかと思ったが、ここが我慢のしどころと、ぐっと抑えて、社長室へ向かった。(女社長に乾杯！)

「よほど」は、自らの意志によって不実行に終わった過去における意志・願望に用いられる。結果的には実行に移すことが憚られたものである、という前提のもとで、意志・願望を抱いた時点の一時的な切迫した状態を、程度の強さとしてとらえられるとすれば、「よほど」はその程度が〈「大」〉であることをあらわす。そこには、行為を思いとどまる冷静な判断からみて〈異常性〉といった評価を伴う。

以上の5つの用法は、現代語の実例から帰納的にとりだしたものであり、典型としてはこのように記述された。そして、現代語の資料に見られるこれらの用法からはずれる少数例については、古くは多用されていたが現代では極端に減少傾向にある使用であることを確認した。そして、近世後期以降の意味と用法の変遷をとらえたうえで、「時間量」「空間

量」など古く特定の量として用いられていたものや「変化量」「相違量」のように何らかの基準が前提となるもの、また、現状を基準として想定しやすい反事実の推量に用いられる場合などに限られ、基準からの差や程度をあらわすのに広く用いられていた古い用法の残存～保存として位置づける可能性を示した。

6. 2 用法のつながり

6. 1 で示したように区別される各用法について、それぞれの用法がどのような関係にあり、どのような点で異なり、また共通するかについて考察する。

6. 2. 1 《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》

6. 2. 1. 1 《必要判断用法》と《例外提示用法》

《必要判断用法》と《例外提示用法》とは、否定条件の形式（「ないと」～「ない限り」）、「よほど」がかかる状態性をもつ語のタイプ、それによってあらわされる従属節の内容と主節の内容との関係を総合して区別されることは、第4章の4. 4と4. 5でも詳述し、それぞれの用法の典型的な構造は本章6. 1で示したとおりである。

《必要判断用法》は「必要性のある行為（の欠如）一望ましくない事態の生起」あるいは「目的一行為の必要性」という、時間的前後関係にある2つの事態を前提とする必要判断に用いられる用法であるが、「よほど」が入る必要判断にはいくつか特徴がみられる。

まず、〈否定条件一帰結〉という構造をとる場合に、主節の内容は未実現の可能性であり、次の(356)(357)のような既に起こっている（あるいは起こった）事実について述べる例は限られる。

(356) 立花も僕も、つまらぬお喋りなんかする暇はないという顔をして、落ちつき払って膝の上に文庫本をひろげていた。しかし発動機のポンポンポンという響につれて、腰を下した身体が小刻みに揺れたから、よほど一心にならないと字が眼の前にちらちらした。
(福永武彦「草の花」)

(357) その時代は今みたいに道具が良くないから、よっぽどきっちり打たないと、球は絶対
にまっすぐ飛んでくれませんでした。(『GOLF DIGEST』2001年6月号)

さらに、主節の内容が未実現の可能性であっても、(358)のような個別一回的な現状に即した必要判断はほとんどなく（この点、「もっと」と対照的であることは4. 4. 4. 3でも触れた）、多くは(359)～(362)のように、ある状況下というより広い意味での現状において、必要な行為を行う主体などが特定されない、より一般化された必要判断を述べるものである。「よほど」が共起する否定条件の形式が、条件をあらわす代表的な形式「と」「ば」

「たら」「なら」の中でも、より一般的な条件をあらわすとされる「ないと」「なければ」に偏っていることもこのことを裏づけると思われる。

(358) 今度の二年生をうんとしこむとしても、だな、己たちがよっぽどしっかりしねえと、夏の試合は負けるぞ、え、負けてもいいのか。(福永武彦「草の花」)

(359) 量産工場のラインというものは、よほど考えて作らなければ、人間が機械に使われてしまうような職場になりかねない。(本田宗一郎「私の手が語る」)

(360) コイではない、とYさんは直感した。釣にかかったコイは、でーんと底に落着いている。よほど引っ張り合わないと腰を浮かさないものである。(畑正憲「ムツゴロウの博物誌」)

(361) この工場では、天井を動くクレーンの音と回転する機械の響きで、余程、大きな声をださないと話がきこえない。(遠藤周作「女の一生」)(例(125)再掲)

(362) もともと企業人は、現在の境遇に自分をなじませ、その境遇を利用して成長するという生き方をしなければ生きていけない。しかし、現在のように企業の環境が主客において変化はなはだしい時期には、よほど個人の側で意識的に生き方を選択しないと生きづらいのである。(森清「選び取る「停年」」)(例(126)再掲)

また、《例外提示用法》は、否定条件をとる従属節には形容詞等によって特徴づけをうけた名詞があらわれるのが中心であるため、「よほど」が用いられる前提となる、従属節の事態と主節の事態との間に明確な時間的前後関係はない。この点、従属節に状態性を含む意志動詞をとり、従属節と主節の事態との間に時間的前後関係がみとめられる《必要判断用法》とは異なるのだが、《必要判断用法》が先にあげた(359)～(362)のように個別一回的な状況でなく一般化された必要判断に用いられるものであったのと同様、《例外提示用法》も、次の(363)(364)のように一般的な傾向や習慣である。(365)のように個人的なものであってもやはり習慣的多回的な事柄を述べるという特徴がある。

(363) 「たとえば、あなたが、誰かをだますために寝もしない布団にはいったように見せかけるとしますな。すると、どうされます。百人中百人が掛布団ぐらい、乱雑にしますよ。……しかし、枕を凹ますことは百人のうち百人が気がつきません。実際、寝れば、よほど、かたい枕でないかぎり、真中に凹みのあとが残ります。……」(遠藤周作「闇のよぶ声」)

(364) アパートから学校へは自転車です。小学生は自転車に乗ってはいけない決まりなので、祖母（62）が毎日送り迎えをする。「車が多くて危ないので、よほど家が近くない限り、みなそうしています」と汪さん。（毎日新聞 95.01.27）（例(152)再掲）

(365) パーティ、忘年会のたぐいは面倒くさいからよほど親しい人が関係していない限り全部欠席。アンケートや電話取材はすべて断り、チャリティ系も関係者関与以外はきりがないので断る。（椎名誠「時にはうどんのように」）（例(153)再掲）

《必要判断用法》は現状（通常の状態）に対して否定的な状況で、「よほど」は主節であらわされるマイナス事態が生じないために必要な意志的行為の程度が〈過度に「大」〉であることをあらわし、《例外提示用法》は現状（通常の状態）に対して、大方の傾向や習慣として標準であるとみとめられる、という肯定的な状況で、「よほど」はその例外にあたる特徴づけの程度が〈過度に「大」〉であることをあらわすものであった。

つまり、《必要判断用法》と《例外提示用法》は、いずれも個別一回的ではなく一般化された現状を前提とする一般的な判断に用いられる点で共通する。そして、《必要判断用法》は現状（通常の状態）への否定から〈異常性〉を伴うほどの意志的行為の必要性を述べる方向へ、《例外提示用法》は現状（通常の状態）への肯定から〈異常性〉を伴うほどの特徴づけをもつものを例外として提示する方向へ、という関係にあるといえる。また、いずれも「よほど」があらわす程度は普通に想定される通常程度が基準となっており、そこから〈異常性〉を伴うほどに逸脱した〈過度に「大」〉という程度であることも共通している。

6. 2. 1. 2 《推定判断用法》と《必要判断用法》《例外提示用法》

《推定判断用法》は「よほど」が現状として存在する既実現の事態から過去～現在の原因や事情を推定する用法であり、時間的前後関係にある個別一回的な2つの事態において用いられるのを典型とするものであった。

一方、《必要判断用法》は現状（通常の状態）への否定から〈異常性〉を伴うほどの意志的行為の必要性を述べる方向へ、《例外提示用法》は現状（通常の状態）への肯定から〈異常性〉を伴うほどの特徴づけをもつものを例外として提示する方向へ、と現状認識からの方向は対照的であるが、個別一回的ではなく通常の状態という一般化された現状を前提とする一般的な判断が典型である点で共通するものであった。

つまり、《推定判断用法》は個別一回的な現状に即したその原因・事情の推定判断に用いられるのに対し、《必要判断用法》《例外提示用法》は、通常状態という現状を前提とするより一般的な可能性としての判断が典型である。それぞれの用法の少数の周辺的な例にはこれらの用法間の近づきがみとめられる。

次の(366)(367)は推定判断に用いられている《推定判断用法》に位置づけられる例だが、その判断の根拠（例の点線部分）は個別一回的な既実現の事態ではなく、一般化されたものである点で、典型とはいいいにくい。

(366) 於継の一顰一笑にびくびくしないだけ加恵はこの家に根を張っていたし、同じ屋根の下にいても具合の悪いことにはその手前で身をかわすという技術もいつの間にか身につけていた。……どこの家でも口にも面にも出さないだけでおそらく同じことが起っているのだろう。姑と嫁が睦みあっているところは、よほどうまく騙しあっているからに違いない。（有吉佐和子「華岡青洲の妻」）

(367) 日本の場合、ゴルフ場の管理のよしあしは食堂で出す料理でわかるというのが、私の経験から得た持論だ。……空腹は最高の料理人だという。ひとしきり歩きまわったところで食べるものがまずいようでは、それはよほど魅力の乏しい食いものである。（本田宗一郎「私の手が語る」）

(366)は「姑と嫁はよほどうまく騙しあっていないと睦みあうことはない」という一般的な可能性を述べる《必要判断用法》に近づいたものと考えられ、両用法の間で位置づけられそうな例である。(367)は従属節が特徴づけをうけた名詞であり、さらに「魅力の乏しい食いもの」というのが必要性を伴いにくいものであるため、「よほど魅力の乏しい食いもの以外はひとしきり歩きまわったところでまずいことはない」あるいは「ひとしきり歩きまわったところで食べるものがまずいのは、よほど魅力の乏しい食いものに限られる」といった《例外提示用法》に近いものとして解釈される。

また、次の(368)(369)は形式的には否定条件節と共起する例であるが、いずれも既実現の事態（「たびたび上洛するのにいつも宿住まいであること」「臆病もの菊本が外科手術めいた治療をうける気になって受けたこと」）が前提となっている点で未実現の一般的なことについて述べる《必要判断用法》の典型とはいいがたい。これらは、既実現の事態を前提としてその事態が起こるためにあってしかるべきという必要判断自体が推定的に解釈される。そのため、形式的には《必要判断用法》に代表的な否定条件節をとるが、「よほど」が用いられている文全体の内容としては「～いつも宿住いというのは、よほど強靱な意志があるのだろう」「～治療をうける気になったのは、よほど熱心に口説かれたのだろう」という《推定判断用法》に近づきがみとめられ、両用法のつながりを示す例として位置づけられる。

(368) それにしても、こうたびたび上洛するの、いつも宿住いというのは、よほど強靱な意志がなければそうなりがたい。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

(369) さきに冷蔵植皮をこころみて効果があつたという椎名麟三の強引な説得に、菊本は感謝した。よほど熱心に口説かれなければ、臆病者の菊本が、皮膚にメスを入れる外科手術めいた治療をうける気になるということはなかったであろう。(青山光二「われらが風狂の師」)

以上、《推定判断用法》と《必要判断用法》《例外提示用法》とは、それぞれ、《推定判断用法》が個別一回的な現状認識からの過去～現在の推定判断に、《必要判断用法》《例外提示用法》は、現状の認識からの方向は対照的であるが、いずれも個別一回的ではなくある状況での通常の状態という一般化された現状を前提とする一般的な判断が典型であり、それぞれの用法の周辺の例には両用法の交渉がみとめられることを述べた。

また、先に《必要判断用法》と《例外提示用法》について、「よほど」は〈異常性〉を伴うほどに逸脱した〈過度に「大」〉という程度をあらわす点で共通することを述べたが、《推定判断用法》についても、通常でない既実現事態から、その原因や事情に相応の異常な程度の事態があることを推定判断するものであり、「よほど」はやはり〈異常性〉〈意外性〉を伴った〈過度に「大」〉という程度をあらわす。これらはいずれも普通に想定される通常程度を基準とするものである点でも共通している。

6. 2. 2 《比較評価判断用法》

《比較評価判断用法》は2つの比較対象を比較した評価判断に用いられる用法であったが、「よほど」が入る比較の文は、2つの比較対象の関係に対する評価判断自体が一般常識や相手の主張といった先行文脈に反する主張として述べられたものであるという特徴があった。

(370) TV 東京の「TV チャンピオン」が面白い。毎週さまざまな人々が登場してチャンピオンを目指して大奮闘。よくぞここまで、と感心するマニア度。「インスタントラーメン通」「少女マンガ通」など、いろんなものに精通している人がいる。下手なタレントよりオタクなシロウトの方が、よっぽど見ごたえがある。(毎日新聞 95.02.20) (例(118)再掲)

(371) 「大変なことになる前に、地頭所の役人に来てもらって取締りを強化したらどうか。役人たちの経費はわれわれが負担すればいい」という意見が多かった。それに対して忠敬は、強い口調で反論した。「冗談ではない。役人が、こんなときに何の役にも立たないのは、江戸を見たってはっきりしている。役人に金を出すぐらいなら、その分村民たちに与えたほうがよっぽどいい。……」(佐藤嘉尚「伊能忠敬を歩いた」) (例(120)(305)再掲)

これらをはじめ多くの例において、「よほど」が用いられるのは、相手の主張や一般常識といった個別的なものから一般的なものまでを含む発話時の状況としてある現状に対して逆のことを主張する〈意外性〉を伴った比較判断である。この用法も《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》と2つの点において通じるものである。1つは現状が前提として意識される点、もう1つは、《比較評価判断用法》においても比較される対象として2つの事態が存在するものであり、2つの事態の関係のなかで「よほど」が用いられる点である⁵⁹。ただし、《比較評価判断用法》では2つの事態の間に原因と結果、条件と帰結といった時間的前後関係はなく、比較評価の対象として同レベルにあるものである。つまり、《推定判断用法》が個別一回的な既実現の事態である現状から過去～現在の判断に、《必要判断用法》《例外提示用法》が今ある通常の状態という現状からの不特定主体の一般的な判断に用いられるのに対して、《比較評価判断用法》は一般常識まで含む広い意味での現状に対する、基本的に時間性をもたない超時の判断に用いられるという関係にあるといえる。

さらに、《比較評価判断用法》において「よほど」があらわす程度は、一般常識や相手の主張に反するという〈意外性〉を伴う、発話者の意識としては比較対象どうしの差が〈過度に「大」〉であると考えられるものであった。その基準は一方の比較対象という顕在化した具体的なものである。この点、《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》においてはいずれも普通に想定される通常程度という潜在的な基準からの程度が〈過度に「大」〉であるのとは異なっている。

6. 2. 3 《意志不実行用法》

《意志不実行用法》は、「よほど」が意志動詞を伴う意志・願望形式としか結びつかず、しかもそれは結果的に不実行に終わったことが前提とされる過去の意志願望に限られるという、文構造全体がもっとも決まった言い方で固定されている用法であった。

山口堯二(2006)によると、意志と共起する言い方の例は江戸時代後期以降に他のいくつかの用法の「後を追うように」あらわれたものとされ、比較的遅いようであるが、明治、大正期には既に構文的にも現代とほぼ同様の例がまとまって見られ、1つの用法として早くに固定されていたものと思われる。そして、その後も他の用法のように大幅に使用の割合が増えることはなく、用法の広がりなども見られないまま、現代まで全体の4%程度の一定量の使用がある、というやや特殊な位置を占める用法である。渡辺実(1987)は文全体

⁵⁹ (371)においては「役人に金を出す」コトと「村民たちに与える」コトという2つの事態の関係性が述べられていることがわかりやすい。(370)では文の中には「下手なタレント」と「オタクなシロウト」というモノどうしがあらわれているが、「見ごたえがある」という評価をうけるのは実際には「下手なタレントがする」コトと「オタクなシロウトがする」コトという2つの事態についてである。比較の文において、現象としてはモノ（実体）どうしが関係づけられているかに見えるものであっても実際にはモノ（実体）とサマ（属性）との統一としてのコト（事象）相互の総体的な関係をとらえて言語主体が比較作用という関係設定を行っている、ということは石神照雄(1981)から学んだ。

の言い回しがかなり固定されたものであることから、「一種の成語、慣用表現のようなものになってしまっている」(p.283)と述べているが、定着の仕方や、他の用法から独立した存在であることから、そのように考えることができる。

したがって、直接他の用法との近づきや境界的な例は見出しにくいのだが、《意志不実行用法》においても、意志することとそれが不実行に終わること、という2つの事態があり、その関係の中で「よほど」が用いられるという点は他の4つの用法と共通している。

また、本稿の記述ではこの用法においても「よほど」が過去の意志・願望という精神作用の強さの度合（あるいは意志・願望という叙法の強調ととらえることもできる）をあらわすと考えた。その程度は実行しかけるほどに切迫した状態であることから〈「大」〉であるが、結果的に行為を思いとどまる冷静な判断からみるとやはりその意志願望を抱いた状態は通常は憚られると判断される〈異常性〉を伴うものであり、何らかの評価を伴った程度をあらわす点では他の用法とも通じると考えられる。

6. 3 用法のつながりのまとめ

以上でそれぞれの用法の間のつながりや共通点、相違点について述べてきたことをまとめる。

「よほど」の用法の全体像を考えるにあたっては、人間の認識にとって最も基本的な個別一回的な事態について用いられる《推定判断用法》を出発点において、次の頁のように用法間の関係をとらえることができる。《推定判断用法》を現代語における基本用法としてとらえるのは、この用法を出発点として全体の意味構造のつながりをとらえやすいことによるが、一方で、歴史的にも現代語の用法の中でも早くに見られはじめるものであり、また限られた現代語の資料の範囲ではあるが、全体の半数近くを占める用法でもある。

5つの用法のうち《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》《比較評価判断用法》は、以上のように個別一回的な判断～時間性をもたない超時の判断という方向でとらえられる関係にある。そして、基準は比較の場合とそうでない場合とで異なるが、いずれの用法においても〈過度に「大」〉という程度と〈異常性〉や〈意外性〉といった評価をあらわすものと考えられる。(《意志不実行用法》については早くに固定した成立事情等から直接他の用法との近づきや境界的な例を見出しにくい部分があることは先に触れたとおりである。) さらにこの評価は、いずれの用法においても2つの事態の関係の中でくだされる評価であるという点で共通する。そして、構文上にあらわれる2つの事態間で行われる判断は、それ自体が「現状認識とそれに対する評価」にもとづくものであることが用法全体に通底すると考えられる。(用法の出発点においた《推定判断用法》においては、関係づけられる2つの事態のうちの1つ事態(既実現事態)とこの「現状認識」の現状とが重なる。)

個別一回的な判断

既実現の事態 から 過去～現在の原因・事情の推定判断 …《推定判断用法》

(現状) 彼はよほど疲れていたらしく、夕食もとらずに寝てしまった。
↓ 程度〈通常程度を基準として過度に「大」〉＋評価〈異常性〉〈意外性〉
↓

多回的・習慣的な一般化された判断

(通常の状態として ある現状) { 現状否定 から 未来への必要判断 …《必要判断用法》

六甲縦走路はよほど調査していないと道に迷うおそれがある。
程度〈通常程度を基準として過度に「大」〉＋評価〈異常性〉

現状肯定 から 標準からはずれる例外の提示 …《例外提示用法》

イギリスでは、よほど下層出身者でない限り、箸の使い方を知っている。
↓ 程度〈通常程度を基準として過度に「大」〉＋評価〈異常性〉
↓

時間性をもたない超時の判断

(相手の主張～一般常識という

より一般化された現状) に対して それに反する比較判断 …《比較評価判断用法》

遊園地より 家の前の空き地のほうがよほどおもしろい。
程度〈具体的な比較対象を基準として過度に「大」〉＋評価〈意外性〉

結果的に不実行に終わる事態の過去における意志願望 …《意志不実行用法》

頭にきてよっぽど文句を言ってやろうかと思ったが、我慢した。
程度〈「大」〉＋評価〈異常性〉

以上、「よほど」がもつ用法間の関係についてまとめた。

第7章 「よほど」における程度性・評価性・叙法性

本章では、第4章の用法記述、第5章の通時的変化、第6章の現代語の用法間の関連をもとに、現代語の「よほど」のもつ程度性、評価性、叙法性について明らかになったことをまとめ、「よほど」のもつ性格がどのようにとらえられるかについて述べる。

7. 1 程度性

副詞における程度性には、もっとも典型的な、状態性をもつ語と結びついてその状態性概念の程度を限定するものから、「きっと」「おそらく」「もしかすると」など、文の内容として述べられる事態の生起の確信の程度をあらわすものまで広くみとめられる。そのなかで、通常、程度性としてとりあげられるのは「とても」「かなり」「ずいぶん」といった程度副詞に共通する、文のことがらの側面に関わる程度である。「よほど」もこれら程度副詞の1つとして扱われることが多いという事実が示すとおり、「よきほど」を語源とする状態性概念の程度をあらわす副詞であり、現代語においてもすべての用法で状態性をもつ語や想定しやすい語と共起し、その程度を限定する程度性がみとめられた。《《意志不実行用法》》については、結びつく語が典型的な状態性をもつ語ではなく〈意志動詞＋と思った〉という述語と共起するものであるため本稿でも積極的に程度性を主張するものではないが、意志的な精神作用の度合いを段階的にとらえられるとすれば、意志や願望の強さという主観的な面での状態性とみなしうるという立場で記述を進めた。）

そして、この程度性の内実は、程度的意味としてそれぞれの用法のなかで〈過度に「大」〉として記述したものである。これは「よほど」においてはことがらの側面に関わる、語の意味（の中核）にあたるものである（通常辞書においても語義として記述される）。用法ごとに異なる構文環境においてあらわされる〈過度に「大」〉という程度的な意味（あるいはそれに伴う〈異常性〉〈意外性〉といった評価的な意味も含めて）は、「よほど」の意味としてどこまでまとめられるものだろうか。

この5つの用法のなかで、まず《意志不実行用法》は結びつく語のタイプが異なるものであった。そして、比較対象を基準とするもの（《比較評価判断用法》）と、普通に想定される通常程度を基準とするもの（《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》）があった。これらを意味の違いとみなすべきかどうかかわからないが、結びつく語や基準の違いから、

- ・普通に想定される通常程度を基準とした程度が〈過度に「大」〉
- ・比較対象どうしの差の程度が〈過度に「大」〉
- ・意志願望が切迫している程度が〈過度に「大」〉

という3つを仮にみとめることができるだろうか。現段階での可能性を示すと同時に、このように実質的概念性の希薄な副詞における用法と意味との関係をどう考えるべきかとい

う問題として今後の課題としたい。

また、このように現代語において〈過度に「大」〉として記述してきた程度的な意味は、山口堯二(2006)によると、かつては「相当度」(「高度寄りの大づかみに概括する程度把握」という幅をもった程度であったとされ、明治期の例においても現代語ほど「過度に」という程度が感じられないものも多い。

(372) 母は前の縁側に蒲団を敷いて日向ぼっこをしていた。近頃は余程体の工合もよい (伊藤左千夫「野菊の墓」)

(373) 兄は代助を見て、「どうだ、一盃遣らないか」と、前にあった葡萄酒の壺を持って振って見せた。中にはまだ余程這入っていた。(夏目漱石「それから」)

(374) 彼女は自分の手で雨戸を手繰った。戸外の模様は何時もよりまだ余ッ程早かった。(夏目漱石「明暗」)

つまり、現代語にかけて程度的な意味にも変化があったことになるが、それは「よほど」がその使用において構文的に制約をうけるようになるとともに、程度性の裏面にもつに至った〈異常性〉〈意外性〉といった評価とも関わりがあるように思われる。この評価性については構文的にどのように条件づけられるかとともに次節で述べる。

7. 2 評価性

程度性をもつ多くの程度副詞が「サマに対する程度」をあらわす反面「サマに対する評価性」をもつ、という指摘が既に工藤浩(1983)でなされたことは第2章の研究史においても触れた。そして、程度副詞に限らず、評価性をもつ副詞は、評価を下すためにはその対象が実現しているか、実現が予定されている必要があるため、

* なかなか上手に書こう。

* さいわい君が来てくれ。

* りんごをたった二つ買いなさい。

など、命令等の叙法と共起しないか、しにくいという現象をもつとされる。単に程度をあらわすとすれば共起してもおかしくないはずだが、「よほど」も「* (Aさんより) よっぽどはやく {歩け／歩いてください／歩こう}」のように命令等の叙法とは共起せず、評価性の濃い副詞であることがうかがわれる。

副詞において「評価」とよばれて扱われるものにはさまざまなものがある。

まず、文の叙述内容全体に対する「ことがら評価」とされるものがあり、語彙的な意味がそのまま反映された評価をあらわすため、評価としてはそのあり方がとらえやすくもつ

とも典型的なものである。

さいわいチケットが手に入った。

あいにく試合は雨で中止になった。

これらは評価そのものをあらわす副詞であり、同様に評価であっても「よほど」がもつような、程度性に「かぶさる」ような形である評価性とは異なる。

このほか、原田登美(1982)では、事態のプラスの評価かマイナスの評価かのいずれかをあらわす「べらぼうに」「すこぶる」など「語それ自体に主観的评价が込められているもの」があげられている。

べらぼうに	}	プラス評価	
すこぶる		おもしろい	親切だ
なかなか		*おもしろくない	*不親切だ

	}	マイナス評価	
ひどく		寒い	悪い
はなはだしく		*暖い	*良い

また、渡辺実(1990)では、「評価」について、組み合わせる語がプラスマイナスの評価に偏りをもつかどうかによって、次の「結構」や「多少」のように偏りがあるものを「評価系」偏りが無いものを「非評価系」とする、というとらえ方を示している。

結構 おもしろい きれいだ 速い …プラス評価に偏る
 *つまらない *きたない *遅い

多少 *すなおだ *安全だ *頼もしい
 なまいきだ 危険だ 頼りない …マイナス評価に偏る

原田(1982)は、副詞自体に主観的评价が込められているために、あらわす事態がプラス評価のものかマイナス評価のものかにわかれるという見方であり、渡辺(1990)は、結びつく語にプラス評価、マイナス評価という偏りがあるかによって副詞が「評価系」であるか「非評価系」であるかが判定されるという見方であり、とらえ方もその対象もおそらく異なる。「よほど」は結びつく語にこのようなプラスマイナスの評価の偏りをもつわけではないため、渡辺(1990)では「非評価系」に位置づけられる。したがって、「よほど」の評価性はこのような結びつく語によってとらえられる評価とは異なる。

このように、副詞に限ってみても「評価」といわれるものが多様であると了解したうえで、本研究では、共起する状態性をもつ語や構文条件に即して評価性について記述を試みた。それぞれの用法について簡潔にまとめると次のようになる。

《推定判断用法》

通常でない既実現事態からの原因推定における〈異常性〉〈意外性〉

彼は夕食もとらずに寝てしまった。よほど疲れていたらしい。

《比較評価判断用法》:

自明の比較でない一般常識や他者の主張に反する2つの比較対象間の比較評価における〈意外性〉

遊園地より家の前の空き地のほうがよっぽど面白い。

《必要判断用法》:

現状への否定的評価から通常程度ではない意志的行為の必要判断における〈異常性〉
(必要な行為の欠如(否定条件)一望ましくない事態の生起(帰結))

六甲縦走路はよほど調査してないと道に迷うおそれがある。

《例外提示用法》:

通常程度の範囲であれば標準とされるという現状への肯定的評価から、その通常程度を逸脱する例外となる状態の提示における〈異常性〉
(例外となる状態(否定条件)一標準の状態(帰結))

イギリスでは、よほど下層出身者でない限り、箸の使い方を知っている。

《意志不実行用法》:

結果的には自らの冷静な判断で実行を思いとどまった、過去の意志的行為の一時的衝動的な意志願望における〈異常性〉

頭にきてよっぽど文句を言ってやろうかと思ったが、我慢した。

つまり、「よほど」がもつ程度性(〈過度に「大」〉という程度的意味)と表裏一体にある評価性として、それぞれの用法において〈異常性〉〈意外性〉という評価的意味を記述した。そして、これらの評価は、用法記述において明らかになった構文特徴にもとづいて上にまとめたとおり、いずれの用法においても2つの事態の関係を前提として見出されるものであった。つまり、「よほど」における評価は2つの事態を関係づけたうえでの評価であり、このような評価のあり方が「よほど」のもつ評価性を特徴づけているのである。

たとえば浅野百合子(1984)では、「ずいぶん」について次のように記述される。

「ずいぶん」:

〈物事の程度が予想を越えて甚だしいこと〉〈それに対する驚き、意外感を含む〉〈主観的〉
(p.50)

このうち、〈物事の程度が予想を越えて甚だしいこと〉が程度性、〈それに対する驚き、意外感を含む〉というのがそれに伴って感じられる評価性に関わる記述であると解釈される。「この車は若い人にずいぶん人気がある」(浅野(1984)より)における「ずいぶん」の予期予想に反する〈意外感〉という評価のあり方と、「よほど」において〈意外性〉と記述した評価のあり方が異なるのは、関係づけをうける事態を想定せずに「*この車は若い人によほど人気がある」とはいえないことにもあらわれていると思われる。(cf.「販売されてすぐに売り切れるなんて、この車は若い人によほど人気がある(んだね。)」「最近の若い人にはスポーツカーよりも この車の方がよほど人気がある」)

また、本稿では収集できた用例数が限られたため実態を記述するにとどまったが、連体用法の「よほどの」においてもその大部分は構文的な特徴は《推定判断用法》《必要判断用法》《例外提示用法》のいずれかであることから、副詞としての「よほど」と同様、2つの事態の関係を前提として用いられる点、すなわち2つの事態の関わりに関わる評価は保持されているといえる。

以上、「よほど」のもつ評価性について述べた。

7. 3 叙法性との関わり

「よほど」は状態性をもつ語の程度を限定する程度性とともに評価性をもち、他の多くの程度副詞に指摘されているのと同様、命令や依頼、勧誘、意志などの未実現のはたらきかけの叙法とは共起しないという叙法制限をもつ。

さらに、それぞれの用法においては、用いられる構文環境において、条件節を含む特定の叙法形式と共起しやすいといった叙法性との関わりが見られた。形式的な面に注目すると、たとえば次のような点が傾向としてみとめられた。

- 《推定判断用法》 : 「推定」を代表とする推量形式、「のだ」を含む諸形式との共起
- 《比較評価判断用法》 : 比較構文自体が平叙文に限られる
- 《必要判断用法》 : 否定条件節(「ないと」「なければ」)
必要をあらわす形式「なければならない」等との共起
- 《例外提示用法》 : 否定条件節(「ない限り」)との共起
- 《意志不実行用法》 : 過去における意志願望形式との共起

「叙法副詞」を広く一覧としてあげている工藤浩(1982)で、「よほど」が「現実認識的な叙法」の中の“推定”、「条件—接続の叙法」の中の“仮定条件”と関わるものとしてあげられている(第2章、2.4参照)のもこの点のいくつかを指摘したものと思われる。

本稿ではこれらの共起する叙法形式を一次的指標として考察を進め、「よほど」のそれぞれの用法の構文特徴を記述し、その構文特徴によって評価性やそのあり方を考察するに至った。つまり、これらの叙法性との関わりは「よほど」のもつ2つの事態の関係づけに関わる評価の形式面のあらわれとしてみとめることができるのではないかと思われる。

第4章の《推定判断用法》の記述において、「推定」形式と共起しやすいという共通点から「どうやら」という副詞を扱った結果、次のような違いがみとめられた。(第4章、4.2参照。「よほど」と共起する形式については4.2.2、4.2.3で、「どうやら」と共起する形式については4.2.2.4で詳しく述べた。)

「どうやら」:「推定」形式(らしい、ようだ、みたいだ、(し) そうだ)

「よほど」 :「推定」形式(らしい、ようだ、みたいだ)

「説明」形式(「のだ」を含む諸形式)

「よほど」が「推定」と「説明」という叙法形式と関わりをもつのは、これらに共通する“既実現事態と判断(原因推定／原因説明)”という2つの事態の関係づけに関わる評価をもつ副詞であり、それが特定の叙法形式との共起にあらわれたものと考えられる。一方、「どうやら」は「推定」形式に限られ、「のだ」との共起は主なものではない。それに加えて、「よほど」では共起にくい「(し) そうだ」(観察された事態から未実現の事態の兆候を判断するものであり、原因推定ではない)とも共起する例がまとまって見られた。つまり、「どうやら」は何らかの根拠にもとづく「推定」という文法的な意味自体に積極的な関わりをもって「推定」形式と共起するものと考えられる。(詳しくは4.2.4.4で述べた。)

叙法性に関わりをもつ副詞には、「叙法副詞」の中でも「どうやら」のように、副詞自体のもつ叙法性によって積極的に特定の構文論的な形式と呼応してその文法的な意味を限定、強調するもの(他にたとえば「どうか—(依頼)」「ぜひ—(希望)」「たぶん—(推量)」「おそらく—(推量)」「もし—(仮定条件)」「たとえ—(仮定逆条件)」など)があるが、「よほど」は、程度性に伴ってもつ、2つの事態の関係に関わる評価性のあらわれとして共起しやすい叙法形式が偏るというあり方で叙法性に関わるものであり、「どうやら」をはじめとするこれら典型的な「叙法副詞」とはその点で異なっていると考えられる。

7. 4 現代語の「よほど」

7. 4. 1 「よほど」はどのように変化したか

7. 3では、「よほど」の記述をもとに、「よほど」のもつ程度性、評価性、叙法性との関わり、のそれぞれについて述べた。本稿では現代語における「よほど」をこれら3つの観点から考察してきたが、既定の事態に用いられるものから現代語の用法につながるような用途にまで広がりが見られ、「程度副詞の世界に深く定着してきた」(山口堯二(2006))とされる近世後期以降、現代語の「よほど」に至る変化を大きくどのようにとらえられるのか考えてみたい。

第5章、5. 3では近世後期の資料における使用の実態を調査した。そして、現代語の用法に見られるような構文的な面での制約はなく、平叙文においては既定の状態や事態をはじめ、評価判断や種々の推量判断など、程度や量をあらわす副詞としてより広く用いられていたことを確認した。限られた資料の範囲ではあるが、純然たる命令や意志等の叙法と共起する例が見られないのは現代語の程度副詞の大半と同様であり、「相当の程度(高度寄りの程度を大づかみに概括する程度)」(山口(2006))をあらわす、いわゆる程度副詞であったと思われる。

以降、明治期、大正期を経て、その使用は現代語の5つの用法に限られる方向で変化し、現代語においては、構文的な制約のない単独の既定の状態や事態には用いられず、特定の構文環境であらわれる別の事態と関連づけられた事態における程度しかあらわし得ない副詞となっている。本稿ではそれらの用法の構文特徴を明らかにし、すべての用法において「よほど」が程度性に伴って〈異常性〉〈意外性〉といった評価をもち、さらにそれらが2つの事態を関係づけたうえでの評価であることを示した。つまり、「よほど」は状態性をもつ語と結びついて程度を限定する機能をもちながら、時間的前後関係にある2つの事態、もしくは比較される2つの事態の関係に関わる評価をもつ評価副詞としての性格をももつに至ったと考えられるのである。このような評価性の獲得に伴って、程度的な意味の面でも、近世後期～近代の実例(たとえば先にあげた(372)(373)(374)など)に見られる〈過度に〉というほどまでは感じられない「相当の程度」(山口(2006))から、〈異常性〉〈意外性〉といった評価に伴われた〈過度に「大」〉へと変化してきたものと思われる。

7. 4. 2 副詞の中での「よほど」の位置づけ

以上のように考えると、「よほど」は副詞のなかでどのように位置づけられる可能性をもつのだろうか。先行研究に対する検討事項としてあげた点について考えてみたい。

7. 4. 2. 1 「よほど」は比較系の程度副詞なのか

2. 5で「よほど」が現在の副詞に関する研究においてどのような枠組みのなかで扱われ、位置づけられているかを検討した。その多くは程度副詞として分類や体系化を試みた

ものであった。

渡辺実(1990)では、程度副詞を「Xは____Aだ」という計量構文にたつか、「XはYよりAだ」という比較構文にたつかによって大きく分け、前者を「発見系」、後者を「比較系」として、「よほど」は「比較系」である「もっと」類（ずっと、よほど、いっそう、はるかに、いちだんと）に位置づけられている。（渡辺(1986)の例で示す）

今の話はとても（非常に／はなはだ）面白い。…計量構文にたつ →発見系

* 今の話はよほど（ずっと）面白い。 …計量構文にたたない→比較系

また、「よほど」を直接の対象として記述した渡辺実(1987)において、「よほど」には3つの用法が次のモデルで提示されているが、このうち、(一)を構文的な制約がないモデルとみなし、基本的用法であるとする。

- | | | |
|---------------------------------|---------|---------------|
| (一) XはYより <u>よほど</u> Aだ。 | ⇒ 基本的用法 | |
| (二) <u>よほど</u> Aと見えてBだ。 | (既実現) | } [現実／実現の可能性] |
| (二)' <u>よほど</u> AでないとBでない。 | (未実現) | |
| (二)" <u>よほど</u> AならBであり得る。 | } | |
| (三) <u>よほど</u> Aしようかとおもったが、やめた。 | …… | [非実現] |

つまり、渡辺は一貫して「よほど」を比較を基本とする程度副詞とみとめているように思われる。

本稿では、第4章で得られた用法記述から「よほど」のすべての用法にわたって、2つの事態の関係に関わる評価のあり方がみとめられ、比較構文をとることをはじめ、それぞれの用法で見られた構文的な制約はそのような「よほど」のもつ評価のあらわれであると考えた。渡辺で計量構文とされる「Xは____Aだ」に「よほど」がそのままでは用いられないのもそのためであるが、また、比較対象を伴った比較構文に用いられるのも、2つの事態の関係に関わる評価による構文的な制約の1つであると考えられる。

このように考えると、「よほど」が比較で用いられる用法（本稿の《比較評価判断用法》）は、それ自体が、他の用法の構文的な制約と同様に、「よほど」がおさまるための1つの構文条件であり、渡辺(1990)のように「制約のない」基本的用法とはみとめがたい。このことは、第4章の用法記述で明らかにしたように、比較にたつ場合でさえ、「ずっと」「はるかに」など他の「比較系」の副詞と比べると、「よほど」が用いられる比較がさらにいくつかの点で特徴づけられることにもあらわれている。

・比較対象のあらわれ方

（「XはYよりAだ」という関係において「Y」よりも「X」の方が表示されやすく「Xは」でなく「Xの方が」をとってあらわれやすい）

- ・結びつく語が「いい」「ました」に代表される評価的なものに偏る
- ・比較の文が言い切りの形で平叙文の終止述語にたつものにほぼ限定される（従属節や連体節にあらわれる例はほとんどない）

これらの点によって、「よほど」が用いられる比較は、単に程度差を述べるというよりは一方を積極的に選択して評価する比較判断であることがわかり、さらにその比較判断自体が先行文脈（一般常識や他者の主張）に反するものが主であった。このことをもって「よほど」がもつ評価性を〈意外性〉と記述したが、かつそれが2つの事態の関係に関わる評価であることは、一見まったくかけ離れて見える他の用法とも共通する「よほど」の本質的な性格ではないかと思われるのである。比較というのは「よほど」のもつ評価のあらわれの1つのかたちにすぎず、それをもって基本用法とみなし、「比較系」の程度副詞と位置づけるのは一面的である。「よほど」は他の用法すべてに通じる評価のあり方、2つの事態の関係づけの面からとらえなおすことができるのではないか。つまり、「比較系」の程度副詞ととらえることはもちろん、比較か計量かという程度副詞の枠組みのなかにはおさまらない副詞だということになる。

7. 4. 2. 2 他の副詞との関係

このような見方にたつと、「よほど」は程度をあらわす副詞に限らず、他のさまざまな副詞との関係のなかでその位置づけを探る可能性、必要性をもつ。

まず、より典型的な「叙法副詞」との叙法性との関わり方の違いについては7. 3でもすでに述べた。文末の叙法形式の文法的な意味に直接関わって呼応関係をもつ「どうか—（依頼）」「たぶん—（推量）」「もし—（仮定条件）」などに比べ、「よほど」は2つの事態の関係に関わる評価をもつことによって、間接的に共起しやすい叙法形式が偏るものであると考察した。

叙法性との関わりをもつ副詞の中には「よほど」と同様、状態性の程度を限定する機能をもちあわせた「さぞ」「あまり」などがある。

「さぞ」については第4章、4. 2. 4. 3でも検討したが、共起する形式が、「だろう」「ことだろう」「う・よう」といった、「推定」系（「らしい」「ようだ」「みたいだ」）を除いた狭い意味での推量形式が80%以上を占め、推量判断の内容も過去、現在（発話時）、未来の事態が広くあらわれることを確認した。つまり、「よほど」は2つの事態の関係に関わる評価をもつことによって、間接的に共起しやすい叙法形式が偏るものであるのに対し、「さぞ」は程度性をもちつつも、文の狭義「推量」という叙法性とも直接的に関わり、典型的な「叙法副詞」に近い。このことは、「よほど」には、次のように他の「叙法副詞」とも共起する例が見られるが、「さぞ」には1例もなく、加えると(377)(378)のように重複した感じをあたえることにもあらわれる。

(375) おそらくこの人にとっては、県の方針による昇給ストップや宿日直その他の手当の減額が、よほど辛いことであつたに違いない。 (石川達三「人間の壁」)

(376) あの若僧とおれは、ひょっとするとよほどふかい宿縁でつながっているのかもしれぬ。 (司馬遼太郎「国盗り物語」)

(377) 「*? {おそらく／たぶん} 東京駅も、さぞホームが汽車で混雑していることでしょうね」
目前の光景から、鳥飼は、まだ見ない東京駅を空想して言った。(松本清張「点と線」)

(378) 星の手から安い原料をもぎとって一掃したことで、*? {おそらく／たぶん} 競争相手の業者はさぞ喜んだことであろう。(星新一「人民は弱し官吏は強し」)

このように、関与する叙法的意味(狭義の「推量」か「推定」か)や、叙法性との関わり方、さらに、結びつく状態性をもつ語の意味的なタイプの違いなどの観点から「さぞ」との共通点や相違点を見出すことができる。

また、「あまり」も程度や量を限定し、程度性をもつものであり、須賀一好(1992)や服部匡(1993)などでも指摘されているが、否定で用いられない場合、主文にはあらわれにくく、次のような条件節や原因理由をあらわす節に用いられる、といった制約をもつようである。

*あまり寒い。

あまり寒いと冷たい飲み物は売れない。

あまり寒かったので冷たい飲み物は売れなかった。

「よほど」が用いられる場合にも(否定)条件―帰結、原因(推定)―結果という関係が見られ、2つの事態の関係を前提とする評価をもつ点で共通する面があるが、どのように異なるのかといった観点からそれぞれの程度的な意味、評価的な意味を明らかにしていくことができると思われる。

次に、程度副詞とされる副詞群との関係について述べる。工藤浩(1983)をはじめとする先行研究でも指摘されてきたように、現状との比較性が強いもの(「もっと」「もう少し」「一層」「ますます」)、量をあらわすもの(「ちょっと」「少し」)などの一部をのぞいた程度副詞は命令や意志等の叙法と共起しにくく、それは程度性に伴って評価性をもつためであるとされる。つまり、その濃さには段階があるのだろうが、程度の判定には何らかの評価を伴うのだと思われる。「よほど」も程度性をもつ点でその例外ではなく、「よほど～しなければならない」「よほど～する必要がある」という必要判断には用いられるが、命令等の叙法と共起する実例は見られなかった。しかし、それにとどまらず、「よほど」のもつ評価性は、いくつかの構文的制約に特徴づけられるように、2つの事態の関係を前提と

するものであるという点で他の程度副詞とは異なるものであった。このような違いはあるが、程度の判定に伴う評価という点では共通するため、「なかなか」「結構」「ずいぶん」など、評価性の色濃いものを中心に、程度性に伴う評価の特徴を明らかにしていく必要がある。

本稿では現代語の「よほど」のすべての用法に共通する本質的な性格として複数事態の関係に関わる評価性をみとめたが、この事態の関係づけという観点からは、さらに、比較、複文あるいは連文のなかでとらえるべき副詞との関係が視野に入ってくる。

まず、比較に用いられる副詞は程度性をもつものに限られず、「いっそ」「むしろ」「かえって」などがあげられる⁶⁰。

(379) 一審で二年かかって、私は疲れ果てた。二審、三審とこの辛い独居房にいるよりは、いっそ処刑されたほうがましだと思う。(加賀乙彦「湿原」)

(380) 「学校に戻ったって、どうせ白い目で見られるだけじゃないか。それなら、いっそ、学校などはやめちまった方がいいんだ」(立原正秋「冬の旅」)

(381) この模型は私の気に入った。このほうがむしろ、私の夢みていた金閣に近かった。(三島由紀夫「金閣寺」)

(382) 昨夜、雨戸の隙間で唸る吹雪の音をききながら、みずから望んで江藤に身をまかせたのは、愛というよりはむしろ一つの脱出行為であったかも知れない。(石川達三「青春の蹉跎」)

(383) 「雨や風の日は船はむりでしょう。自転車のほうが、かえって早いでしょうに。」(壺井栄「二十四の瞳」)

(384) そのにおいは、二階の彼の部屋にまでしみこんでいるのである。……庭に逃げても、においは彼を追って来た。近所のにおいが集まって来るから部屋の中よりも庭の方がかえってよくなかった。(新田次郎「孤高の人」)

「よほど」が用いられる比較には、単に程度差を述べるというよりは一方を積極的に選択して評価する比較判断である、という特徴があり、これらの副詞とは近づきがみとめられる。しかし一方で、程度性をもつか否かや、それぞれの副詞が比較以外の用法にも共通

⁶⁰ 「いっそ」「むしろ」は、工藤浩(1977)で「限定副詞」と称され「文中の特定の対象を、同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞」(p.972)と定義される副詞群のなかで、「比較選択」に関わる「他の対象的な語句と比較して、それヨリこちらノハウガと、対象の語句をあえて二者択一的に選びとることを表わす」ものとして扱われている。(この「限定副詞」は工藤浩(1982)で「とりたて副詞」と呼びかえられ陳述副詞の1つのタイプとされる。)

する機能により、あらわれる位置やとりうる文の構造にも異なりがでてくる。「いっそ」は第4章、4.6でも検討したが、意志や願望、命令の叙法と共起しやすい。一方、「かえって」は、多くが、ある状況がありそこから予測される結果と異なる事態が生ずるという2つの事態の関係において用いられ、予測との相違という〈意外性〉という評価をもつためか、平叙文に限られる。

(385) この前、ここに訪ねてきた父から、ひとまわり大きくなった感じがするね、と言われたが、それは自分でも感じていた。社会から隔絶されているために、かえって社会が見えてきた、という点もあった。(立原正秋「冬の旅」)

(386) 六時過ぎに、ようやく内藤が裕見子と一緒に控室に入ってきた。裕見子は地味な紺色のスーツを着ていたが、ほっそりとした体型によく合い、かえって鮮やかに映った。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

このように、比較という事態の関係づけに関わる副詞のなかで、叙法的制限や評価性の観点からそれぞれの副詞の性格や相互の関係を明らかにしていくことができるだろう。

さらに、複文、連文に関わる副詞としては、渡辺実(1980)で「せっかく」について「見越しの評価」とよばれた、

せっかく A だから B だ (せっかくここまで来たのだから ニ三日泊ってお行き。)

せっかく A だが非 B だ (せっかくここまで来たのに もう帰るのか。)

において、事態 A を直接の評価の対象とするものでありながら、「せっかくここまで来た」という事態 A のみでは用いることができず、続く事態 B (非 B) が表現されることにより落ち着きを得る、という二重性格の評価に関わるものが指摘されている。このような性格をもつ副詞は、他にも「なまじ」「さすが」「どうせ」「へたに」「いくら」「いっそ」など少なくない。

なまじ Ph.D の肩書きなどを持っていると、民間企業でもなかなか雇ってもらえない。

彼女はさすが留学経験があるだけあって、英語の成績はトップだった。

どうせ買えないのだから、カタログを眺めていてもしかたがない。

小林可奈子(1992a)(1992b)では評価という見方はしていないが、従属節におさまらず主節にも及ぶものや単文でも前後の他の文に依存するという特徴を「接続性」とよび、このような特徴をもつ副詞に注目している⁶¹。

本研究はこれらの副詞の詳細な分析までは行えなかったが、「よほど」はこのような 2

⁶¹ 「接続性」というものがどの範囲にまでみとめられるものかわからないが、「よほど」「よくよく」「せっかく」「いざ」「いっそ」「せめて」「さぞ」などの例があげられている。

つの事態の関わりを前提とした評価性をもつ副詞のなかで位置づけられる面をもつ。

さらに、事態間の関係に関わるものとして、川端善明(1983)では「関係副詞」というとらえ方が示されている。「やはり・案の定」「図らずも・意外にも」「事実・実際」など、予期や反予期、あるいは事実性においてことがらを規定しながら、前提の存在が了解されるもの（前提となるコトガラとしての意味は連文や複文において現れる場合も単に暗示されるにとどまる場合もある）から、「まして・いっそ・むしろ」や「まるで・さも・いかにも」など比較・比況の副詞までを広く2つの事態の関係に成立するものとしている。「よほど」に関しても、比較、結果—原因（推定）、（否定）条件—帰結など2つの事態の関係は一樣ではなかったが、このような副詞に関わるさまざまな事態間の関係の面から、より広く検討される可能性もある。

副詞は多種多様で広範囲にわたり、現時点で明確な位置づけを示すことはできないが、「よほど」の分析を通して見えてきた、さまざまな共通点と相違点をもって存在する他の副詞との関係、位置づけの検討の可能性とともにその必要性について述べた。

第8章 まとめと今後の課題

本研究の結論として、明らかになったことと本研究の意義をまとめる。

本稿では、副詞が複合的にもつ、程度性、評価性、叙法性といった多面的な性格を、文の内部構造や、複文、連文関係の構造においてもつさまざまな特徴に形式づけられたものとして明らかにすべく、「よほど」という副詞を中心にとりあげ、詳細な用法記述、考察を行ってきた。

現代語の実例 1005 例にもとづいた実例分析の結果、典型として次のような構造でとりだせる用法をまとめるに至った。第4章のそれぞれの節で明らかにした概略のみ示す。

I 《推定判断用法》

- ・ **よほど** (感情・心情をあらわす形容詞) らしく、(既実現の事態の描写).....。
[推定内容 (事態の原因・事情)] [推定根拠]
例 彼はよほど疲れていたらしく、夕食もとらずに寝てしまった。
- ・ (既実現の事態の描写).....。 **よほど** (感情・心情をあらわす形容詞) のだ (ろう)。
[説明される対象] [説明内容 (事態の原因・事情)]
例 人々はしばしば汗をぬぐっている。外はよほど暑いのだろう。

II 《比較評価判断用法》

- Y (なんか・など) より X (の) ほうが **よほど** (主観的・評価的形容詞)。
[比較対象] [比較対象] [評価判断]
例 遊園地なんかより家の前の空き地のほうがよつほどおもしろい。

III 《必要判断用法》

- ・ **よほど** 意志動詞 + ないと、
なければ、
[必要性のある行為 (の欠如)] [望ましくない事態の生起]
例 六甲縦走路はよほど調査していないと道に迷うおそれがある。
- ・ (望む事態) するには、 **よほど** 意志動詞 {ないと／なければ} いけない。
必要がある。
[目的] [行為の必要性]
例 この授業の単位をとるにはよほど勉強しないとけない。

IV 《例外提示用法》

- ・ **よほど** { (形容詞) + 名詞 } + ないと、
無意志動詞 } 以外は、
[ある特徴づけ (の除外)] [標準～安心]
例 よほどひどい汚れでない限りこの洗剤で落ちます。

- 例　彼女が黙りこむのはよほど機嫌がわるいときに限られていた。

よほど { 意志動詞 しようかと思った } { が／けれど、 } ……(事態の不実行の描写)。
 { したかった。 } { しかし、 }
 [過去の意志・願望] [意志・願望の不実行]

例 よっぽど文句を言ってやろうかと思ったが、我慢した。

①いずれの用法においても形式の検討を積み重ね、複文、連文にまで範囲を広げて分析を行った。構文的な特徴を多角的にとらえることにより、「よほど」の用いられる構造をより詳細に示し、それぞれの用法について形式面にとどまらない本質的な規定を提示した。

本研究の実例の 96.4%は、以上のいずれかの用法に位置づけられるが、いずれの用法の
特徴ももたない例がわずかながら見られた。これらの位置づけとともに、現代語の意味・
用法にどのように至ったかを探るため、先行研究において現代語につながる用法が見られ
はじめるとされる近世後期から近代の実例（近世後期（江戸語）105 例、明治期 496 例、
大正期 323 例）をもとに使用の実態を調査した。その結果、次のことが明らかになった。

- つまり、近世後期に広く程度や量をあらわすものとして用いられながら、現代語につながるような例が見られはじめ、明治、大正期を経て、現代までに構文的に制約のある5つ

の用法にほぼ限られる方向で用法が変化してきたことがわかった。そのような変化のなかで、特定の量や何らかの基準を想定しやすいものに限り、構文的な制約のない使用が現代にも残っているのだと解釈される。したがって、上であげた5つの用法に位置づけにくい、少数の現代語の例についても、古い用法の残存、あるいは現代語のいずれかの用法への変化のなかで位置づけられるものとして個別に検討した。

このような通時的な観点からの考察を経て、いずれの特徴ももたない少数例についても現代語の用法への変化のなかで位置づけられるという見通しが得られた。つまり、本稿で提示した、先にあげたような構造で示される用法は、現代語の使用を包括的に位置づけ得るものであると考えられることが確認された。

また、第4章で得られた現代語の用法記述をもとに、それぞれの用法において用例数の偏りによる典型的なものと周辺的なものを手がかりに、現代語の用法の相互の関係や共通点、相違点について考察し、次のように全体のつながりを示した。

個別一回的な判断

既実現の事態 から 過去～現在の原因・事情の推定判断 …《推定判断用法》

(現状) 彼はよほど疲れていたらしく、夕食もとらずに寝てしまった。

↓

程度〈通常程度を基準として過度に「大」〉+評価〈異常性〉〈意外性〉

↓

多回的・習慣的な一般化された判断

(通常の状態として ある現状) { 現状否定 から 未来への必要判断 …《必要判断用法》

六甲縦走路はよほど調査していないと道に迷うおそれがある。

程度〈通常程度を基準として過度に「大」〉+評価〈異常性〉

{ 現状肯定 から 標準からはずれる例外の提示 …《例外提示用法》

イギリスでは、よほど下層出身者でない限り、箸の使い方を知っている。

程度〈通常程度を基準として過度に「大」〉+評価〈異常性〉

↓

↓

時間性をもたない超時の判断

(相手の主張～一般常識という

より一般化された現状) に対して それに反する比較判断 …《比較評価判断用法》

遊園地より 家の前の空き地のほうがよっぽどおもしろい。

程度〈具体的な比較対象を基準として過度に「大」〉+評価〈意外性〉

結果的に不実行に終わる事態の過去における意志願望 …《意志不実行用法》

頭にきてよっぽど文句を言ってやろうかと思ったが、我慢した。

程度〈「大」〉+評価〈異常性〉

全体の意味構造を考えるにあたっては、人間の認識にとって最も基本的な個別一回的な事態において用いられるのが典型である《推定判断用法》を出発点におき、個別一回的な判断から時間性をもたない超時の判断へという方向でそれぞれの用法の関係を示した。

（《意志不実行用法》については早くに固定した成立事情等から直接他の用法との近づきや境界的な例を見出しにくい面がある。）

このように用法全体をみると、「よほど」は〈過度に「大」〉という程度的な意味と、それに伴う〈異常性〉〈意外性〉という評価的な意味をあらわし、さらにこの評価は2つの事態の関係を前提としてくだされるものであることがすべての用法に共通してみとめられた。また、《意志不実行用法》を除いた、構文上にあらわれる2つの事態間で行われる種々の判断には、左側に記した「現状認識とそれに対する評価」が通底するものとしてある。

これらの共通点から、「よほど」のもつ程度性、評価性、叙法性について整理し、現代語の「よほど」の性格について次のようにまとめた。

現代語の「よほど」は〈過度に「大」〉という程度的な意味をあらわし、〈異常性〉〈意外性〉といった評価的な意味を伴う。この評価は用法記述によって明らかになった構文的な特徴をもとに上でまとめたとおり、2つの事態の関係を前提として見出されるものであり、このような評価のあり方が「よほど」の評価性を特徴づけている。「よほど」が特定の構文環境にあらわれ、文の叙法性と関わりをもつのは、このような評価のあり方のあらわれである（たとえば《推定判断用法》では「既実現事態と（原因推定）判断」という2つの事態の关系到重点があるために、「推定」系の形式（「らしい」）、あるいは「説明」を伴う諸形式（「のだ（ろう）」）と共起しやすい）。

つまり、近世後期、近代まで既定の事態や状態をはじめ広く程度や量をあらわすいわゆる程度副詞であった「よほど」は、現代では状態性をもつ語と結びついて程度を限定する機能をもちながら、時間的前後関係にある2つの事態、もしくは比較される2つの事態の关系到関わる評価性を帯び、評価副詞としての性格をももつに至ったと考えられる。このような評価性の獲得とともに、程度的な意味も〈過度に〉というほどまでは感じられないものから、〈過度に「大」〉へと変化してきたと考えられることも指摘した。そして、このように考察を進めてきた本稿の立場は、「よほど」を比較を基本とする程度副詞として扱うのではなく、比較構文をとることもその1つの構文的な制約とみなしたうえで、複数事態の关系到関わる評価をもつ評価副詞という観点からもとらえること、程度性と評価性と叙法性とは、一つの副詞においても相互に関わりあっていることを主張するものである。

従来の副詞の枠組みにおける、程度副詞との評価のあり方の違い、文の叙法性に直接関わって呼応関係をもつ典型的な「叙法副詞」（「どうか」「たぶん」「もし」）との叙法性との関わり方の違いについても、意識的に選んで検討したいいくつかの副詞との比較を通して評価のあり方の観点から論じた。さらに、複文や連文にまで視野を広げた構文的な特徴の検討から明らかになった、2つの事態の关系到関わる評価、あるいは事態の関係づけの面か

ら、共通の性格をもつ他の副詞とともにとらえていく可能性、必要性を示した。

以上のように、本研究は副詞が用いられる構文的な特徴を実例にもとづいて詳細に記述することによって、現代共時態における用法を提示するとともに、1つの副詞が複合的にもつ程度性・評価性・叙法性という多面的な性格を明らかにし、その相互の関係を統合的にとらえることを試みた。

そこには、実例分析の際に本研究で徹底して意識的にとった方法論がある。

それは、副詞の用法を記述する際に、「形式」を重視し、それらを構文環境の中に積極的に見出して記述の対象とした点である。ここで「形式」として扱うものには、まず、結びつく語の種類や語形、共起する叙法形式や比較対象をあらわす形式といった、文の内部構造において目につきやすい形式があり、それらを分析の一次的指標とした。また、他の副詞と比較して「よほど」の実例に数量的な偏りがあれば、結びつく語の意味的なタイプ、他の語との相対的な位置などもまた「形式」として扱った。さらに、共起する叙法形式の数量的な偏りを手がかりに、実例から一般化できるものであれば、複文の節と節との関係、あるいは文の内部構造をこえて、連文構造であられる文と文との関係、「よほど」が用いられる文とそれに先行する文脈との関係にまで分析の範囲を広げ、やはり広義の「形式」として記述の対象とし、それぞれの用法の構造に反映させた。

これらの「形式」をとりだす際の拠りどころとしたのは実例に見られる用例数の分布、偏りであり、実例分析によって得られる数値の面からも実証的に支えられている。

このように、実例から帰納的に「形式」を見出して記述するという方法論をとったことにより、具体的には先にまとめたようなそれぞれの用法の構造を提示するとともに、これらの「形式」に裏づけられたものとして「よほど」の意味機能を程度性・評価性・叙法性といった複数の観点から考察し、明らかにすることが可能となった。

そしてまた、このような方法論にたって得られた用法記述は、

①現代語の実例の 96.4%を包括的に位置づけられるものであり、通時的にみた用法の数量分布の推移という点からみても、「よほど」の意味・用法の変化を無理なく説明できるものであったこと（残り 3.6%の少数例についても通時的な意味・用法の変化のなかで位置づけられるものであると解釈された）

②用法間の関係を考察するにあたって、得られた用例数の分布がそれを説明するのに説得的なものであったこと

など、さまざまな点で結果的にも実例の数値に矛盾するものでなく、むしろ数値に説得的に語らせ得るような妥当性のあるものであった。

本研究は、副詞の意味機能を記述するために必要な程度性・評価性・叙法性といった複数の観点からの分析にとって、このような方法論の有効性、妥当性を示したものとしても意義があり、今後の副詞研究に対して貢献し得るものである。そして、このような方法論にたった副詞の分析は、個々の副詞を、既存の枠組みをこえてさまざまな副詞との関係な

かでとらえ、より包括的な副詞のシステムのなかに位置づけていく手立てになると思われる。

最後に、今後の課題について述べる。

「よほど」に関してみた場合でも、第7章、7. 4. 2. 2で示したようなさまざまな方向で他の副詞との関係を検討していく可能性とともに必要性があることを述べた。特に、複数の事態の関係に関わる評価をもつ、すなわち、複文や連文のなかで意味機能を明らかにしていくべき他の副詞については、まだ十分に分析ができておらず、本稿では扱えなかった。これらの副詞の性格をとらえるには、さらに分析を進め、複数の事態との関わり方や評価のあり方を記述していく必要がある。程度副詞の大半がもつ程度の判定に伴う評価をはじめとするさまざまなものにかぶさる形で存在する評価を含め、副詞があらわす評価やそのあり方にはどのようなものがあるのかを明らかにしていくことも必要である。

程度性、評価性、叙法性の有無やその度合いは副詞によって異なり、それによって注目すべき構文的な特徴や分析の観点も異なってくる。1つ1つの副詞の分析を積み重ね、それぞれの副詞がどのような点でどのような副詞と関わりあうのかを丹念に調査していくことが今後の課題となる。本研究をその出発点として取り組んでいきたい。

参考文献

- 浅野百合子(1983)「程度副詞の分析—ずいぶん・だいぶ・なかなか・相当・かなり—」『日本語教育』52, 日本語教育学会, pp.47-54
- 安達太郎(1996)「副詞から見た証拠性判断の意味特徴」『神戸大学留学生センター紀要』3, 神戸大学, pp.67-77
- 石神照雄(1980)「比較の構文構造—〈程度性〉の原理—」『文芸研究』93, 日本文芸研究会, pp.41-49
- 石神照雄(1981)「比較表現から程度性副詞へ」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院, pp.233-248
- 市川孝(1965)「副用語」『岩波講座 日本語 6 文法 I』岩波書店, pp.219-258
- 大鹿薫久(1993)「「だろう」を述語にもつ文についての覚書き」『日本文芸研究』45・3, 関西学院大学日本文学会, pp.20-34
- 大鹿薫久(1993b)「推量と「かもしれない」「にちがいない」—叙法の体系化をめざして—」『ことばとことのは』10, あめつち会, pp.96-104
- 大鹿薫久(1995)「本体把握—「らしい」の説—」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院, pp.527-548
- 奥田靖雄(1967)「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8 [再録: 奥田靖雄(1996)『ことばの研究・序説』むぎ書房, pp.3-20]
- 奥田靖雄(1968-1972)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28 [再録: 言語学会編(1983)『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房, pp.21-149]
- 奥田靖雄(1972)「語彙的なものと文法的なもの」『宮城教育大学国語国文』3 [再録: 奥田靖雄(1996)『ことばの研究・序説』むぎ書房, pp.21-29]
- 奥田靖雄(1973)「言語における形式」『教育国語』35 [再録: 奥田靖雄(1996)『ことばの研究・序説』むぎ書房, pp.31-40]
- 奥田靖雄(1979)「意味と機能」『教育国語』58 [再録: 奥田靖雄(1996)『ことばの研究・序説』むぎ書房, pp.159-169]
- 奥田靖雄(1980-1981)「言語の体系性」『教育国語』63・64・65・66 [再録: 奥田靖雄(1996)『ことばの研究・序説』むぎ書房, pp.189-226]
- 奥田靖雄(1983)「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学学会編『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房, pp.281-323 (1962 に報告)
- 奥田靖雄(1984)「おしはかり (一)」『日本語学』12・3, 明治書院, pp.54-69
- 奥田靖雄(1985)「おしはかり (二)」『日本語学』4・2, 明治書院, pp.48-62
- 奥田靖雄(1985)「文のさまざま (1) 文のこと」『教育国語』80, 教育科学研究会・国語

- 部会, pp.41-49
- 奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」言語学研究会編『ことばの科学1』むぎ書房, pp.181-212
- 奥田靖雄(1988)「文の意味的なタイプ—その対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい—」『教育国語』92, 教育科学研究会・国語部会, pp.14-28
- 奥田靖雄(1990)「説明(その1)—のだ、のである、のです—」言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房, pp.173-216
- 奥田靖雄(1996)「文のこと—その分類をめぐって—」『教育国語』2-22, 教育科学研究会・国語部会, pp.2-14
- 奥田靖雄(1996)「現実・可能・必然(中)—「していい」と「してもいい」—」言語学研究会編『ことばの科学7』むぎ書房, pp.137-173
- 奥田靖雄(1996)『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 奥田靖雄(1999)「現実・可能・必然(下)—しなければならない—」言語学研究会編『ことばの科学9』むぎ書房, pp.195-261
- 奥田靖雄(2001)「説明(その4)—話しあいのなかでの「のだ」—」言語学研究会編『ことばの科学10』むぎ書房, pp.175-202
- 川端善明(1983)「副詞の条件—叙法の副詞組織から—」渡辺実編『副用語の研究』明治書院, pp.1-34
- 川端元子(2000)「聞き手への行為要求表現と程度副詞—共起制限理由の再検討—」『名古屋大学国語国文学』86, 名古屋大学国語国文学会, pp.(1)-(15)
- 川端元子(2002)「比較構文に出現する程度副詞—スケールの相違という観点から—」『日本語科学』12, 国立国語研究所, pp.29-47
- 川端元子(2012)「程度副詞を分類する視点の考察」『愛知工業大学研究報告』47, 愛知工業大学, pp.115-124
- 菊地康人(2000)「「ようだ」と「らしい」—「そうだ」「だろう」との比較も含めて—」『国語学』51-1, 国語学会, pp.46-60
- 北澤尚(2001)「条件表現形式「限り」の文法記述」『東京学芸大学紀要 第2部門人文科学』52, 東京学芸大学, pp.37-45
- 木下りか(2010)「副詞ドウヤラと判断の焦点化」『大手前大学論集』10, 大手前大学, pp.111-123
- 工藤浩(1977)「限定副詞の機能」『国語学と国語史』明治書院, pp.969-986
- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」国立国語研究所『研究報告集3』秀英出版, pp.45-92
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院, pp.176-198
- 工藤浩(1989)「日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39, 東京外国語大学, pp.13-33
- 工藤浩(1996)「「どうしても」考」『日本語文法の諸問題』ひつじ書房, pp.163-192

- 工藤浩(1997)「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房, pp.55-72
- 工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店, pp.161-234
- 工藤浩(2005)「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82-8, 東京大学国語国文学会, pp.1-15
- 工藤浩(2005)「[書評]「渡辺実著『国語意味論—関連論文集』」『日本語の研究』1-1, 日本語学会, pp.91-96
- 工藤真由美(2006)「文の対象的内容・モダリティ・テンポラリティの相関性をめぐって—「らしい」と「ようだ」—」『ことばの科学 11』むぎ書房, pp.139-182
- 言語学会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 国立国語研究所(西尾寅弥)(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 国立国語研究所(宮島達夫)(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 国立国語研究所(1991)『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』大蔵省印刷局
- 小林可奈子(1992a)「二つの節を前提とする副詞の意味分析について—「あまり」「よほど」「いったん」を例として—」『都大論究』29, 東京都立大学国語国文学会, pp.1-12
- 小林可奈子(1992b)「「よほど」「よくよく」の意味分析」『鹿児島短期大学研究紀要』50, 鹿児島短期大学, pp.35-46
- 小矢野哲夫(1996)「評価のモダリティ副詞の文章における出現条件—「幸い」と「せっかく」を例にして—」『日本語・日本文化研究』6, 大阪外国語大学日本語講座, pp.1-16
- 小矢野哲夫(2000)「評価的な意味—副詞「どうせ」を例にして—」『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』ひつじ書房, pp.225-236
- 佐々木文彦(2010)「副詞「よほど」の意味・用法について—近代から現代へ—」『近代語研究 第15集』武蔵野書院, 近代語学会, pp.(117)-(132)
- 佐野由紀子(1998a)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3, 国立国語研究所, pp.7-22
- 佐野由紀子(1998b)「比較に関わる程度副詞について」『国語学』195, 国語学会, pp.(1)-(14)
- 新川忠(1979)「副詞と動詞とのくみあわせ」試論『言語の研究』むぎ書房, pp.173-202
- 須賀一好(1992)「副詞「あまり」の意味する程度評価」『山形大学紀要(人文科学)』12-3, 山形大学, pp.35-46
- 杉村泰(2003)「日本語の副詞サゾの意味分析—「共感」と「程度性」—」『言語文化論集』25-1, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.67-81
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 竹内美智子(1973)「副詞とは何か」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 5 連体詞・副詞』明治書院, pp.71-146
- 田中里美(1993)「ことばの評価性」『日本語・日本文化研究』3, 大阪外国語大学日本語講

- 座, pp.121-133
- 田野村忠温(1990)「文における判断をめぐって」『アジアの言語と一般言語学』三省堂, pp.785-795
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法 I —「のだ」の意味と用法—』和泉書院 ((2002)再刊を参照した。)
- 田野村忠温(1991)「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10, 京都大学言語学研究会, p.62-78
- 田野村忠温(2000)「意味分析と電子資料—副詞「よほど」の分析を例に—」『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』ひつじ書房, pp.211-224
- 田和真紀子(2011)「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』61 第1部, 宇都宮大学教育学部, pp.25-36
- 丹保健一(1981)「程度副詞と文末表現—「ひじょうに」を中心に—」『金沢大学語学・文学研究』11, 金沢大学教育学部国語国文学会, pp.22-30
- 茶谷恭代(2005)「副詞「よほど」の意味と用法」『言語・地域文化研究』11, 東京外国語大学大学院, pp.103-124
- 茶谷恭代(2010)「近世後期の江戸語資料における副詞「よほど」の使用の実態調査」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.4, 東京外国語大学 (TUFS) 大学院総合国際学研究院, pp.21-38
- 中山恵利子(1996a)「程度副詞の分類の試み—その程度・量・基準により—」『阪南論集 人文・自然科学編』31-3, 阪南大学, pp.75-86
- 中山恵利子(1996b)「程度副詞はことがら成分か」『阪南論集 人文・自然科学編』31-4, 阪南大学, pp.39-53
- 鳴海伸一(2009)「「相当」の意味変化と程度副詞化」『国語学研究』48, 東北大学大学院文学研究科国語学研究室, pp.133-120
- 鳴海伸一(2012)「程度的意味・評価的意味の発生—漢語「随分」の受容と変容を例として—」『日本語の研究』8-1, 日本語学会, pp.(16)-(31)
- 西尾寅弥(1988)『現代語彙の研究』明治書院
- 仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店, pp.79-159
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 服部匡(1993)「副詞「あまり (あんまり)」について—弱否定および過度を表す用法の分析—」『1993年度 学術研究年報』同志社女子大学, pp.1-27
- 服部匡(1996)「程度副詞と比較基準—「多少」、「少し」を中心に—」『1996年度 学術研究年報』同志社女子大学, pp.1-16
- 濱田敦(1953)「「やう\／」から「やっと」へ—語の意味の変化の一例として—」『人文研究』4-6 [再録: 濱田敦ほか(1991)『国語副詞の史的研究』新典社, pp.7-23]
- 濱田敦・井出至・塚原鉄雄(2003)『国語副詞の史的研究 増補版』新典社 [初版1991]
- 林奈緒子(1996)「意味素性による程度副詞の記述」『筑波応用言語学研究』3, 筑波大学, pp.13-26

- 林奈緒子(1997)「程度副詞と命令のモダリティ」『日本語と日本文学』25, 筑波大学国語国文学会, pp.1-10
- 早津恵美子(1988)「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』7-4, 明治書院, pp.46-61
- 早津恵美子(2009)「語彙と文法の関わりーカテゴリーカルな意味ー」『政大日本研究』6, 台湾 政治大學日本語文學系, pp.1-70
- 原田登美(1982a)「否定との関係による副詞の四分類」『国語学』128, 国語学会, pp.(1)-(17)
- 原田登美(1982b)「強程度副詞のムード性」『外国語・外国文学研究』6, 大阪外国語大学大学院修士会, pp.49-64
- 播磨桂子(2000)「副詞「随分」などについて」『日本文学研究』35, 梅光女学院大学日本文学会, pp.93-105
- 播磨桂子(2006)「「よほど」の使用条件の変化」『筑紫語学論叢Ⅱー日本語史と方言ー』風間書房, 筑紫国語学談話会, pp.346-363
- 樋口文彦(1989)「評価的な文」『ことばの科学3』むぎ書房, pp.181-192
- 樋口文彦(2001a)「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学10』むぎ書房, pp.43-66
- 樋口文彦(2001b)「状態形容詞と特性形容詞、その評価性をめぐって」『教育国語』4-3, 教育科学研究会・国語部会, pp.4-10
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』第6版 東京堂出版
- 前田直子(2009)『日本語の複文』くろしお出版
- 松井栄一(1977)「近代口語文における程度副詞の消長ー程度の甚だしさを表す場合ー」『松村明教授還暦記念 国語と国文学』明治書院, pp.737-758
- 松木正恵(1996)「「とみえる」の表現性ー「らしい」との比較を通してー」『表現研究』64, 表現学会, pp.28-35
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』勉誠社〔復刊1974〕
- 松下大三郎(1930)『標準日本口語法』中文館書店
- 松村明(1957)『江戸語東京語の研究』東京堂出版〔増補版1998〕(増補版を参照)
- 三尾砂(1942)『話言葉の文法(言葉遣編)』帝国教育会出版部
- 三宅知宏(1994)「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』63-11, 京都大学国文学会, pp.20-34
- 三宅知宏(1995)「「推量」について」『国語学』183, 国語学会, pp.(1)-(11)
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』(第4章 認識のモダリティ) くろしお出版, pp.121-171
- 宮島達夫(1977a)「語彙の体系」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語9 語彙と意味』岩波書店, pp.1-39〔再録: 宮島達夫(1994)『語彙論研究』むぎ書房, pp.7-42〕
- 宮島達夫(1977b)「単語の文体的特徴」『国語学と国語史』明治書院〔再録: 宮島達夫(1994)『語彙論研究』むぎ書房, pp.211-236〕
- 宮島達夫(1983)「情態副詞と陳述」渡辺実編『副用語の研究』明治書院, pp.89-116
- 宮島達夫(1991)「言語のあいまいさ」『教育国語』100, 教育科学研究会・国語部会〔再録:

- 宮島達夫(1994)『語彙論研究』むぎ書房, pp.177-207]
- 宮島達夫(1994)『語彙論研究』むぎ書房
- 森田良行(1977)『基礎日本語 1—意味と使い方—』角川書店
- 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型—用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- 八亀裕美(2003)「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15, pp.13-40
- 矢澤真人(2000)「副詞的修飾の諸相」『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店, pp.187-233
- 山口堯二(2006)「副詞「よつぽど」の形成」『京都語文』13, 佛教大学国語国文学会, pp.143-157
- 湯本昭南(1995)「単語の語彙的な意味について」『教育国語』2-19, 教育科学研究会・国語部会, pp.2-9
- 吉井健(1993)「国語副詞の史的研究—「とても」の語史」『文林』27, 神戸松蔭女子学院大学学術研究会, pp.1-30
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館
- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館
- 吉井健(2003)「「とても」の語史」『国語副詞の史的研究 増補版』新典社, pp.311-340 [初版 1991] (増補版に追加された)
- 渡辺実(1949)「陳述副詞の機能」『国語国文』18-1, 京都大学文学部国語学国文学研究室, pp.1-26
- 渡辺実(1957)「品詞論の諸問題—副用語・付属語」『日本文法講座 1 総論』明治書院, pp.77-95
- 渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房
- 渡辺実(1980)「見越しの評価「せっかく」をめぐって」『月刊言語』9-2, 大修館書店, pp.32-40
- 渡辺実(1986)「比較の副詞—「もっと」を中心に—」『学習院大学言語共同研究所紀要』8 [再録: 渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房, pp.259-271]
- 渡辺実(1987)「比較副詞「よほど」について—副用語の意義・用法の記述の試み(二)—」『上智大学国文学科紀要』4 [再録: 渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房, pp.272-284]
- 渡辺実(1988)「潜在比較副詞—副用語の意義用法の記述の試み—」『Sophia Linguistica』23 上智大学 [再録: 渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房, pp.285-297]
- 渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23, 上智大学国文学会 [再録: 渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房, pp.298-313]
- 渡辺実(1991)「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」『国語学』165 [再録: 渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房, pp.94-122]
- 渡辺実(1996)『日本語概説』岩波書店
- 渡辺実(1997)「難語「さすが」の共時態と通時態」『国文学科紀要』14 上智大学 [再録: 渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房 pp.372-212]

渡辺実(2001)『さすが！日本語』筑摩書房

渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房

Greenbaum, Sidney (1969) *Studies in English Adverbial Usage*. Longman. [郡司利男・

鈴木英一監訳(1983)『英語副詞の用法』研究社出版]

Jackendoff, Ray.S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press.

Leisi, Ernst (1953) *Der Wortinhalt : seine Struktur im Deutschen und Englischen*.

Quelle & Meyer. [邦訳：鈴木孝夫訳(1971)『意味と構造』研究社出版] (邦訳を参照)

Palmer, F.R. (2001) *Mood and Modality*. second edition. Cambridge University Press.

Quirk, Randolph. Greenbaum, Sidney. Leech, Geoffrey. and Svartvik, Jan. (1985) 8.The semantics and grammar of adverbials. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman. pp.478-653

Sapir, Edward (1944) Grading : A study in semantics. *Philosophy of Science*,11. pp.93-116

辞書・辞典類

国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版

佐藤喜代治編(1977)『国語学研究事典』初版 明治書院

日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編(2000-2002)『日本国語大辞典』第2版，小学館 [初版：日本大辞典刊行会編(1972-1976)『日本国語大辞典』小学館]

松村明編(1988)『大辞林』初版 三省堂

言語資料一覧

■現代語資料（昭和戦後 1945 年～）

・『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』（新潮社 1995）より以下 39 冊 55 作品

【小説】

著者名	生年	書名	発行年	作品名・発表年ほか
赤川次郎	1948	『女社長に乾杯!』	1984	「女社長に乾杯！」1982
阿川弘之	1920	『山本五十六』	1973	「山本五十六」1965
安部公房	1924-1993	『砂の女』	1981	「砂の女」1962
有吉佐和子	1931-1984	『華岡青洲の妻』	1970	「華岡青洲の妻」1966
池波正太郎	1923-1990	『剣客商売』	1985	「剣客商売」1972
石川達三	1905-1985	『青春の蹉跌』	1971	「青春の蹉跌」1968
井上ひさし	1934-2010	『ブンとフン』	1991	「ブンとフン」1970
井上靖	1907-1991	『あすなろ物語』	1958	「あすなろ物語」1953
井伏鱒二	1898-1993	『黒い雨』	1970	「黒い雨」1965 (『姪の結婚』)
遠藤周作	1923-1996	『沈黙』	1981	「沈黙」1966
大江健三郎	1935	『死者の奢り・飼育』	1959	「飼育」1958／「死者の奢り」1957／「戦いの今日」1958／「他人の足」1957／「人間の羊」1958／「不意の唾」1958
大岡昇平	1909-1988	『野火』	1954	「野火」1952
開高健	1930-1989	『パニック・裸の王様』	1960	「巨人と玩具」1957／「裸の王様」1957／「パニック」1957／「流亡記」1959
北杜夫	1927	『榆家の人びと』	1994	「榆家の人びと」1964
倉橋由美子	1935-2005	『聖少女』		「聖少女」1965
沢木耕太郎	1947	『一瞬の夏』	1984	「一瞬の夏」1981
椎名誠	1944	『新橋烏森口青春篇』	1991	「新橋烏森口青春篇」1987
塩野七生	1937	『コンスタンティノープルの陥落』	1991	「コンスタンティノープルの陥落」1983
司馬遼太郎	1923-1996	『国獲り物語』	1990	「国盗り物語」1963-1966
曾野綾子	1931	『太郎物語』	1985 1987	「太郎物語」1973
竹山道雄	1903-1984	『ビルマの堅琴』	1949	「ビルマの堅琴」1947-1948
立原正秋	1926-1980	『冬の旅』	1973	「冬の旅」1968-1969
田辺聖子	1928	『新源氏物語』	1984	「新源氏物語」1978-1979

筒井康隆	1934	『エディプスの恋人』	1981	「エディプスの恋人」1977
壺井栄	1899-1967	『二十四の瞳』	1957	「二十四の瞳」1952
新田次郎	1912-1980	『孤高の人』	1973	「孤高の人」1969
福永武彦	1918-1979	『草の花』	1991	「草の花」1954
星新一	1926-1997	『人民は弱し官吏は強し』	1978	「人民は弱し官吏は強し」1967
松本清張	1909-1992	『点と線』	1971	「点と線」1957-1958
三浦綾子	1922-1999	『塩狩峠』	1973	「塩狩峠」1966-1968
三浦哲郎	1931-2010	『忍ぶ川』	1965	「帰郷」／「幻燈畫集」／「忍ぶ川」1960／ 「初夜」1961／「團欒」1964／「恥の譜」／ 「驢馬」1961
三島由紀夫	1925-1970	『金閣寺』	1960	「金閣寺」1956
水上勉	1919-2004	『雁の寺・越前竹人形』	1969	「越前竹人形」1963
水上勉	1919-2004	『雁の寺・越前竹人形』	1969	「雁の寺」1961
村上春樹	1949	『世界の終わりとハード・ボイル・ワンダーランド』	1988	「世界の終わりとハード・ボイル・ワンダーランド」 1985
吉行淳之介	1924-1994	『砂の上の植物群』	1966	「樹々は緑か」1958／「砂の上の植物群」 1964
渡辺淳一	1933	『花埋み』	1975	「花埋み」1970

【エッセイ・ルポ】

五木寛之	1932	『風に吹かれて』	1972	「風に吹かれて」1968
藤原正彦	1943	『若き数学者のアメリカ』	1981	「若き数学者のアメリカ」1977

・『CD-ROM 版 絶版の 100 冊』（新潮社 2000）より以下 29 冊 55 作品

【小説】

著者名	生年	書名	発行年	作品名・発表年ほか
青山光二	1913-2008	『われらが風狂の師』	1987	「われらが風狂の師」1981
有吉佐和子	1931-1984	『地唄』	1967	「黒衣」／「墨」／「地唄」1956／「人形浄瑠璃」
石川達三	1905-1985	『七人の敵が居た』	1984	「七人の敵が居た」1980
石川達三	1905-1985	『人間の壁』	1961	「人間の壁」1957-1959
石坂洋次郎	1900-1986	『石中先生行状記』	1953 1956	「石中先生行状記」1949
石原慎太郎	1900-1986	『化石の森』	1982	「化石の森」1970

伊藤整	1905-1969	『氾濫』	1990	「氾濫」1956-1958
井上ひさし	1934-2010	『下駄の上の卵』	1982	「下駄の上の卵」1980
井上靖	1907-1991	『射程』	1963	「射程」1956
円地文子	1905-1986	『食卓のない家』	1982	「食卓のない家」1979
大岡昇平	1909-1988	『ながい旅』	1986	「ながい旅」1982
小川国夫	1927-2008	『或る聖書』	1977	「或る聖書」1973
大佛次郎	1897-1973	『帰郷』	1952	「帰郷」1949
大佛次郎	1897-1973	『宗方姉妹』	1954	「宗方姉妹」1950
尾崎一雄	1899-1983	『虫のいろいろ』	1970	「石」1957／「美しい墓地からの眺め」1948／「毛虫について」1952／「小鳥の声」1950／「冬眠居閑談」1950／「トマト畠で」1947／「踏切」1952／「亡友への手紙」1946／「虫のいろいろ」1948／「虫も樹も」1965／「焼ケ岳」1939／「落梅」1947
海音寺潮五郎	1901-1977	『おどんな日本一』	1978	「おどんな日本一」1966
開高健	1930-1989	『新しい天体』	1976	「新しい天体」1974
加賀乙彦	1929	『湿原』	1988	「湿原」1985
梶山季之	1930-1975	『女の警察』	1981	「女の警察」1967
源氏鶏太	1912-1985	『停年退職』	1965	「停年退職」1963
椎名麟三	1911-1973	『永遠なる序章』	1958	「永遠なる序章」1948
柴田翔	1935	『ノンちゃんの冒険』	1980	「ノンちゃんの冒険」1975
島尾敏雄	1917-1986	『出発は遂に訪れず』	1973	「帰魂譚」1961／「帰巢者の憂鬱」1954／「島の果て」1948／「出発は遂に訪れず」1962／「単独旅行者」1947／「兆」1952／「「廃址」1959／「マヤと一緒に」1962／「夢の中での日常」1948
田村泰次郎	1911-1983	『肉体の門・肉体の悪魔』	1968	「肉体の悪魔」1946／「肉体の門」1947／「鳩の街草話」／『「街の天使」系譜』
壺井栄	1899-1967	『暦』		「暦」1940
福永武彦	1918-1979	『死の鳥』	1977	「死の鳥」1971
藤原審爾	1921-1984	『さきに愛ありて』	1985	「さきに愛ありて」1973-1977
舟橋聖一	1904-1976	『雪夫人絵図』	1952	「雪夫人絵図」1948
米谷ふみ子	1930	『過越しの祭』	1991	「遠来の客」1985／「過越しの祭」1985

・『CD-ROM 版 毎日新聞 1995 年版』全紙面

・『CASTEL/J』CD-ROM（日本語教育支援システム研究会）より「講談社新書」以下 37 冊

【論説】

著者名	生年	書名	出版社	発行年
会田雄次	1916-1997	『日本人の意識構造』	講談社	1972
合山究	1942	『故事成語』	講談社	1991
飛鳥井雅道	1934-2000	『近代の潮流』	講談社	1976
飯田経夫	1932-2003	『「ゆとり」とは何か』	講談社	1982
井上昌次郎	1935	『睡眠の不思議』	講談社	1988
井上忠司	1939	『まなざしの人間関係』	講談社	1982
今津晃	1917-2003	『二十世紀の世界』	講談社	1974
織田武雄	1907	『地図の歴史－日本篇』	講談社	1974
加藤秀俊	1930	『パチンコと日本人』	講談社	1984
河野友美	1929	『たべものと日本人』	講談社	1974
金田一春彦	1913-2004	『日本人の言語表現』	講談社	1975
黒井千次	1932	『働くということ』	講談社	1982
桜井哲夫	1949	『手塚治虫』	講談社	1990
品川嘉也	1932-1992	『全脳型勉強法のすすめ』	講談社	1987
下川浩一	1930	『日本の企業発展史』	講談社	1990
鷹羽狩行	1930	『俳句のたのしさ』	講談社	1976
高尾一彦	1924	『近世の日本』	講談社	1976
高田宏	1932	『エッセーの書き方』	講談社	1984
千葉康則	1925	『記憶の脳生理学』	講談社	1991
都筑卓司	1928	『時間の不思議』	講談社	1991
中川剛	1934	『憲法を読む』	講談社	1985
中川剛	1934	『日本人の法感覚』	講談社	1989
中村希明	1932	『酒飲みの心理学』	講談社	1990
中村希明	1932	『犯罪の心理学』	講談社	1990
中根千枝	1926	『タテ社会の人間関係』	講談社	1967
中根千枝	1926	『タテ社会の力学』	講談社	1978
中根千枝	1926	『適応の条件』	講談社	1972
中原英臣・佐川峻	1945・1944	『進化論が変わる』	講談社	1991
野元菊雄	1922	『敬語を使いこなす』	講談社	1987

平野仁啓	1914	『日本の神々』	講談社	1982
森清	1933	『選び取る「停年」』	講談社	1992
山折哲雄	1931	『神と仏』	講談社	1983
山田雄一	1930	『稟議と根回し』	講談社	1985
吉岡郁夫	1932	『人体の不思議』	講談社	1986
吉田寿三郎	不詳	『高齢化社会』	講談社	1981
吉野裕子	1916-2008	『日本人の死生観』	講談社	1982
米山正信	1918	『化学とんち問答』	講談社	1991

・書籍より手作業で収集したもの 以下 72 冊

【小説】

著者名	生年	書名	出版社	発行年	刊行年・収録作品名・発表年ほか
浅田次郎	1951	『鉄道員』	集英社	2000	「鉄道員」1995／「ラブ・レター」／「悪魔」1995／「角筈にて」／「伽羅」／「うらぼんえ」／「ろくでなしのサンタ」／「オリオン座からの招待状」
浅田次郎	1951	『地下鉄に乗って』	講談社	1999	「地下鉄に乗って」1995
浅田次郎	1951	『霞町物語』	講談社	2000	「霞町物語」1995／「夕暮れ隧道」1995／「青い火花」1996／「グッバイ Dr. ハリー」1996／「雛の花」1997／「遺影」1997／「すいばれ」1998／「卒業写真」1998
石原慎太郎	1932	『太陽の季節』	新潮社	1957	「太陽の季節」1955／「灰色の教室」／「処刑の部屋」／「ヨットと少年」／「黒い水」
井上ひさし	1934-2010	『青葉繁れる』	文芸春秋	1974	「青葉繁れる」1973
江國香織	1964	『こうばしい日々』	新潮社	1995	「こうばしい日々」1990／「綿菓子」1991
遠藤周作	1923-1996	『女の一生』	新潮社	1986	「女の一生」1982 刊行（朝日新聞社）
遠藤周作	1923-1996	『闇のよぶ声』	角川書店	1971	「闇のよぶ声」（『海の沈黙』）1963-1964
北方謙三	1947	『遠い港』	角川書店	1998	「遠い港」1991 刊行（講談社）
佐藤正午	1955	『バニシングポイント』	集英社	2000	「バニシングポイント」1997 刊行
沢木耕太郎	1947	『馬車は走る』	文芸春秋	1989	「馬車は走る」1986
椎名誠	1944	『トロッコ海岸』	文藝春秋	1997	「猫殺し」／「トロッコ海岸」／「デカメロン」／「ほこりまみれ」／「ポウの首」／「蛇の夢」／「椿の花が咲いていた」／「殺人との接近」／「謎の解明」／「道の記憶」／「映写会」（『猫殺し その他

					の短篇』1994 刊行)
曾野綾子	1931	『テニス・コート』	角川書店	1986	「テニス・コート」1978-1979
高樹のぶ子	1946	『白い光の午後』	文芸春秋	1999	「白い光の午後」1991
立原正秋	1926-1980	『その年の冬』	講談社	1984	「その年の冬」1980
田中康夫	1956	『昔みたい』	新潮社	1989	「芦屋市平田町」／「ヴェネチア・サン・ミケーレ島」／「品川区島津山」「大井埠頭」／「世田谷区深沢八丁目」／「伊豆山蓬莱旅館」／「フランクフルトホテル・ケンピンスキー」／「神戸市花隈町」／「名古屋市八事」／「パリ ホテル・ル・ブリストル」／「千代田区三番町」／「港区伊皿子坂」／「軽井沢千ヶ滝西区」／「台東区浅草柳橋」／「昔みたい」以上 1985-1987
中島らも	1952-2004	『今夜、すべてのバーで』	講談社	1994	「今夜、すべてのバーで」1990
南木佳士	1951	『医学生』	文芸春秋	1998	「医学生」1993
乃南アサ	1960	『不発弾』	講談社	2002	「かくし味」1994／「夜明け前の道」1996／「タ立」1997／「福の神」1998／「不発弾」1998／「幽霊」1998
帚木蓬生	1947	『閉鎖病棟』	新潮社	1997	「閉鎖病棟」1994 刊行
原田宗典	1959	『何者でもない』	講談社	1995	「クスコの引っ越し」(「翼はないけれども」改題) 1990／「何者でもない」1992／「一人芝居」1992
松本清張	1909-1992	『砂の器』(上)(下)	新潮社	1973	「砂の器」1961 刊行
三浦綾子	1922-1999	『ひつじが丘』	講談社	1980	「ひつじが丘」1965-1966
森浩美	1960	『家族の言い訳』	双葉社	2008	「ホテルの熱」／「乾いた声でも」／「星空への寄り道」／「カレーの匂い」／「姉のかわり」／「おかあちゃんの口紅」／「イブのクレヨン」／「粉雪のキャッチボール」2006 刊行
森浩美	1960	『こちらの事情』	双葉社	2009	「晴天の万国旗」／「葡萄の木」／「甘噛み」／「短い通知表」／「福は内」／「靴ひもの結び方」／「妻のパジャマ」／「荷物の順番」以上 2006-2007
湯本香樹美	1959	『ポプラの秋』	新潮社	1997	「ポプラの秋」1997 文庫書き下ろし
米山公啓	1952	『エア・ホスピタル』	講談社	2000	「エア・ホスピタル」1997 刊行
渡辺淳一	1933	『まひる野』(上)(下)	新潮社	1981	「まひる野」1974-1975

【エッセイ・ルポ】

著者名	生年	書名	出版社	発行年	刊行年・収録作品名・発表年
阿川佐和子ほか		『ああ、恥ずかし』	新潮社	2003	1994-
生島治郎	1933-2003	『片翼だけの青春』	集英社	1989	1985 刊行
石川達三	1905-1985	『生きるための自由』	新潮社	1981	1976 刊行
伊集院静	1950	『水のうつわ』	幻冬舎	1997	「水のうつわ」1990-1991／「深夜の象」／「鍛冶屋」1997 文庫書き下ろし
五木寛之	1932	『生きるヒント』	角川書店	1994	1993 刊行
江國滋	1934-1997	『日本語ハツ当り』	新潮社	1993	1989 刊行
岸本葉子	1961	『幸せな朝寝坊』	文芸春秋	1998	(『近ごろの無常』) 1994 刊行
鷺沢萌	1968-2004	『ケナリも花、サクラも花』	新潮社	1997	1994 刊行
佐藤嘉尚	1943	『伊能忠敬を歩いた』	新潮社	2001	2001 文庫書き下ろし
佐野三治	不詳	『たった一人の生還ー『たか号』漂流二十七日間の闘いー』	新潮社	1995	1992 刊行
佐野洋子	1938-2010	『がんばりません』	新潮社	1996	(『佐野洋子の単行本』) 1985 刊行
沢木耕太郎	1947	『馬車は走る』	文芸春秋	1989	1986 刊行
沢木耕太郎	1947	『勉強はそれからだ 象が空をⅢ』	文芸春秋	2000	1993 刊行(1982-1992)
塩野七生	1937	『イタリアからの手紙』	新潮社	1997	1972 刊行
塩野七生	1937	『人びとのかたち』	新潮社	1997	1995 刊行
椎名誠	1944	『時にはうどんのように』	文芸春秋	1998	1995 刊行
城山三郎	1927-2007	『アメリカ生きがいの旅』	文芸春秋	1987	1983-1984
曾野綾子	1931	『人びとの中の私』	集英社	1980	1977 刊行
田辺聖子	1928	『天窓に雀のあしあと』	中央公論社	1993	「雀のひとりごと」1987-1989「雀の水浴び」1988
俵万智	1962	『りんごの涙』	文芸春秋	1992	1989 刊行
辻仁成	1959	『そこに君がいた』	新潮社	2002	「そこに君はいた」1994-1995 他書き下ろし
土屋賢二	1944	『われ笑う、ゆえにわれあり』	文芸春秋	1997	1994 刊行
土屋賢二	1944	『われ大いに笑う、ゆえにわれ笑う』	文芸春秋	1999	1996 刊行

永井明	1947-2004	『ぼくが医者をやめた理由』	角川書店	1998	1993 刊行
畑正憲	1935	『ムツゴロウの博物誌』	文芸春秋	1975	1970 刊行
原田宗典	1959	『笑われるかも知れないが』	幻冬舎	1997	1991-1996
本田宗一郎	1906-1991	『私の手が語る』	講談社	1985	1982 刊行
宮本輝	1947	『命の器』	講談社	1986	1980-1983
素樹文生		『旅々オートバイ』	新潮社	2002	1999 刊行
森瑤子	1940-1993	『非常識の美学』	角川書店	1995	1992 刊行(1990-1991)
群ようこ	1954	『日常生活』	新潮社	1993	1993 文庫書き下ろし
群ようこ	1954	『アメリカ居すわり一人旅』	角川書店	1991	(『アメリカ恥かき一人旅』) 1987 刊行
米山公啓	1952	『午前3時の医者ものがたり』	集英社	1995	1995 文庫書き下ろし

【論説】

著者名	生年	書名	出版社	発行年	
田勢康弘	1944	『政治ジャーナリズムの罪と罰』	新潮社	1996	1992-1994
田中克彦	1934	『差別語からはいる言語学入門』	明石書店	2001	2001

【対談集】

沢野ひとし	1944	対談集『僕はやっぱり山と人が好き』	角川書店	1995	1987 刊行
椎名誠	1944	対談集『ホネのような話』	角川書店	1994	1989 刊行
司馬遼太郎	1923-1996	対談集『日本語と日本人』	中央公論新社	1984	1978 刊行
城山三郎	1927-2007	『失われた志 対談集』	文芸春秋	2000	1993-1997
田辺聖子	1928	『おせいカモカの対談集』	新潮社	1992	1981 刊行
向田邦子	1929-1981	『向田邦子全対談』	文芸春秋	1985	1975-1981
向田邦子	1929-1981	『森繁の重役読本』	文芸春秋	1993	1962-1969
群ようこ	1954	群ようこ対談集『解体新書』	新潮社	1998	1995 刊行
山田詠美	1959	対談集『内面のノンフィクション』	文芸春秋	2001	1992 刊行

■近代語資料

【明治期】

・『CD-ROM 版 明治の文豪』（新潮社）より以下 35 冊

（発行年については CD-ROM 版に情報がなく調べがつかない。『明治の文豪』に収録された版による。）

著者名	生年	書名	刊行年・収録作品名・発表年
伊藤左千夫	1864-1913	『野菊の墓』	「野菊の墓」1906／「浜菊」1908／「姪子」1909／「守の家」1912
泉鏡花	1873-1939	『歌行燈・高野聖』	「歌行燈」1910／「国貞えがく」1910／「高野聖」1900／「女客」1905／「売食鴨南蛮」1920
泉鏡花	1873-1939	『婦系図』	「婦系図」1907
尾崎紅葉	1867-1903	『金色夜叉』	「金色夜叉」1897-1902／「続金色夜叉」／「続続金色夜叉」／「新続金色夜叉」1903
国木田独歩	1871-1908	『武蔵野』	「置土産」1900／「おとずれ」1897／「河霧」1898／「郊外」1900／「小春」1900／「鹿狩」1898／「詩想」1898／「たき火」／「初恋」1900／「初孫」1900／「星」1896／「まぼろし」1898／「武蔵野」1898／「遺言」1900／「わかれ」1898／「忘れえぬ人々」1898／「源叔父」1897
国木田独歩	1871-1908	『牛肉と馬鈴薯・酒中日記』	「運命論者」1903／「岡本の手張」／「窮死」1907／「牛肉と馬鈴薯」1901／「号外」1906／「少年の悲哀」1903／「死」1898／「酒中日記」1902／「巡査」1902／「空知川の岸辺」／「竹の木戸」1908／「富岡先生」1902／「渚」1907／「二老人」1908／「春の鳥」1904／「疲労」1907
田山花袋	1871-1930	『田舎教師』	「田舎教師」1909
田山花袋	1871-1930	『蒲団・重右衛門の最後』	「重右衛門の最後」1902／「蒲団」1907
田山花袋	1871-1930	『生』	「生」1908
長塚節	1879-1915	『土』	「土」1910
夏目漱石	1867-1916	『文鳥・夢十夜』	「手紙」1911／「文鳥」1908／「変な音」1911／「夢十夜」1908／「永日小品」1909／「思い出す事など」1910／「ケーベル先生」1911

夏目漱石	1867-1916	『二百十日・野分』	「二百十日」1906／「野分」1907
夏目漱石	1867-1916	『彼岸過迄』	「彼岸過迄」1912
夏目漱石	1867-1916	『硝子戸の中』	「硝子戸の中」1915
夏目漱石	1867-1916	『草枕』	「草枕」1906
夏目漱石	1867-1916	『虞美人草』	「虞美人草」1907
夏目漱石	1867-1916	『行人』	「行人」1912
夏目漱石	1867-1916	『抗夫』	「抗夫」1908
夏目漱石	1867-1916	『こころ』	「こころ」1914
夏目漱石	1867-1916	『坊っちゃん』	「坊っちゃん」1906
夏目漱石	1867-1916	『倫敦塔・幻影の盾』	「幻影の盾」1905／「倫敦塔」1905／「一夜」1905／「カーライル博物館」1905／「薤露行」1905／「琴のそら音」1905／「趣味の遺伝」1906
夏目漱石	1867-1916	『それから』	「それから」1909
夏目漱石	1867-1916	『三四郎』	「三四郎」1908
夏目漱石	1867-1916	『道草』	「道草」1915
夏目漱石	1867-1916	『明暗』	「明暗」1916
夏目漱石	1867-1916	『門』	「門」1910
夏目漱石	1867-1916	『吾輩は猫である』	「吾輩は猫である」1905-1906
二葉亭四迷	1864-1909	『浮雲』	「浮雲」1887-1889
二葉亭四迷	1864-1909	『其面影』	「其面影」1906
二葉亭四迷	1864-1909	『平凡』	「平凡」1907
森鷗外	1862-1922	『阿部一族・舞姫』	「阿部一族」1913／「うたかたの記」1890／「かのやうに」1912／「寒山拾得」1916／「附寒山拾得縁起」1916／「堺事件」1914／「じいさんばあさん」1915／「鶏」1909／「舞姫」1890／「余興」1915
森鷗外	1862-1922	『キタ・セクスアリス』	「キタ・セクスアリス」1909
森鷗外	1862-1922	『雁』	「雁」1911-1915
森鷗外	1862-1922	『山椒大夫・高瀬舟』	「興津弥五右衛門の遺書」1912／「カズイスチカ」1911／「護持院原の敵討」1913／「最後の一句」1915／「杯」1910／「山椒大夫」1915／「高瀬舟」1916／「高瀬舟縁起」1916／「普請中」1910／「二人の友」1915／「妄

			想」1911／「百物語」1911
森鷗外	1862-1922	『青年』	「青年」1910

【大正期】

- ・『CD-ROM 版 大正の文豪』（新潮社）
- ・『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』（新潮社）
- ・『CD-ROM 版 絶版の 100 冊』（新潮社）より 以下 46 冊（重複する作品は調整済み）
（発行年については CD-ROM 版に情報がなく調べがつかない。それぞれの CD-ROM に収録された版による。）

芥川龍之介	1892-1927	『戯作三昧・一塊の土』	「秋」1920／「あばばば」1923／「或日の大石蔵之助」／「一塊の土」1924／「お富の貞操」1922／「開化の良人」1919／「開化の殺人」1918／「枯野抄」1918／「戯作三昧」1917／「庭」1922／「年末の一日」1926／「雛」1923／「舞踏会」1920
芥川龍之介	1892-1927	『蜘蛛の糸・杜子春』	「アグニの神」1920／「犬と笛」1919／「蜘蛛の糸」1918／「猿蟹合戦」1923／「白」1923／「仙人」1922／「杜子春」1920／「トロコ」1922／「魔術」1919／「蜜柑」1919
芥川龍之介	1892-1927	『河童・或阿呆の一生』	「或阿呆の一生」1927／「河童」1927／「玄鶴山房」1927／「蜃気楼」1927／「大導寺信輔の半生」1925／「歯車」1927
芥川龍之介	1892-1927	『奉教人の死』	「糸女覚え書」1924／「おぎん」1922／「おしの」1923／「神神の微笑」1922／「きりしとほろ上人伝」1919／「黒衣聖母」1920／「さまよへる猶太人」1917／「煙草と悪魔」1916／「報恩記」1922／「奉教人の死」1918／「るしへる」1918
芥川龍之介	1892-1927	『羅生門・鼻』	「芋粥」1916／「運」1917／「袈裟と盛遠」1918／「好色」1921／「邪宗門」1918／「俊寛」1922／「鼻」1916／「羅生門」1915
芥川龍之介	1892-1927	『地獄変・偷盗』	「往生絵巻」1921／「地獄変」1918／「偷盗」1917／「藪の中」1921／「竜」1919／「六の宮の姫君」1922

芥川龍之介	1892-1927	『文芸的な、あまりに文芸的な』	「文芸的な、あまりに文芸的な」1927／ 「続文芸的な、あまりに文芸的な」1927／ 「小品・随筆」(「変わりな作品に就いて」／ 「僻見」1924／「明治文芸に就いて」／「わが家の古玩」／「今昔物語に就いて」／「澄江堂雑記」／「続澄江堂雑記」)
芥川龍之介	1892-1927	『侏儒の言葉・西方の人』	「侏儒の言葉」1923-27／「西方の人」1927／ 「続西方の人」1927
有島武郎	1878-1923	『或る女』	「或る女」1919(「或る女のグリンプス」1911-1913)
有島武郎	1878-1923	『小さき者へ・生れ出づる悩み』	「生れ出づる悩み」1918／「小さき者へ」1918
有島武郎	1878-1923	『惜みなく愛は奪う』	「惜みなく愛は奪う」1917
岩野泡鳴	1873-1920	『泡鳴五部作』	「断橋」1911／「憑き物」1917／「毒薬を飲む女」1914／「発展」1911-1912／「放浪」1910
宇野浩二	1891-1961	『子を貸し屋』	「あの頃の事」1920／「子を貸し屋」1923／ 「人心」1920／「一と踊」1921
葛西善蔵	1887-1928	『葛西善蔵集』	「悪魔」1923／「暗い部屋にて」1920／ 「湖畔手記」1924／「子をつれて」1918／ 「椎の若葉」1924／「酔狂者の独白」1927／ 「仲間」1921／「呪はれた手」／「春」／ 「埋葬そのほか」1921
菊池寛	1888-1948	『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』	「ある恋の話」1919／「入れ札」1921／「恩讐の彼方に」1919／「恩を返す話」／「形」／ 「極楽」／「俊寛」1921／「忠直卿行状記」1918／「藤十郎の恋」1919／「蘭学事始」1921
菊池寛	1888-1948	『父帰る・屋上の狂人』	「海の勇者」1916／「屋上の狂人」1916／ 「敵討以上」／「義民甚兵衛」1920／「時勢は移る」／「父帰る」1917／「真似」1924
菊池寛	1888-1948	『真珠夫人』	「真珠夫人」1920
久保田万太郎	1889-1963	『末枯・大寺学校』	「末枯」1917／「続末枯」1918／「大寺学校」1927

久米正雄	1891-1952	『学生時代』	「競漕」／「受験生の手記」／「母」／「艶書」／「選任」／「文学会」／「鉄拳制裁」／「嫌疑」／「復讐」／「密告者」／「求婚者の話」
倉田百三	1891-1943	『出家とその弟子』	「出家とその弟子」1916
佐藤春夫	1892-1964	『都会の憂鬱』	「都会の憂鬱」1922
里見弴	1888-1983	『多情仏心』	「多情仏心」1922
志賀直哉	1883-1971	『小僧の神様・城の崎にて』	「雨蛙」1924／「赤西蠣太」1918／「城の崎にて」1917／「好人物の夫婦」1917／「小僧の神様」1920／「佐々木の場合」1917／「瑣事」1925／「十一月三日午後の事」1919／「焚火」1920／「痴情」1926／「転生」1924／「晩秋」1926／「冬の往来」1925／「濠端の住まい」1925／「真鶴」1920／「山科の記憶」1926／「雪の日」1920／「流行感冒」1919
島崎藤村	1872-1943	『嵐・ある女の生涯』	「熱海土産」1925／「嵐」1926／「ある女の生涯」1921／「三人」1924／「食堂」／「伸び支度」1925／「分配」1927
島崎藤村	1872-1943	『家』	「家」1910-1911
島崎藤村	1872-1943	『海へ』	「海へ」
島崎藤村	1872-1943	『エトランゼエ』	「エトランゼエ」1922
島崎藤村	1872-1943	『旧主人・芽生』	「岩石の間」1912／「旧主人」1902／「刺繍」1912／「足袋」／「並木」1907／「船」／「芽生」1909／「藁草履」1902
島崎藤村	1872-1943	『桜の実の熟する時』	「桜の実の熟する時」1919
島崎藤村	1872-1943	『市井にありて・桃の雫』	「市井にありて」1930／「桃の雫」1936
島崎藤村	1872-1943	『夜明け前』	「夜明け前」1929-1935
島崎藤村	1872-1943	『新生』	「新生」1918
島崎藤村	1872-1943	『千曲川のスケッチ』	「千曲川のスケッチ」1912
島崎藤村	1872-1943	『破戒』	「破戒」1906
島崎藤村	1872-1943	『春』	「春」1908
島田清次郎	1899-1930	『地上』	「地上」1919
谷崎潤一郎	1886-1965	『痴人の愛』	「痴人の愛」1924

徳田秋声	1871-1943	『あらくれ』	「あらくれ」1915
徳田秋声	1871-1943	『縮図』	「縮図」1941
直木三十五	1891-1934	『仇討浄瑠璃坂』	「仇討浄瑠璃坂」1929
長与善郎	1888-1961	『青銅の基督』	「青銅の基督」1923
長与善郎	1888-1961	『竹沢先生と云ふ人』	「竹沢先生と云ふ人」1924
正宗白鳥	1879-1962	『生まざりしならば・入江のほとり』	「入江のほとり」1915／「生まざりしならば」1923／「泥人形」1911／「微光」1910
宮沢賢治	1896-1933	『銀河鉄道の夜』	「オツベルと象」1926／「カイロ団長」／「黄いろのトマト」／「饑餓陣営」／「銀河鉄道の夜」／「シグナルとシグナレス」1923／「セロ弾きのゴーシュ」／「猫の事務所」1926／「ビジテリアン大祭」1934／「ひのきとひなげし」／「双子の星」／「北守将軍と三人兄弟」／「マリヴロンと少女」／「よだかの星」
武者小路実篤	1885-1976	『愛慾・その妹』	「愛慾」1915／「その妹」1926
武者小路実篤	1885-1976	『友情』	「友情」1919

■近世後期 江戸語資料

- ・『日本古典文学大系 59 黄表紙・洒落本集』（岩波書店）より 以下 19 作品

黄表紙：「金々先生栄花夢」1775／「高慢斉行脚日記」1776／「見徳一炊夢」1781／「御存商売物」1782／「大悲千祿本」1785／「江戸生艶気樺焼」1785／「莫切自根金生木」1785／「文武二道万石通」1788／「孔子縞干時藍染」1789／「心学早染艸」1790／「敵討義女英」1795

洒落本：「遊子方言」1770 頃／「辰巳之園」1770／「道中粹語録」1779 頃／「卯地臭意」1783／「総籬」1787／「傾城買四十八手」1790／「錦之裏」1791／「傾城買二筋道」（1798）

- ・『日本古典文学大系 62 東海道中膝栗毛』（岩波書店）より 以下 1 作品

滑稽本：「東海道中膝栗毛」1802-1809

- ・『日本古典文学大系 64 春色梅児誉美』（岩波書店）より 以下 2 作品

人情本：「春色梅児譽美」1832-1833／「春色辰巳之園」1833-1835

（※以上の『日本古典文学大系』（岩波書店）については、国文学研究資料館の日本古典文

学本文データベースも利用した。)

- ・『新日本古典文学大系 85 米饅頭始・仕懸文庫・昔話稲妻表紙』(岩波書店) より 4 作品
黄表紙:「米饅頭始」1780／「三筋緯客気植田」1787／「玉磨青砥銭」1790
洒落本:「仕懸文庫」1791
- ・『新日本古典文学大系 86 浮世風呂・戯場粹言幕の外・大千世界楽屋探』(岩波書店) より 3 作品
滑稽本:「戯場粹言幕の外」1806／「浮世風呂」1809-1812／「大千世界楽屋探」1817
- ・『日本古典文学全集 47 洒落本・滑稽本・人情本』(小学館) より 7 作品
洒落本:「跣婦人伝」1753／「甲斐新話」1775／「古契三娼」1787／「繁千話」1790
滑稽本:「酩酊気質」1806 頃／「浮世床」1813-1814
人情本:「春告鳥」1836
- ・『新編日本古典文学全集 79 黄表紙・川柳・狂歌』(小学館) より 6 作品
黄表紙:「桃太郎後日晰」1777／「口空多雁取帳」1783／「従夫以来記」1784／「江戸春一夜千両」1786／「鸚鵡返文武二道」1789／「鼻下長物語」1792